新潟県埋蔵文化財調査報告書　第227集

一般国道253号
上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅷ

狐宮遺跡Ⅱ
下割遺跡Ⅳ

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅷ

狐宮（きつのみや）遺跡 Ⅱ
下割（しもわり）遺跡 Ⅳ

２０１１

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 253 号上越三和道路は、上越市寺と上越市三和区本郷を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る一般国道 253 号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域振興快速道路は上越地域と魚沼地域の交流を促進するとともに、北陸自動車道や関越自動車道と合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指しています。これにより産業・経済・文化の広域的な交流が活発になり、地域の活性化を促進するものと期待されています。

本書は、この上越三和道路建設に先立ち、平成 21 年度に実施した狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳの発掘調査報告書です。狐宮遺跡Ⅱでは平安時代の集落の一部を調査しました。平成 17 年度の発掘調査結果と合わせると、集落の範囲や立地がより一層明らかになりました。下割遺跡Ⅳでは奈良時代の集落と室町時代から江戸時代初期にかけての水田を調査しました。いずれもこれまでの調査で見つかっていなかった時代のもので、下割遺跡の内容がさらに明らかになりました。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後に、この発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた上越市教育委員会並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで、格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成 23 年 8 月

新潟県教育委員会

教 育 長　武藤　克己

例　　言

1　本書は、新潟県上越市大字本道字南沖477番地ほかに所在する狐宮遺跡、大字米岡字中割1,086番地ほかに所在する下割遺跡の発掘調査記録である。『狐宮遺跡Ⅱ』は平成21年度に実施した第2次の発掘調査で、狐宮遺跡の2冊目、『下割遺跡Ⅳ』は平成21年度に実施した第4次の発掘調査で、下割遺跡の4冊目の発掘調査報告書である。

2　この調査は一般国道253号上越三和道路の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。

3　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社吉田建設に委託して平成21年度に発掘調査を実施した。

4　本文編集に係る作業は、平成22年度に埋文事業団が県教委から受託し、これに当たった。

5　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。

6　遺物の注記は、狐宮遺跡Ⅱの略記号「09キツノ」、下割遺跡Ⅳの略記号「下ワリⅣ」にそれぞれ出土地点、遺構名、層位等を併記した。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　掲載遺物の番号は、遺跡ごとに種別に関わらず、すべて通し番号を付した。本文及び観察表、図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

9　本文中の注は第Ⅲ章6、第Ⅳ章6を除いて脚注とし、頁ごとに番号を付した。また引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10　自然科学分野にかかる分析は、下記の機関に委託して行い、了解を得て再編集した。

　花粉分析、珪藻分析、樹種同定、植物珪酸体分析、放射性炭素年代測定……株式会社パレオ・ラボ

11　遺構図・遺物実測図のトレース及び各種図版の作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。

12　本書の執筆は、飯坂盛泰（埋文事業団調査課　主任調査員）、野水晃子・矢部英生・長沼吉嗣・今井昭俊（以上、株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部　調査員）、高橋保雄（埋文事業団調査課　課長代理）が当たり、編集は高橋が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

　飯坂盛泰：第Ⅰ章2B、第Ⅲ章2・4A・4B・4C・7B、第Ⅳ章2・4C
　野水晃子：第Ⅲ章5A・5B・7A、第Ⅳ章4C・5A・5B・7A
　矢部英生：第Ⅱ章1、第Ⅲ章1・4C、第Ⅳ章1・4C・5A・5C・7C
　長沼吉嗣：第Ⅲ章5C、第Ⅳ章4A・4B・4C・5A・5D・7B
　今井昭俊：第Ⅱ章2、第Ⅲ章5B、第Ⅳ章4C・5B
　高橋保雄：第1章1・2A・3、第Ⅲ章3、第Ⅳ章3、
　鈴木　茂（株式会社パレオ・ラボ）：第Ⅲ章6A、第Ⅳ章6A　・6B
　藤根　久（株式会社パレオ・ラボ）：第Ⅲ章6B、第Ⅳ章6C
　黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）：第Ⅲ章6C、第Ⅳ章6D
　伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一（株式会社パレオ・ラボ）：第Ⅳ章6E
　米田恭子（株式会社パレオ・ラボ）：第Ⅳ章6A

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

　相沢　央　　相羽重徳　　上田芳彰　　岡村光展　　小島幸雄　　斉藤優介　　中西　聡　　中村直人
　秦　繁治　　福原圭一　　山本幸俊　　横山勝栄　　上越市北田中町内会・鵜町町内会・本道町内会・
　門田新田町内会・米岡町内会　　上越市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 2
A　試掘発掘調査 …… 2
B　本発掘調査 …… 5

3　発掘調査体制と整理作業 …… 7
A　試掘確認調査 …… 7
B　本発掘調査・整理作業 …… 8
C　整理作業の経過 …… 8

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境 …… 9

2　遺跡の分布と歴史的環境 …… 11

第Ⅲ章　狐宮遺跡Ⅱ

1　遺跡の立地と微地形 …… 14

2　グリッドの設定 …… 15

3　基本層序 …… 15

4　遺　　構 …… 16
A　概　　要 …… 16
B　遺構の記述と表記方法 …… 17
C　古代の遺構 …… 17

5　遺　　物 …… 21
A　概　　要 …… 21
B　土　　器 …… 21
C　その他の遺物 …… 23

6　自然科学分析 …… 24
A　花粉化石 …… 24
B　基本層序堆積物中の珪藻化石群集 …… 26
C　出土木製品の樹種同定 …… 28

7　ま　と　め …… 31
A　遺物の編年的位置付け …… 31
B　総　　括 …… 32

第Ⅳ章　下割遺跡Ⅳ

1　遺跡の立地と微地形 …… 33

2　グリッドの設定 …… 34

3　基本層序 …… 34

4　遺　　構 …… 37
A　概　　要 …… 37
B　記述方法 …… 37
C　遺構各説 …… 37

5　遺　　物 …… 51
A　概　　要 …… 51
B　古代の遺物 …… 51
C　中世～近世の遺物 …… 58
D　その他の遺物 …… 61

6　自然科学分析 …… 63
A　植物珪酸体 …… 63
B　花粉化石 …… 65
C　基本層序堆積物中の珪藻化石群集 …… 68
D　出土木製品の樹種同定 …… 70
E　放射性炭素年代測定 …… 73

7　ま　と　め …… 75
A　古代の土器の編年的位置付け …… 75
B　古代の遺構・遺物から見た遺跡の性格 …… 77
C　中世～近世初期の水田について …… 78

《要　　約》 …… 81

《引用・参考文献》 …… 82

《観　察　表》 …… 85

狐宮遺跡Ⅱ　遺構観察表 …… 85
狐宮遺跡Ⅱ　遺物観察表 …… 85
下割遺跡Ⅳ　遺構観察表 …… 87
下割遺跡Ⅳ　遺物観察表 …… 91

挿図目次

第 1 図　上越三和道路の予定路線と遺跡の位置 …… 1
第 2 図　狐宮遺跡　試掘調査トレンチ位置図 …… 2
第 3 図　下割遺跡　試掘調査トレンチ位置図 …… 4
第 4 図　下割遺跡　本調査必要範囲と
　　平成 21 年度（下割遺跡Ⅳ）発掘調査範囲 …… 4
第 5 図　高田平野の地形分類図 …… 10
第 6 図　高田平野における古代・中世の遺跡分布 … 12
第 7 図　中世末期の米岡村周辺図 …… 13
第 8 図　狐宮遺跡Ⅱの位置と周辺の微地形 …… 14
第 9 図　狐宮遺跡Ⅱ　グリッド設定図 …… 15
第 10 図　狐宮遺跡Ⅱ　基本層序 …… 16
第 11 図　遺構の平面形態と断面形態の分類 …… 17
第 12 図　狐宮遺跡Ⅱの花粉化石 …… 25
第 13 図　狐宮遺跡Ⅱの花粉化石分布図 …… 25
第 14 図　堆積物の珪藻化石観察用プレパラート
　　状況写真 …… 28
第 15 図　出土材の顕微鏡写真 …… 30
第 16 図　狐宮遺跡　食膳具構成比率 …… 32
第 17 図　下割遺跡Ⅳの位置と周辺の微地形 …… 33
第 18 図　下割遺跡Ⅳ　グリッド設定図 …… 34
第 19 図　下割遺跡Ⅳ　基本層序 …… 35
第 20 図　水田区画配置図 …… 45
第 21 図　古代の土器出土分布図 …… 51
第 22 図　食膳具法量分布図 …… 52
第 23 図　古代の土器分類図 …… 53
第 24 図　29Q6 セクション（上）、37O1 セクション
　　（下）の植物珪酸体分布図 …… 64
第 25 図　下割遺跡Ⅳの植物珪酸体 …… 65

第 26 図　下別遺跡Ⅳの花粉化石分布図 …… 66
第 27 図　下別遺跡Ⅳの花粉化石 …… 67
第 28 図　堆積物の珪藻化石観察用プレパラート
　　状況写真 …… 69
第 29 図　出土材の顕微鏡写真 …… 71
第 30 図　暦年較正結果 …… 74
第 31 図　下別遺跡Ⅳ・今池遺跡・三角田遺跡・
　　延命寺遺跡の出土土器 …… 76
第 32 図　明治 29 年の土地更正図と下別遺跡Ⅳの
　　遺構配置図 …… 80

表　目　次

第 1 表　高田平野の古代・中世の主な遺跡 …… 11
第 2 表　中世末期の米岡村周辺の村の石高 …… 13
第 3 表　狐宮遺跡Ⅱの産出花粉化石一覧表 …… 25
第 4 表　珪藻分析を行った試料の詳細 …… 27
第 5 表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 28
第 6 表　樹種同定結果一覧 …… 29
第 7 表　狐宮遺跡　機種構成比率 …… 31
第 8 表　下別遺跡　基本層序対応表 …… 36
第 9 表　下別遺跡Ⅳ出土の陶磁器 …… 59
第 10 表　資料 1g 当たりの植物珪酸体個数 …… 63
第 11 表　産出花粉化石一覧表 …… 66
第 12 表　珪藻分析を行った試料の詳細 …… 68
第 13 表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 69
第 14 表　樹種同定結果一覧 …… 70
第 15 表　測定試料及び処理 …… 73
第 16 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 … 73
第 17 表　SK326・SD331 器種構成比率 …… 75
第 18 表　編年対照表 …… 77

図　版　目　次

［図　面］
図版 1　狐宮遺跡　平成 17・21 年度調査　遺構全体図
図版 2　狐宮遺跡Ⅱ　平成 21 年度遺構全体図
図版 3　狐宮遺跡Ⅱ　分割図 1
図版 4　狐宮遺跡Ⅱ　分割図 2
図版 5　狐宮遺跡Ⅱ　分割図 3
図版 6　狐宮遺跡Ⅱ　分割図 4
図版 7　狐宮遺跡Ⅱ　分割図 5
図版 8　狐宮遺跡Ⅱ　遺構個別図 1　SB14・15
図版 9　狐宮遺跡Ⅱ　遺構個別図 2　井戸・土坑
図版 10　狐宮遺跡Ⅱ　遺構個別図 3　溝・性格不明遺構
図版 11　狐宮遺跡Ⅱ　遺物実測図 1　遺構出土土器
図版 12　狐宮遺跡Ⅱ　遺物実測図 2　遺構外出土土器
図版 13　狐宮遺跡Ⅱ　遺物実測図 3　木製品 1
図版 14　狐宮遺跡Ⅱ　遺物実測図 4　木製品 2・石製品・
　　金属製品
図版 15　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構全体図
図版 16　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　分割図 1
図版 17　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　分割図 2
図版 18　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　分割図 3
図版 19　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 1　SB230
図版 20　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 2
　　SB270・SA269
図版 21　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 3　SB315
図版 22　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 4　SB339
図版 23　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 5　土坑 1
図版 24　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 6　土坑 2
図版 25　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 7　土坑 3
図版 26　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 8　土坑 4
図版 27　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 9　土坑 5
図版 28　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 10　土坑
　　6・性格不明遺構 1
図版 29　下別遺跡Ⅳ　Ⅴ層古代　遺構個別図 11　性格
　　不明遺構 2
図版 30　下別遺跡　Ⅳ層中世～近世　全体図
図版 31　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構全体図
図版 32　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　分割図 1
図版 33　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 1
　　畦畔 1・溝 1
図版 34　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　分割図 2
図版 35　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 2
　　畦畔 2
図版 36　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　分割図 3
図版 37　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 3
　　畦畔 3・溝 2
図版 38　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 4
　　畦畔 4・溝 3・土坑
図版 39　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　分割図 4
図版 40　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 5
　　畦畔 5・溝 4
図版 41　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　分割図 5
図版 42　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 6
　　畦畔 6・溝 5
図版 43　下別遺跡Ⅳ　Ⅳ層中世～近世　遺構個別図 7
　　畦畔 7・溝 6
図版 44　下別遺跡Ⅳ　遺物実測図 1　遺構出土土器 1
図版 45　下別遺跡Ⅳ　遺物実測図 2　遺構出土土器 2
図版 46　下別遺跡Ⅳ　遺物実測図 3　遺構出土土器 3

図版 47 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 4　遺構出土土器 4
図版 48 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 5　遺構出土土器 5
図版 49 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 6　遺構出土土器 6
図版 50 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 7　遺構出土土器 7・遺構外出土土器 1
図版 51 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 8　遺構外出土土器 2
図版 52 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 9　遺構外出土土器 3
図版 53 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 10　中世～近世の陶磁器
図版 54 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 11　木製品 1
図版 55 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 12　木製品 2
図版 56 下割遺跡Ⅳ　遺物実測図 13　石製品・金属製品

［写　真］
図版 57 狐宮遺跡Ⅱ　遺跡の位置・遺跡遠景
図版 58 狐宮遺跡Ⅱ　遺跡近景・遺跡全景
図版 59 狐宮遺跡Ⅱ　出土遺物・基本層序・井戸
図版 60 狐宮遺跡Ⅱ　SB14
図版 61 狐宮遺跡Ⅱ　SB15・井戸・土坑 1
図版 62 狐宮遺跡Ⅱ　土坑 2
図面 63 狐宮遺跡Ⅱ　土坑 3・溝 1
図版 64 狐宮遺跡Ⅱ　溝 2・性格不明遺構
図版 65 狐宮遺跡Ⅱ　遺構出土土器・遺構外出土土器 1
図版 66 狐宮遺跡Ⅱ　遺構外出土土器 2・墨書土器
図版 67 狐宮遺跡Ⅱ　木製品・石製品・金属製品
図版 68 下割遺跡Ⅳ　遺跡の位置・遺跡遠景
図版 69 下割遺跡Ⅳ　遺跡遠景・古代面全景
図版 70 下割遺跡Ⅳ　古代面　掘立柱建物と周辺の遺構
図版 71 下割遺跡Ⅳ　中世～近世　全景・水田
図版 72 下割遺跡Ⅳ　出土遺物・基本層序
図版 73 下割遺跡Ⅳ　古代面　SB230
図版 74 下割遺跡Ⅳ　古代面　SB270
図版 75 下割遺跡Ⅳ　古代面　SB315
図版 76 下割遺跡Ⅳ　古代面　SB339
図版 77 下割遺跡Ⅳ　古代面　土坑 1
図版 78 下割遺跡Ⅳ　古代面　土坑 2
図版 79 下割遺跡Ⅳ　古代面　土坑 3
図版 80 下割遺跡Ⅳ　古代面　土坑 4
図版 81 下割遺跡Ⅳ　古代面　土坑 5
図版 82 下割遺跡Ⅳ　古代面　土坑 6
図版 83 下割遺跡Ⅳ　古代面　溝 1
図版 84 下割遺跡Ⅳ　古代面　溝 2
図版 85 下割遺跡Ⅳ　古代面　性格不明遺構
図版 86 下割遺跡Ⅳ　中世～近世　水田全景
図版 87 下割遺跡Ⅳ　中世～近世　畦畔 1・溝
図版 88 下割遺跡Ⅳ　中世～近世　畦畔 2
図版 89 下割遺跡Ⅳ　遺構出土土器 1
図版 90 下割遺跡Ⅳ　遺構出土土器 2
図版 91 下割遺跡Ⅳ　遺構出土土器 3
図版 92 下割遺跡Ⅳ　遺構出土土器 4
図版 93 下割遺跡Ⅳ　遺構出土土器 5
図版 94 下割遺跡Ⅳ　遺構出土土器 6・遺構外出土土器 1
図版 95 下割遺跡Ⅳ　遺構外出土土器 2
図版 96 下割遺跡Ⅳ　遺構外出土土器 3
図版 97 下割遺跡Ⅳ　遺構外出土土器 4・墨書土器・ヘラ記号
図版 98 下割遺跡Ⅳ　中世～近世の陶磁器・木製品 1
図版 99 下割遺跡Ⅳ　木製品 2・石製品・金属製品

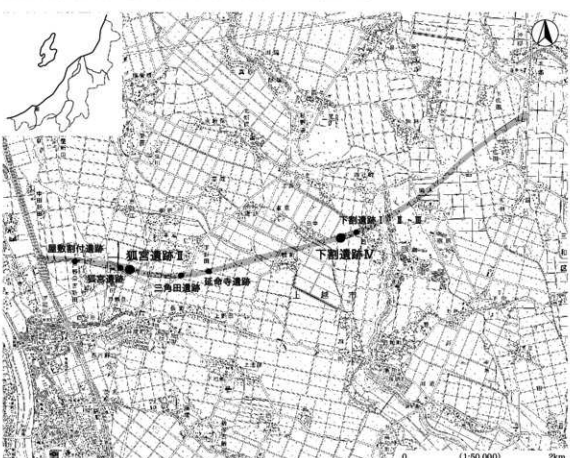
第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

上越魚沼地域振興快速道路（延長約 60km）は上越市と南魚沼市を結び、両地方の交流を促進するとともに、高規格幹線道路の北陸自動車道と関越自動車道を合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成する地域高規格道路である。同道路の完成により上越～十日町～六日町間の通行時間は大幅に短縮され、日本海と首都圏を結ぶ最短経路となり、広域的な交流が活発になるものと期待される。

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路の一部で、上越市寺から同市三和区本郷までの 7.4km 区間の道路である。上越地方拠点都市地域内の連携強化を図り、地域の活性化を促進することを目的としている。同道路は平成 10（2008）年度に整備区間に指定され、平成 12 年度に都市計画道路に決定された。

これを受けて国交省は、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団は、平成 13 年 4 月に計画予定地の上越市寺～同市三和区本郷の法線内を対象に分布調査を実施した。調査の結果、24 か所から主に古代・中世の遺物が採集されたため、ほぼ全域にわたり試掘確認調査を行い遺跡の有無を確認する必要があると報告した。

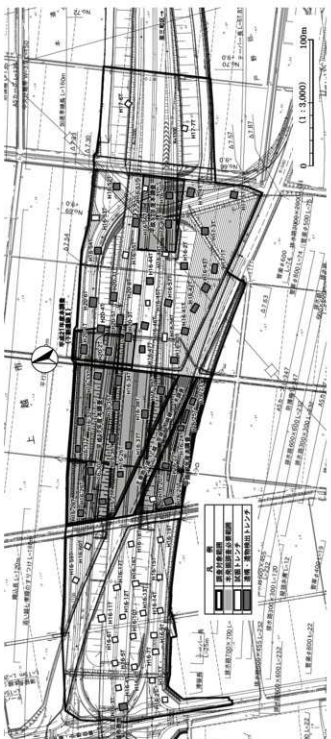


第 1 図　上越三和道路の予定路線と調査遺跡の位置

［国土地理院発行「高田東部」1：25,000 原図　平成 19 年発行］

平成13年3月、国交省から試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、調査を埋文事業団に委託した。平成14年3月、埋文事業団は上越市米岡地内にて調査を実施した。調査の結果、法線北側に隣接する下割遺跡[1]が計画予定地内に拡がることが判明した。この後、下割遺跡は平成14・15・20年度の試掘確認調査を経て、本発掘調査必要面積は91,567㎡（上層52,067㎡・中層25,500㎡・下層14,000㎡）となり、平成14・15・20年度に本発掘調査を行った。一方、狐宮遺跡は平成16・17・20年度の試掘確認調査を経て、本発掘調査必要面積は12,775㎡となり、平成17年度に本発掘調査を行った。

なお、狐宮遺跡Ⅱ及び下割遺跡Ⅳの本発掘調査は、平成21年3月、国交省の依頼を受けた県教委が埋文事業団に委託した。同年4月、埋文事業団は狐宮遺跡Ⅱから調査を開始した。



第2図　狐宮遺跡　試掘調査トレンチ位置図（トレンチ番号は「調査年度－トレンチNo.」を表す）

2　調査の経過

A　試掘確認調査

1）狐宮遺跡

用地取得の関係から平成16・17・20年度の3か年にわたり行われた。

平成16年度

県教委から委託を受け、平成16年5月17日～6月11日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲の25,000㎡に任意のトレンチ（試掘坑）を60か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、現地表下約20cmで多くのトレンチ（H16-21～44、46・47・49・50・52・54・56・57T）から古代の遺物や遺構を検出した。また、H16-22・23・31・34Tでは古代の遺物包含層の下位から古墳時代の遺物が出土した。このような状

1）下割遺跡は平成12年度県営場整備事業に伴う上越市教育委員会の試掘調査で、新たに発見された遺跡である。東西約450m、南北約250mの範囲で、古墳時代～中世の遺構・遺物が検出されている。

況から、法線センター杭№ 52 ～ 58 間（20 ～ 39T 周辺）の 9,450㎡を本調査必要範囲とし、法線センター杭№ 59 ～ 65 間は、未収得地があることから判断保留とした。

平成 17 年度

県教委から委託を受け、平成 17 年 4 月 4 日～ 8 日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は、法線センター杭№ 63 ～ 66 間の南側、№ 66 ～ 70 間の範囲である。面積 3,640㎡に任意のトレンチを 7 か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、H17-1 ～ 5T で古代の遺物が出土したが、量が少ないことや遺構が検出されなかったことから、本発掘調査の必要はないと判断した。また、平成 16 年度試掘確認調査で判断保留とした H16-48 ～ 56T 地点は、平成 17 年度試掘確認調査と同様な状況と判断されたものの、H16-49・50T では比較的遺物が多く出土したことから、この周辺 1,750㎡をトレンチ調査による本発掘調査が必要と判断した。

平成 20 年度

県教委から委託を受け、平成 20 年 8 月 18・19 日に埋文事業団が実施した。調査対象は、法線センター杭№ 58 ～ 63 間の北側である。面積 3,586㎡に任意のトレンチを 8 か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、すべてのトレンチから遺物が出土し、H20-2・3T で遺構を検出した。しかし、H20-2・3T 以外では遺物の出土が少なく、遺構が検出されないことから、弧宮遺跡の縁辺部と判断した。このような状況から H20-2・3T 周辺を含む 1,775㎡を本発掘調査が必要と判断した。

2）下割遺跡

用地取得の関係や調査対象面積が広範囲に及ぶことなどから、平成 13 ～ 15・20 年度の 4 か年にわたり行われた。

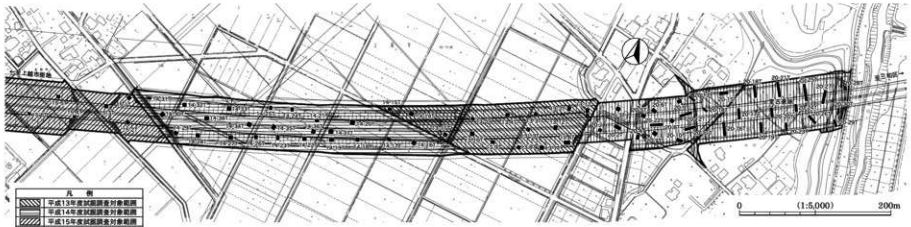
平成 13 年度

県教委から委託を受け、平成 14 年 3 月 4 ～ 8 日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は市道米岡荒屋線の東側で法線センター杭№ 205 ～ 219 間である。面積 14,000㎡に任意のトレンチを 13 か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、上層（現地表下 20 ～ 30cm）ではすべてのトレンチで古代～中世の遺物が出土し、多くのトレンチ（H13-3・4・6 ～ 8・11・12T）で遺構を検出した。また、中層（現地表下 120 ～ 150cm）では、H13-1・2・4・6 ～ 10・13T で古墳時代の遺物が出土した。このような状況から、調査対象範囲の東側 13,000㎡（上層 6,500・中層 6,500㎡）を本発掘調査必要範囲とし、西側 7,500㎡は調査未了のため、再調査とした。

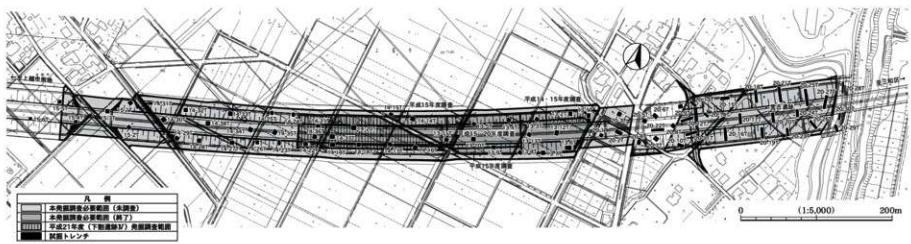
平成 14 年度

県教委から委託を受け、平成 14 年 4 月 15 日～ 5 月 8 日（1 回目）、平成 14 年 10 月 7・8 日（2 回目）に埋文事業団が実施した。

1 回目の調査対象範囲は、平成 13 年度調査未了範囲に引き続き、法線センター杭№ 210 ～ 190 間である。面積 24,150㎡に任意のトレンチを 25 か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、上層ではすべてのトレンチで遺物、または遺構が検出された。また、中層では H14-27・28・33・34 で古墳時代の遺物が出土し



第３図　下割遺跡　試掘調査トレンチ位置図　（トレンチ番号は「調査年度－トレンチNo.」を表す）



第４図　下割遺跡　本調査必要範囲と平成 21 年度（下割遺跡Ⅳ）発掘調査範囲　（トレンチ番号は「調査年度－トレンチNo.」を表す）

た。さらに下層（現地表下380～420cm）では、H14-30・33～35Tで縄文時代後期の遺物が出土した。このような状況と昨年度の試掘確認調査結果を加味し、面積36,550㎡（上層24,150・中層12,400㎡）を本調査必要範囲とした。また、下層は深部のため十分な精査・観察ができなかったことから、上・中層の本発掘調査終了後に試掘確認調査を行うこととした。

2回目の試掘確認調査は、平成13年度に本発掘調査必要範囲とされた法線センター№209～219間（6,500㎡）の下層を対象とした。上層の調査が終了した時点で4か所にトレンチを設定した。調査の結果、遺構・遺物が認められず、本発掘調査不要と判断した。

平成15年度

県教委から委託を受け、平成15年5月6日～6月17日、7月15日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は下割遺跡以西の法線センター杭№190～70間である。面積167,000㎡に任意のトレンチを140か所設定した。下割遺跡に関係するトレンチはH15-1～6Tである。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、上層（現地表下20cm）ではH15-1～4Tで古代～中世の遺物が出土し、H15-1・3・4Tで遺構を検出した。また、中層（現地表下30cm）ではH15-1・3・4Tで古墳時代・古代の遺物が出土した。下層（現地表下340cm）では土器は伴わないものの、H15-3Tで径20cmの柱根が出土した。このような状況から、面積13,200㎡（上層6,600・中層6,600㎡）を下割遺跡の範囲拡大とした。下層は深部にあるため、上・中層の調査が終了後、再度、試掘確認調査を実施することとした。

平成20年度

県教委から委託を受け、平成20年8月27～29日、11月17～21日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は法線センター杭№219から飯田川までである。面積22,700㎡に任意のトレンチを30か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査の結果、遺構・遺物の検出層は1面で、H20-1・2・8～10・15・17・19～21・23～30Tから古代～中世の遺物が出土し、H20-1・2・4・10～16・19～21・23～27Tから遺構を検出した。また、これらは法線センター杭№219～221、225～228、230～235にまとまる傾向が見られた。このような状況から、調査対象範囲の西側の7,967㎡を下割遺跡の範囲拡大として、東側11,006㎡を新発見の『堂古遺跡』として本発掘調査必要範囲とした。

B　本発掘調査

1）狐宮遺跡

平成17年度

平成17年4月11日～11月18日に面積11,200㎡を対象に実施した。調査の結果、9世紀前葉～後葉を主体とする集落が見つかり、多数の掘立柱建物、竪穴建物、井戸、畑作溝などを検出した。このほか古墳時代の木棺を据えた陥穴や、縄文時代草創期の所産と考えられる尖頭器を検出した。遺跡の立地する高田面の形成年代や、土地利用を考える上で貴重な資料となった。

平成21年度

平成17年度に未買収地であったため調査ができなかった範囲1,589㎡について平成21年4月22日～6月12日まで実施した。

4月9日、遺跡の所在する本道地区の集会場にて発掘調査の施工について地元説明会を行った。調査区

西端にかかる農道、用排水路の切り回しについて説明し、了解を得た。4月13日から現地入りし、翌日地元教育委員会、区長等の関係機関、関係者への挨拶回りをした。農道、用排水路の切り回し完了後の4月22日からバックホーによる表土掘削を開始、周縁に開渠を兼ねる溝を切り壁面の土層堆積の観察、確認調査の結果の検証を行った。4月24日にグリッドの杭打ち、4月27日、作業員を投入、まず開渠掘削・整形、土層観察用の畔に沿ってサブトレンチを入れて遺跡全体の層序確認に務めた。4月30日バックホーによる表土掘削作業終了。5月連休明けの7日から人力による包含層掘削、遺構検出を行った。掘削は移植ゴテ・竹べらなどを用いた。遺物の取り上げは2m毎の小グリッド（第Ⅲ章2参照）を基本とし、遺構出土の遺物はこれに遺構名を付した。なお、遺構番号は遺構の種類（土坑・ピット・溝など）にかかわらず連番とした。遺構は掘立柱建物の柱穴、井戸、土坑、溝などが検出し、5月中でほぼ終了した。6月10日にラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影（以下、空撮）を行い、同日に県教委の調査終了確認を受けた。6月11日にすべての平面図測量を終了し、調査を終了した。

2）下割遺跡

平成14年度

平成14年4月11日～10月11日に法線センタ杭No.214～219間の上層6,500㎡を対象に実施した。調査の結果、13世紀後半～14世紀の集落が見つかった。集落は掘立柱建物、井戸、溝などで構成され、溝で区画された屋敷地の集まりであった。また、屋敷地や集落間をつなぐ道路遺構も検出した。

平成15年度

平成15年4月7日～11月21日に面積14,600㎡を調査した。対象範囲は、平成14年度調査区の西側に隣接する上層7,500㎡と、主に平成14年度調査区の下にある中層7,100㎡である。調査の結果、上層では平成14年度調査で検出した13世紀後半～14世紀の集落の続きが見つかり、該期の集落形態が明らかとなった。中層は古墳時代前期～中期の掘立柱建物や井戸、旧河川を検出し、河川の両側に集落が形成されていたことが明らかとなった。また、遺物では、在地系の土師器に加え、畿内系外来土器であるタタキ甕が多数出土した。

平成20年度

平成20年5月12～9月1日に実施した。調査対象範囲は平成15年度上層調査終了範囲のうち、中層に広がりを確認されている3,384㎡であった。平成15年度調査と同時期の遺構・遺物を検出した。しかし、遺構はそれほど多くなく、集落の南及び西側の縁辺部にあたると考えられた。遺物は平成15年度調査と同様の出土傾向を示し、畿内系外来土器であるタタキ甕の出土量は県内最多であった。

平成21年度

中世～近世初頭の水田区画の畦畔などの調査を6,623㎡、その後奈良時代の遺構面の調査を2,537㎡、合わせて9,160㎡を平成21年5月28日～10月30日まで実施した。

5月11日から狐宮遺跡の調査と並行して暗渠設置工事を開始した。5月29日、水田遺構が予想されていたことから畦畔の位置を明らかにするためバックホーによるトレンチ調査を開始。6月1日、暗渠工事が終了。6月9日から表土剥ぎ開始する。土層堆積を確認した結果、水田面を埋めているⅣ層から中世～近世初頭の土器・陶磁器が出土したため水田は当該期の所産と断定、その下のⅤ層は出土遺物から古代の包含層と断定した。中世～近世初頭の水田遺構の調査のため表土掘削は、Ⅳ層中からの遺物が少ないことから、畦畔の検出を最優先することを考え畦畔が検出できるレベルのⅣ層中までを掘削した。6月12日、

調査区西側から作業員を入れ、畦畔、溝などの検出作業を始めた。6月23日、市道米岡荒屋線の北側の試掘調査を行った。遺構・遺物が確認できなかったのでこの場所は表土掘削から派生した残土置き場に利用した。6月25日、表土掘削中に木簡（278）が出土。7月6日、表土掘削が終了した。中世～近世初頭の水田遺構の調査は、水田の田面を被覆しているⅣ層を全面剥ぐことをせず畦畔や水口の一部分にトレンチを入れ断面を記録し、検出した畦畔、溝は上端のみ平面図におとした。8月6日、上越市中郷区の『縄文の楽校』の一環で小学生約20名が来跡し見学と発掘調査の体験をした。8月27日、中世～近世初頭の水田遺構の空撮を行い、同日マスメディアに遺跡の共同公開を行った。やはり同日、中世～近世初頭面（Ⅳ層中）の調査終了確認を県教委から受けた。8月29日、現地説明会を開催、見学者は142名であった。

8月31日、古代の調査を開始、Ⅴ層包含層の粘質が強く人力ではかなりの労力がかかることと、遺物の出土量は多くないということから、遺構検出を重視しⅥ層上面までバックホーで掘削することにした。9月7日、グリッド基準杭を再設置、翌日から作業員を動員し遺構検出重視の調査を行った。9月9日、バックホーによる古代の包含層掘削が終了した。9月25日、上越市北諏訪小学校6年生が来跡し、遺跡の見学と発掘体験学習をした。10月7日、32～33P区検出の柱穴列、溝が北側に拡がることがわかり、調査範囲を拡げた。10月16日、古代遺構面の調査終了確認を県教委から受けた。10月22日、空撮を実施。10月26日までに平面測量が終了し、10月27日から古墳、縄文時代など下層の遺構・遺物がないか試掘調査を行った。その結果、古墳時代、縄文時代の遺物が出土したトレンチもあったが、遺構が検出しなかったことと、遺物も多く出土しなかったことから今回の調査した範囲の下層調査は必要なしとした。10月30日、調査を終了した。

3　発掘調査体制と整理作業

狐宮遺跡及び下割遺跡の試掘確認調査、本発掘調査は多年度にわたるため、ここでは狐宮遺跡Ⅱ及び下割遺跡Ⅳに直接関係する調査体制を記述する。

A　試掘確認調査

遺跡名（年度）	**狐宮遺跡**（平成20年度）	**下割遺跡**（平成14年度）
調査期間	平成20年8月18・19日	平成14年4月15日～5月8日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）	新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）
調　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	同　左
総　括	木村正昭（事務局長）	黒井幸一（事務局長）
管　理	斎藤　栄（総務課長）	長谷川司郎（総務課長）
庶　務	長谷川靖（　同　班長）	高野正司（　同　主任）
調査総括	藤巻正信（調査課長）	岡本郁栄（調査課長）
調査指導		高橋　保（　同　国土交通省担当課長代理）
調査担当	田海義正（　同　試掘確認調査担当課長代理）	尾崎高宏（　同　班長）
調査職員	畠野義昭（　同　主任調査員）	田中一穂（　同　嘱託員）

B　本発掘調査・整理作業（平成 21 年度）

調査期間	狐宮遺跡Ⅱ：平成21年4月22日～6月12日　下別遺跡Ⅳ：平成21年5月28日～10月30日
整理期間	平成21年11月2日～平22年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
調　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　括	木村正昭（事務局長）
管　理	斎藤　栄（総務課長）
庶　務	松原健二（同　班長）
調査総括	藤巻正信（調査課長）
調査担当	高橋保雄（　同　本発掘調査担当課長代理）
調査職員	飯坂盛泰（　同　主任調査員）
支援組織	株式会社吉田建設
現場代理人	保坂修央（土木部工務係）
調査員	野水晃子　　矢部英生　　長沼吉嗣（以上、埋蔵文化財調査部）
補助員	今井昭俊　　鈴木ゆかり　　北見順子　　和田恒美（以上、埋蔵文化財調査部）

C　整理作業の経過

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場（現地事務所）で本発掘調査と並行して行った。これ以外の遺構図面の点検修正、遺構図面図版組み、遺構写真図版作成、遺物図面図版組み、遺物写真撮影、遺物写真図版組み等は発掘調査の終了した 11 月から支援業者の整理室にて行った。その後、原稿執筆、編集・校正を行った。

なお、編集作業のうち、図版編集は平成 21 年度に、本文編集は平成 22 年度に行い、印刷は平成 23 年度に行った。

現地説明会（8 月 29 日）

地元児童の発掘調査体験（9 月 25 日）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境[1)]

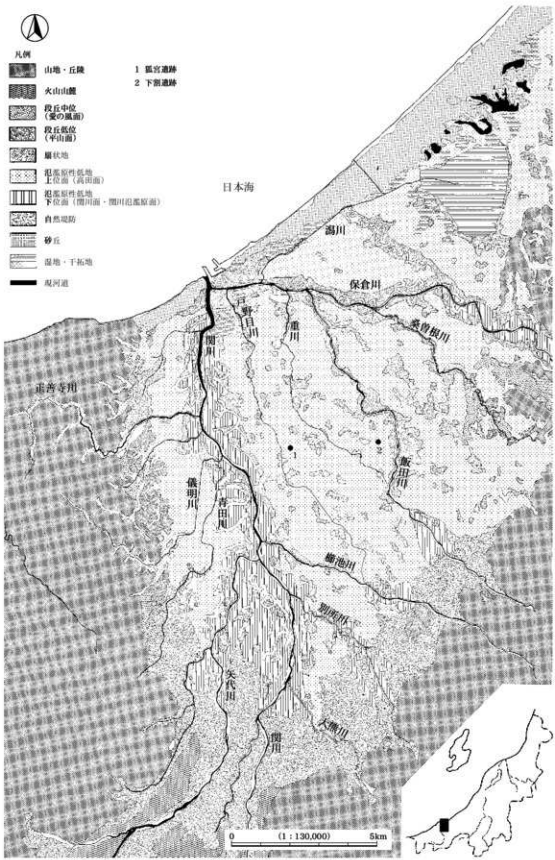
狐宮遺跡と下割遺跡が立地する高田平野は、新潟県南西部に位置する沖積平野である。その形状は、上越市五智、上越市柿崎区竹鼻、上越市三和区岡田、妙高市小出雲付近を頂点とする不等辺四角形におおむねなっている。北辺は、長さ約 20km にわたり湯町砂丘が発達し、海岸と平野を区画している。東辺から南東辺には、東頸城丘陵が広がり、柏崎平野・越後平野・十日町盆地・長野盆地と高田平野を隔てている。東頸城丘陵北端には、米山を主峰とする米山山地、南東部には信越国境をなす関田山脈、南端には斑尾山がそびえている。西辺には西頸城丘陵が広がっている。この丘陵は、海岸に沿って西方に延び、糸魚川市の平野部と高田平野とを隔てている。西頸城丘陵南方には西頸城山地が連なり、その北端には青田難波山、南端には主峰の火打山（2,462m）がそびえている。さらに、その南には、富士火山帯の北端をなす焼山（2,400m）及び妙高山（2,454m）の両火山がそびえ、平野南端は、妙高山の岩屑流、火砕流により形成された丘陵と接している。

平野には、これら周辺の山地・山脈、丘陵から多数の河川が流入している。平野最大の河川である関川は、火打山・妙高山及び長野県との境をなす高妻山・乙妻山の地域を水源とし、平野を西偏しながら北流し、日本海に注いでいる。途中、妙高山から白田切川・大田切川など、西頸城山地から矢代川・青田川など、西頸城丘陵から儀明川・正善寺川などが関川に合流する。また、東頸城丘陵や関田山脈からは、大熊川・別所川・柵池川・飯田川・保倉川などの中小河川が関川に合流する。平野の北東部では、東頸城丘陵・米山山地を水源とする吉川・大出口川・柿崎川などが平野に流れ出し、直接日本海に注いでいる。

北東部から南西部にかけて、関川や矢代川をはじめ、大熊川・別所川・柵池川・飯田川などにより形成された扇状地が発達している。

高田平野の地形面は階段状であり、最も低い関川氾濫原面・関川面、最も高い高田面と２段の沖積段丘を形成している。狐宮遺跡と下割遺跡をのせる高田面は、主に礫・砂・シルトの互層からなる高田層によって形成された堆積面であり、その分布は平野の大部分を占める。平野の中央部において高田面の表層地質や珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかになった［高田平原団体グループ 1962］。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなっている。平野に分布する遺跡の時代を検討した結果、高田面は古墳時代初頭から段丘化し始め、数回におよぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている［高田平野団体研究グループ 1981、岡本 1999］。しかしながら、平成 17 年度の狐宮遺跡の発掘調査で、縄文時代の草創期の石器や縄文時代後・晩期の土器が出土したことにより、少なくとも縄文時代の後半には人々が居住し得る環境が整っていた可能性があり、高田面の形成年代について検討が必要であろう。飯田川と関川の間には、小規模な自然堤防が点在し、その分布は、一定の方向性をもって配列している。その配列に従って灌漑水路が通り、戸野目川・重川のような小河川が流れているので、か

1）高田平野の地理的環境については、『第 171 集　狐宮遺跡』の「2　遺跡周辺の地理的環境」［桐原 2007］の一部修正・加筆して引用する。



第５図　高田平野の地形分類図

（北陸地方建設局北陸技術事務所 1981；新潟県農地部農村総合農村総合整備課 1980・1981 を改変，入江 2008 原図に加筆）

つてはここに丘陵地から流れ出した川が流れていたのではないかと推察される［高野 2002］。このような自然堤防上の微高地に、現集落が成立している。

2　遺跡の分布と歴史的環境

狐宮遺跡（1）・下割遺跡（2）が立地する高田平野と、その周辺に広がる古代・中世の主な遺跡の分布は第６図に示す通りである。この平野における古代の遺跡は、多くが各流域の自然堤防上や扇状地に位置する［笹澤 2003a］。この自然堤防上や扇状地に立地する傾向は、城館跡を除く中世の遺跡にも同様に見られる［戸根 2003］。

古　代　頸城郡は、大宝２年（702）に古志・魚沼・蒲原の３郡とともに越後国へと編入される以前は越中国に属していた。越後国に編入後、頸城郡に国府が設置されていたことが『和名類聚抄』に「国府在頸城郡」という形で記載されている。その所在は先学によって複数の推定地が存在している。昭和55～57年の発掘調査の結果、有力視されているのは関川右岸の段丘上に立地する今池遺跡（8）周辺の地域である［相沢 2004］。この今池遺跡の周辺には、子安遺跡（9）・下新町遺跡（10）・本長者原廃寺（11）がある。今池遺跡は８世紀前半～９世紀前半の東西棟の掘立柱建物が多数検出され、円面硯・瓦片・近畿地方からの搬入土器が出土した［坂井ほか 1984］。子安遺跡は今池遺跡の衰退後に遺構数が増加し、当地域の中核となる遺跡である［坂井ほか 1984、野村ほか 2009］。本長者原廃寺は南北に主軸を持つ基壇跡や、今池遺跡との位置関係などから国分寺跡と推定されている［小島 1984］。また、頸城郡衙関連遺跡として有力視されているのは栗原遺跡（12）である。栗原遺跡は８世紀初頭～中葉の遺跡で関川と矢代川の間の段丘上に立地する。周辺の同時期の遺跡に月岡遺跡（13）・倉田遺跡（14）・東沖遺跡（15）がある。栗原遺跡では基壇跡や大型の掘立柱建物が検出され、「郡」と記された墨書土器や帯金具が出土した［坂井 1982、高橋 1984］。倉田遺跡では倉庫と考えられる総柱建物が多数検出され、栗原遺跡出土の瓦片と同種の瓦片が出土したことから栗原遺跡と関連のある遺跡と推定されている［高橋 1997］。

狐宮遺跡と下割遺跡周辺の８～９世紀代を中心とする遺跡は、三角田遺跡（3）・延命寺遺跡（4）・越前遺跡（6）などがある。三角田遺跡では８～９世紀にかけて集落が営まれ、それに伴う畑も検出された。自然堤防とその周縁において断続的に居住生産活動が行われた遺跡と推定されている［沢田ほか 2006］。延命寺遺跡では手挙・具注暦・売券などの内容が記載された木簡が出土し、その中に現在の地名との関係が想定される言葉が記されているものもあった。また、一度使用した木簡を削り再利用していることや、

No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代
1	狐宮遺跡	縄文～古代	13	月岡遺跡	古代	25	宮ノ本遺跡	古墳・中世
2	下割遺跡	古墳～中世	14	倉田遺跡	奈良	26	末野窯跡	平安
3	三角田遺跡	古代～近世	15	東沖遺跡	古代	27	日向窯跡	奈良
4	延命寺遺跡	古墳～古代	16	一之口遺跡	古代	28	下馬場古窯跡群	古代
5	屋敷割付遺跡	古代	17	八反田遺跡	古代	29	滝寺古窯跡群群	古代
6	越前遺跡	古代	18	山畑遺跡	弥生・飛鳥	30	大貫古窯跡群	古代
7	横曽根遺跡	中世	19	岩ノ原遺跡	平安	31	至徳寺跡	中世
8	今池遺跡	奈良・平安	20	樋田遺跡	中世	32	御館跡	中世
9	子安遺跡	弥生～中世	21	水久保遺跡	中世	33	安国寺跡	中世
10	下新町遺跡	弥生～古墳・古代	22	仲田遺跡	古墳・中世			
11	本長者原廃寺	古代	23	用言寺遺跡	平安・中世			
12	栗原遺跡	古代	24	池田遺跡	平安・中世			

第１表　高田平野の古代・中世の主な遺跡

第６図　高田平野における古代・中世の遺跡分布

［国土地理院発行「高田平野東部」・「高田平野西部」・「柿崎」１：50,000 原図］

層の使用などから官衙的性格を持つ遺跡と推定されている[山崎ほか2008]。越前遺跡では自然流路に沿って計画的に配置された遺構が検出され、遺物では律令祭祀具や大量の墨書土器が出土したことから公的機関、または富裕層が関わった遺跡と推定される［笹澤2003b］。

古代窯跡群は高田平野周縁の丘陵に立地しており、東西に大別できる。東頸城丘陵には末野窯跡（27）・日向窯跡（28）などが分布し、西頸城丘陵には下馬場古窯跡群（29）・滝寺古窯跡群（30）・大貫古窯跡群（31）などの窯跡群が点在する。高田平野の須恵器生産は7世紀末に下馬場古窯跡群から開始され、8世紀代に活発に生産された。しかし、9世紀中葉に佐渡小泊窯跡群産の製品が流入を始めると生産は衰退してくる［笹澤2002］。

中　世　時代が中世に推移しても頸城地方には国府が依然として存在し、越後国の中心となっていた。その中枢は直江津であり、中世都市として発展する。この地域には守護所と考えられる至徳寺跡（32）、上杉氏の居館である御館跡（33）や安国寺跡（34）などが立地する［戸根2003］。一方、中世の集落遺跡は樋田遺跡（20）・水久保遺跡（21）・子安遺跡、平成14年度調査時の下割遺跡などがある。これらの集落遺跡は溝が建物群を区画し、複数の屋敷地が集合して集落を形成している。横曽根Ⅰ遺跡（7）の場合は堀で区画されており、集落というより居館的性格を持つと考えられる［水澤2003］。仲田遺跡（22）や用言寺遺跡（23）も集落遺跡であり、どちらも中世前期から後期に渡る遺跡である。仲田遺跡では集落の変遷を把握することができ［加藤ほか2003］、用言寺遺跡では居住域と生産域が一体的に検出され散村的な景観をうかがえる［加藤ほか2006］。

今回の発掘調査で下割遺跡から、畦畔の長軸がほぼ真北を向く中世～近世初期の水田を検出した。周辺地域における中世の水田の例として池田遺跡（24）と宮ノ本遺跡（26）がある。池田遺跡では畦畔が北西と南西に直行している水田遺構が12枚と、畦畔に沿うような足跡が検出された［鈴木1985］。宮ノ本遺跡では洪水埋没前の水田が29枚、火山灰埋没後の水田が26枚、火山灰より新しい洪水によって埋没した水田が30枚検出された［小池1999］。

第7図　中世末期の米岡村周辺図
（『越後国絵図一覧城郭』部分［東京大学史料編纂所編1983］加筆）

	米岡村	四辻村	西原村	上野田村	下野田村
慶長2年（1597）	534石	150石	108石	457石	140石

第2表　中世末期の米岡村周辺の村の石高
［『越後郡絵図』東京大学史料編纂所編1987］

慶長2（1597）年の「越後国郡絵図」を見ると、下割遺跡の周辺は水田が広がり、村が点在している風景が描かれている。絵図にはそれぞれの村の石高や家の数などが詳細に記されており、下割遺跡に近い米岡村の石高は534石余と記述されている。隣村の石高は四辻村が150石、西原村が108石と記されており、これらの石高に比べると米岡村はかなりの石高であることがわかる。そのため、村名の下に水田の等級を表す「上」の字が記されている。等級は「上」「中」「下」「下々」の4段階で構成され、米岡村は最上位の等級である［市村2004］。絵図の情報だけではあるものの、下割遺跡周辺の水田は中世末期の段階で既に高い生産力を保持していたと見られる。

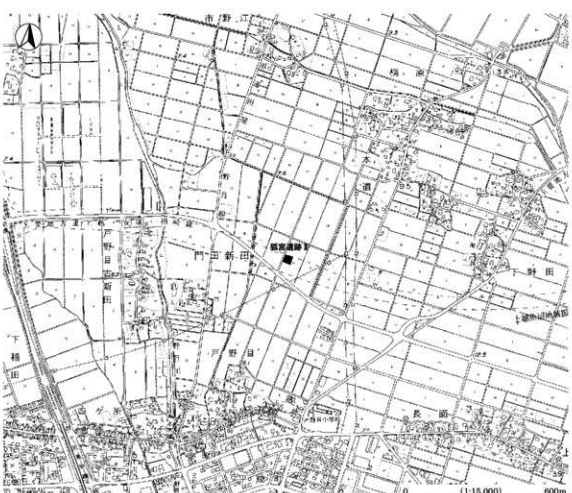
第Ⅲ章　狐宮遺跡Ⅱ

1　遺跡の立地と微地形（第８図）

狐宮遺跡は、高田平野の中央部に位置する。平成 21 年度調査区は上越市本道字南沖 477 番地ほかに所在し、平成 17 年度調査区の東側である。遺跡は、関川右岸の門田新田・戸野目・本道集落に挟まれた低地に立地し、周辺には水田が広がる。水田面の標高は約 7.8 ～ 8.2m である。

水田面から約 30 ～ 40cm 下で遺構を検出した。遺構検出面の標高は約 7.5 ～ 7.6m であった。平成 17 年度調査区に接する西側で高く、東側へ向かって次第に低くなる。平成 17 年度調査区では、最大幅が 6.7m で蛇行する古代の川跡を検出した。標高は川跡の周辺で高く、川跡から離れるに従って低くなる傾向が見られる。古代の集落は、川に沿った微高地上に築かれたものであろう。

なお、狐宮遺跡周辺の景観は、主要地方道上越・安塚・柏崎線の開通によって大きく変化したと思われるが、大正３年陸地測量部発行の地形図によると、現在と同様に水田が広がっていた様子が見て取れる。



第８図　狐宮遺跡Ⅱの位置と周辺の微地形

［上越市役所発行「上越市街図」1：10,000 原図］

2　グリッドの設定（第９図）

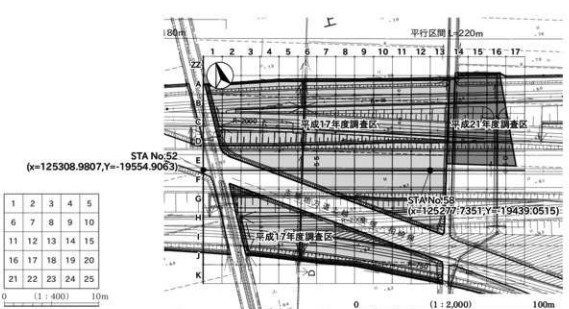
グリッドは、平成 17 年調査時に設定したグリッドを東側に延長した。基準になっている横軸は上越三和道路のセンター杭２点で、センター杭 STA-No52（1F 杭：世界測地系 X=125308.9807、Y=−19554.9063）と STA-No58（13F 杭：世界測地系 X=125277.7351、Y=−19439.0515）を結んだ線である。これに直交して起点を通る線を縦軸とする主軸を設定した。グリッド基準線の方位は、南北基準線が真北から７度 58 分 24 秒５東偏している。

調査では大小２種類のグリッドを使用した。大グリッドは 10m 間隔で、横軸では算用数字を使用して西から東に向かって「1、2、3、4…」列、縦軸では北から南に向かって「A、B、C、D…」列とし、大グリッド名は北西隅の基準線の交点により「1A、1B、1C…」と呼称した。しかし、今回の調査範囲で北東側の一部がグリッド縦設定枠に収まらなかったところがある。そこは、苦肉の策で ZZ とすることにした。小グリッドは大グリッドを 2m 方眼に 25 分割した。小グリッドは北西隅を１とし、南東隅を 25 とし算用数字順で表した。グリッドは「7B1」のように呼称した。

3　基本層序（第 10 図）

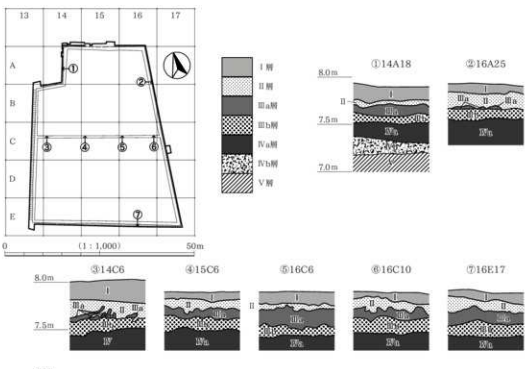
平成 17・21 年度調査を見れば明らかのように、狐宮遺跡は南北に伸びる微高地状に立地する。遺跡の東縁にあたる今回の調査区は東に向かって緩く傾斜するが、その傾斜は緩く、ほぼ平坦と言ってよい。したがって、どの地点でも基本層序はほぼ同じである。また、古代以降の土層の乱れから、水田耕作が推定されたが、畦畔などの水田関連の遺構は検出されなかった。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅴ層まで説明する。なお、土色は『新版標準土色帖』[農林水産省水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 2004] を使用した。



第９図　狐宮遺跡Ⅱ　グリッド設定図

Ⅰ　層　灰褐色粘土（7.5YR　4/2）　現水田耕作土、鉄分の酸化が著しい。
Ⅱ　層　暗灰色粘土（N　3/）　水田耕作土、鉄分の酸化が進んでいない。
Ⅲａ層　青灰色粘土（5B　5/1 ～ 6/1）　炭化粒を少量含む。古代の遺物が含まれる（遺物包含層）。
Ⅲｂ層　明青灰色粘土～明青灰色シルト（5B　7/1）　炭化粒を含まない。古代の遺構検出面である。
Ⅳａ層　青灰色シルト～青灰色細砂（5B　5/1 ～ 6/1）　どの層よりも粘性が弱い。
Ⅳｂ層　青灰色粘土～明青灰色粘土（5B　6/ ～ 7/）　Ⅳａ層に比べ明るい。
Ⅴ　層　黒色粘土（N　2/ ～ 1.5/）
Ⅳａ層を除き、いずれも粘性がある。中でもⅣｂ・Ⅴ層は特に粘性が強い。



第 10 図　狐宮遺跡Ⅱ　基本層序

4 遺　　構

A 概　　要

遺構は、掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基、土坑 12 基、溝 11 条、性格不明遺構 5 基、ピット 44 基を検出した。これらの遺構の時期は、井戸（SE2013）から一括して出土した土器などから 9 世紀中葉の平安時代である。遺構は掘立柱建物を検出した 14 ～ 15A 区周辺と、井戸を検出した 14D 区周辺に多く分布する。平成 17 年度の調査成果から遺構形態のあり方を見ると、建物、井戸、土坑、畑の耕作溝が遺構群を形成し、これらが数群のセットになって、集落を構成していたと思われる。14 ～ 15A 区の掘立柱建物もその遺構群のひとつであるが、調査区の端で遺構が調査区外に延び、全容はとらえられなかった。また東側は遺構が希薄で、今回の調査区が遺跡の東縁であると言える。

B　遺構の記述と表記方法

遺構の説明は、本文、観察表、図面図版、写真図版を用いた。

遺構名　遺構の呼称は、遺構種別の略号と番号を組み合わせて表記した。遺構種別は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、P：ピット、SD：溝、SX：性格不明遺構

番号は平成17年度調査の遺構と重ならないよう配慮し、続きの番号からにした。掘立柱建物は14から、それ以外は2001から通し番号を付けた。また、現場作業の進行の過程で欠番がある。

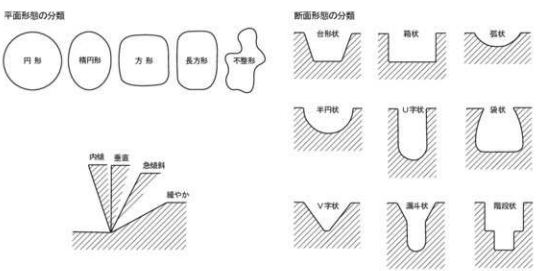
本　文　遺構の形状・計測値は、遺構検出面での数値である。掘立柱建物は、柱間の多い方（原則として長軸）を桁行、少ない方を梁行とした。ただし、柱間が同じ場合は長辺の方を桁行とし、正方形の場合は用いない。建物の主軸方向は、南北方向に対する建物軸の傾きを示している。

ほかの遺構との関連が認められない単独のピットを除き原則として個別に記述した。

遺構観察表　遺構の種別ごとに観察項目を設け記載した。また遺構の平面及び断面の表記は、統一した表現が良いとの考えで和泉Ａ遺跡の遺構の形状分類等［荒川・加藤1999］に準拠した。

図面図版　遺構全体図と分割図、主要な遺構の個別図で構成している。図面の縮尺は遺構全体図：1/500・1/300、遺構分割図：1/100で掲載した。個別図は掘立柱建物・エレベーション図：1/80、井戸、土坑、溝の断面図：1/40で掲載した。土層断面図の色調は、『新版標準土色帖』［農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所2004］を使用した。

遺構写真　調査の過程に応じ検出状況、断面、遺物出土状況、完掘写真などを撮影しているが、本文掲載遺構、遺物出土状況を中心に選択して掲載した。



第11図　遺構の平面形態と断面形態の分類（［荒川・加藤1999］を転載）

C　古代の遺構

1）掘立柱建物

SB14（図版5・8・60）

15ZZ及び15Aの境界付近に位置する。調査区北側の開渠にかかり、開渠沿いの壁面で、4基の柱穴を検出した。これらは、調査区外に広がる建物の柱穴列の一部と考える。柱穴列は68度西偏する。柱掘形は円形で残存径62～74cm、深さ63～92cmであり、いずれも断面形はＵ字状である。覆土にはⅣ

層土やV層土のブロックを多く含むのが特徴である。P2051には底部を平坦に加工した柱根が残っていた（70）。また、土層断面で柱痕跡を確認できるものがあり、柱の推定径はP2035で22cm、P2036で19cmである。P2033の埋土2層の灰色粘土も柱痕跡である可能性が高い。柱間寸法は1.78～2.05mと比較的一定している。P2035から土師器の長甕（1）・小甕・鍋が、P2036から土師器の長甕が出土した。

SB15（図版3・8・61）

14ZZ及び14Aの境界付近に位置し、調査区外に広がる建物の一部と考える。主軸の方向は不明であるが、P2039からP2071にかけての柱穴列は82度西偏する。柱掘形は円形あるいは楕円形で、径35～65cm、深さ34～57cmであり、ばらつきが大きい。覆土は、青灰色ないしは明青灰色の粘土・シルトを主体とする。いずれの柱穴にも柱痕跡が確認され、柱の推定径はP2039で21cm、P2071で13cm、P2038で14cmである。柱間寸法はP2039とP2071が1.55m、P2071とP2038が2.16mである。P2038から土師器の無台椀が出土した。

2）井　　戸

SE2013（図版4・9・59・61）

平成17年度に調査した掘立柱建物（SB13）の東側、14D11・16に位置する素掘りの井戸である。平面楕円形で、断面漏斗状を呈する。覆土は下位の7～8層は水平で、中～上位の1～6層はレンズ状に堆積する。

井戸は覆土の堆積と遺物の出土状況のあり方から、底面、7層、5～4層で埋め戻しの際の祭祀行為が行われている。底面では在地産の須恵器杯3点（4～6）が重なって出土し、ほかに須恵器壺（15）、土師器無台椀（8）、刀子（74）が出土した。須恵器杯2点（4・6）は内面にタールが付着し、外面に墨書が記されており、井戸を埋める際の祭祀行為が想定される。時期は9世紀中葉である。井戸の廃絶後は7層まで埋め、そこに土師器無台椀（7）、黒色土器（10・11）、曲物（48～52）、馬形（56）などの木製品、鉄鎌（75）を投げ入れている。これは祭祀行為と考えるが、一部は廃棄物も含んでいると考えられる。底面から7層までがV層黒色土を主体としているのに対して、6層からはⅢ～Ⅳ層灰色シルトを主体とする覆土である。そして、4～5層の埋め戻し途中で再び祭祀行為を行っており、被熱した礫と須恵器杯（2）、長頸瓶（17）、土師器小甕（12）などが出土した。

3）土　　坑

SK2011（図版4・9・61）

13D20に位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形は弧状である。

SK2014（図版4・9・61）

14D11に位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形は弧状である。覆土は炭化物を多く含み、底面から土師器の椀（20）が出土した。

SK2017（図版4・9・62）

14D7に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は弧状である。遺物は須恵器の有台杯（21）が出土した。

SK2019（図版4・9・62）

14D8に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。遺物は土師器の長甕（22）が出土した。

SK2044（図版 5・9・62）

15A4 に位置し、北側は開渠にかかる。残存部の長さは 86cm、深さは 14cm である。覆土は炭化物粒やシルトブロックを含む灰色粘土からなる。本土坑は SD2043 と重複し、これを切っている。須恵器の無台杯（23）のほか、土師器の無台椀・長甕・小甕・鍋が出土した。

SK2052（図版 5・9・62）

16A21、16B1 に位置する。長さ 86cm、幅 36cm で、平面形状は楕円形を呈する。底面は北側に向かって深くなり、最深部の深さは 22cm である。覆土は灰色粘土の単層で、炭化物粒を含む。

SK2065（図版 4・9・62）

14D5 に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。SD2066 を切っている。

SK2067（図版 4・9・62）

14D4 に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。

SK2068（図版 4・9・62）

14C24 に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。

SK2081（図版 9・16・62）

13C に位置する。平面形は開渠に切られるため不明である。断面形は弧状で深さ 14cm、立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で黒色粘土が堆積し、ブロック状の灰色粘土を多く含む。遺物は出土していない。

SK2085（図版 7・9・63）

16E5・10 に位置する。長さ 105cm、幅 54cm で、平面形状は楕円形を呈する。底面は凹凸が著しく、U 字状のくぼみも見られる。覆土は灰色粘土の単層で、炭化物粒を含む。

4）溝

SD2003（図版 3・10・63）

14A4 に位置し、西側は開渠にかかる。概ね北西 - 南東方向に延びる溝である。長さ 156cm 以上、幅 15 ～ 42cm、深さ 6cm で、断面は弧状である。覆土は灰色粘土の単層で、炭化物粒を含む。

SD2012（図版 4・10・63）

14C22 に位置する。真中が深くなる長さ 96cm、幅 16 ～ 36cm、深さ 16cm の小溝で、覆土は単層で炭化物の粒を多く含み、断面形は弧状である。遺物は出土しなかった。

SD2015（図版 4・10・63）

14D18 ～ 13E5 に位置する。井戸 SE2013 の南側にあって、井戸を囲むように東西方向から 14D18 で北東方向に曲がる。14D13 付近で不明瞭になりその先を検出できなかった。幅は 32cm、深さ 7cm、断面形は弧状である。この溝は主軸方向がほぼ平行の平成 17 年検出の SB12・13 の掘立柱建物、SE2013 などの遺構群の区画溝と推定する。遺物は須恵器の杯（24）が出土している。

SD2016（図版 4・10・63）

14D12 に位置する。SE2013 の北側にあり、SD2015 につながる北西・南西方向の溝である。長さは 23cm、幅 17cm、深さ 5cm である。

SD2020（図版 4・10・63）

14D9・10 に位置する。東西方向の溝で、西側末端は南側に屈曲しそこで掘り込みが不明瞭になる。

長さ 276cm、幅 32cm、深さ 5cm で、断面形は弧状を呈する。方向は SD2066 と平行する。

SD2041（図版 3・10・63）

15B に位置し東西方向を向く。規模は全長 13.4m、幅 45cm である。断面形は弧状で深さ 11cm である。覆土は単層で灰色粘土が堆積する。須恵器杯・須恵器壺・土師器小甕が出土した。

SD2043（図版 5・10・63）

15A・16A に位置し東西方向を向く。規模は全長 8.3m、幅 40cm である。SK2044 と開渠に切られる。断面形は弧状で深さ 9cm である。覆土は単層で灰色粘土が堆積する。須恵器杯蓋（25）・土師器長甕・土師器小甕が出土した。

SD2061（図版 4・10・64）

14D3 に位置する東西方向の小溝で、長さ 80cm、幅 45cm、深さ 10cm である。

SD2063（図版 4・10・64）

14D9 に位置する北西 - 南東方向の小溝である。東側は SD2020 に合流する。長さ 52cm で、幅 22cm 深さ 6cm である。断面形は中心がＵ字型にへこむ。

SD2064（図版 4・10・64）

14C25 ～ 14D9 に位置する南北方向の溝である。長さ約 6m の範囲で断続して検出したが、深さが浅いため過度の掘り下げで消滅してしまい、本来は一本の溝である。また、北側の SD2075 との間に確認トレンチが入って不明確ゾーンになっているが、この SD2075 までつながっていた可能性がある。幅は 24cm、深さ 5cm、断面形は弧状である。

SD2066（図版 4・10・64）

14D4 ～ 15D1 にある東西方向の溝である。14D5 のところで SK2065 に切られている。長さは 482cm、幅 22cm、深さ 7cm、断面形は弧状である。方向は SD2020 と平行する。区画溝である。

SD2075（図版 3・10・64）

14C4・9 に位置し、南端は開渠にかかる。概ね南北方向へ直線的に延びる溝である。長さ 296cm 以上、幅 38cm、深さ 10cm で、断面は弧状である。覆土は暗青灰色粘土の単層で、炭化物粒を含む。

5）性格不明遺構

SX2001（図版 10・18）

13B10・15、14B6・11 に位置する。平面形は SK2002 に切られる。平面形は長軸 140cm、短軸 98cm の不整楕円形である。断面形は弧状で深さ 8cm、立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で灰色粘土が堆積し、ブロック状の黒色粘土を多く含む。土師器無台椀が出土した。

SX2002（図版 10・18）

13B15・20 に位置する。平面形は長軸 150cm、短軸 85cm の長楕円形である。断面形は弧状で深さ 14cm、立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で黄灰色粘土が堆積する。SK2001 を切る。遺物は土師器無台椀・須恵器壺・土師器長甕・土師器小甕が出土した。

SX2006（図版 10）

14B15 に位置する。平面形は長軸 140cm、短軸 105cm の不整形である。断面形は弧状で深さ 9cm、立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で灰色粘土が堆積しブロック状の黒色粘土を多く含む。遺物は出土していない。

SX2031（図版3・10・64）

14A9に位置する。平面は、長さ228cm、幅82～119cmで、東西方向の長軸をもつ不整形を呈する。深さ12～14cmで、断面は皿状の浅い落ち込みである。覆土は、炭化物を含む暗灰色粘土と灰色粘土がレンズ状に堆積する。土師器の小甕が出土した。

SX2086（図版7・10・64）

調査区東端の17C16・17に位置する。遺構の中央部は開渠にかかるため全形は不明であるが、平面は楕円形を呈し、長さは130cm程度であったと推定する。残存部の断面は半円状で、幅72cm、深さ32cmである。覆土は、粘土と砂質シルトがレンズ状に堆積し、上部には炭化物粒を少量含む。

5　遺　　物

A　概　　要

出土した遺物には土器・木製品・石製品・金属製品がある。遺物の年代は平成17年度の調査と同様に古代で、9世紀中葉にまとまる。出土量は平箱で土器が11箱、木製品5箱である。遺物は遺構の分布が集中する調査区西側で多く出土した。SE2013からは9世紀中葉の土器と木製品の良好な一括資料が出土している。

B　土　　器

1）記述の方法

遺構出土のものから記述し、その後に包含層出土のものを続ける。法量や色調などの詳細な情報は観察表に記載した。時期区分及び年代観は、春日真実氏による編年［春日1999］を参考にした。土器類の名称で土師器のうち、内面に黒色処理を行うものについては「黒色土器」とした。調整技法及び実測図の表現方法は、山三賀Ⅱ遺跡［坂井ほか1989］、滝寺・大貫古窯跡群［小田ほか2006］などの報告書を参考に、以下のとおり表現を統一した。

小破片のため径の復元が不可能な場合は、実測図の中心線と左右の線に間隔をあけた。

「ロクロナデ」はロクロ回転を利用したナデ、その他のものは「ナデ」とした。実測図では2点を切った破線で示した。

「ロクロケズリ」はロクロ回転を利用した削り、ロクロ回転を利用しない削りを「ヘラケズリ」とした。実測図では、「ロクロケズリ」は1点を切った破線で示した。また「ヘラケズリ」は単位と砂粒の移動痕を図示した。

「カキメ」と「ハケメ」の原体は同じであるが、「カキメ」はロクロ回転を利用した調整であり、「ハケメ」はこれを利用しない調整である。

ロクロ成形の底部切り離しには回転ヘラ切りと回転糸切りがある。土師器は基本的に回転糸切りであるため、須恵器については実測図の下に回転ヘラ切りは「h」、回転糸切りは「i」と示した。なお、記述の際には「回転」を省略した。

須恵器甕や土師器長甕等の外面に見られる叩板の痕跡を「タタキメ」、内面の当て具の痕跡を「当て具痕」とした。

2）各　説

a 遺構出土

SB14-P2035（図版 11・65-1）

1 は土師器長甕であり、口縁端部が上方を向きわずかに内傾する。このほかに土師器小甕・鍋の小片が出土した。

SE2013（図版 11・65-2 ～ 19）

底面、7 層面、5 ～ 4 層面で埋め戻しの際の祭祀行為が行われ、層位別に遺物のまとまりが見られる。

底面・8 層出土　4 ～ 6 は須恵器無台杯、8 は土師器無台椀、14 は土師器小甕、15 は須恵器壺である。4 ～ 6 は椀形を呈し、5 の口縁端部はわずかに外反する。4・6 の体部外面には墨書が見られる。4 は倒位の「六」であり、6 も倒位の墨書であるが判読できない。15 は奈良県平城京で壺 G と分類されているもので［小笠原・西・吉田 1976］、上越市今池遺跡の SK102・SK120［坂井ほか 1984］や本遺跡 SD84（平成 17 年度調査分）に出土例がある。

7 層出土　7 は土師器無台椀、10・11 は黒色土器無台椀である。7 の内面には付着物がある。11 の底部外面にはヘラ記号がある。

6 層出土　9 は黒色土器無台椀である。

4 ～ 5 層出土　2 は須恵器無台杯、12 は土師器小甕、17 は長頸瓶、19 は甕である。12 の口縁部内面には炭化物が帯状に付着する。17 の底部外面はロクロケズリされる。

1 ～ 3 層出土　3 は須恵器無台杯、13 は土師器小甕、16・18 は長頸瓶である。3 の体部外面にはタールが付着する。

このほかに須恵器杯蓋、土師器長甕の小片が出土している。

SK2014（図版 11・65-20）

20 は土師器無台椀であり、全体的に磨耗が著しい。このほかに土師器長甕・小甕の小片がある。

SK2017（図版 11・65-21）

21 は須恵器有台杯であり、高台は外端接地する。このほかに土師器無台椀・長甕・小甕、黒色土器無台椀の小片が出土した。

SK2019（図版 11・65-22）

22 は土師器長甕であり、口縁端部は上方を向く。このほか土師器小甕の小片がある。

SK2044（図版 11・65-23）

23 は須恵器無台杯であり、全体的に磨耗している。このほかに土師器無台椀・長甕・小甕・鍋の小片が出土した。

SD2015（図版 11・65-24）

24 は須恵器無台杯である。このほかに土師器小甕の小片が出土した。

SD2043（図版 11・65-25）

25 は須恵器杯蓋であり、口縁端部は直線的に垂下する。このほかに土師器長甕・小甕の小片がある。

b 遺構外出土（図版 12・65・66-26 ～ 47）

須恵器　26 ～ 29 は無台杯である。28 の体部外面には横位に「□（北）カ十」の墨書がある。29 は底

部と体部の境に稜をもち、「二段底」を呈する。滝寺・大貫古窯跡群［小田ほか2006］の報告書における B 類に相当する。30・31 は有台杯である。30 は体部外面に正位の墨書があり、アルファベットの「Z」に類似する記号が二つ並ぶ。31 の高台はかなり細く、外端接地する。底部外面にはヘラ記号がある。32 ～ 34 は杯蓋で、摘みは擬宝珠型を呈する。45 は甕であり、頸部が「く」の字状に外反する。46・47 は長頸瓶である。46 は口縁端部が内傾し、内外面に自然釉がかかる。47 は外面に自然釉がかかる。

土師器　35・36 は無台椀であり、底部外面に墨書があるがどちらも判読できない。37 は黒色土器無台椀である。38 ～ 42 は土師器長甕である。38 ～ 41 は口縁端部が上方を向きわずかに内傾する。42 は断面の形状が三角形で厚みがある。43 は小甕であり、口縁端部は上方を向く。44 は鍋であり、口縁端部は面をもつ。

C　その他の遺物

その他の遺物は 51 点出土した。このうち製品を中心に 29 点を掲載した。内訳は土製品 1、石製品 2、金属製品 3、木製品 23 である。遺構出土の遺物は SE2013 が 21 点、P2029・2051 が各 1 点で、SE2013 からの出土が多い。時期は共伴土器から 9 世紀前葉～中葉と考えられる。ほかの 6 点は古代の遺物包含層である基本層序Ⅲａ層（以下、Ⅲａ層）からの出土である。

1）木　製　品（図版 13・14・67）

木製品は 27 点出土し、製品・加工材と判断できる 23 点を掲載した。内訳は曲物 5・木錘 3・馬形 1・果皮 2・柄 1・棒状木製品 3・木札 1・用途不明木製品 4・部材 1・箸 1・柱根 1 である。このうち 18 点は SE2013 中層からの出土である。ほかは P2029・2051 で各 1 点、Ⅲａ層の 2 点である。

a　遺構出土

SE2013　48・50 ～ 52 は曲物側板である。いずれもスギやヒノキの柾目材が使用され、内面には垂直方向にケビキが入っている。48 はスギ、52 はヒノキでどちらも樹皮の接合材が残る。49 は曲物底板である。ヒノキの柾目取りで、外縁付近には側板と接合する溝がめぐり、樹皮の接合材が残る。53 ～ 55 は木錘である。53・55 はコナラ属コナラ節の丸太材を半裁し、外周の半分と両端の角は削り取っている。材の重心上部には紐・縄を通すための方形の穴が貫通する。55 の未加工の表面には樹皮が残る。54 はコナラ属アカガシ亜属の丸太材の両端を垂直に切断し、断面の角を削り落としている。中央部には断面 V 字状の溝がめぐる。56 は馬形である。ツバキ属の枝材から、各部を削り出している。後端は欠損し断面は炭化している。57・58 は瓢箪の果皮である。58 の直径は 10.4cm で、容器として使用していた可能性がある。59 は柄杓などの柄である。スギの流れ柾目材を削り、断面円形に仕上げている。下端に向かって断面径は徐々に小さくなる。下端と下端から 9cm の部分の表面が磨耗していることから、直径 8 ～ 9cm の小型曲物側面に挿して使用していたと想定できる。上端は折れて欠損している。60・61・63 は棒状木製品である。60 は柾目材の全周を削り、断面多角形に仕上げている。62 は木札状木製品である。板目材を荒く平滑に加工し、上部には側面に偏った位置にやや方形の穴が貫通する。紐を通した孔の周囲は磨耗している。64 ～ 66 は用途不明木製品である。65・66 は下端を尖らせた加工痕があり、上端は平坦で摩滅している。

P2029　67 は用途不明木製品である。板目材を断面楕円形に加工し、下端に向かって徐々に細くする。

P2051　70は柱根である。ミカン割りしたクリの分割材を使用している。下端は材に対してほぼ垂直の加工痕が残り、底部は平坦である。

b　遺構外出土

68・69はいずれもⅢa層から出土している。68は部材である。平滑な板目材を断面方形になるよう割り裂いて加工している。上部側面に材に対して垂直方向にV字状の溝を施し、その後4隅を同じくV字状に抉る。下端は両側面から加工され、やや尖る。69は箸である。ヒノキの流れ柾目材を断面多角形になるよう削り出す。中央から下部はやや歪み、上端は欠損している。

2）石　製　品（図版14・67）

出土した18点から製品2点を掲載した。71・72は砥石で、石材は砂岩である。71はSE2013の下層から出土している。面状の砥面のほか、両側面には鋭い筋状の砥ぎ痕が残る。72はⅢa層から出土した。砥面は正面のみ確認でき、使用痕はやや薄い。

3）土　製　品（図版14・67）

Ⅲa層から1点出土している。73は平瓦の破片で、全体に磨耗しているが表面には布目痕がわずかに残る。

4）金属製品（図版14・67）

金属製品は3点を掲載した。内訳は刀子1、鎌1、用途不明鉄製品1である。74・75がSE2013下層、76がⅢa層の出土である。

74は刀子である。刃部の大部分が欠損し、残存部は2.3cmを測る。茎は完形である。75は鉄鎌である。峰も刃部も緩やかに内湾する曲刃鎌である。断面は峰で最大2mmの厚さ測り、刃縁に向かい薄くなる。正面右側の基端部は着柄のために折り返されている。76は用途不明鉄製品で、二枚の金属板を鋲で鍛接したものと思われる。

6　自然科学分析

A　花粉化石

1）はじめに

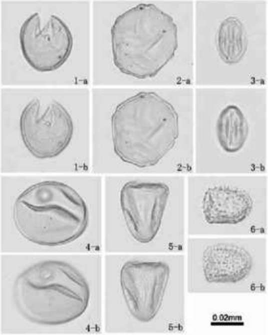
新潟県上越市本道に所在する狐宮遺跡は、関川右岸の自然堤防上に立地している。この狐宮遺跡において行われた発掘調査で、古代の掘立柱建物や井戸、土坑等が検出されている。以下に、基本層序セクションから採取された土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、古代における遺跡周辺の古植生について検討した。

2）試料と分析方法

試料は、15C6セクションから採取された基本層序Ⅲa層とⅢb層の2試料である。各試料について、Ⅲa層試料は青灰色粘土で、古代の遺物包含層である。Ⅲb層試料は明青灰色の粘土～シルトで、古代

の遺構検出面である。花粉分析はこの２試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約5g）を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣から適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。



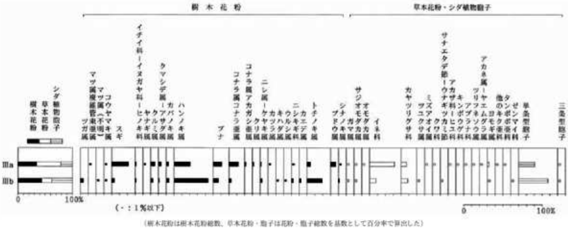
1: スギ　PLC.SS 5074 Ⅲa層
2: クルミ属　PLC.SS 5077 Ⅲa層
3: ブドウ属　PLC.SS 5075 Ⅲa層
4: イネ科　PLC.SS 5076 Ⅲa層
5: カヤツリグサ科　PLC.SS 5078 Ⅲa層
6: オモダカ属　PLC.SS 5079 Ⅲa層

第12図　狐宮遺跡Ⅱの花粉化石

和名	学名	Ⅲa	Ⅲb
樹木			
ツガ属	*Tsuga*	-	8
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	2	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	1
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	2	2
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	44	7
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	3	3
ヤナギ属	*Salix*	1	-
クルミ属	*Juglans*	11	8
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	6	3
カバノキ属	*Betula*	6	8
ハンノキ属	*Alnus*	43	92
ブナ	*Fagus crenata* Blume	22	14
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	25	6
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	4	-
クリ属	*Castanea*	4	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* - *Zelkova*	3	5
カツラ属	*Cercidiphyllum*	1	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	1
ウルシ属	*Rhus*	-	1
ニシキギ科	Celastraceae	1	3
カエデ属	*Acer*	-	5
トチノキ属	*Aesculus*	8	41
ブドウ属	*Vitis*	14	-
シナノキ属	*Tilia*	1	3
草本			
ガマ属	*Typha*	1	1
サジオモダカ属	*Alisma*	1	1
オモダカ属	*Sagittaria*	1	-
イネ科	Gramineae	188	30
カヤツリグサ科	Cyperaceae	41	41
ツユクサ属	*Commelina*	-	1
ミズアオイ属	*Monochoria*	1	-
クワ科	Moraceae	1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	3
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	2	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	3	-
アブラナ科	Cruciferae	4	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	1	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia* - *Galium*	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	13	4
他のキク亜科	other Tubuliflorae	4	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	-
シダ植物			
ゼンマイ科	Osmundaceae	-	1
単条型胞子	Monolete spore	123	183
三条型胞子	Trilete spore	3	1
樹木花粉	Arboreal pollen	204	211
草本花粉	Nonarboreal pollen	264	90
シダ植物胞子	Spores	126	185
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	594	486
不明花粉	Unknown pollen	43	22

T.－C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

第3表　狐宮遺跡Ⅱの産出花粉化石一覧表



（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

第13図　狐宮遺跡Ⅱの花粉化石分布図

3）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉 24、草本花粉 17、形態分類を含めたシダ植物胞子３の総計 44 である。これら花粉・胞子の一覧を第３表に、それらの分布を第 13 図に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図及び表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、Ⅲｂ層試料ではハンノキ属が最優占しており出現率は 40％を越えている。次いでトチノキ属が多く、20％近い出現率を示している。そのほか、ツガ属、スギ、カバノキ属、ブナなどが検出されている。草本類の占める割合は低く、その中ではイネ科とカヤツリグサ科が５～10％の出現率を示している。また単条型胞子が多産している。

Ⅲａ層試料ではスギの増加が特徴的であり、ブナやコナラ亜属、ブドウ属等も出現率を上げている。一方、ハンノキ属は大きく出現率を下げている。草本類ではイネ科が多く検出されており、出現率は 30％を越えている。また水生植物のオモダカ属やミズアオイ属等も観察されている。

4）遺跡周辺の植生変遷

先にも記したが、分析試料は古代（平安時代）と考えられている。この時期の狐宮遺跡周辺低地部ではハンノキ属が湿地林や河畔林を形成していたと見られる。また、クルミ属やトチノキ属も湿地林・河畔林周辺に生育していたと推測される。さらにこれら樹木に絡まるようにブドウ属が生育していたと見られる。また、遺跡周辺丘陵部にはスギ林やコナラ亜属などの落葉広葉樹林が成立していたと推測され、常緑広葉樹のアカガシ亜属も一部に生育していたと見られる。一方、低地部では、イネ科花粉の多産と水田雑草を含む分類群であるサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属が検出されていることから水田稲作が行われるようになった可能性が推察される。

B　基本層序堆積物中の珪藻化石群集

1）はじめに

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている［小杉 1988; 安藤 1990］。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

狐宮遺跡Ⅱは、上越市本道字南沖 477 番地ほかに所在する縄文時代及び古代の遺跡である。調査では、古代の集落跡で掘立柱建物跡の柱穴列や井戸などが検出された。

ここでは、基本層序の堆積物について珪藻化石群集を調べた。なお、基本層序の堆積物について花粉分析を行っている（花粉分析を参照）。

2）試料と処理方法

試料は、基本層序⑤地点の２層堆積物である（第４表）。各試料は、以下に示す処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

試料№	遺構	グリッド	層位	堆積物の特徴
1	基本層序⑤	15C6	Ⅲａ	青灰色粘土
2			Ⅲｂ	明青灰色の粘土～シルト

第４表　珪藻分析を行った試料の詳細

（1）湿潤重量約 1g 程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し 30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。（2）反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。（3）残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 ～ 1000 倍で観察し、珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。なお、珪藻殻は、完形と非完形（半分以上残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 中の殻数を計算し、分布図に示した。なお、珪藻化石が非常に少なかったため、作製したプレパラート全面について観察した。

3）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に［安藤 1990］が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、［安藤 1990］が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［上流性河川指標種群（J）］：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K）］：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地及び自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約 1.5m 以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所及び湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

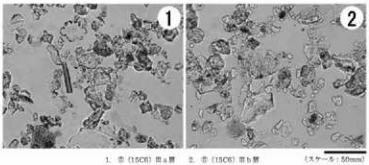
［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落及び泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

4）珪藻化石の特徴と堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、淡水種が 8 分類群 6 属 3 種であった。これらの珪藻化石からは環境指標種群の珪藻化石は見られなかった（第 5 表）。

いずれの試料も、珪藻化石に乏しく、検出された珪藻化石は破片である。同じ試料についての花粉化石の検討では、十分な珪藻化石が得られていることから（花粉分析を参照）、水成堆積物であることは間違いない。このことから、珪藻化石が堆積後、溶出した可能性が高い［Murakami 1996］。



1. 赤（15C6）Ⅲa層　2. 赤（15C6）Ⅲb層　（スケール：50mm）

第 14 図　堆積物の珪藻化石観察用プレパラート状況写真

分類群	種群	Ⅲa層	Ⅲb層
Aulacosira granulata	N	1	
Cymbella spp.	?	1	
Eunotia biareofera	W	2	
Eunotia spp.	?		1
Gomphonema grovei	W		1
Gomphonema spp.	?		
Pinnularia spp.	?	5	2
Stauroneis spp.	?	1	
広布種	W	0	1
淡水不定・不明種	?	7	3
合計		7	4
堆積物 1g 当たりの殻数（個）		1548	709

第 5 表　堆積物中の珪藻化石産出表

引用文献

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理 42』73-88p

小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究 27』1-20p

Murakami T.　1996　「Silicious Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Naganoyama Wetland in Aichi Prefecture,Central Japan」『第四紀研究 35』17-23p

C　出土木製品の樹種同定

1）はじめに

狐宮遺跡は上越市本道字南沖に所在し、古代の遺跡である。ここでは古代の木製品 10 点の樹種同定を行った。

2）試料と方法

試料は木錘（No.53 ～ 55）、馬形（No.56）、柄（No.59）、曲物（No.48, 49, 52）、箸（No.69）、柱根（No.70）の計 10 点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3）結　　果

樹種同定の結果、針葉樹はヒノキ科のヒノキとスギ科のスギの 2 分類群、広葉樹はブナ科のクリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節、ツバキ科のツバキ属の 4 分類群、合計 6 分類群が同定された。木錘はアカガシ亜属とコナラ節、馬形はツバキ属、柄はスギ、曲物はスギとヒノキ、箸はヒノキ、柱根はクリであった。結果を第 6 表に示す。

以下に同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、顕微鏡写真は図版に示す。

（1）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第15図　1a-1c（No.49）

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は散在もしくは晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

報告番号	種別	樹種	木取り	時代
54	木錘	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	古代
53	木錘	コナラ属コナラ節	芯持半裁	古代
55	木錘	コナラ属コナラ節	芯持半裁	古代
56	馬形	ツバキ属	芯持丸木・加工	古代
59	柄	スギ	芯無削出	古代
48	曲物（側板本体）	スギ	柾目	古代
49	曲物（底板）	ヒノキ	柾目	古代
52	曲物（側板接合部）	ヒノキ	柾目	古代
69	箸	ヒノキ	芯無削出	古代
70	柱根	クリ	芯無割材？	古代

第6表　樹種同定結果一覧

ヒノキは温帯から暖帯に分布する。材は加工が容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高くて狂いが少ない。建築・器具・漆器・土木・彫刻・経木などに利用される。

（2）スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　スギ科　第15図　2a-2c（No.48）

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する。材は比較的軽軟で切削加工は容易、保存性は中庸で、割裂性は大きい。建築・樽桶・土木・船・彫刻・下駄・経木・箸などに利用される。

（3）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　第15図　3a-3c（No.70）

環孔材で、大型の道管が年輪界に並び、晩材部では角張った小道管が火炎状に配列している。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管の穿孔は単一で、放射組織は単列同性である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。建築・家具・器具・土木などに利用される。

（4）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　第15図　4a-4c（No.53）

放射孔材で、円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅のいびつな線状に配列する。道管の壁孔は柵状で、穿孔は単一である。放射組織は同性で単列である。広放射組織は確認できなかったが、他の特徴からアカガシ亜属とした。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、イチイガシ、アカガシ、ハナガシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。材はきわめて堅硬、弾性強く強靱で、水湿に強い。器具・船舶・車両・機械などに用いられる。

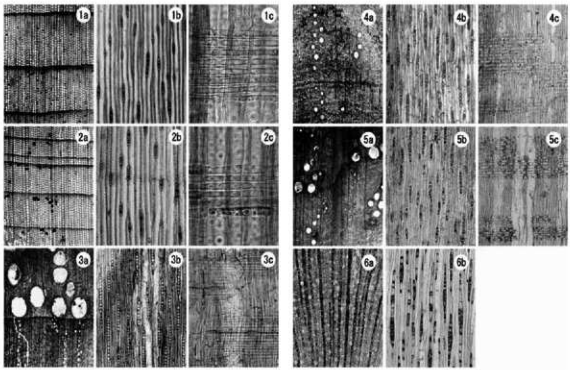
（5）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　第15図　5a-5c（No.54）

環孔材で、大型の道管が年輪界に沿って1～3列並ぶ。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単一、放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類があるが、接線断面では広放射組織は確認できなかった。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は全体的に重硬である。建築・家具・器具・薪炭などに用いられる。

（6）ツバキ属　*Camellia*　ツバキ科　第15図　6a-6b（No.56）

小径の道管がほぼ単独に分布する散孔材である。放射断面の切片が採取できなかったため、接線断面から確認したところ、道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は縁辺に方形もしくは直立細胞が2～4程度ある異性、細胞幅は2列程度で単列部と多列部の幅が同じである。



1a-1c．ヒノキ（No.49,a:500 μm,b:200 μm,c:50 μm）
2a-2c．スギ（No.48,a:500 μm,b:200 μm,c:50 μm）
3a-3c．クリ（No.70,a:500 μm,b:200 μm,c:200 μm）
4a-4c．コナラ属アカガシ亜属（No.54,a:500 μm,b:200 μm,c:200 μm）
5a-5c．コナラ属コナラ節（No.53,a:500 μm,b:200 μm,c:200 μm）
6a-6b．ツバキ属（No.56,a:200 μm,b:200 μm）

第 15 図　出土材の顕微鏡写真　（a：横断面　b：接線断面　c：放射断面）

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキ、サザンカ、チャノキなどがある。

4）ま と め

木錘はアカガシ亜属とコナラ節で、木取りは芯持丸木と芯持半截であった。木錘にはアカガシ亜属やコナラ亜属、ツバキ属などの使用例があり［島地・伊東 1988］、やや重硬な広葉樹を用いる傾向がある。

馬形はツバキ属で、木取りは芯持丸木の加工材であった。一般的に馬形などの祭祀具はスギやヒノキなどの針葉樹が圧倒的に多いが、広葉樹の場合はカシ類、シイ類、ツゲ、サカキなどが樹種を選ばず利用される傾向にある。これらは遺跡周辺に生育していた樹種を用いたものと思われる。

曲物は底板がヒノキ、側板本体と側板接合部がスギであり、樹種が異なっていた。木取りはいずれも柾目であった。曲物には針葉樹が用いられることが多く、木取りも一般的に柾目である。当遺跡においてもこの傾向に一致すると言える。

当遺跡は甲信越地方の日本海沿いであり、現在の植生分布では主に常緑広葉樹林帯に属する。分析で確認された樹種も主に温帯から暖帯の常緑広葉樹林帯に分布するが、スギやヒノキは流通材である可能性も考えられる。

参考引用文献

島地謙・伊東隆夫　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』259p　雄山閣出版
（株）加速器分析研究所　2007「樹種同定」『新潟埋蔵文化財調査報告書第 171 集　一般国道 253 号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅳ　狐宮遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

7 ま と め

A　遺物の編年的位置付け

平成17年度の調査で出土した遺物は春日編年[春日1999]Ⅲ～Ⅵ期（8世紀前葉～9世紀後葉）に帰属し、主体となるのはⅤ期（9世紀前葉～中葉）であった[野水2007]。今回の調査で出土した遺物はほとんどがⅤ期に所属すると考えられる。ここではSE2013の食膳具を中心に、上越市の今池遺跡[坂井1984]や岩ノ原遺跡[金内2008]、滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群[小田2006]の出土土器と比較しながら、編年的位置付けについて検討する。

SE2013及びその他の遺構出土土器は春日編年Ⅴ2期に比定でき、今池遺跡Ⅴ期（SD201）、岩ノ原遺跡3期、滝寺・大貫古窯跡群5期に併行すると考えている。

滝寺・大貫古窯跡群5期では底部の切り離し

H21 狐宮遺跡Ⅱ全体　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	破片数	比率（口縁部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	336	309	43.8%	17.2%
	無台杯	0	0	0.0%	0.0%
	杯	0	0	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	135	90	17.6%	5.0%
	有台杯	9	20	1.2%	1.1%
	杯	67	42	8.7%	2.3%
	杯蓋	67	42	8.7%	2.3%
	鉢	3	2	0.4%	0.1%
黒色土器	無台椀	28	39	3.6%	2.2%
	有台椀	0	0	0.0%	0.0%
食膳具計		645	544	84.0%	30.3%
須恵器	長頸瓶	10	4	1.3%	0.2%
	広口瓶	0	0	0.0%	0.0%
	横瓶	0	0	0.0%	0.0%
	壺蓋	0	2	0.0%	0.1%
	突帯付四耳壺	0	0	0.0%	0.0%
	短頸壺	0	0	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0.0%	0.0%
	小型壺	0	0	0.0%	0.0%
	壺・瓶	0	65	0.0%	3.6%
	甕	3	68	0.4%	3.8%
貯蔵具計		13	139	1.7%	7.7%
土師器	長甕	67	777	8.7%	43.2%
	小甕	42	296	5.5%	16.5%
	鍋	1	41	0.1%	2.3%
	甑	0	0	0.0%	0.0%
	羽釜	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具計		110	1114	14.3%	62.0%
総計		768	1797	100.0%	100.0%

H17･21 狐宮遺跡全体　器種構成比率

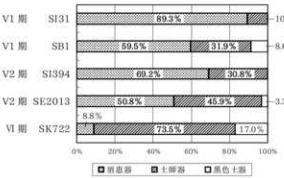
種別	器種	口縁部残存率	破片数	比率（口縁部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	1611	3177	23.7%	13.1%
	無台杯	7	8	0.1%	0.0%
	杯	56	26	0.8%	0.1%
	鉢	17	7	0.3%	0.0%
	その他	8	6	0.1%	0.0%
須恵器	無台杯	586	672	8.6%	2.8%
	有台杯	368	359	5.4%	1.5%
	杯	1261	921	18.6%	3.8%
	杯蓋	907	498	13.4%	2.1%
	鉢	5	23	0.1%	0.1%
黒色土器	無台椀	194	403	2.9%	1.7%
	有台椀	0	35	0.0%	0.1%
食膳具計		5020	6135	73.9%	25.3%
須恵器	長頸瓶	136	175	2.0%	0.7%
	広口瓶	0	52	0.0%	0.2%
	横瓶	27	79	0.4%	0.3%
	壺蓋	5	6	0.1%	0.0%
	突帯付四耳壺	24	25	0.4%	0.1%
	短頸壺	19	6	0.3%	0.0%
	壺	18	214	0.3%	0.9%
	小型壺	25	4	0.4%	0.0%
	壺・瓶	23	234	0.3%	1.0%
	甕	178	1700	2.6%	7.0%
貯蔵具計		455	2495	6.7%	10.3%
土師器	長甕	817	13171	12.0%	54.2%
	小甕	417	1907	6.1%	7.9%
	鍋	77	529	1.1%	2.2%
	甑	3	41	0.0%	0.2%
	羽釜	0	8	0.0%	0.0%
煮炊具計		1314	15656	19.4%	64.5%
総計		6789	24286	100.0%	100.0%

H17 狐宮遺跡全体　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	破片数	比率（口縁部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	1275	2868	21.2%	12.8%
	無台杯	7	8	0.1%	0.0%
	杯	56	26	0.9%	0.1%
	鉢	17	7	0.3%	0.0%
	その他	8	6	0.1%	0.0%
須恵器	無台杯	451	582	7.5%	2.6%
	有台杯	359	339	6.0%	1.5%
	杯	1194	879	19.8%	3.9%
	杯蓋	840	456	13.9%	2.0%
	鉢	2	21	0.0%	0.1%
黒色土器	無台椀	166	364	2.8%	1.6%
	有台椀	0	35	0.0%	0.2%
食膳具計		4375	5591	72.6%	24.9%
須恵器	長頸瓶	126	171	2.1%	0.8%
	広口瓶	0	52	0.0%	0.2%
	横瓶	27	79	0.4%	0.4%
	壺蓋	5	4	0.1%	0.0%
	突帯付四耳壺	24	25	0.4%	0.1%
	短頸壺	19	6	0.3%	0.0%
	壺	18	214	0.3%	1.0%
	小型壺	25	4	0.4%	0.0%
	壺・瓶	23	169	0.4%	0.8%
	甕	178	1632	3.0%	7.3%
貯蔵具計		445	2356	7.4%	10.5%
土師器	長甕	750	12394	12.5%	55.1%
	小甕	375	1611	6.2%	7.2%
	鍋	76	488	1.3%	2.2%
	甑	3	41	0.0%	0.2%
	羽釜	0	8	0.0%	0.0%
煮炊具計		1204	14542	20.0%	64.7%
総計		6024	22489	100.0%	100.0%

第7表　狐宮遺跡　器種構成比率

技法に糸切りが多くを占めるものの、ヘラ切りも少数存在する。この現象は今池遺跡 SD201 出土資料でも確認できる。SE2013 出土土器では、2・3がヘラ切り、4～6が糸切りである。2・3は佐渡小泊窯産であるから、在地産の須恵器は糸切りのみである。また在地産と佐渡小泊窯産の須恵器があり、土師器無台椀が組成に加わるというあり方は岩ノ原遺跡3期でも見られる。



第 16 図　狐宮遺跡　食膳具構成比率

出土土器全点に対し口縁部残存率計測法［宇野 1992］を用いて機能別構成比率・食膳具構成比率を算出した（第7表）。平成 17 年度調査では 167.3 個体（6024/36）、22489 片の土器が出土した。機能別構成比率は食膳具 72.6%・貯蔵具 7.4%・煮炊具 20.0%であった。この計測結果に今回調査分を加えると、総計は 188.5 個体（6789/36）、24286 片である。機能別構成比率は食膳具 73.9%・貯蔵具 6.7%・煮炊具 19.4%であり、食膳具が高い比率を占める。

前回の調査成果も含めた各期の主要遺構の食膳具構成比率は第 16 図のとおりである。Ⅴ1 期では土師器よりも須恵器が多く、SI31 の須恵器は9割に近い。Ⅴ2 期の SE2013 では須恵器の数値が若干高いものの、土師器と須恵器で半数ずつを占め、黒色土器が少量入る。Ⅵ期の SK722 では須恵器が1割弱となり、土師器が大多数を占める。黒色土器もⅤ2 期より増加している。

越後においては8世紀前半の段階で食膳具・貯蔵具が須恵器、煮炊具が土師器というあり方が明瞭であるが、9世紀後半には食膳具における須恵器と土師器の比率は逆転する［坂井 1988］。狐宮遺跡における食膳具構成比率の変化は、このような越後の土器様相の一環としてとらえることができよう。

B 総　　括

狐宮遺跡は9世紀代に降盛した平安時代の集落で、基本的に掘立柱建物・竪穴建物・井戸・畑作溝の遺構群を形成し、時代が下るにつれ北から南へと活動拠点を移している（図版1）。今回の地点は集落の東縁に当たり、時期は9世紀中葉である。

遺構は SD2015・2041・2064 から東側と南側では希薄になることから、これらの溝が集落の境界を示していると考えられる。

検出した掘立柱建物は調査外に延び全容が明らかでないが、平成 17 年調査で検出した建物軸がすべて真北方向に近いのに対し、今回は2棟とも東側に 10°～20°程傾いている。そして、唯一残存していた SB15 の柱穴 P2051 の柱根の樹種に着目するとクリ材で、SE2013 に関連する建物 SB12・13（平成 17 年調査）では柱根、礎板はスギ材が使われていて異なっている。これは時期的な違いあるいは北東側に展開する別集落になるのかなどと考えられるが今のところ判断しがたい。

最後に、狐宮遺跡では畑作溝を検出したが、水田遺構は見つかっていない。しかし、古植生復元を目的に行った花粉化石分析からイネ科花粉と、水田に群生する雑草類の検出から低地部での水田稲作の可能性が指摘されている。国府が所在していた頸城郡域において、主に農業開発を生産基盤に展開していた平安時代の一般的な集落の姿を示しているといえる。

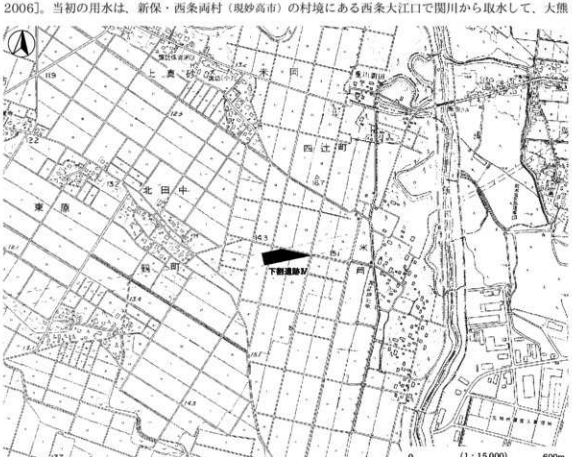
第Ⅳ章　下割遺跡Ⅳ

1　遺跡の立地と微地形（第 17 図）

下割遺跡は、高田平野の中央部に位置する。平成 21 年度調査区は上越市大字米岡字中割 1,086 番地ほかに所在し、平成 14・15・20 年度調査区の西側である。遺跡は、飯田川左岸の米岡・北田中集落に挟まれた低地に立地し、周辺には水田が広がる。現在の水田面の標高は約 14.0 ～ 14.5m である。

現在の水田面から約 30 ～ 60cm 下で中世～近世初期の水田遺構を検出した。中～近世の遺構検出面の標高は約 13.4 ～ 13.8m であった。調査区北東側で標高が高く、南西側へ次第に低くなる傾向が認められる。水田遺構の下位には、遺物包含層を挟んで古代の集落跡を検出した。古代の遺構検出面の標高は、29 ～ 38 ラインの調査区で約 13.1 ～ 13.4m、19 ～ 21 ラインの調査区で約 13.7m であった。

ところで、平成 14・15 年度調査区は東縁を中江用水と接している。中江用水は延宝（1673 ～ 1681）年間に高田藩主松平光長時代に藩営事業として開削された。河村瑞軒を江戸から招いて顧問とし、家老小栗美作が指揮を執って開発した用水と伝えられている［池田 1967、新編中江用水史編集委員会編 2006］。当初の用水は、新保・西条両村（現妙高市）の村境にある西条大江口で関川から取水して、大熊



第 17 図　下割遺跡Ⅳの位置と周辺の微地形
（上越市役所発行「上越市街図」、三和区総合事務所発行「三和区全図」1：10,000 原図）

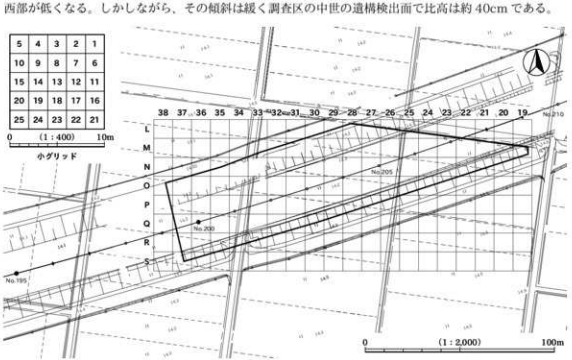
川・別所川・柳池川を横断して高田平野の中央部を灌漑していた。水路の延長は約 26km におよび、掛樋や越樋等の大規模な工作物も造られた。開発時の受益地域は 122 か村、石高 25,619 石余であった。昭和 14（1939）年に板倉発電所の落成によって、その放水路から主用水を取り入れることになった。また、昭和 28（1953）年には県営事業による水路の改良事業が完成して、通水が著しく改善された。それと前後して区画整理事業が着手され、それにともなって用水も改修された。その後にも、折に触れて用水は改修が重ねられ、現在では灌漑面積 2,734ha におよぶ上越最大の農業用水路となった。

2 グリッドの設定（第 18 図）

グリッドは平成 14 年度調査の下割遺跡Ⅰで設定したグリッドを用いた。下割遺跡Ⅳは、下割遺跡Ⅰの南西にあることから縦軸を西側に、横軸は南側に延長して使用した。大グリッドは国家座標を基準に 10m 方眼を組んでいる。表示は東から西に算用数字を、北から南にアルファベットの大文字を用い、両者を組み合わせて「25N・30P・37R・・・」などと呼称した。小グリッドはさらに各大グリッドを 2m 方眼を分け、北東隅を「1」に、南西隅を「25」になるように算用数字順に配列した。包含層出土遺物は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせ、例えば「25N1・30P12・37R25」などのように取り上げた。なお、座標値は「27N 杭：世界測地系 X＝12350.000、Y＝-16290.000」、「36Q 杭：世界測地系 X＝125320.000、Y＝-16380.000」である。

3 基本層序（第 19 図）

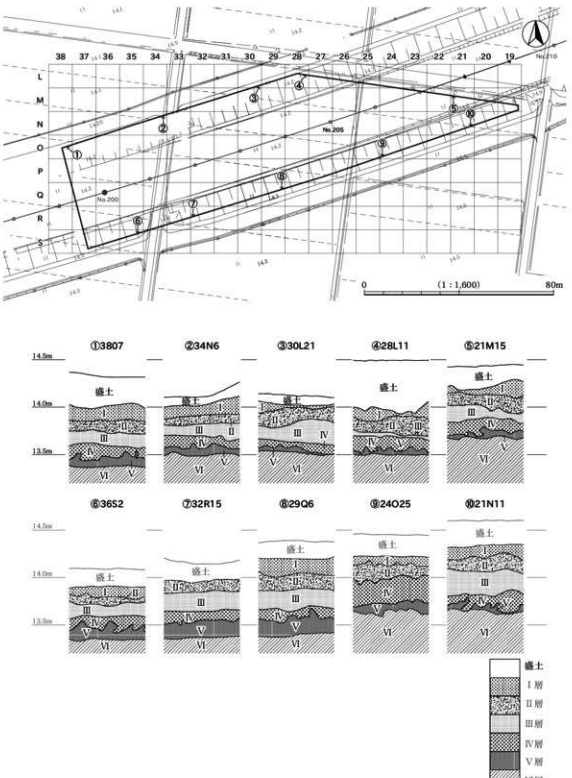
下割遺跡は、遺跡の東側を北流する飯田川によって形成された沖積地に立地する。したがって、周辺の微地形で述べたように、遺跡の周辺は飯田川に近い東部から南東部が高く、飯田川から離れた西部から北西部が低くなる。しかしながら、その傾斜は緩く調査区の中世の遺構検出面で比高は約 40cm である。



第 18 図　下割遺跡Ⅳ　グリッド設定図

このように地形の傾斜が緩いことから、基本層序はどの地点もほぼ同様の堆積を示している。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅵ層を説明する。なお、土色は『新版標準土色帖』［農林水産省水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 2004］を使用した。



第 19 図　下割遺跡Ⅳ　基本層序

盛　土　地点により層厚は異なるが、10 ～ 100cm の盛土が見られた。平成 14 年以降の堆積である。

Ⅰ　層　褐灰色粘質土～黒褐色粘質土（10YR　4／1～3／2）　表土、現水田耕作土。鉄分の酸化が著しい。植物根を多く含む。

Ⅱ　層　灰色粘土（N　4／）　鉄分の沈着が著しい。炭化粒を少量含む。旧水田耕作土[1]、または現水田耕作土の床土に相当する。なお、この層からはイネの品種名「農林二十一号[2]」と書かれた木簡が出土している。

Ⅲ　層　灰色粘土（N　4／）　炭化粒を少量含む。菱鉄鉱[3] を多量に含む。鉄分の酸化がやや見られる。古代～近世の遺物が含まれるが、主体は近世遺物である（近世遺物包含層）。

Ⅳ　層　灰色粘土（N　5／）　Ⅲ層に比べやや明るい。炭化粒を中量含む。菱鉄鉱を中量含む。密度に多少はあるが、Ⅴ層が少ブロック状に混入する。古代～近世初期の遺物が含まれるが、主体は中世～近世初期の遺物である（中世～近世初期遺物包含層）。Ⅱ～Ⅳ層の色調はほぼ同じであり、また、その変化も極めて漸移的で識別しにくい層である。

Ⅴ　層　明青灰色粘土～青灰色粘土（5BG　7／1～5BG　6／1～5B　6／1）　炭化粒を中量含む。菱鉄鉱を含まない。Ⅵ層に比べやや汚れており、色調はやや暗い。土師器・須恵器を含む（古代遺物包含層）。上面は中世～近世の遺構検出面である。

Ⅵ　層　明緑灰色シルト・粘土～緑灰色シルト・粘土（5G　7／1～5G　6／1）　炭化粒を含まない。Ⅴ層に比べ、色調がやや明るい。無遺物層である。上面は古代の遺構検出面である。

Ⅰ～Ⅵ層はいずれも極めて粘性が強い土である。なお、下割遺跡Ⅰ・Ⅱとの基本層序の対応関係は、第8表のとおりである。

下割遺跡Ⅳ	下割遺跡Ⅰ・Ⅱ
盛　土：平成 14 年度以降の堆積	（未検出）
Ⅰ　層：表土・現水田耕作土。	Ⅰ　層：表土・現水田耕作土。
Ⅱ　層：旧耕作土、現水田床土。	Ⅱ　層：現水田床土。
Ⅲ　層：古代～近世の遺物包含層（近世主体）。	Ⅲ１層：古代～近世の遺物包含層。
Ⅳ　層：古代～近世の遺物包含層（中世～近世初期主体）。	Ⅲ２層：古代～近世の遺物包含層。
（未検出）	Ⅳ　層：無遺物層。
Ⅴ　層：古代の遺物包含層。上面は中世～近世の遺構検出面。	Ⅴ１層 Ⅴ２層：古代・中世の遺構検出面。
Ⅵ　層：無遺物層。上面は古代の遺構検出面。	Ⅵ　層：古墳時代～古代の遺物包含層。

＊下割遺跡Ⅰ・Ⅱは、さらに下層に古墳時代の遺構検出面があるため、Ⅹ層まで細分されている。

第８表　下割遺跡　基本層序対応表

1）遺跡周辺では昭和 35（1960）年ころに耕地整理が行われたという。この頃の水田耕作土と考えられる。

2）昭和 20-30 年代にかけて多く栽培された品種である。昭和 30 年「コシヒカリ」が新潟県の奨励品種になってからは徐々に栽培面積が減少した（独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構『イネ品種データベース検索システム』から）。

3）新鮮な断面は灰白色の斑紋が認められる。斑紋は球状に近い団塊・不定形な団塊・層状・縞状など様々な形状である。上越市岩ノ原遺跡でも多く認められ、分析の結果、火山灰の堆積物ではなく、炭酸鉄を主成分とした菱鉄鉱である可能性が大きい［早津 2008］とされている。

4 遺　　構

A 概　　要

試掘確認調査の時点で本調査区は、上層1面として古代～中世の遺物が認められ、遺構は古代の所属として認識されていた。しかし、本発掘調査に伴う事前の暗渠設置工事の土層観察で、古代と中世～近世の各遺物包含層、及びそれぞれの遺構検出面の存在が明らかとなった。中世～近世の遺構検出面を上層1面（中世面）、古代の遺構検出面を上層2面（古代面）とし、それぞれの面で発掘調査を行った。

その結果、古代面からは掘立柱建物4棟、杭列1列、土坑44基、溝14条、ピット59基を、中世面からは水田遺構とこれに伴う畦畔66条、溝15条と土坑1基を検出した。時期は出土遺物から古代面が8世紀前葉主体で、中世面は13世紀～17世紀前半である。

B 記述方法

遺構の説明と呼称は、前述の狐宮遺跡Ⅱに準ずる。遺構番号は、調査の進行に合わせて1から通し番号を付けた。なお、発掘調査の進行過程で通し番号に欠番が生じたものもある。遺構の形状及び計測値は、遺構検出面での数値である。

以下、図版の構成・表記方法は前述の狐宮遺跡Ⅱと同様であるため、省略する。

C 遺構各説

1）古代の遺構

a 掘立柱建物

SB230（図版16・19・70・73）

36Rに位置する桁行2間（4.0m）×梁行2間（3.6m）の側柱建物であり、面積は14.4m²である。主軸はN-57°-Wを示す。桁行は西側柱列では2間、東側柱列では1間である。柱間寸法は桁行1.9～2.0m、梁行1.7～1.9mでほぼ等間である。柱掘形はP276のみ楕円形であるが、そのほかは直径35cm前後の円形である。P227以外のすべての柱穴に柱根が残存していた。遺物は出土していないが、隣接するSK237から8世紀前葉の土器が出土していることから、おおむねこの時期の所属と推測する。

SB270（図版17・20・70・74）

32Qに位置する。柱穴の一部は検出できなかったが、桁行2間（5.7m）×梁行2間（3.8m）の側柱建物である。また、内部には間仕切りを持つ。推定面積は21.5m²で、主軸はN-52°-Wを示す。柱間寸法は桁行の北側でP263-P281が210cm・P281-P282が360cm、梁行西側でP261-P265が173cm・P263-P265が204cmを測る。柱掘形は長径8～53cm、平面円形または楕円形、深さ17～63cm、断面U字状または台形状のものが多い。覆土は紫灰色・明緑灰色粘土を主体とするものが大半を占め、炭化物を多く含む。P282には底部を四角錐状に加工した柱根（252）が残っていた。また、土層断面で柱の痕跡を確認できるものがあり、柱の推定径はP261で12cm、P265で21cm、P266で10cmである。遺物はP281から土師器長甕・小甕が、P282から土師器鍋が出土している。

SB315（図版17・21・70・75）

32P、33O-Pに位置する。桁行2間（4.6m）×梁行2間（4.1m）の側柱建物である。面積は18.8m²で、

主軸はN-48°-Wを示す。柱間寸法は桁行北側でP308-P313が146cm・P310-P313が299cm、南側でP311-P312が177cm・P286-P311が293cm、梁行東側でP286-P305が186cm・P305-P310が221cmでばらつきが大きい。柱掘形は長径20～48cm、平面円形または楕円形、深さ12～80cm、断面U字状または弧状のものが多い。覆土は青灰色・灰色粘土を主体とするものが大半を占め、炭化物を含む。柱根はP286で腐食の著しい柱根（253）、P311で底部を四角錐状に加工した柱根（254）、また図示していないがP313にも著しく腐食した直径約18cmの柱根が残っていた。このほか覆土の土層断面で柱の痕跡を確認できるものがあり、柱の推定径はP310で21cm、P312で9cmである。遺物はP305から土師器の長甕が出土している。

SB339（図版17・22・70・76）

32O・Pに位置する。桁行2間（3.6m）×梁行2間（4.0m）の側柱建物である。桁行はさらに北に1間延びそうであるが、柱間寸法が異なることや柱筋が平行でなくゆがむため2間と判断した。面積は14.3m²で、主軸はN-42°-Wを示す。西側にある区画溝SD331～333や掘立柱建物SB315とほぼ同方向である。柱間寸法は桁行東側でP295-P296が201cm・P296-P298が176cm、西側でP297-P334が167cm・P334-P336が174cm、梁行南側でP294-P295が198cm・P294-P297が164cmでやや等間隔となる。柱穴は梁行北側で一つを検出できなかったものの長径53～71cm、平面隅丸方形や円形・楕円形、深さ33～54cm、断面台形や箱状のものが多く、ほぼ同規模の柱掘形である。覆土は、灰色または灰オリーブ色粘土を主体とするものが多く、炭化物を少量含む。柱根はP298・334・336で検出したが、腐食が激しい。そのほかの遺物はP295から土師器長甕（1）が出土している。

b 土　坑

SK202（図版17・23）

33Q25・33R5に位置する。平面長楕円形、断面皿状を呈する。長径130cm、短径31cm、深さ10cmで、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は明青灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

SK203・SK204（図版17・23）

33Q3・4・9に位置する。いずれも平面長楕円形、断面皿状を呈する。SK203は長径80cm、短径31cm、深さ5cmを、SK204は長径92cm、短径29cm、深さ9cmを測り、底面から緩やかに立ち上がる。覆土はともに青灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物はSK203から土師器の長甕が出土している。

SK210（図版16・23）

34P18に位置する。平面隅丸長方形、断面皿状を呈する。長径91cm、短径49cm、深さ7cmで、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は明紫灰色粘土の単層で、炭化物粒を少量含む。遺物は出土していない。

SK211（図版16・23）

34P18・23に位置する。平面不整形、断面皿状を呈する。長径85cm、短径65cm、深さ6cmで、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は明紫灰色粘土の単層で、炭化物をやや多く含む。遺物は土師器の長甕・鍋が出土している。

SK213（図版16・23）

34Q2・3・8に位置する。平面不整形、断面は皿状を呈する。底面の起伏が顕著である。長径174cm、短径78cm、深さ11cmで、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は、紫灰色粘土の単層で、炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK216（図版17・23・77）

33P22・23、33Q2・3に位置し、北側は調査時の開渠にかかる。平面不整形、断面皿状を呈する。長径116cm、短径107cm、深さ13cmで、底面から緩やかに立ち上がる。底面の起伏が顕著である。覆土は、粘土ブロック及び炭化物を含む紫灰色粘土と、明緑灰色粘土がレンズ状に堆積する。須恵器の有台杯（2）・土師器の小甕（3）のほか、土師器の長甕・鍋が出土している。

SK218（図版17・23・77）

32Q25・33Q21に位置する。33Q21でSX287と重複し、これを切る。平面不整形、断面弧状を呈する。長径197cm、短径77cm、深さ20cmで、底面からやや急斜度に立ち上がる。覆土は灰色粘土と、にぶい黄褐色砂質シルトからなり、炭化物を含む。遺物は土師器の小甕（4）のほか、須恵器の杯、土師器の長甕・鍋が出土している。

SK228（図版16・23・77）

36S3・8に位置する。平面楕円形、断面弧状を呈する。規模は長径97cm、短径84cm、深さ38cmで、やや急斜度に立ち上がる。覆土は3層に分かれ、1・2層は炭化物を多く含む。遺物は土師器長甕の体部片が出土している。

SK231（図版16・23）

35R25に位置する。平面不整形、断面皿状を呈する。規模は長径148cm、短径68cm、深さ8cmで、緩やかに立ち上がる。覆土は青灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は須恵器杯、土師器長甕・小甕の体部片が出土している。

SK232（図版16・24・77）

36S2・7に位置する。SK274と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面楕円形、断面台形状を呈する。規模は長径102cm、深さ58cmで、底面から急斜度に立ち上がる。覆土は4層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器甕・壺・瓶、土師器長甕等の破片が出土している。

SK237（図版16・24・78）

35R15・20、36R11・16に位置する。平面不整形、断面皿状を呈する。規模は長径245cm、短径146cm、深さ21cmを測り、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は4層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器杯蓋（5・6）、土師器長甕（7～9）が出土しており、8世紀前葉に位置付けられる。

SK238（図版16・24・78）

36S6に位置する。南側は暗渠により壊されるが、平面楕円形と推測され、断面皿状を呈する。規模は長径76cm、深さ11cmを測り、底面から緩やかに立ち上がる。遺物は土師器長甕（10）が出土している。

SK240（図版16・24）

35R7・12に位置する。底面でP273を検出した。平面楕円形、断面皿状を呈する。規模は長径127cm、短径82cm、深さ8cmを測り、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は青灰色粘土の単層であり、炭化物を多量に含む。遺物は出土していない。

SK241（図版16・24・78）

34Q13・18に位置する。P242と重複し、西端を切られている。平面不整形、断面台形状を呈する。規模は長径114cm、短径96cm、深さ30cmを測り、底面から急斜度に立ち上がる。覆土は青灰色粘土の2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器の長甕（11）、須恵器の杯が出土している。

SK243（図版16・24・78）

35R6・11 に位置する。土層観察トレンチで西側や中央部の一部を欠損している。平面不整形、断面皿状を呈する。規模は長径 121cm 以上、短径 119cm、深さ 26cm を測り、底面から急斜度に立ち上がる。覆土は灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は土師器の長甕（12 ～ 14）など、土師器片が多く出土している。

SK245（図版 16・25・79）

34R5・10、35R1・6 に位置する。平面楕円形、断面弧状を呈する。規模は長径 202cm、短径 128cm、深さ 20cm を測り、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は灰色粘土、オリーブ黒色粘土の 2 層に分かれ、いずれも炭化物を少量含む。遺物は遺構の南寄りで須恵器有台杯（17）、土師器長甕（18 ～ 20）がまとまって出土している。

SK246（図版 16・25）

35R1・2・6・7 に位置する。土層観察トレンチで中央部の一部を欠損している。平面不整形、断面台形状を呈する。規模は長径 136cm、短径 102cm、深さ 26cm を測り、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物を少量含む灰色・オリーブ黒色粘土の 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕など、土師器片が多く出土している。

SK250（図版 17・25）

31Q19 に位置する。平面楕円形、断面弧状を呈する。規模は長径 87cm、短径 69cm、深さ 12cm を測り、底面から緩やかに立ち上がる。覆土は灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

SK253（図版 16・25・79）

37Q17・18 に位置する。SX255 と重複し、これを切っている。平面形不整形、断面弧状を呈する。規模は長径 156cm、短径 89cm、深さ 29cm を測る。覆土は灰色・暗灰色粘土の 4 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器杯蓋（21）・小型壺（27）、土師器椀（22）・長甕（23・24）・小甕（25・26）が出土し、このほかに土師器片・須恵器片が少量出土している。

SK254（図版 16・25・79）

35Q15・20、36Q11・12・16・17 に位置する。平面不整形、断面皿状を呈する。規模は長径 426cm、短径 367cm、深さ 25cm を測る。覆土は灰色粘土を主体とし、3 層に分かれる。3 層には炭化物が多く含まれ、西側の一部では薄く層状に堆積していた。遺物は須恵器杯蓋（28・29）、土師器長甕（30）・小甕（31）・鍋（32）が出土し、このほかに土師器片・須恵器片が多く出土している。

SK259（図版 16・26・79）

35Q5・10 に位置する。平面楕円形、断面弧状を呈する。規模は長径 118cm、短径 70cm、深さ 27cm を測る。覆土は灰色粘土を主体とする 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK274（図版 16・24）

36S2・7 に位置する。SK232 と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面楕円形、断面台形状を呈する。規模は径 72cm、深さ 49cm を測る。覆土は青灰色・灰色粘土の 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK280（図版 16・26・80）

36R20、37R16 に位置する。平面長楕円形、断面皿状を呈する。規模は長径 100cm、短径 44cm、深さ 24cm を測る。覆土は青灰色粘土を主体とする 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕・小甕の体部片が出土した。

SK291（図版17・26・80）

32Q11・12・16・17に位置し、掘立柱建物SB270の北東側に近接する。平面隅丸長方形、断面弧状を呈する。規模は長径301cm、短径142cm、深さ14cmを測る。覆土は灰色粘土の単層である。遺物は8世紀前葉の須恵器無台杯（33）・有台杯（34・35）、土師器の長甕などが出土した。

SK292（図版17・26・80）

31Q4・5・9・10に位置し、区画溝SD249の北東側にある。平面楕円形、断面弧状を呈する。規模は長径206cm、短径130cm、深さ24cmを測る。覆土は灰色・オリーブ黒色粘土の3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器有台杯、土師器片が出土した。

SK321（図版16・26・80）

36S4・9に位置する。SD222と重複するが、これに切られる。平面楕円形、断面半円状を呈する。規模は長径81cm、短径57cm、深さ30cmを測る。覆土は灰色・青灰色粘土の3層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器杯、土師器長甕の小破片、棒状木製品（255・256）が出土した。

SK322（図版16・26・81）

36R14・19に位置する。SB230の範囲に収まるが、新旧関係は明らかでない。平面楕円形、断面台形状を呈する。規模は長径79cm、短径68cm、深さ30cmを測る。覆土は青灰色・灰色粘土の2層に分かれ、水平に堆積する。遺物は土師器長甕・小甕の体部片が出土した。

SK323（図版16・26・81）

36R12・17に位置する。平面円形、断面半円状を呈する。規模は長径73cm、短径67cm、深さ34cmを測る。覆土は青灰色・灰色粘土の2層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕の体部片が出土した。

SK324（図版16・26）

36S15に位置する。暗渠により南側を壊されるが、平面楕円形を呈すると推測する。規模は長径119cm、深さ20cmを測る。覆土は青灰色粘土の単層である。遺物は土師器長甕の体部片が出土した。

SK325（図版18・27・81・82）

30Q4・5・9・10、31Q1・6に位置する。北側はSK326、南側はSK328と重複し、SK326を切り、SK328に切られる。平面隅丸方形、断面皿状を呈する。規模は長径300cm、短径274cm、深さ19cmを測る。覆土は灰色・オリーブ黒色・黒色粘土の4層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は2・4層から多数出土し、須恵器杯蓋（37）・長胴短頸壺（42）、土師器長甕（38）・小甕（39～41）を図化した。

SK326（図版18・27・81・82）

30P25、31P21、30Q5、31Q1・2に位置する。南東側はSK325と重複し、これに切られる。平面不整形、断面弧状を呈する。規模は長径354cm、深さ37cmを測る。覆土は灰色・オリーブ黒色・黒色粘土の5層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は2～4層から多量に出土し、須恵器有台杯（43）・杯蓋（44）・長胴短頸壺（57）、土師器長甕（45～48）・小甕（49～56）を図化した。

SK328（図版18・27・81・82）

30Q10・15に位置する。北側はSK325と重複し、これを切る。平面楕円形、断面半円状を呈する。規模は長径135cm、短径90cm、深さ56cmを測る。覆土はオリーブ黒色・灰色粘土の5層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯（58）・有台杯（59）、土師器甑（60）が出土した。

SK343（図版18・28・82）

31O119・20・23 ～ 25、31P3 に位置する。平面不整形、断面弧状を呈する。規模は長径 468cm、短径 204cm、深さ 24cm を測る。覆土は灰色・暗灰色粘土の 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯（61）が出土している。

SK344（図版 18・28・82）

31P7・8・12・13 に位置する。平面隅丸長方形、断面弧状を呈する。規模は長径 235cm、短径 125cm、深さ 40cm を測る。覆土は灰色・オリーブ灰色粘土で 4 層に分かれる。遺物は土師器小甕（62）が出土し、このほか土師器煮炊具片が多く出土している。

c　溝

SD205（図版 17）

33Q14・19 に位置する。おおむね北西 - 南東方向に延びる溝である。長さ 2.5m、幅 58cm、深さ 8cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は炭化物を多く含む明青灰色・青灰色粘土で、レンズ状に堆積する。遺物は土師器長甕が出土した。

SD212（図版 16）

34P23、34Q2・3 にかけて位置する。おおむね北西 - 南東方向に延びる溝である。長さ 2.3m、幅 42cm、深さ 8cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は紫灰色粘土の単層で、炭化物を多量に含む。遺物は土師器長甕が出土した。

SD214（図版 16・83）

34P23、34Q2・3 に位置する。おおむね北西 - 南東方向に延びる溝である。長さ 3.4m、幅 57cm、深さ 10cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は紫灰色粘土の単層で、炭化物を多量に含む。遺物は土師器鍋（63）のほか、土師器長甕が出土した。

SD221（図版 16・83）

37S6・7 に位置する。東西方向を向き、調査区外へ延伸する。長さ 2.2m 以上、幅 42cm、深さ 28cm を測り、断面半円状を呈する。覆土は青灰色粘土で 2 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SD222（図版 16・83）

36R ～ S、37Q ～ S に位置する。北西方向を向き、調査区外へ延伸する。長さ 14m 以上、幅 3.39m、深さ 60cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は青灰色粘土で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は 2・3 層から多量に出土し、須恵器無台杯（64 ～ 75）・有台杯（76 ～ 78）・杯蓋（79 ～ 81）・甕（125）・長頸瓶（126）・横瓶（127）・長胴短頸壺（128）、土師器無台椀（82 ～ 99）・高杯（102）・器台（103）・長甕（107 ～ 111）・小甕（112 ～ 121）・鍋（122 ～ 124）、黒色土器無台椀（100・101）、灰釉陶器椀（104・106）・皿（105）、木製品櫛（257）・漆器（258）・曲物底板（259）・用途不明木製品（260 ～ 274）を図化した。

SD247・249（図版 17）

31・32Q、32R に位置し、SB270、SK291 を囲っている区画溝である。SD247 は南北溝 SD249 から東西方向に枝分かれする。いずれも断面皿状を呈し、覆土は灰色粘土の単層である。遺物は SD249 から須恵器有台杯（129）、土師器片が出土している。

SD252（図版 16・84）

37Q22･23 に位置する。西側は SD222、東側は SX255 と重複し、SD222 に切られ、SX255 を切る。長さ 2.8m 以上、幅 26cm、深さ 16cm を測り、断面形半円状を呈する。覆土は灰色粘土で 2 層に分けられる。遺物は出土していない。

SD260（図版 17・70）

31P13 に位置する。長さ 90cm、幅 28cm、深さ 10cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は灰色粘土で 2 層に分けられ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SD289（図版 17・84）

32P20 ～ 33P14・19 に位置する。東側は試掘確認調査のトレンチにかかることから明らかでない。また南東側は SX290 と重複し、これを切る。おおむね東西方向に延びる溝である。長さ 8.1m 以上、幅 25cm、深さ 7cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は、青灰色粘土の単層で、炭化物をやや多く含む。遺物は土師器長甕・小甕が出土した。

SD301（図版 17・84）

32P9 ～ 32P15 に位置する。32P9 で SD331 から枝分かれし、SB315 の南東側に近接する。おおむね北東 - 南西方向に延びる。長さ 3.5m、幅 29cm、深さ 7cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は青灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

SD327（図版 18・84）

20M ～ 20N に位置する。南北方向を向き、調査区外へ延伸する。長さ 6.6m 以上、幅 59cm、深さ 26cm を測れい、断面弧状を呈する。覆土は青灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

SD331・332・333（図版 17・84）

32O・P、33O に位置する。掘立柱建物 SB315 と SB339 の間にある南北方向の区画溝で、SD332 と SD333 は SD331 の枝分かれ部分である。SD331 は 20.2m、幅 78cm、深さ 15cm を測り、断面弧状を呈する。覆土は灰色粘土の単層である。SD332・333 も断面形、覆土は SD331 に同じ。遺物は SD331 で須恵器無台杯（130）・有台杯（131・132）、土師器長甕（133・134）・小甕（135）、SD332 で須恵器の有台杯（136）・杯蓋（137）、土師器長甕（138）・小甕（139）、SD333 で須恵器無台杯（140）・有台杯（141）、土師器長甕（142）が出土した。

SD337（図版 17）

32P7 に位置する。SD333 の延長線上にあり、SB339 の西側桁行方向に沿う短い溝である。長さ 1.7m、幅 42cm、深さ 32cm を測り、断面半円状を呈する。覆土は灰色粘土の単層である。遺物は土師器片が出土した。

d 杭　　列

SA269（図版 17・20・74）

32Q4 ～ 32Q15 に位置する。3 基の柱穴で構成され、柱穴間隔は 2.1 ～ 2.3m であり、全長は 4.4m を測る。方位は N-45° -E を示し、南東側に近接する SB270 の梁行方向とほぼ同じ。柱穴は平面円形、断面 U 字状を呈する。規模は長径 15 ～ 20cm、深さ 10 ～ 11cm を測る。覆土は青灰色または明緑灰色粘土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は P264 から須恵器杯が出土した。SA269 は、SB270 の北西側に位置し、1.5 ～ 1.7m の間隔をおいて建物と並行することから、両者は関連して構築された可能性が高い。

e　性格不明遺構

SX255（図版 16・28・85）

37Q13・14・17 ～ 19・22・23 に位置する大型の不整形な落ち込みである。SD222・252、SK253 と重複し、これらに切られている。長径 4.5m 以上、短径 1.8m、深さ 18cm で、断面弧状を呈する。覆土は灰色粘土で 3 層に分けられる。遺物は土師器片が少量出土している。

SX257（図版 16・29・85）

36P6 に位置する小型の落ち込みである。平面楕円形、断面不整形を呈する。断面形の形状から性格不明遺構とした。規模は長径 69cm、短径 56cm、深さ 13cm を測り、土器を底面からの立ち上がり部分に張り付けている。覆土は炭化物を多く含む灰色粘土で、灰色粘土と赤褐色土をブロック状に多く含んでいた。しかし、底面や側壁に被熱の痕跡は認められなかった。遺物は土師器鉢（146）・長甕（147）・小甕（148）、須恵器長頸瓶（149）、土師器鍋等が出土している。

SX287（図版 17・29・85）

33Q ～ R に位置する大型の不整形な落ち込みである。33Q21 で SK218 と重複し、これに切られる。北西 - 南東方向に長軸を持ち、長径 7.5m、短径 2.2m、深さ 28cm で、断面皿状を呈する。覆土は炭化物を含む紫灰色粘土と青灰色粘土で 3 層に分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台杯（151）・杯蓋（152・153）、土師器無台杯（150）・長甕（154）・鍋（155）・小甕等が出土した。

SX290（図版 17・29・85）

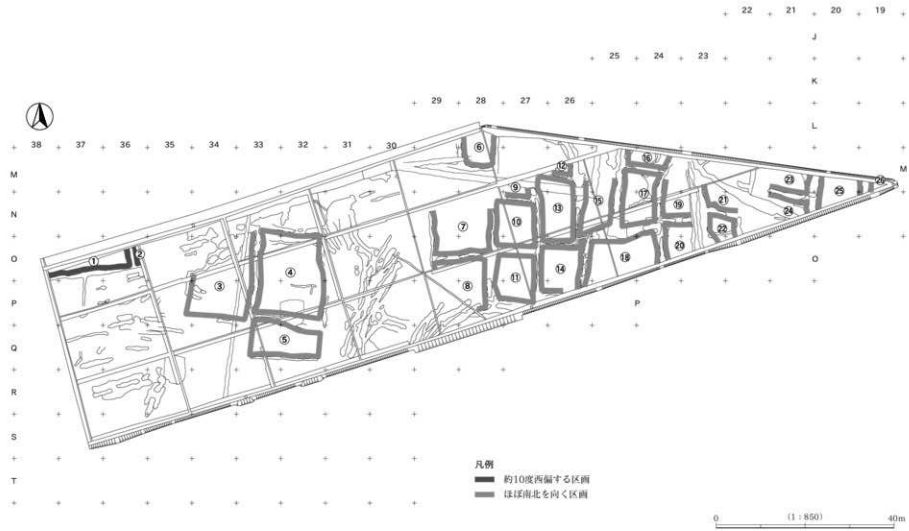
32P15・20 ～ 33P21・22 に位置する不整形の落ち込みである。33P16 で SD289 と重複し、これに切られる。長径 4.7m、短径 1.9m、深さ 15cm で、断面皿状を呈する。覆土は青灰色粘土の単層で、炭化物を多量に含む。遺物は須恵器有台杯（156）、土師器小甕（157）・長甕（158）のほか、須恵器壺蓋・土師器鍋などが出土した。

2）中世～近世初期の遺構

a　水　　田

調査区のほぼ全域で水田を検出した。発掘調査は調査区西側から約 22m 区間とそのほか一部はⅣ層土を掘削し、水田底面を検出した。残りの調査区は、Ⅳ層土中で遺構の検出とサブトレンチ掘削による土層断面の観察を行い、水田畦畔と水田底面への落ち込みの検出に努めた。検出面の標高は、東側が高く 13.8m を測り、西側へ向かって緩やかに傾斜し、33 ～ 34 列ラインでは 13.4 ～ 13.5m となる。

検出した畦畔は、いわゆる擬似畦畔［斎野 1987］に相当し、Ⅴ層土が帯状または島状に高まっていたものである。水田底面まで掘削した区域では、Ⅴ層上面に耕作痕が顕著に認められた。そのほかのサブトレンチを掘削した区域でも、Ⅳ層とⅤ層の境界の凹凸が著しかったことから、耕作痕は水田の広範にわたっていたものと判断した。畦畔の延びる方向や連続性をもとに、26 の水田区画を検出した（第 20 図）。Ⅳ層からは、輸入陶磁器・瀬戸美濃焼・珠洲焼・肥前系陶磁器・越中瀬戸焼等（215 ～ 246）、木簡・木札・箸等の木製品（278 ～ 283）、和釘・刀子・火縄銃の弾丸・鉄滓等の金属品（295 ～ 300）、銭貨（301 ～ 306）が出土した。出土した遺物の年代は 13 ～ 17 世紀前半が主体を占めることから、水田の時期は中世～近世初期ころであると判断した。ただし、畦畔の伸びる方向から区画は、ほぼ真北を向く多くのものと、調査区西側で検出された約 10 度西偏するものの二つがある。時期的に異なるものと考えている。また、



第 20 図　水田区画配置図

Ⅳ層からは古代の土器も多く出土したが、これは耕作時の攪拌によってⅤ層（古代の遺物包含層）の土器が混入したことに起因する。

以下、畦畔によって区画された水田を説明する。

ⅰ　約10度西偏する区画

区画①（図版32・33・86・87）

36～38Oに位置する。畦畔161・162によって画される。区画の南東部に当たり、北西側は調査区外に広がる。畦畔は下端幅104～151cm、高さ1～6cmを測る。畦畔に沿って深さ8cmのSD11が延びる。区画の面積は42m²以上である。直線状の畦畔がL字状に屈曲することから、区画の平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画②（図版32・33・86）

36Oに位置する。畦畔161・162によって画される。区画の南西端に当たり、東側は検出できず、また北側は調査区外に広がる。畦畔は下端幅104～151cm、高さ1～6cmを測る。区画の面積は4m²以上である。直線状の畦畔がL字状に屈曲することから、区画の平面形状は方形または長方形であったと推定する。

その他（図版32～36・38・86・87）

30～35M～Oと36～38O～R周辺では、主軸が約10度西偏あるいはこれに概ね直交する方向に延びる畦畔が多く見られる。例えば、畦畔49・92・96・97・117・118・151・152・164・166・167・172・174・175・197である。連続性に乏しく、また近接するものとの関係が判然としないことから、これらの畦畔を基に区画を認定するまでには至らなかった。しかし、区画①・②を構成する畦畔と同様の方位を指向することから、これらも同時期に構築された水田の畦畔の可能性が高い。

ⅱ　ほぼ真北を向く区画

区画③（図版34・35）

33～35N～Pに位置する。畦畔77・91・100・182によって画される。区画の北側は、東北東－西南西に延びる畦畔と交錯することから判然としない。畦畔は推定も含めて下端幅68～126cm、高さ3～6cmを測る。区画の面積は209m²以上である。直線状の畦畔が3辺を構成し、このうち南北に延びる畦畔が東西に延びる畦畔より長いことから、平面形状は長方形である。

区画④（図版34～36・88）

31～33N～Qに位置する。畦畔77・78・91・103・104・176によって画される。畦畔は推定も含めて下端幅57～127cm、高さ2～6cmを測る。区画の面積は290m²である。平面形状は長辺約22m、短辺約16mの長方形を呈する。内側には畦畔80・130・183が存在することから、さらに小区画に分割されていた可能性もある。

区画⑤（図版34・35・88）

32～33P・Qに位置する。畦畔102・103によって画される。区画の西側と東側は判然としない。畦畔は下端幅57～68cm、高さ2～6cmを測る。隣接する区画との比較から、本区画の面積は126m²で、平面形状は長方形であったと推定する。

区画⑥（図版39・40・87）

28 ～ 29L・M に位置する。畦畔 18・184・185 によって画される。区画の南側に当たり、北側は調査区外に広がる。畦畔は下端幅 66 ～ 130cm、高さ 5 ～ 7cm を測る。区画の面積は 55m² 以上である。直線状の畦畔が 3 辺を構成し、またL字状に屈曲することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画⑦（図版 36・37・39・40・88）

28 ～ 29N・O に位置する。畦畔 81 ～ 84 によって画される。区画の北側は検出できなかった。畦畔は下端幅 58 ～ 82cm、高さ 3 ～ 6cm を測る。区画の面積は 169m² 以上である。直線状の畦畔が 3 辺を構成することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画⑧（図版 36・37・39・40・88）

28 ～ 29O・P に位置する。畦畔 74・76・81 ～ 83 によって画される。区画の西側と南側は検出できなかった。畦畔は下端幅 58 ～ 120cm、高さ 3 ～ 8cm を測る。区画の面積は 103m² 以上である。隣接する区画との比較から、平面形状は方形であったと推定する。畦畔 74 は、28P19・24 において近世前半以降の溝である SD71 に切られる。

区画⑨（図版 39・40）

27M・N に位置する。畦畔 6・9 によって画される。区画の南東端に当たり、北西側は検出できなかった。畦畔の上端幅は 49 ～ 57cm を測る。区画の面積は 7m² 以上である。畦畔の遺存状況は悪いが、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画⑩（図版 39・40・86・88）

27 ～ 28N・O に位置する。畦畔 6・9・84 によって画される。また、畦畔 6 と畦畔 84 は直線状に延びるが、畦畔 6 は 27O7 付近で西に、畦畔 84 は 28O6 付近で東に張り出すことから、これが区画の南側に当たると考えた。畦畔は推定も含めて下端幅 75 ～ 92cm、高さ 4 ～ 6cm を測る。区画の面積は 102m² で、平面形状は一辺が約 9 ～ 11m の方形であったと推定する。

区画⑪（図版 39・40・86・88）

27 ～ 28O・P に位置する。畦畔 60・75・76 によって画される。区画の北西側と南東側は検出できなかった。畦畔は下端幅 46 ～ 120cm、高さ 3 ～ 5cm を測る。隣接する区画との比較から、本区画の面積は 110m² で、平面形状は方形であったと推定する。

区画⑫（図版 39）

26M に位置する。畦畔 8・186 によって画される。区画の南東端に当たり、北西側は検出できなかった。畦畔の上端幅は 53 ～ 148cm を測る。区画の面積は 7m² 以上である。畦畔の遺存状況は悪いが、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画⑬（図版 39・40・86・88）

26 ～ 27M ～ O に位置する。畦畔 6 ～ 8・58・186 によって画される。畦畔の上端幅は 22 ～ 148cm を測り、高さは推定 5 ～ 6cm である。区画の面積は 123m² である。平面形状は長辺約 15m、短辺約 8m の長方形を呈する。

区画⑭（図版 39・40・86・88）

26 ～ 27O・P に位置する。畦畔 57 ～ 60・187 によって画される。区画の南東端は調査区外に広がる。畦畔は推定も含めて下端幅 46 ～ 84cm、高さ 5 ～ 16cm を測る。区画の面積は 103m² 以上である。北側の畦畔は部分的に屈曲しているが、区画は直線状の畦畔から構成されていることから、平面形状はおお

むね方形と見なすことができる。

区画⑮（図版 39 ～ 42）

25 ～ 26M・N・O に位置する。畦畔 7・29・186・187 によって画される。区画の北側は検出できなかった。畦畔は推定も含めて下端幅 86 ～ 112cm、高さは 3 ～ 5cm である。区画の面積は 87m² 以上である。南側の畦畔は部分的に屈曲しているが、南北に延びる畦畔は直線状で、また平行であることから、区画の平面形状はおおむね長方形と見なすことができる。

区画⑯（図版 41・42）

24 ～ 25M に位置する。畦畔 24・25・28・29 によって画される。区画の南側に当たり、北側は調査区外に広がる。畦畔は、推定も含めて下端幅 54 ～ 112cm、高さ 3 ～ 4cm を測る。畦畔 24 に沿って深さ 7cm の SD31 が、畦畔 29 に沿って深さ 9cm の SD33 が、それぞれ延びる。区画の面積は 35m² 以上である。直線状の畦畔が 3 辺を構成し、また L 字状に屈曲することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。内側には畦畔 26 が存在することから、さらに小区画に分割されていた可能性もある。

区画⑰（図版 41 ～ 43・88）

24 ～ 25M・N に位置する。畦畔 24・25・28・29・55・188 によって画される。区画の南西端は、試掘トレンチにかかるため判然としない。畦畔は推定も含めて下端幅 54 ～ 140cm、高さ 3 ～ 8cm を測る。区画の面積は 91m² である。平面形状は長辺約 12m、短辺約 9m の長方形を呈する。内側には畦畔 27・35 が存在することから、さらに小区画に分割されていた可能性もある。

区画⑱（図版 39 ～ 41・43・87・88）

24 ～ 26N ～ P に位置する。畦畔 52・55・57 によって画される。区画の北側に当たり、南は調査区外に広がる。畦畔の上端幅は 65 ～ 68cm を測り、高さは推定 8 ～ 16cm である。区画の面積は 145m² 以上である。南北に延びる畦畔は直線状で、また平行することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画⑲（図版 41 ～ 43）

23 ～ 24M・N に位置する。畦畔 24・51・56・188 によって画される。区画の南西端に当たり、北側は検出できず、また東側は SD53 によって切られる。畦畔の上端幅は 52 ～ 90cm を測り、高さは推定 3 ～ 7cm である。区画の面積は 76m² 以上である。直線状の畦畔が L 字状に屈曲することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。区画⑱と⑲を境界とする畦畔 51・56 は、23N20・24N16 において途切れ、掘り込まれることから水口として機能していた可能性が高い。

区画⑳（図版 41・43・87・88）

23 ～ 24N・O に位置する。畦畔 51・52・55・56 によって画される。区画の北西端にあたり、南側は調査区外に広がり、また東側は SD53 によって切られる。畦畔の上端幅は 52 ～ 90cm を測り、高さは推定 7 ～ 14cm である。隣接する区画との比較から、本区画の面積は 66m² 以上で、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画㉑（図版 41）

22 ～ 23M・N に位置する。畦畔 189・195 によって画される。区画の南西端に当たり、北東側は検出できなかった。畦畔の上端幅は 77 ～ 203cm を測る。区画の面積は 44m² 以上である。直線状の畦畔が L 字状に屈曲することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画㉒（図版 41）

22 ～ 23N・O に位置する。畦畔 189・190・195 によって画される。区画の北側に当たり、南側は調査区外に広がる。畦畔の上端幅は 77 ～ 203cm を測る。区画の面積は 34m² 以上である。直線状の畦畔が L 字状に屈曲することから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。内側には畦畔 191 が存在することから、さらに小区画に分割されていた可能性もある。

区画㉓（図版 41 ～ 43）

20 ～ 22M・N に位置する。畦畔 44・194 によって区画される。区画の南東端に当たり、西側は検出されず、また北側は調査区外に広がる。畦畔は上端幅 104 ～ 174cm、高さ 4cm を測る。区画の面積は 20m² 以上である。直線状の畦畔が 2 辺を構成し、それぞれが直交する方向に延びることから、区画の平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画㉔（図版 41 ～ 43）

20 ～ 22M・N に位置する。畦畔 44・194 によって区画される。区画の北東端に当たり、西側は検出されず、また南側は調査区外に広がる。畦畔は上端幅 104 ～ 174cm、高さ 4cm を測る。区画の面積は 11m² 以上である。直線状の畦畔が 2 辺を構成し、それぞれが直交する方向に延びることから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。内側には畦畔 46・193 が存在することから、さらに小区画に分割されていた可能性もある。

区画㉕（図版 41 ～ 43）

19 ～ 21M・N に位置する。畦畔 158・194 によって画される。区画の北側と南側は調査区外に広がる。畦畔は下端幅 142 ～ 183cm、高さ 4 ～ 8cm を測る。区画の面積は 52m² 以上である。南北に延びる畦畔は直線状で、また平行であることから、平面形状は方形または長方形であったと推定する。

区画㉖（図版 41・43）

19M・N に位置する。畦畔 158 は区画の西側に当たり、それ以外は調査区外に広がる。畦畔は下端幅 142cm、高さ 8cm を測る。畦畔に沿って深さ 16cm の SD41 が延びる。区画の面積は 4m² 以上である。区画の大半は調査区外であるが、畦畔の延びる方向は西隣の区画と同様の傾向を示すことから、区画の平面形状は方形または長方形であったと推定する。

その他（図版 32・33）

35 ～ 37O ～ Q 周辺では、主軸が南北方向あるいはこれにおおむね直交する方向に延びる畦畔が多くが見られる。例えば、畦畔 163・168・170・171 である。連続性に乏しく、また近接するものとの関係が判然としないことから、これらの畦畔をもとに区画を認定するまでには至らなかった。しかし、区画③～を構成する畦畔と同様の方位を指向することから、これらも同時期に構築された畦畔の可能性が高い。

3）近世初期以降の遺構

a　溝

30～32 ラインにかけて 22 条の溝を検出した。これらの溝を掘削したところ、Ⅴ層やⅣ層から混入したと考えられる古代の土器、中世の陶磁器も含まれていたが、出土遺物の年代は 17 世紀が主体であった。溝は配置や方向性から構築に時期差があった可能性が高いが、中世～近世初期の畦畔を切っていることから、いずれも近世初期まで遡らないものと判断した。溜池状遺構とともに利水に関連していたものと推察する。

SD71・73・88 ～ 90（図版 36 ～ 38）

28 ～ 30P・Q に位置し、調査区外へ向かって南西方向に流下する溝群である。溝は幅 58 ～ 73cm、

深さ 15 ～ 34cm で、断面半円状ないしは弧状を呈する。いずれの溝も、底面の起伏は顕著であった。覆土は炭化物粒を含む灰色粘土がレンズ状に堆積する。SD88 は SD89 から、SD90 は SD73 からそれぞれ分岐する。SD73 と SD88 は重複するが、新旧関係は明らかでなかった。また、SD71 は、28P19・24 で水田の畦畔 74 を切る。遺物は SD71 から産地不明の皿（209）、SD73 から珠洲焼の片口鉢（210）と越中瀬戸焼の擂鉢（211）、SD89 と SD90 から煙管（292・293）が出土した。

SD65・67・69・121・122・124・126・128・132・138（図版 36 ～ 38）

30 ～ 31N ～ Q に位置し、北東－南西方向に延びる溝群である。溝は、幅 56 ～ 132cm、深さ 7 ～ 37cm で、断面半円状ないしは弧状を呈する。SD67・69・138 を掘削したところ、底面起伏は顕著であった。覆土は暗青灰色・褐灰色のシルトや粘土のものが多く、レンズ状に堆積する。溝群は分岐や合流が著しいが、いずれも覆土の特徴が類似していることから新旧関係は明らかでなかった。遺物は SD69 からは肥前系陶器の椀（207）と皿（208）、SD132 から珠洲焼の甕か壺Ｔ種（213）と備前系の可能性が高い陶器（214）が出土した。

SD101・157（図版 36・38）

30P・Q に位置し、北西南東方向に延びる溝である。30P・Q で SD138 と重複するが、新旧関係は判然としなかった。幅 89 ～ 127cm、深さ 18 ～ 33cm で、断面半円状ないしは弧状を呈する。覆土はいずれも炭化物粒を含む灰色粘土からなり、SD101 はレンズ状に堆積し、SD157 は単層である。遺物は出土していない。

SD111・112・115・116（図版 36・38）

30・31N・O に位置し、北西方向に流下する溝である。幅 74 ～ 174cm、深さ 6 ～ 22cm で、断面弧状ないしは半円状を呈する。覆土は灰色粘土の単層である。遺物は SD111 から青磁の椀（212）、肥前系陶器の椀・甕、火縄銃の弾丸（294）が出土した。

SD114（図版 36・38）

31 ～ 32N に位置し、南東方向に流下する溝である。32N6 で水田の畦畔 49 と重複し、これを切っている。幅 19cm、深さ 9cm で、断面弧状を呈する。覆土は黒褐色粘土の単層である。遺物は出土していない。

b 土　　坑

SK63・SK156（図版 36 ～ 38）

前述の溝群に近接する土坑である。SK63 は 30O14・15 に位置する。長さ 131cm、幅 53cm、深さ 16cm を測り、平面長楕円形、断面半円状を呈する。覆土は炭化物粒を含む暗青灰色粘土の単層である。SK156 は 31O7 に位置する。長さ 104cm、幅 71cm、深さ 27cm を測り、平面長楕円形、断面半円状を呈する。覆土は灰色粘土の単層である。いずれも遺物は出土していない。

c 溜池状遺構（図版 36・71）

30N に位置する。中世～近世初期の水田を切って掘り込まれた平面不整形の大型の土坑である。規模は 7.4 × 6.8m、深さ 50cm 以上を測る。SD111・112・116 の溝につながり、30O 付近で北東・南北方向の多条にある近世初期以降の溝群（SD122・132 など）に接続する。この遺構は水田への水の流し入れを調整する機能を担っていた溜池ではないかと考えられる。

5 遺　　物

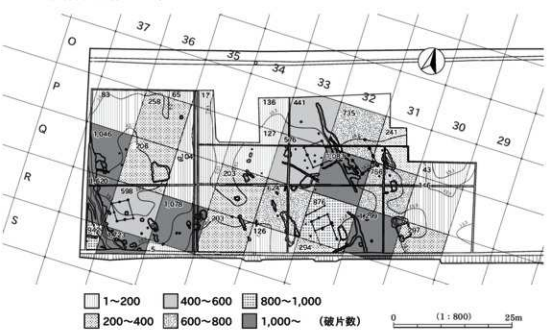
A 概　　要

出土した遺物には土器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品がある。所属時期は古代と中世～近世のものがあり、古代の遺物は遺構覆土と遺物包含層（Ⅴ層）及びその上層のⅣ層から、中近世の遺物はⅡ～Ⅳ層から出土した。Ⅳ層は中世～近世に堆積した層と推定されるが、水田耕作時の攪拌によりⅤ層中の古代の遺物もⅣ層に混入している。

古代の土器は平箱で89箱、中世～近世の陶磁器は3箱、金属製品は1箱、木製品は4箱である。出土状況は、土坑（SK243・245・326等）や建物の区画溝（SD331等）、大溝（SD222）から多数の土器が出土している。遺構の分布が希薄な地区（34～37P、30P・Q付近）では、土器の出土量は少ない（第21図）。

古代の土器はSD222で8世紀前葉～9世紀中葉のものが出土しているが、そのほかの遺構出土土器の年代はおおむね8世紀前葉にまとまる。なお、SD222からは古墳時代の土器が少量出土しており、高杯（102）・器台（103）を図示した。

Ⅳ層から出土した陶磁器は、13世紀～17世紀と年代幅が大きいが、14世紀～15世紀及び17世紀初頭～前半のものが多い。28～31グリッドの溝群から出土した陶磁器は、中世のものが数点含まれるほかは17世紀代が主体である。



第21図　古代の土器出土分布図

B 古代の遺物

1）土　　器

a 記述の方法

第Ⅲ章　狐宮遺跡Ⅱと同様であることから省略する。

b 分　類（第 23 図）

須恵器

食膳具と貯蔵具に大別できる。食膳具には無台杯・有台杯・杯蓋があり、貯蔵具には長頸瓶・横瓶・長胴短頸壺・壺蓋・小型壺・鉢・甕がある。

無台杯　口径 14cm 前後・器高 4 ～ 5cm 前後をⅠ類（130）、口径 12 ～ 14cm 前後・器高 3 ～ 5cm をⅡ類（161）、口径 12cm 未満・器高 3cm 前後をⅢ類（151）とした（第 22 図）。底部の切り離しにはヘラ切りと糸切りの二種があるが、ヘラ切りが大多数を占める。

有台杯　口径 15 ～ 16cm 前後・器高 5 ～ 7.5cm をⅠ類（165）、口径 12.5 ～ 15cm・器高 3.5 ～ 5cm をⅡ類（169）、口径 11 ～ 12cm・器高 3 ～ 4cm をⅢ類（43）、口径 9.5cm 前後・器高 4cm 前後をⅣ類（176）とした（第 22 図）。底部の切り離しにはヘラ切りと糸切りの二種があるが、無台杯と同様にヘラ切りが主流である。

杯　蓋　口径 16 ～ 17cm・器高 2.5 ～ 4cm をⅠ類（152）、口径 14 ～ 16cm・器高 2.5 ～ 3.5cm をⅡ類（181）、口径 12cm 前後・器高 3cm をⅢ類（81）とした（第 22 図）。杯蓋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類は、有台杯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類にそれぞれ対応する。

長頸瓶（187）　口縁部から底部まで残存するものはなく、分類は行っていない。体部は肩部で強く屈曲し、浅い沈線が施される。

横　瓶（189）　器形を復元できる資料がないため、分類は行っていない。

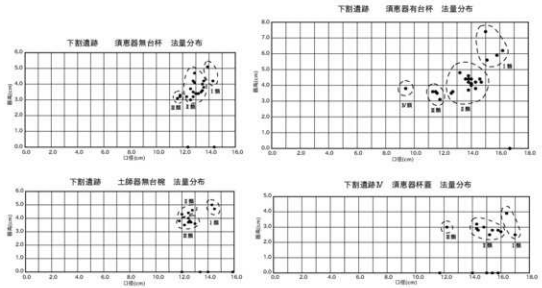
長胴短頸壺（42）　短い口縁部に長い胴部が付く壺である。

壺　蓋（185）　壺に伴う蓋である。出土量は少ない。

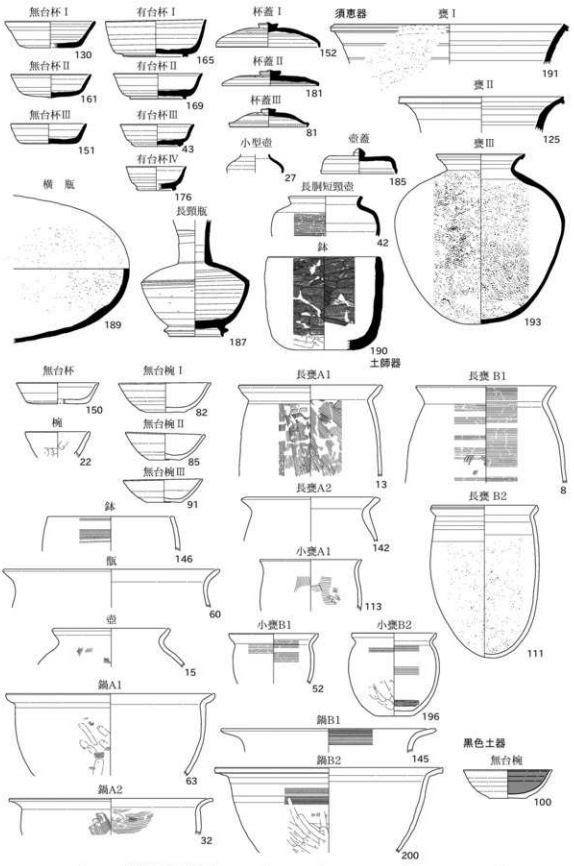
小型壺（27）　小型の広口壺のような器形と推測する。1 点のみ出土した。

鉢（190）　丸みをおびた底部に直立する体部がつづく鉢である。1 点のみ出土した。

甕　出土量は少ないが、口径によりⅠ類：大甕（191：口径 48.4cm）、Ⅱ類：中甕（125：口径 26.0cm）、Ⅲ類：小甕（192・193：口径 20cm 未満）に分類した。



第 22 図　食膳具法量分布図



第 23 図　古代の土器分類図

土師器

食膳具と煮炊具に大別できる。食膳具には椀・無台杯・無台椀があり、煮炊具には鉢・甕・長甕・小甕・鍋がある。このほか壺が1点出土した。また成形時にロクロを使用するロクロ成形ものと、ロクロを使用しない非ロクロ成形のものがある。

椀（22）　非ロクロ成形の椀である。1点のみ出土した。

無台椀　ロクロ成形の椀である。口径14～15cm・器高4～5cmをⅠ類（22）、口径12～13cm・器高4～5cmをⅡ類（85）、口径11.5～13cm・器高3.5～4cmをⅢ類（91）とした（第22図）。

無台杯（150）　須恵器の無台杯を模倣したものと考えられ、器形や製作技法が同じである。

鉢（146）　口縁部がやや内傾する。炭化物が付着することから煮炊きに用いられたようである。

甕（60）　口径が大きいことから甕とした。1点のみ出土した。

長　甕　非ロクロ成形のものをA類、ロクロ成形のものをB類とした。器形を復元できる資料が少ないため、口縁端部の形状により分類した。

A1類：非ロクロ成形で口縁端部が丸いもの（13）。

A2類：非ロクロ成形で口縁端部に面を持つもの（142）。

B1類：ロクロ成形で口縁端部が丸いもの（8）。

B2類：ロクロ成形で口縁端部に面を持つもの（111）。

小　甕　分類の基準は長甕と同様である。

A1類：非ロクロ成形で口縁端部が丸いもの（113）。

B1類：ロクロ成形で口縁端部が丸いもの（52）。

B2類：ロクロ成形で口縁端部に面を持つもの（196）。

鍋　分類の基準は長甕と同様である。鍋A類の数は少ない。

A1類：非ロクロ成形で口縁端部が丸いもの（63）。

A2類：非ロクロ成形で口縁端部に面を持つもの（32）。

B1類：ロクロ成形で口縁端部が丸いもの（145）。

B2類：ロクロ成形で口縁端部に面を持つもの（200）。

壺（15）「く」の字に外反する口頸部に球形の体部がつづく器形と推測する。1点のみ出土した。

黒色土器

出土量は少なく、確認できた器種は無台椀のみである（100）。

c　遺構内出土

SB339-P295（図版44・89-1）

1は土師器長甕B2類であり、かなり磨耗している。このほかに須恵器甕、土師器鍋の小片が出土した。

SK216（図版44・89-2・3）

2は須恵器有台杯、3は土師器小甕B1類である。2は底部を欠くが、有台杯Ⅰ類である。外面に浅い沈線が2条めぐる。上越市今池遺跡［坂井ほか1984］SK391B出土の有台杯（483）に類似し、8世紀前葉に比定できる。3は口縁部内面から体部外面にかけて煤・コゲが付着する。このほかに土師器長甕・鍋の小片が出土した。

SK218（図版44・89-4）

4は土師器小甕であるが、磨耗が著しくA・B類の判別ができない。このほかに土師器長甕・鍋の小片が出土した。

SK237（図版44・89-5～9）

5・6は須恵器杯蓋Ⅱ類、7～9は土師器長甕である。5は内面に墨痕があり、転用硯である。6は摘みを欠損するが、器高3cm程のⅡ類であろう。7は長甕A類の底部であり、木葉痕が残る。8は長甕B1類であり、体部中位にタタキメが残る。9は長甕A1類であるが全体的に磨耗している。このほかに須恵器甕、土師器鍋の小片が出土した。

SK238（図版44・89-10）

10は土師器長甕B1類である。かなり磨耗しており、調整痕は不明瞭である。

SK241（図版44・89-11）

11は土師器長甕B2類であり、体部外面に煤が付着する。

SK243（図版44・89-12～16）

12～14・16は土師器長甕、15は土師器壺である。12・13は長甕A1類である。13の口縁部は丁寧なヨコナデが施される。14は長甕B2類であり、口縁端面にごく浅い沈線が1条めぐる。15は非ロクロ成形の壺である。8世紀初頭～前半の上越市津倉田遺跡［笹澤・小島1999］SI67出土土器に類似資料がある。16は長甕A類の底部である。

SK245（図版45・89-17～20）

17は須恵器有台杯Ⅱ類、18～20は土師器長甕B2類である。18の体部外面はハケメの後にカキメ、内面はハケメの後にロクロナデが施される。19の体部外面にはタタキメが残る。20は全体的に磨耗しているが、外面にタタキメがわずかに残る。このほかに土師器小甕・鍋が出土した。

SK253（図版45・89・90-21～27）

21は須恵器杯蓋、22は土師器椀、23・24は長甕、25・26は小甕、27は須恵器小型壺である。21は摘みを欠損するが、器高3cm程のⅡ類であろう。天井部には漆で「×」と描かれる。22は非ロクロ成形の椀であり、内外面ともヘラケズリされる。口縁部内外面には煤・コゲが帯状に付着する。23は長甕B1類、24はB2類である。25は小甕B1類、26はB2類であり、26は被熱のため器壁がかなり剥落している。27は小破片のため全体の器形は不明であるが、小型の広口壺のような器形と推測する。このほかに土師器鍋の小片が出土した。

SK254（図版45・90-28～32）

28・29は須恵器杯蓋、30は土師器長甕B1類、31は小甕B1類、32は鍋A2類である。28・29は完形品ではないが、いずれも杯蓋Ⅱ類であろう。31は被熱のため器壁がかなり剥落している。32の口縁部は丁寧にヨコナデされる。

SK291（図版45・90-33～36）

33は須恵器無台杯Ⅰ類、34・35は有台杯Ⅱ類、36は土師器長甕B1類である。33の底部は厚く、丸みを帯びる。35の高台は内端接地する。36は全体的に磨耗している。このほかに須恵器杯蓋、土師器小甕の小片が出土した。

SK325（図版45・90-37～42）

37は須恵器杯蓋、38は土師器長甕、39～41は小甕、42は須恵器長胴短頸壺である。37は器高

3cm 程度の杯蓋Ⅱ類であろう。外面には自然釉がかかる。38 の長甕は磨耗が著しく A・B 類の判別ができない。39・40 は小甕 B1 類、41 は A1 類であり、39 は被熱により器壁がかなり剥落している。42 の体部外面にはカキメがめぐり、自然釉が部分的にかかる。このほかに須恵器無台杯・有台杯、土師器鍋の小片が出土した。

SK326（図版 46・90-43 ～ 57）

43 は須恵器有台杯Ⅲ類、44 は杯蓋Ⅱ類、45 ～ 48 は土師器長甕、49 ～ 56 は小甕である。43 の高台は底部の外側に付き、底部外面はロクロケズリされる。44 の内面には墨痕と磨耗痕があり、転用硯である。45 ～ 47 は長甕 B2 類である。49・50 は小甕 A1 類、51 は B2 類、52 ～ 56 は B1 類である。いずれも被熱している。55 は口縁部が強く外反し、全体的に薄手のつくりである。57 は体部外面にタタキメが残り、部分的に自然釉がかかる。このほかに須恵器無台杯、土師器鍋の小片が出土した。

SK328（図版 46・90・91-58 ～ 60）

58 は須恵器無台杯、59 は有台杯、60 は土師器甑である。58 は無台杯としたが有台杯の可能性もある。59 の高台は底部の外側に付き、内端接地する。60 は口径が大きいことから甑とした。このほかに土師器長甕・小甕・鍋の小片が出土した。

SK343（図版 46・91-61）

61 は須恵器無台杯Ⅱ類である。このほかに土師器長甕・小甕・鍋の小片が出土した。

SK344（図版 46・91-62）

62 は小甕 B 類の底部であり、内外面はヘラケズリされる。このほかに土師器長甕・鍋の小片が出土した。

SD214（図版 46・91-63）

63 は鍋 A1 類であり、体部外面に煤・コゲが部分的に付着する。このほか土師器長甕の小片が出土した。

SD222（図版 47 ～ 49・91 ～ 93・64 ～ 128）

食膳具は須恵器無台杯（64 ～ 75）・有台杯（76 ～ 78）・杯蓋（79 ～ 81）、土師器無台椀（82 ～ 99）、黒色土器無台椀（100・101）、灰釉陶器椀（104・106）・皿（105）がある。64 ～ 69・71・74 は無台杯Ⅱ類、70・72 はⅢ類である。65 の底部内面には漆が付着し、外面には「×」と「—」のヘラ記号がある。68 の底部はやや突出している。74・75 の底部切り離しは糸切りである。74 は椀形を呈し、口縁部が外側に短く屈曲する。76・77 は有台杯Ⅱ類、78 はⅢ類である。76 は全体的に厚手であり、高台も太く底部の外側に付く。79 は杯蓋Ⅱ類であり、天井部には「万呂」の墨書がある。80 は摘みを欠損するが、器高 3cm 程度のⅡ類であろう。81 はⅢ類である。82・83 は無台椀Ⅰ類、84 ～ 86 はⅡ類、87 ～ 93 はⅢ類である。82 は口縁部外面にタールが付着する。83 の口縁部は緩く外反する。92 は被熱により器面が粗く、内面にはタールが付着する。100 の口縁部外面にはタールが付着する。101 は体部下半から底部外面にかけてロクロケズリされる。104 ～ 106 は灰釉陶器である。104 は美濃産の光ヶ丘 1 号窯式（9 世紀後半）、106 は尾張産の黒笹 90 号窯式（9 世紀後半）にそれぞれ比定される。

煮炊具は土師器長甕（107 ～ 111）・小甕（112 ～ 121）・鍋（122 ～ 124）がある。107・108 は長甕 A1 類である。108 は胴部があまり張らない器形である。109・110 は長甕 A 類の底部である。111 は長甕 B2 類である。胴部は緩やかに膨らみ、丸底である。胴部上半は内外面ともロクロナデが施される。胴部下半外面は格子タタキメ、内面は同心円状の当て具痕とハケメが残る。胴部外面には煤・コゲが全面に付着する。112 ～ 114 は小甕 A1 類である。112 は胴部の張りが弱い。115・116・120 は B2 類、118・119・121 は B1 類である。116 の口縁端部は肥厚し、器面は被熱により粗い。117 は小甕 A 類の底部

である。122 ～ 124 は鍋 B2 類である。122・123 は口縁端面にごく浅い沈線が一条めぐる。124 はハケメの後、カキメが施される。

貯蔵具は須恵器甕（125）・長頸瓶（126）・横瓶（127）・長胴短頸壺（128）がある。125 は須恵器甕Ⅱ類であり、内面に自然釉がかかる。126 は口頸部の接合方法に円盤閉塞法［北野 2001］が用いられる。127 の横瓶は閉塞痕がわずかに残り、内外面に自然釉がかかる。128 は灰白色を呈し、胎土は軟質である。SD222 は、ほかの遺構では見られない土師器無台椀や佐渡産の須恵器食膳具が出土している。一方、65・66・68 のような 8 世紀前葉の須恵器食膳具や非ロクロ土師器の甕が定量存在する。したがって、SD222 は 8 世紀前葉から 9 世紀中葉まで機能していたと考えられる。

このほか古代以外の土器も 2 点出土している。102 は高杯の脚部であり、脚頂部には粘土が充填される。103 は器台の脚部である。摩耗が著しく、調整痕は確認できない。いずれも古墳時代の所産である。

SD249（図版 49・93-129）

129 は須恵器有台杯Ⅲ類であり、口縁部はわずかに外反する。このほかに土師器長甕・小甕の小片が出土した。

SD331（図版 49・93-130 ～ 135）

130 は須恵器無台杯Ⅰ類、131・132 は有台杯Ⅱ類、133・134 は土師器長甕、135 は小甕である。130 の底部外面は摩滅している。131 の底部内面には「右国」の墨書がある。また墨痕と付着物があり、転用硯である。132 は灰白色を呈し、胎土は軟質である。133 は長甕 B1 類である。134 は磨耗が著しく、調整痕が確認できない。135 は小甕 B 類の底部である。このほかに土師器鍋の小片が出土した。

SD332（図版 49・93-136 ～ 139）

136 は須恵器有台杯、137 は杯蓋、138 は土師器長甕 A1 類、139 は小甕である。136 は有台杯Ⅱ類、137 は杯蓋Ⅱ類であろう。138 はかなり磨耗しており、内面にハケメがわずかに残る。139 は被熱により器面がかなり粗く、調整痕を確認できない。このほかに土師器鍋の小片が出土した。

SD333（図版 49・93-140 ～ 142）

140 は須恵器無台杯Ⅱ類、141 は有台杯Ⅱ類、142 は土師器長甕 A2 類である。141 は底部外面に墨痕があり、転用硯である。また体部外面にはヘラ記号がある。142 は内外面とも磨耗している。このほかに土師器小甕・鍋の小片が出土した。

P224（図版 49・93-143）

143 は須恵器無台杯Ⅱ類であり、椀形を呈する。このほかに土師器長甕の小片が出土した。

P236（図版 49・93-144）

144 は土師器小甕 B1 類である。このほかに須恵器有台杯、土師器長甕・鍋の小片が出土した。

P239（図版 49・93-145）

145 は土師器鍋 B1 類である。このほかに土師器長甕の小片が出土した。

SX257（図版 49・93・94-146 ～ 149）

146 は土師器鉢、147 は長甕 B2 類、148 は小甕、149 は須恵器長頸瓶である。146 の口縁部は内傾し、煤・コゲが付着する。148 は小甕 A 類の底部である。149 は把手付の長頸瓶である。肩部で強く屈曲し、浅い沈線が 2 条めぐる。体部下半はヘラケズリされる。このほかに土師器鍋の小片が出土した。

SX287（図版 50・94-150 ～ 155）

150 は土師器無台杯、151 は須恵器無台杯Ⅲ類、152・153 は杯蓋、154 は土師器長甕 B1 類、155

は鍋B2類である。150は須恵器無台杯と器形・製作技法が共通する。152は杯蓋Ⅰ類、153はⅡ類である。153は摘みの先端がわずかに欠損し、天井部には「□石」の墨書がある。このほかに土師器小甕の小片がある。

SX290（図版50・94-156～158）

156は須恵器有台杯Ⅱ類、157は土師器小甕、158は長甕A2類である。157は小甕B類の底部である。158は内外面ともかなり磨耗している。このほかに土師器鍋の小片が出土した。

d　遺構外出土

須恵器（図版50～52・94～96-159～193）

159～163は須恵器無台杯Ⅱ類である。162の底部は厚い丸底である。164～178は有台杯である。164～167はⅠ類、168～174はⅡ類、175はⅢ類、176はⅣ類である。164の外面には浅い沈線が1条めぐる。165の底部外面はロクロケズリされる。167の底部外面は糸切り後にロクロケズリされる。168の底部外面には「合」の墨書がある。169は内外面とも墨痕があり、転用硯である。166・169・170・173・175・178の底部外面にはヘラ記号がある。177・178の外面には墨痕があり、転用硯である。179～184は杯蓋であり、179～183はⅡ類である。180・183の内面にはヘラ記号がある。182・183は内面に墨痕があり、転用硯である。185は壺蓋であり、天井部はロクロケズリされる。186は瓶類の口縁部であるが、平瓶または提瓶であろう。187・188は長頸瓶である。187は頸部と肩部に沈線がめぐる。肩部以下の外面及び底部外面はロクロケズリされる。頸部は円盤閉塞法［北野2001］により接合される。189は片面閉塞の横瓶［春日2001］である。底部側面は叩き成形され、内面には縁辺を用いた同心円当て具痕がある。体部中央付近の内面にはロクロナデが施され、外面にはタタキメとカキメが残る。190は鉢である。底部は厚みがあり、体部は直立する。体部内外面及び底部内面はハケメ、底部外面にはヘラケズリが施される。胎土は白色の粗砂粒を大量に含み、やや粗い。体部外面には部分的に自然釉がかかる。191は甕Ⅰ類、192・193は甕Ⅲ類である。191の外面は3条の沈線により区画され、その間は斜め方向のヘラ書き沈線が連続する。192は灰白色を呈し、胎土は軟質である。193は口縁部内面から体部上半の外面にかけて自然釉がかかる。

土師器（図版52・96・97-194～200）

194は長甕B1類、195はA1類である。196は小甕B2類、197はB1類である。198は小甕B類の底部である。199・200は鍋B2類であり、体部下半の外面はヘラケズリされる。

緑釉陶器（図版52・97-201）

近江産緑釉陶器の皿であり、10世紀半ば頃のものである。

灰釉陶器（図版52・96・97-202～206）

202～204は椀、205・206は皿である。203は尾張産の黒笹90号窯式（9世紀後半）に比定される。204は三日月高台を呈し、尾張産の折戸53号窯式（10世紀前半）に比定される。

C　中世～近世の遺物

1）陶　磁　器

a　記述の方法

出土した中世～近世の陶磁器は156片であり、その内訳をまとめると第9表になる。珠洲焼が最も多く、

種類	器種	口縁部残存率 /36	破片数	備考
青磁	椀	17.5	10	
白磁	皿	4	1	
青花	皿	1	1	
李朝陶器	皿	8.5	1	
瀬戸美濃焼	椀	3	7	天目椀、平椀
	皿	0	1	志野皿
珠洲焼	擂鉢	0	1	
	片口鉢	3.5	14	
	甕か壺	0	37	
	瓶	0	1	
合計	口縁部残存率　122/36 破片数　156 片			

種類	器種	口縁部残存率 /36	破片数	備考
肥前系陶器	椀	5.5	8	
	皿	20	16	
	擂鉢	3	6	
	甕	0	1	
	壺	0	2	
	鉢	3	3	
	その他	0	4	
肥前系磁器	皿	2.5	2	
越中瀬戸焼	皿	13	6	灯明皿を含む
	擂鉢	0	3	
	壺	22	18	広口壺など
その他		15.5	13	

第 9 表　下割遺跡Ⅳ出土の陶磁器

肥前系陶磁器や越中瀬戸焼がこれにつづく。そのほか天目椀や志野皿を含む瀬戸美濃焼、備前系と考える陶器、輸入陶磁器の青磁・白磁・青花・李朝陶器などが出土した。陶磁器の分類・編年及び年代観については、主に以下の各氏の論考をもとにした。輸入陶磁器は［上田 1982］・［小野 1982］・［森田 1982］・［森本・片山 2000］・［水澤 2004］、瀬戸美濃焼は［藤澤 2002・2008］、珠洲焼は［吉岡 1994］、肥前系陶磁器は［大橋 1989］、越中瀬戸焼は［宮田 1997］である。

b　遺構内出土

SD69（図版 53・98-207・208）

207 と 208 は、いずれも肥前系陶器である。207 は厚手の椀で、体部が強く湾入する。208 は内面の口唇部に溝がめぐる溝縁皿で、大橋Ⅱ期（17 世紀前半）の所産である。

SD71（図版 53・98-209）

皿の小片が出土した。胎土は粗く、長石や砂粒を多く含む。高台を持つが、強く磨耗を受けている。

SD73（図版 53・98-210・211）

210 は珠洲焼の片口鉢である。縦位の卸し目が密に施され、一単位は 8 条以上である。211 は越中瀬戸焼の擂鉢である。胎土は粗く、1 ～ 4mm 大の石英・長石・砂粒が目立つ。内面には卸し目が密に施される。体部の卸し目は、縦位に引かれたものと斜位のものが交差する。底面には円状に卸し目が引かれる。卸目の一単位は 9 条以上の可能性が高いが、磨耗が著しいため判然としない。

SD111（図版 53・98-212）

青磁の椀で、外面には細線蓮弁文が施される。蓮弁の形状があまり崩れていないことから、15 世紀後半～ 16 世紀前半に比定される。

SD132（図版 53・98-213・214）

213 は珠洲焼の甕または壺Ｔ種の体部片で、外面にはオリーブ灰色の自然釉がかかる。214 は小型の擂鉢である。口縁外面には縁帯をもち、端部は鏡利に仕上げられる。外面の縁帯には凹線が 1 条めぐり、内面の口縁端部直下には稜を持つ。内面には一単位 5 条の卸し目が間隔を空けて施される。胎土や口縁部の特徴から、備前系（備前・堺・明石）の可能性が高い。

c　遺構外出土

i　中世の陶磁器

輸入陶磁器（図版 53・98-215 ～ 221）

215 ～ 218 は青磁の椀である。215 は無文の端反椀で、釉が厚くかかる。216 の外面には片切彫に

よる鏡蓮弁文の一部が残る。217の外面にはヘラ状工具による雷文帯が施される。218は底部片であり、見込に渦巻文が描かれる。高台の外側端部は面取りされ、高台内は露胎で明褐灰色を呈する。216は13～14世紀、215は14世紀後半～15世紀前半、217は15世紀の所産である。219は体部が内湾する白磁の皿で、口縁端部は面取りする。15世紀の所産である。220は口縁部が屈曲する青花の皿で、内外面の口縁端部直下には圏線がめぐる。外面の体部には草花文と思われる文様が描かれる。15～16世紀の所産である。221は李朝陶器の皿である。体部上半は外傾し、削り出し高台を持つ。見込と畳付には砂目が認められる。釉の剥落が著しく、体部上半には藁灰釉がわずかに残る。16世紀の所産である可能性が高い。

瀬戸美濃焼（図版53・98-222・223）

222は天目椀の体部上半で、内外面には鉄釉がかかる。口縁部はくびれが弱く、おおむね直立する。223は平椀の小片で、口縁部はわずかに屈曲し、端部は外反する。223は古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期（14世紀末～15世紀前半）、222は大窯3～4期（16世紀後半～17世紀初頭）の所産である。

珠洲焼（図版53・98-224～234）

224～228は片口鉢である。224・225は体部上半で、いずれも口縁部端面は内傾する。225の口縁部端面は明瞭に作出される。226～228は体部下半である。226の内面には卸し目が密に施されており、一単位は9条以上である。卸し目は強く磨耗を受ける。227の卸し目は流水状に引かれており、一単位が6条である。228は一単位6条の卸し目が間隔を空けて引かれる。230～233は甕または壺T種の体部片である。230・231は薄手のつくりで、破断面ないしは外面が赤灰色を呈する。叩き目は細かい。233には外面に研磨痕が認められることから、「転用研磨具・研削具」[小池1994]と呼称されている研磨具に転用されたものである。229・234は甕または壺である。229は頸部片で、頸基部に稜を持つ。234は底部片である。所属時期は227が吉岡Ⅱ～Ⅲ期（13世紀）、224・225がⅣ期（14世紀初頭～後半）の所産である。図示しないものも含め珠洲焼は、遺構外から50点も出土しているが、小片が多く時期を特定できる資料は少ない。

産地不明（図版53・98-235）

甕か壺の体部片である。胎土は赤灰色を呈し、器表には長石・砂粒等の吹き出しが認められる。信楽焼もしくは越前焼の可能性が高いが、産地は特定できなかった。

ⅱ　近世の陶器

肥前系陶器（図版53・98-236～241）

236は体部が外傾する椀である。外面には鉄絵が描かれるが、小片のためモチーフは不明である。外面の口縁部直下には凹線がめぐる。237～240は皿である。237は皮鯨手の皿で、外面の体部上半と内面には灰釉が掛かり、さらに内面の口縁部に沿って鉄釉を上掛けする。238は丸皿で、体部が強く内湾し、口縁端部が直立する。239は体部が階段状に屈曲する。240は体部下半から底部の破片で、体部下半はロクロケズリが施され、削り出し高台を持つ。外面の体部下半の一部と見込に灰釉がかかり、高台の周辺と高台内は露胎となる。241は瓶の体部片で、外面に暗褐色の灰釉を施した後、肩部に藁灰釉がかかる。所属時期は237・238が大橋Ⅰ期、239・240が大橋Ⅱ期、236が大橋Ⅰ～Ⅱ期の所産で、年代はおおむね17世紀初頭～前半である。

越中瀬戸焼（図版53・98-242～246）

242・243は皿である。242は体部が外傾する。体部には鉄釉がかかり、内底面には釉止めの段が設けられる。高台の周辺と高台内は露胎となる。243は体部が内湾する。内面と外面の体部上半には釉の痕跡が認められるが、剥落が著しい。口縁端部の周辺にわずかに残る釉は白濁している。二次的に被熱した可能性もある。244・245は広口壺である。244は口縁部が肥厚し、口縁端部が平坦になる。245は頸部が屈曲し、口縁部は直立する。246は直立する壺類の小片で、内外面には鉄釉がかかる。長胴壺か匣鉢であろうか。年代はいずれも17世紀の可能性が高いが、242はおおむね17世紀初頭の所産である。

D　その他の遺物

そのほかの遺物としたものは76点出土し、製品を中心に64点を掲載した。内訳は木製品55点・石製品1点・金属製品14点・銭貨9点である。このほか遺跡に持ち込まれたと考えられる搬入礫129点が出土している。木製品はSD222から多く出土し、搬出土器から8世紀前葉～9世紀中葉の所産と考えられる。包含層出土のものは、基本層序Ⅴ～Ⅲ層からの出土し、古代～近世までの多岐にわたる。特に銭貨と金属製品の大部分は、Ⅳ及びⅢ層からの出土である。

1）木　製　品（図版54・55・98・99）

55点出土し、製品・加工材と判断できる44点を掲載した。内訳は柱根8点・棒状木製品3点・櫛1点・漆器1点・曲物2点・用途不明品20点・木簡1点・木札2点・箸1点・部材2点・切屑5点である。

a　遺構出土

SB230（図版54・98-247～251）

247～251は柱根である。いずれもトネリコ属の分割材を使用している。248の下端は、両側面の斜め上から削り込んだ加工痕が残り、底部は楔状に尖る。250の下端は、正面を斜め上2方向から削りこんだ加工痕が残り、底部は三角錐状に尖る。251の下端は、正面と裏面を材に対して垂直に近い角度で削り込んだ加工痕が残り、底部はほぼ平坦である。

SB270（図版54・98-252）

トネリコ属の分割材を使用した柱根である。下端断面は腐食のため明確な加工痕は見られないが、断面角度から斜め上4方向から削り込んだと見られる。底部は四角錐状に尖る。

SB315（図版54・98-253・254）

いずれもトネリコ属の分割材が使用した柱根である。254の下端は斜め上4方向から削り込んだ加工痕が残り、底部は四角錐状に尖る。

SK321（図版54・99-255・256）

255・256は棒状木製品である。どちらも柾目材を割り裂いており、磨耗により断面の角は丸くなっている。256の中央部は磨耗による摺り減りが見られ、両端は材に対して垂直方向から複数回切り込んだ後、折り取るように切断した痕跡が残る。

SD222（図版54・55・99-257～274）

257は追い柾目の材を使用した櫛で、樹種はイスノキである。歯の間隔は約0.5mmと狭く、頭皮のふけや髪の埃などを落とす梳き櫛と思われる。258は漆器であるが、小片のため器種は特定できない。259は曲物側板の破片である。スギの柾目材を使用し、木目と垂直方向にケビキが連続的に施される。260

～ 274 は用途不明品である。260 は板目材を使用し、上端部を圭頭状に削る。266 ～ 269 は部材製作時に出た端材と思われる。266・267 は表面が未加工の柾目材で、端部の一方を垂直に切断している。269 は建材などの角材端部を整えるため切り離したものと考えられる。

b　遺構外出土（図版 55・99-275 ～ 290）

275 ～ 277 は用途不明品である。275 はミカン割りした材の両端に、深い角度から複数回切り込んだ加工痕が残る。278 はヒノキの柾目材を用いた木簡で、墨書のある正面は平滑に加工している。墨書は「セんふへもミ」と読める。収穫量増加の願いを込めた品種の種籾に付けられていた木札と考えられる。279 は柾目材の板材である。上端は緩い弧状に削られており、曲物底板の可能性がある。280 は板目材を使用した木札である。上部両側面を抉り、正面のやや偏った位置を穿孔する。下部は腐食により欠損している。282 は箸である。柾目材を断面方形に成形し、正面下部を薄い楔状に削り出している。284・285 は部材である。284 は板目材を丁字状に加工している。左側面がよく磨耗しているが、用途は不明である。286 ～ 290 は木材加工時に出た切屑である。286 は木札を再加工したものと思われ、正面上部の穿孔と側面の抉りの一部が残る。287 ～ 290 は柾目の薄い板材を加工した際に出た切屑で、288・289 の正面には表面を平滑にした加工痕が残る。

2）石　製　品（図版 56・99-291）

1 点のみの出土で、軽石製の砥石である。SK254 の 3 層から出土している。面状の砥面のほか、表裏両面には筋状の砥ぎ痕が残る。

3）金 属 製 品（図版 56・99-292 ～ 300、307 ～ 310）

金属製品は 20 点出土し、13 点掲載した。内訳は煙管 4 点・銃弾 2 点・船釘 4 点・刀子 1 点・用途不明品 1 点・鉄滓 1 点である。

a　遺 構 出 土

SD89（図版 56・99-292）

真鍮河骨形煙管の雁首である。羅宇から火皿までの位置が高く、雁首のカーブが大きい。16 世紀末ポルトガル領であったブラジル系 L 形のパイプを模して製作されたと思われ、江戸初期の所産である。薄い真鍮板から鍛金で作られており、溶接部にはロウ付けした痕跡が残る。羅宇・吸口は欠損しているが、全長は 30 ～ 70cm であったと考えられる [1]。

SD90（図版 56・99-293）

煙管の火皿である。材質は銅もしくは真鍮で、薄い金属板から抜き上げて作られる [2]。底部内面には、皿床に張り付いた火皿をはずすため、裏側から打ち抜いた痕跡が残る。

SD111（図版 56・99-294）

火縄銃の弾丸である。材質は鉛で直径 12.4mm、重量 10.2g である。玉割り [3] から三匁筒の弾丸と見

1）燕市産業資料館　斉藤優介氏の御教示による。
2）皿床という型を用いた初歩的なプレス工法である。燕市産業資料館　斉藤優介氏の御教示による。
3）口径と弾丸径の割合。銃の口径に対して弾丸が小さすぎれば、銃口を下げたとき弾丸が脱落するおそれがあり、威力も出ない。反対に大きすぎれば玉込めが難しくなる。

られる。表面に凹凸が残る[1]。

b　遺構外出土（図版 56・99-295 ～ 300、307 ～ 310）

295・296・307・308 は和釘の船釘である。鋼を細長く扁平に鍛造して作られ、上端は弧状である。直角に接する船材を接合する際、通常の和釘より強い接合力が必要なため、断面が扁平な形状をしている。307 は上端を、308 は下部をそれぞれ欠損するが接合しない。297 は刀子である。刃部上端を欠損するが、以下はほぼ完形で残る。298 は火縄銃の弾丸である。玉割りから二匁筒の弾丸と見られる。変形は着弾時のものとも考えられる。299 は用途不明品である。表面の錆は少ないが、内面からの錆膨れを生じている。300 は鉄滓である。不整形な板状で、外面は脆い赤錆に覆われている。断面中心部は結晶様光沢を持つ。309・310 は、292 と同じ特徴を持つ真鍮河骨形煙管の雁首である。

4）銭　　貨（図版 56・99-301 ～ 306）

銭貨は 9 枚出土している。この内、名称が判読できるものは 6 枚であった。いずれもⅣ層から出土し、303・304 と 305・306 はそれぞれ同一グリッドから検出した。時期は北宋銭 4 種・唐銭 1 種で、最も古い年代のものは開元通寶（621 年初鋳）で、最も新しい年代のものは元祐通寶（1086 年初鋳）である。305・306 は腐食の影響により数枚が固着しており、最上面の銭のみ判読できた。

6　自然科学分析

A　植物珪酸体

1）はじめに

下割遺跡Ⅳでは古代の集落や中世～近世初期の生産遺跡が見つかっている。ここでは、水田と思われる地点・層序の土壌を分析し、水田としての可能性及び古環境を判断する目的で植物珪酸体分析を行った。以下にこの結果及び考察を示す。

2）試料と分析方法

試料は 29Q6 セクション、37O1 セクションの 2 地点の各基本層序（Ⅲ層～Ⅵ層）から採取された計 8 試料である。試料 No. は、No.1 ～ No.4 が 29Q6 セクションのⅢ層～Ⅵ層、No.5 ～ No.8 が 37O1 セクションのⅢ～Ⅵ層とした（第 10 表参照）。各基本層序について、Ⅲ層は灰色粘土で、古代から近世（近世主体）である。Ⅳ層は、灰色粘土で、古代から近世初期の遺物包含層であり、時期は中世であると考えられてい

試料番号	調査区	層序	イネ（個 /g）	イネ籾殻片（個 /g）	クマザサ属型（個 /g）	ヨシ属（個 /g）	キビ族（個 /g）	ウシクサ族（個 /g）	不明（個 /g）
1	29Q6	Ⅲ	17,600	2,900	13,200	2,900	7,300	2,900	11,700
2		Ⅳ	7,400	0	10,300	2,900	1,500	2,900	8,800
3		Ⅴ	2,800	1,400	2,800	2,800	1,400	0	1,400
4		Ⅵ	1,500	0	1,500	0	1,500	0	2,900
5	37O1	Ⅲ	16,700	1,700	0	0	3,300	3,300	6,700
6		Ⅳ	3,100	0	4,700	0	4,700	0	9,400
7		Ⅴ	1,500	0	0	0	0	0	1,500
8		Ⅵ	7,400	0	3,000	0	3,000	0	8,900

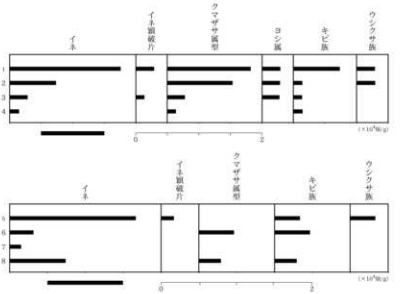
第 10 表　試料 1g 当たりの植物珪酸体個数

1）戦闘中、連続的に射撃を行うと銃身は膨張し、口径は徐々に小さくなる。それに対応するため、射手は大きさの少しずつ異なる弾丸を携行していた。一方、現場で即時に対応するため、鉛丸を鎚って扁平にすることで径を合わせることもあった。

る。Ⅴ層は、青灰色粘土で、土師器・須恵器を含む古代の遺物包含層であり、時期は奈良・平安時代と考えられている。Ⅵ層は、緑灰色シルト～粘土で、古代の遺構検出面である。

植物珪酸体分析はこれら8試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣からグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。



第24図　29Q6セクション（上）、37O1セクション（下）の植物珪酸体分布図

3）分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（第10表）、それらの分布を第24図に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数的にはNo.1（Ⅲ層）が最も多く17,600個体、No.5（Ⅲ層）では16,700個体が検出されている。次いで、No.2（Ⅳ層）とNo.8（Ⅵ層）からは、それぞれ7,400個体が得られている。No.3（Ⅴ層）とNo.6（Ⅳ層）からは、約3,000個前後が、No.4（Ⅵ層）とNo.7（Ⅴ層）では1,500個体が検出されている。また、No.1、No.3、No.5からは、イネ頴（籾殻）の破片が観察されている。イネ以外で最も多く観察されたのはクマザサ属型でNo.1とNo.2で10,000個を超えている。また、No.1では、キビ族が7,300個体検出されている。その他、ヨシ属とウシクサ族が若干観察されている。

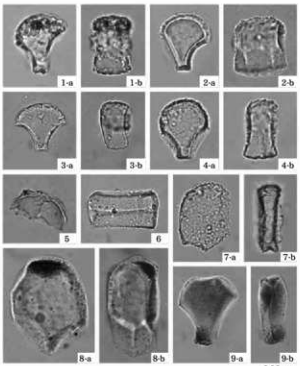
4）水田稲作について

上記したように、全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出された。ここで検出個数の目安を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1gあたり5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている［藤原1984］。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

29Q6セクションにおいてはⅢ層とⅣ層で、5,000個を越えており、検出個数のみからは古代から近世にかけ、これら層準おいて、水田稲作が行われていた可能性は高いと植物珪酸体分析からは判断される。

同セクションⅤ層、Ⅵ層においては、5,000 個に達していない。ここで、37O1 セクション試料において行われた花粉分析の結果を見るとイネ科花粉が多産しており、Ⅴ層試料においては水田雑草を含む分類群が検出されている。こうしたことから、5,000 個には達していないものの、一部において稲作が行われていた可能性は考えられる。また 37O1 セクションにおいては、Ⅲ層とⅥ層において 5,000 個を越えており、検出個数のみからは、水田稲作が行われていた可能性は高いと植物珪酸体分析からは判断される。37O1 セクションのⅣ層とⅤ層においても、約 1,500 ～ 3,000 個と 5,000 個には達していないものの、29Q6 セクション同様に、一部において稲作が行われていた可能性はあるように思われる。

なお、Ⅲ層では両セクションにおいてイネの検出数が多く、近世には大規模な水田耕作が行なわれていた可能性が考えられる。Ⅳ～Ⅵ層準については、イネ以外の植物珪酸体の検出状況から、両地点の環境の違いが推測される。



1～4：イネ（a：断面、b：側面）1：No.1、2：No.2、3：No.5、4：No.8、5：イネ籾殻片No.1
6：キビ族（側面）No.1、7：クマザサ属型（a：断面、b：側面）No.8、
8:ヨシ族（a：断面、b：側面）No.1、9：ウシクサ族（a：断面、b：側面）No.5

第 25 図　下割遺跡Ⅳの植物珪酸体

5）遺跡周辺のイネ科植物

イネ以外で最も多く観察されているスズダケやミヤコザサなどのクマザサ属型のササ類は遺跡周辺の森林の下草的存在で生育していたと見られる。キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明であるが、イネと比例して多い値を示していることから、稲作に伴う雑草類（タイヌビエなど）ではないかと思われる。また、No.1 ～ No.3 においてヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）が連続して検出されており、水田稲作に伴い水田内やその周辺の水路などに生育していたと推測される。また、ススキやチガヤなどのウシクサ族は遺跡周辺の空地や森林の林縁部などの日の当たる開けたところに生育していたと見られる。

引用文献

藤原宏志　1984　「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』No.227，2-7p

B　花粉化石

1）はじめに

下割遺跡は、飯田川左岸の沖積地に立地している。この下割遺跡において行われた発掘調査で、古代の

掘立柱建物や中世～近世の畦畔等が検出された。以下に、古環境を判断する目的で行った花粉分析の結果を示し、遺跡が営まれていた時期及びその前後を含めた遺跡周辺の古植生について検討した。

2）試料と分析方法

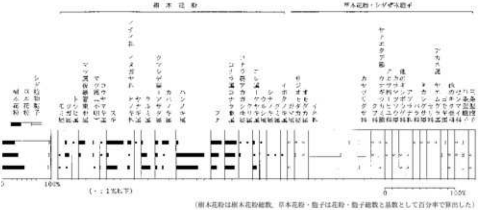
試料は、3701セクションから採取された基本層序Ⅳ層～Ⅵ層の3試料である。各試料について、Ⅳ層は、灰色粘土で、古代から近世初期の遺物包含層であり、時期は中世であると考えられている。Ⅴ層は、青灰色粘土で、土師器・須恵器を含む古代の遺物包含層であり、時期は奈良・平安時代と考えられている。Ⅵ層は、緑灰色シルト～粘土で、古代の遺構確認面である。花粉分析はこれら3試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

和名	学名	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
樹木				
モミ属	*Abies*	-	1	1
ツガ属	*Tsuga*	6	13	3
トウヒ属	*Picea*	1	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	15	2	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	5	3	1
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	1	1	3
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	11	6	32
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	11	3	7
ヤナギ属	*Salix*	1	-	-
クルミ属	*Juglans*	4	17	28
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus*－*Ostrya*	1	7	6
カバノキ属	*Betula*	21	2	5
ハンノキ属	*Alnus*	8	82	66
ブナ	*Fagus crenata* Blume	33	22	18
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	36	30	29
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	5	-
クリ属	*Castanea*	1		
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus*－*Zelkova*	6	2	12
ウルシ属	*Rhus*	1	-	-
シナノキ属	*Tilia*		1	
グミ属	*Elaeagnus*	-	1	-
イボタノキ属	*Ligustrum*		1	-
草本				
ガマ属	*Typha*	3	-	1
サジオモダカ属	*Alisma*	1	7	-
オモダカ属	*Sagittaria*	7	3	
イネ科	Gramineae	480	388	126
カヤツリグサ科	Cyperaceae	21	77	14
クワ科	Moraceae	2	1	
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	2	9	2
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae－Amaranthaceae	3	1	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae		1	1
アブラナ科	Cruciferae	-	1	2
バラ科	Rosaceae	1	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	1	-	
セリ科	Umbelliferae	2	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia*－*Galium*	1	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	58	11	13
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	1	1
シダ植物				
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	1	-
単条溝胞子	Monolete spore	20	15	26
三条溝胞子	Trilete spore	8	4	1
樹木花粉	Arboreal pollen	214	204	209
草本花粉	Nonarboreal pollen	591	461	225
シダ植物胞子	Spores	30	21	27
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	836	627	465
不明花粉	Unknown pollen	35	37	38

T.－C.はTaxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceaeを示す

第11表　産出花粉化石一覧表



（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

第26図　下割遺跡Ⅳの花粉化石分布図

3）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉22、草本花粉17、形態分類を含めたシダ植物胞子3の総計42である。これら花粉・胞子の一覧を第11表に、それらの分布を第26図に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図及び表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

第27図　下割遺跡Ⅳの花粉化石

検鏡の結果、Ⅴ層、Ⅵ層試料ではハンノキ属が、またⅣ層試料ではスギが最優占している。そのうちハンノキ属はⅣ層試料で大きく出現率を下げており、スギはⅤ層試料で大きく減少している。そのほかでは、ブナとコナラ属コナラ亜属が上部に向かい漸増しており、マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）にも同様の傾向が認められる。草本類ではイネ科が多産しており、Ⅳ層試料では50%を越える出現率を示している。また水生植物のサジオモダカやオモダカ属等がⅣ層およびⅤ層試料で観察されている。

4）遺跡周辺の植生変遷

先にも記したが、出土遺物からⅤ層が奈良・平安時代、Ⅳ層が中世頃と考えられており、これらの時期を中心とした下割遺跡周辺の古植生について述べる。

Ⅵ層堆積期の遺跡周辺丘陵部ではスギ林や、コナラ亜属やクマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していたと見られる。一方、低地部ではハンノキ属の湿地林が形成されており、その周囲にクルミ属が生育していたと推測される。また、草本類ではイネ科が多産しており、植物珪酸体分析においてイネの機動細胞珪酸体が多く検出されている（植物珪酸体分析の節参照）。こうしたことから、時期については不明であるがⅥ層堆積期において稲作が行われていた可能性が推察される。

奈良・平安時代（Ⅴ層）においても遺跡周辺低地部では稲作が行われていたと見られ、水田雑草を含む分類群であるサジオモダカ属やオモダカ属が検出されていることからこの稲作は水田稲作と推察される。この時期の遺跡周辺丘陵部ではスギ林が縮小したと見られる。その要因について、一つには水田稲作にともない有用材であるスギが水田施設等に使われ、それによってスギ林が縮小したことが推測される。その跡地にニヨウマツ類やコナラ亜属が侵入し、一部にこれらの二次林が成立するようになったと見られる。

また、常緑広葉樹のアカガシ亜属も分布していたと推測される。

中世を中心とした時期（Ⅳ層）の下割遺跡周辺低地部では水田稲作域がさらに拡大したと推測され、それに伴ってハンノキ属の湿地林は大きく縮小したと見られる。また、この時期の遺跡周辺丘陵部ではニヨウマツ類やコナラ亜属の二次林がさらに拡大したと推測され、植林であろうか、スギもその林分を再び広げたと見られる。

C　基本層序堆積物中の珪藻化石群集

1）はじめに

珪藻は、10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている［小杉 1988、安藤 1990］。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、下割遺跡Ⅳ基本層序の堆積物について珪藻化石群集を調べた。

2）試料と処理方法

試料は、基本層序２地点（②と⑫地点）の各３層堆積物の６試料である（第12表）。各試料は、以下に示す処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

（1）湿潤重量約1g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。（2）反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。（3）残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

試料 No.	採取 No.	遺構	グリッド	層位	堆積物の特徴
1	②	基本層序	37O1	Ⅳ層	灰色粘土
2				Ⅴ層	青灰色粘土
3				Ⅵ層	緑灰色シルト～粘土
4	⑫	基本層序	29Q6	Ⅳ層	灰色粘土
5				Ⅴ層	青灰色粘土
6				Ⅵ層	緑灰色シルト～粘土

第12表　珪藻分析を行った試料の詳細

作製したプレパラートは顕微鏡下600～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。

なお、珪藻殻は、完形と非完形（半分以上残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g中の殻数を計算し、分布図に示した。なお、珪藻化石が非常に少なかったため、作製したプレパラート全面について観察した。

3）珪藻化石の環境指標種群

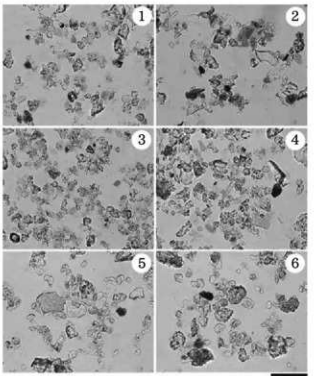
珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤［1990］が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、安藤［1990］が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［上流性河川指標種群（J）］：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K）］：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。



1：②（37O1）Ⅳ層　2：②（37O1）Ⅴ層　3：②（37O1）Ⅵ層
4：⑫（29Q6）Ⅳ層　5：⑫（29Q6）Ⅴ層　6：⑫（29Q6）Ⅵ層

第 28 図　堆積物の珪藻化石観察用プレパラート状況写真

［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約 1.5m 以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落及び泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

4）珪藻化石の特徴と堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水～汽水種が 2 分類群 2 属 1 種、淡水種が 7 分類群 6 属 3 種 1 変種であった。これらの珪藻化石は、汽水種が 1 環境指標種群、淡水種が 2 環境指標種群に分類された（第 13 表）。

		② (37O1)			⑫ (29Q6)		
分類群	種群	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層
Cescinodiscus spp.	?	1		1			
Nitzschia punctata	E2					1	
Aulacosira granulata	N						
Caloneis bacillium	W						1
Cymbella spp.	?	1	1	1		1	
Eunotia praerupta var.*bidens*	O				1		
Eunotia spp.	?			1			
Hantzschia amphioxys	Q				1		
Pinnularia spp.	?			1	2		
海水不明種	?	1		1			
汽水泥質干潟指標種群	E2					1	
沼沢湿地付着生指標種群	O				1		
陸域指標種群	Q				1		
広布種	W						1
淡水不定・不明種	?	1	1	3	2	1	0
合計		2	1	4	4	2	1
堆積物 1g 当たりの殻数（個）		554	203	733	1235	362	198

第 13 表　堆積物中の珪藻化石産出表

全体的に珪藻化石に乏しく、検出された珪藻化石は破片である。同じ試料についての花粉化石の検討では、十分な珪藻化石が得られていることから（花粉分析を参照）、水成堆積物であることは間違いない。このことから、珪藻化石が堆積後、溶出した可能性が高い［Murakami1996］。

引用文献

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』№42　73-88 p
小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』№27　1-20 p
Murakami T.　1996「Silicious Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Naganoyama Wetland in Aichi Prefecture,Central Japan」『第四紀研究』№35　17-23 p

D　出土木製品の樹種同定

1）はじめに

ここでは古代及び中世から出土した木製品13点の樹種同定を行った。なお、同じ木材の一部を用いてAMS法による年代測定を行っている（放射性炭素年代測定の報告参照）。

2）試料と方法

試料は漆器（No.258）、曲物側板の一部（No.259）、櫛（No.257）が1点ずつ、柱根が9点（No.247～254・実測No.47 報告外）、木札が1点（No.278）の合計13点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

剃刀を用いて試料の3断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3）結　　果

樹種同定の結果、針葉樹はヒノキ科のヒノキとスギ科スギの2分類群、広葉樹はニレ科のケヤキ、イスノキ科のイスノキ、モクセイ科のトネリコ属とトネリコ属シオジ節の4分類群、計6分類群が同定された。漆器はケヤキ、曲物側板はスギ、櫛はイスノキ、柱根はシオジ節を含むトネリコ属であった。結果は第14表に示す。

以下に同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、顕微鏡写真は第29・30図に示す。

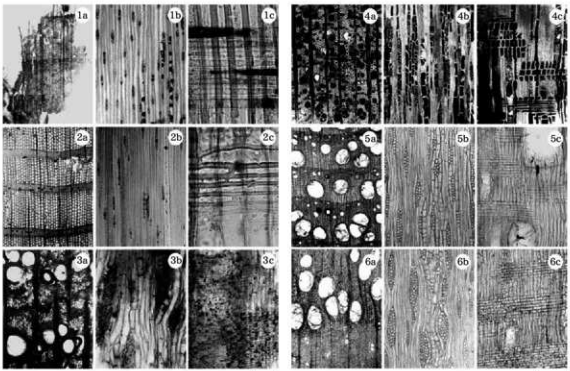
①　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第29図　1a-1c（No.278）

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性、耐湿性は著しく高く狂いが少ない。建

報告番号	種別	樹種	木取り	時代
258	漆器	ケヤキ	不明	古代
259	曲物（側板の一部）	スギ	板目	古代
257	櫛	イスノキ	追柾目？	古代
254	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代
248	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代
250	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代
251	柱根	トネリコ属シオジ節	芯無割材	古代
249	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代
252	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代
247	柱根	トネリコ属シオジ節	芯無割材	古代
253	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代
278	木札（墨書）	ヒノキ	芯無割材	中世
実測番号47	柱根	トネリコ属	芯無割材	古代

第14表　樹種同定結果一覧



1a－c：ヒノキ（No.278, a：500μm,b：200μm,c：50μm）
2a－c：スギ（No.259, a：500μm,b：200μm,c：50μm）
3a－c：ケヤキ（No.258, a：500μm,b：200μm,c：200μm）
4a－c：イスノキ（No.257, a：200μm,b：200μm,c：200μm）
5a－c：シオジ節（No.251, a：500μm,b：200μm,c：200μm）
6a－c：トネリコ属（No.250, a：500μm,b：200μm,c：200μm）

第 29 図　出土材の顕微鏡写真（a：横断面、b：接線断面、c：放射断面）

築・器具・漆器・土木・彫刻・経木などに利用される。

② スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　スギ科　第 29 図　2a-2c（No.259）

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯･温帯下部に生育する。材は比較的軽軟で切削加工は容易、保存性は中庸で、割裂性は大きい。建築・樽桶・土木・船・彫刻・下駄・経木・箸などに利用される。

③ ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　ニレ科　第 29 図　3a-3c（No.258）

環孔材で、大型の道管が年輪界に沿って 1 列に並び、晩材部では小道管が複合して厚く接線状に配列する。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で上下端の細胞に大きな結晶がみられる。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は重硬で狂いがなく、建築・器具・家具・土木・船・ろくろ細工などに利用される。

④ イスノキ　*Distylium racemosum* Siebold et Zucc.　マンサク科　第 29 図　4a-4c（No.257）

小径の道管が単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は線状もしくは散在状に配列する。道管の穿孔は階段状で、横棒は 20 段程度である。多数道管中にゴム様物質を含む。放射組織は異性で 1 ～ 2 列となり、単列部と多列部が同じ大きさになる。

イスノキは関東以西の暖帯に分布する常緑高木である。材はきわめて重硬で強度も大きいが、切削加工・割裂は困難である。指物加工・器具材・薪炭材などに利用される。

⑤ トネリコ属シオジ節　*Fraxinus* sect. *Fraxinaster*　モクセイ科　第 29 図　6a-6c（No.251）

大型の道管が年輪界に１列程度並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に２～３個複合して散在する。軸方向柔組織は周囲状となる。道管の穿孔は単一、放射組織は同性で１～３列である。

シオジ節は温帯に分布する落葉高木で、シオジとヤチダモがある。材はやや重硬で強く粘りがあり、加工・保存性は中庸である。

⑥　トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科　第29図　5a-5c（実測No.47）

組織はシオジ節とほぼ同じだが、横断面において大型の道管が年輪界に３～５列程度並ぶ。これ以上の同定ができないため、トネリコ属とした。

トネリコ属は温帯に分布する落葉高木で、シオジ節とトネリコやアオダモなどを含むトネリコ節に分かれる。

4）ま　と　め

針葉樹は曲物にスギ、木札にヒノキが用いられていたが、ほかの木製品は広葉樹であった。曲物は一般に水湿に強く割裂性の大きい針葉樹が多く用いられ、また木取りも側板は柾目であることが多い。下割遺跡Ⅰの調査において樹種同定が行われた曲物もすべてスギで木取りもほぼ柾目であり、今回の結果と一致する［パリノ・サーヴェイ株式会社2003］。

漆器の木地はケヤキであった。漆器木地は中世以降になるとブナやトチノキがやや増加するほか潅木や針葉樹も用いられるが、古代では特にケヤキの割合が高い［山田1993］。ケヤキの材は強度は大きいが切削加工は困難でなく、耐朽性もあり、木目も美しいことから幅広い用途に用いられる。環孔材であるため肌目は粗いが磨くと光沢が出る特徴を持つ。

櫛はイスノキであったが、イスノキはこの地域には生育しないため、製品もしくは原材で他の地域から持ち込まれたものを加工したと推測される。櫛にはツゲやイスノキ、モッコクなど密度が高く肌目の細かい樹種が用いられる。イスノキは日本産の有用材中で最も重硬で強度も大きく、イスノキの櫛はツゲに次いでよいものとされる。

柱根はすべてトネリコ属であった。トネリコ属の樹は全体的に木理が直通であり、加工も比較的容易である。特にシオジ節は大きな木になり量もまとまって得られるため、柱材としても有用であったと思われる。下割遺跡Ⅱの調査では杭材、反貫目遺跡においてもトネリコ属の自然木が確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社2004］。以上から、柱根に用いられたトネリコ属も遺跡周辺に生育していたものを利用した可能性が考えられる。

引用文献

島地謙・伊東隆夫　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』259p　雄山閣出版

山田昌久　1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間-植物関係史－」『植生史研究』特別第１号

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003「木製品の樹種同定」『下割遺跡Ⅰ』26-28p　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2004「木製品の樹種同定」『下割遺跡Ⅱ』39-42p　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

E　放射性炭素年代測定

1）はじめに

下別遺跡Ⅳから検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2）試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 15 表のとおりである。

試料は 2 棟の掘立柱建物から 1 点ずつ選ばれた柱根、計 2 点である。2 棟の掘立柱建物の時期は古代とされている。掘立柱建物 SB230 の柱穴 P276 から出土した柱根（試料 No.250：PLD-15318）は、最外年輪が確認できなかった。試料採取部位は、残っている中で最も外側の 1 年輪である。SB230-P276 出土の柱根は、外側がそれほど大きく削り取れられているようには見られなかったため、試料採取部位は最外年輪に近いかもしれない。掘立柱建物 SB315 の柱穴 P313 から出土した柱根（試料 No.47：PLD-15319）は、最外年輪は確認できなかったが、最外年輪の可能性がある部位が見られた。試料採取部位は、最外年輪の可能性がある年輪を含む 3 年輪である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15318	遺構：SB230 位置：P276 試料 No.250	試料の種類：生材 試料の性状：最外年輪に近い？外側 1 年輪 状態：wet	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N） 処理時の知見 :900℃ 5h 焼
PLD-15319	遺構：SB315 位置：P313 試料 No.47	試料の種類：生材（外側 3 年輪分） 試料の性状：最外年輪？を含む 3 年輪 状態：wet	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N） 処理時の知見 :900℃ 5h 焼

第 15 表　測定試料及び処理

3）結　　果

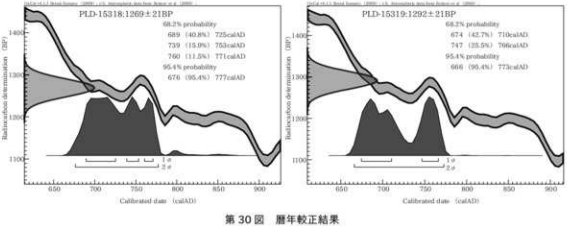
第 16 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第 30 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

測定番号	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-15318 試料 No.250	-29.61 ± 0.21	1269 ± 21	1270 ± 20	689AD（40.8%）725AD 739AD（15.9%）753AD 760AD（11.5%）771AD	676AD（95.4%）777AD
PLD-15319 試料 No.47	-27.38 ± 0.25	1292 ± 21	1290 ± 20	674AD（42.7%）710AD 747AD（25.5%）766AD	666AD（95.4%）773AD

第 16 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果



第 30 図　暦年較正結果

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4）考　　察

SB230 の P276 の柱根は、1 σ暦年代範囲で 689-725calAD（40.8％）、739-753calAD（15.9％）、760-771calAD（11.5%）、2 σ暦年代範囲で 676-777calAD（95.4%）の範囲を示した。

SB315 の P313 の柱根は、1 σ暦年代範囲で 674-710calAD（42.7%）及び 747-766calAD（25.5%）、2 σ暦年代範囲で 666-773calAD（95.4%）の範囲を示した。

2 σ暦年代範囲に着目すると、いずれも 7 世紀後半～ 8 世紀後半の範囲を示した。ただし、SB230 の P276 の柱根は最外年輪ではなく、SB315 の P313 の柱根も最外年輪とは断定できないため、古木効果を考慮する必要がある。すなわち、柱根の木材が伐採された年代は今回示された暦年代範囲よりも新しい可能性がある。したがって、柱根の木材が伐採されたのは、いずれも 7 世紀後半～ 8 世紀後半あるいはそれよりも新しい年代である。

参考文献

Bronk Ramsey, C.　1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20p

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.　2009　IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

7 ま と め

A　古代の土器の編年的位置付け

古代の遺構は切り合いが少なく、遺構出土土器の大多数は春日編年［春日 1999］Ⅲ２期（8 世紀前葉）に比定できるが、調査区西端に位置する SD222 からは 8 世紀前葉～ 9 世紀中葉の土器が出土している。

a　器種構成比率・食膳具構成比率（第 17 表）

出土量が多い SK326 及び SD331 の構成比率を検討する。SK326 は貯蔵具の比率が 3.9%と低く、SD331 では出土していない。両遺構とも貯蔵具がごく少量で、食膳具と煮炊き具が約半数ずつを占める。食膳具構成比率では土師器の食膳具は存在せず、須恵器のみである。SD222 を除く、そのほかの遺構でも土師器食膳具はごく少量であり、須恵器が主体となる。

下割遺跡と時期的に併行関係にある三角田遺跡下層 SD113 の器種構成比率を見ると［細井 2006］、食膳具 84.8%・貯蔵具 4.0%・煮炊具 11.2%である。食膳具構成比率は土師器無台杯等が少量あるほかは須恵器が大多数を占める。下割遺跡と比較すると、食膳具は高い比率を示すが、貯蔵具の比率がかなり低いという共通する様相が確認できる。また食膳具は下割遺跡と同様に須恵器が主体的である。

越後では 8 世紀前半で食膳具・貯蔵具は須恵器、煮炊具は土師器というあり方が明瞭であり［坂井 1988］、下割遺跡と三角田遺跡の検討結果はこうした 8 世紀前半の土器様相を反映しているといえよう。

b　編年的位置付け

下割遺跡出土土器の編年的位置付けについて、上越市の今池遺跡［坂井 1984］、延命寺遺跡［山崎

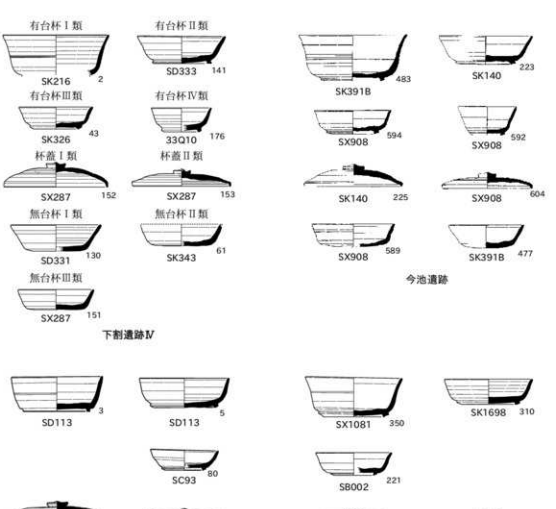
下割遺跡Ⅳ　SK326　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	破片数	比率（口縁部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	0	0	0.0%	0.0%
	無台杯	0	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	0	1	0.0%	0.1%
	有台杯	8	1	5.2%	0.1%
	杯	14	7	9.1%	0.8%
	杯　蓋	46	20	29.9%	2.3%
	鉢	0	0	0.0%	0.0%
黒色土器	無台椀	0	0	0.0%	0.0%
	有台椀	0	0	0.0%	0.0%
食膳具計		68	29	44.2%	3.4%
須恵器	長頸瓶	0	0	0.0%	0.0%
	広口瓶	0	0	0.0%	0.0%
	横　瓶	0	0	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0.0%	0.0%
	短頸壺	5	4	3.2%	0.5%
	壺　蓋	0	0	0.0%	0.0%
	壺・瓶	1	4	0.6%	0.5%
	甕	0	0	0.0%	0.0%
貯蔵具計		6	8	3.9%	0.9%
土師器	長　甕	46	585	29.9%	68.7%
	小　甕	31	184	20.1%	21.6%
	鍋	3	46	1.9%	5.4%
煮炊具計		80	815	51.9%	95.7%
総計		154	852	100.0%	100.0%

下割遺跡Ⅳ　SD331　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	破片数	比率（口縁部残存率）	比率（破片数）
土師器	無台椀	0	0	0.0%	0.0%
	無台杯	0	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	無台杯	14	3	9.1%	0.4%
	有台杯	19	2	12.3%	0.2%
	杯	0	1	0.0%	0.1%
	杯　蓋	0	0	0.0%	0.0%
	鉢	0	0	0.0%	0.0%
黒色土器	無台椀	0	0	0.0%	0.0%
	有台椀	0	0	0.0%	0.0%
食膳具計		33	6	21.4%	0.7%
須恵器	長頸瓶	0	0	0.0%	0.0%
	広口瓶	0	0	0.0%	0.0%
	横　瓶	0	0	0.0%	0.0%
	壺	0	0	0.0%	0.0%
	短頸壺	0	0	0.0%	0.0%
	壺　蓋	0	0	0.0%	0.0%
	壺・瓶	0	0	0.0%	0.0%
	甕	0	0	0.0%	0.0%
貯蔵具計		0	0	0.0%	0.0%
土師器	長　甕	22	102	14.3%	12.0%
	小　甕	0	37	0.0%	4.3%
	鍋	0	10	0.0%	1.2%
煮炊具計		22	149	14.3%	17.5%
総計		55	155	35.7%	18.2%

第 17 表　SK326・SD331 器種構成比率



第 31 図　下割遺跡Ⅳ・今池遺跡・三角田遺跡・延命寺遺跡の出土土器　S=1/6　※番号は報告番号

2008]、三角田遺跡下層［細井 2006］出土資料と比較しながら検討する（第 31 図・第 18 表）。

今池編年Ⅰ期はＡ地区（SK140･391B、SX508）出土土器を標式とし、春日編年Ⅲ２期に比定される［春日 2005］。延命寺遺跡の奈良時代主要遺構（SB002･007、SK1698、SD1700、SX508･1081 等）出土土器は、春日編年Ⅲ２～Ⅳ１期に位置付けられている。三角田遺跡下層出土土器の上限は妙高市栗原遺跡 SD25 出土土器の直後とし、下限は今池編年Ⅱ期の一部としている。３遺跡の資料とも春日編年Ⅲ２期を中心とし、一部がⅣ１期に下るものの、おおむね併行する時期の資料である。

下割遺跡有台杯Ⅰ類（2）は体部外面に沈線がめぐり、金属器を模倣したものである。これに類似する資料は今池遺跡 SK391B（483）、三角田遺跡 SD113（3）、延命寺遺跡 SX1081（350）で確認できる。下割遺跡有台杯Ⅱ類（141）は器壁が厚く、高台が底部の外縁に付されるが、これに相当する資料は今池遺跡 SK140（223）、三角田遺跡 SD113（5）、延命寺遺跡 SK1698（310）である。下割遺跡有台杯Ⅲ類（43）・有台杯Ⅳ類（176）はいずれも有台杯Ⅱ類と同様に、器壁が厚く高台が底部の外側に付くという特徴があ

西暦	坂井 1984	春日 1999	笹澤 2003a	山崎 2008	細井 2006	下割遺跡Ⅳ
700 年	Ⅰ期	Ⅲ 2	Ⅲ 1	SB002・SB007 SK1698・SD1700 SX508・SX1081 等	第 1 群土器	SK216・SK237・SK243・SK245 SK253・SK254・SK326・SD331 SD332・SD333・SX287・SX290
					第 2 群土器	SK291
	Ⅱ期	Ⅳ 1	Ⅲ 2			

第 18 表　編年対照表

る。これらに類似するのは今池遺跡 SX908（594）・（592）、三角田遺跡 SC93（80）である。延命寺遺跡 SB002（221）は高台が底部のやや内側に付き、新しい時期の要素を持つ。

下割遺跡杯蓋Ⅰ類（152）・Ⅱ類（153）は口径が 15㎝以上と大きく、摘みは擬宝珠型を呈する。これと類似する資料は今池遺跡 SK140（225）・SX908（604）、三角田遺跡 SC49（66）・SD113（1）、延命寺遺跡 SK1169（309）・SB007（236）である。延命寺遺跡 236 は摘みが低いボタン状を呈しており、やや新しい要素を持つ。

下割遺跡無台杯Ⅰ～Ⅲ類（130・61・151）は全体的に器壁が厚い。今池遺跡 SX908（589）・SK391B（477）、三角田遺跡 SD113（9・11）、延命寺遺跡 SK1169（307・308）も器壁が厚く、今池遺跡 477・三角田遺跡 9・11・延命寺遺跡 307 は丸底である。下割遺跡でも SK291（33）・包含層（162）など、丸底を呈する無台杯は確認できる。

以上のことから、下割遺跡出土土器の主体は、今池編年Ⅰ期及び春日編年Ⅲ 2 期に併行する時期の所産と考えることができる。しかし、下割遺跡 SK291 の有台杯 34・35 は体部が直線的に開き、高台が底部のやや内側に付され、Ⅲ 2 期よりもやや新しい様相を呈する。また包含層出土の有台杯 173・174 も高台が底部の内側に付き、Ⅳ 1 期頃の所産と考える。

調査区西端に位置する SD222 からはⅢ 2 期～Ⅴ 2 期の土器が多数出土しているが、Ⅴ 2 期に比定できる資料は SD222 以外からは出土していない。以上のことから、下割遺跡出土土器はⅢ 2 期を主体とするものの一部がⅣ 1 期まで下り、今回の調査区よりも南側や西側の地区にはⅤ 2 期（9 世紀中葉）を主体とする時期の遺構群が存在する可能性が高いといえよう。

B　古代の遺構・遺物から見た遺跡の性格

古代の遺構は掘立柱建物 4 棟のほか、杭列、土坑、溝などを検出した。土坑・溝は建物の周辺に集中しており、建物が検出されなかった調査区北側及び東側では、そのほかの遺構も少なかった。遺構群の中心と考えられる掘立柱建物 4 棟の主軸方向は、42 ～ 57° 西偏している。規模は隅柱の一角が検出されなかった SB270 を除けば、いずれも 2 間×2 間で面積は 14 ～ 18㎡である。また柱根の樹種は分析した SB230・270・315 のすべてがトネリコ属であった。

掘立柱建物の時期は、SB315 と SB339 周辺で検出された SD331・333、SK343、SB270 周辺の SX287、SK291、SB230 周辺の SK237 などから出土した遺物を検討すると、いずれも大半が［春日 1999］のⅢ 2 期（8 世紀前葉）に比定でき、掘立柱建物も同時期と考えられる。一方、SB230 に近接する SD222 からはⅢ 2 ～Ⅴ 2 期（9 世紀中葉）の遺物が出土している。しかし、SD222 が古代の遺構検出面より上位で検出されていることや、SD222 の覆土以外ではⅤ 2 期の遺物は出土していない。このことからも SB230 の時期は、8 世紀前葉と考えるのが妥当である。SD222 の南側や西側の地区にⅤ 2 期の遺物を含む遺跡が存在すると考えられる。

以上のことから推察される本遺跡の性格は、①掘立柱建物の主軸方向、配置や規模にある程度規則性が認められ、使用されている柱材の樹種が同一であることから、時間的前後関係があるにせよ同一集落の一部を構成するものと考えられる。②出土している遺物に時期幅がないことから、ここでの集落は短期間と思われる。ただし、SD222出土遺物から調査区周辺では9世紀中葉まで集落が続いた可能性が高い。③集落の範囲は、遺構の分布が調査区の北側でまばらに対して南側で濃密になること、遺物の分布も同様な状況を示すことから、集落の縁辺部に当たり、その中心は南側に広がる。

C　中世～近世初期の水田について

下割遺跡では中世～近世初期の水田を検出した。高田平野における当該期の水田は、これまで3遺跡が知られている。妙高市（旧新井市）高柳遺跡群においては、2遺跡で水田を検出している。このうち馬場遺跡では、焼山火山灰に覆われた11の区画が確認され［高橋1994］、その田面には人間や動物（馬）のものと考えられる足跡が残されていた。一方、宮ノ本遺跡では、洪水層や焼山火山灰に覆われる3面の水田が検出された［高橋1997］。上越市池田遺跡の水田では、12以上の区画が確認された［鈴木1985］。水田の畦畔は断面形・幅・高さをもとに3分され、そのうちの大畦畔は、遺跡の南側を流れる正善寺川に沿うように構築された可能性が高い。また、畦畔に沿って多数の足跡が残されていた。このほかにも上越市用言寺遺跡では、居住域に隣接して「堀田」と呼ばれる水田に類似する溝状の遺構を検出している［加藤・杉田ほか2008］。下割遺跡の水田は、これらに続く検出例となり、高田平野における中世～近世初期の稲作農耕の様相が明らかになりつつある。以下では、下割遺跡の集落景観について触れ、さらに検出した水田の構造や植物珪酸体分析の結果について述べ、最後に遺構配置と明治期の土地更正図との比較を行った。

1）集落の景観

下割遺跡の平成14・15年度調査区は、平成21年度調査区の東側に位置する（図版30）。平成14・15年度調査区では、掘立柱建物・井戸・空白地が一辺50～60mの溝で囲まれる屋敷地を検出した［山崎ほか2003・2004］。屋敷地は数か所隣接しており、集村化傾向にある集落の一形態を示していることが明らかになった。集落は13世紀後半～14世紀のものであり、水田跡と時期が重なることから、両者は一時期並存していた可能性がある。標高を比較すると、飯田川に近い東側で高く西側へ向かって低くなることから、自然堤防上に集落が立地し、その西側の低地部で水田耕作が営まれていたものと推察する。

2）水田の構造

平成21年度調査区で検出した水田は、畦畔・水口・溝からなる。畦畔の延びる方向や連続性を基に26の区画を抽出した。検出した区画の平面形は、畦畔の遺存状況が悪く全容がつかめないものもあるが、直線的な畦畔やL字状に直角に曲がる畦畔から方形または長方形と推測できる。

調査区の34列から東では比較的遺存状況の良い畦畔が検出でき、南北方向へ直線的に延びる畦畔と、連続性に乏しいものの東西方向へ延びる畦畔が多く見られた。この畦畔によって区画された水田は、ほぼ南北方向に規則性をもって配列している。

一方、調査区の北西部で検出された畦畔は、南北方向及び東西方向から約10°西偏し、同じく区画された水田も約10°西偏する。30～35列の北側や35列以西では、東西方向から約10°西偏する畦畔が多く

見られ、一部ほぼ東西方向を示す畦畔と混在する。畦畔を構成する土層（Ⅴ層）は同じであり、水田を構成する覆土の識別も困難なことから、新旧関係は明らかにできなかった。しかし、ほぼ南北方向を向く水田は古代の条里制を意識した水田区画であると推測できることから、約 10°西偏する水田は何らかの事情からほぼ南北方向を向く水田を新しく改変したものと考えられる。

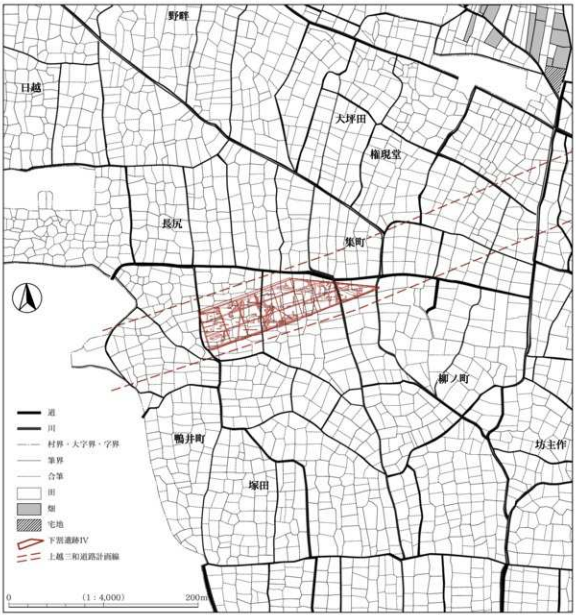
また、今回の調査では一部で水田底面まで掘削したが、調査区の大半ではⅣ層中での遺構検出と区画の検出に主眼を置いた。そのため、水口の可能性が高い畦畔の途切れを数か所で検出したものの、各区画への配水の状況を復元するための十分な情報を得ることができなかった。さらに、導水に関連する水路は検出されず、また調査範囲が限られていたことから各区画への配水状況の復元を困難にしている。しかし、区画が連続して確認されている 29 ラインから東の区域について見ると、検出面の標高は東側で高く西側へ緩やかに傾斜していることから、調査区外を流れる水路から導水して、東側から西側の区画へと順次配水したものと想定する。

3）稲作の検証

本遺跡における稲作の可能性と古環境を検討するために、採取した土壌サンプルの植物珪酸体分析を実施した（第Ⅳ章　第 6 節）。調査区中央の 29Q6 におけるイネの植物珪酸体含量は、Ⅲ層が 17,600 個 /g、Ⅳ層が 7,400 個 /g と高い値を示すことから、Ⅲ・Ⅳ層では稲作を行っていたことを裏付けている。また、調査区西端の 37O1 のⅢ層もイネの植物珪酸体含量は 16,700 個 /g であり、稲作を行っていたものと判断される。これに対し、同地点のⅣ層では含量が 3,100 個 /g と一定量認められるものの、稲作検証の目安となる 5,000 個 /g を下回っていた。代わりにクマザサ属型やキビ族の植物珪酸体が特徴的に含まれていた。このうちのキビ族は稲作に伴う雑草類の可能性が指摘されている。36 ～ 38O・P では直線的に延びる畦畔によって区画される水田跡を確認していることから、当時も稲作を行っていたことは確実である。37O1 における分析結果は、水田周辺の植生の影響を強く受けたものではないだろうか。また、Ⅲ層からも 5,000 個 /g を大きく越える量のイネの植物珪酸体が得られていることは、近世前半以降にも稲作が行われていた可能性を示すものである。

4）遺構配置と土地更正図

第 32 図は、明治 29（1896）年 4 月調製の『中頸城郡諏訪村大字来岡更正図』に、平成 21 年度調査区におけるⅣ層検出の遺構配置図を重ね合わせたものである。土地更正図によると、明治期の遺跡周辺には田が広がり、また道や川が巡っている様子が見て取れる。そして、道や川を境に田の区画の形態や長軸方向が変わっているか所もある。このような地割は、地形上の制約を受けつつ構築されたものも含まれると推測する。平成 21 年度調査区の周辺について見ると、土地更正図による地割は、おおむね南北方向と東西方向を指すものが目立つ。上述したように、調査区では、南北方向と東西方向へ延びる畦畔を数多く検出した。このような傾向は、土地更正図に見られる特徴と一致するものである。さらに、遺跡で検出した南北方向の畦畔に着目すると、位置はややずれるものの土地更正図と同様の間隔で配置しているか所もある。遺構配置図と土地更正図を比較すると、以上のような共通点を見出すことができ、中世～近世初期の遺跡で見られた地割の特徴は、明治期まで踏襲されつづけてきたものと解釈できる。



第 32 図　明治 29 年の土地更正図と下割遺跡Ⅳの遺構配置図（遺跡の位置は推定）
【明治 29（1896）年調整「中頸城郡諏訪村大字米岡更正図」1:600 原図】

要　　約

狐宮遺跡Ⅱ

1　狐宮遺跡は、新潟県上越市大字本道字南沖 477 番地ほかに所在する。遺跡は戸野目川右岸の自然堤防上に立地し、調査前の現況は水田である。標高は 7.8m ～ 8.2m である。

2　発掘調査は一般国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、平成 21 年 4 月 22 日～ 6 月 12 日にかけて実施した狐宮遺跡の第 2 次調査である。調査面積は、1,589m² である。

3　調査の結果、平成 17 年度調査で検出した古代集落（8 世紀～ 9 世紀後葉）の東域縁辺部に当たる遺構・遺物を検出した。

4　遺構は、掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基、土坑 13 基、溝 12 条、性格不明遺構 5 基、ピット 44 基を検出した。掘立柱建物は調査区外に柱列が延び、全容がつかめなかった。井戸は、埋め戻しの際に廃絶に関わる祭祀が行われていた。また、検出した区画溝を境に遺構が希薄になり、当該地域が集落の東端であると判断した。

5　遺物は古代の須恵器、土師器、木製品、石器、瓦、金属製品などが出土した。特に、井戸から井戸祭祀に関係する土器、木製品、金属製品など良好な資料が出土した。時期は、9 世紀中葉である。

6　狐宮遺跡は、9 世紀代を中心に農業開発を基盤に形成した集落である。

下割遺跡Ⅳ

1　下割遺跡は、新潟県上越市米岡字中割 1,086 ほかに所在する。遺跡は飯田川左岸の低地に立地し、調査前の現況は水田である。標高は 14m ～ 14.5m である。

2　発掘調査は一般国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、平成 21 年 5 月 28 日～ 10 月 30 日にかけて実施した下割遺跡の第 4 次調査である。調査面積は 9,160m² で、遺構面は古代（Ⅴ層）と中世～近世初期（Ⅳ層）の 2 面である。

3　調査の結果、古代（8 世紀前葉～ 10 世紀前葉）、中世～江戸時代初期（14 世紀～ 17 世紀前半）の遺構・遺物を検出した。そのほかに古代の溝で流れ込みの古墳時代の土器が少量出土した。

4　古代の遺構は掘立柱建物 4 棟、杭列 1 列、土坑 44 基、溝 14 条、性格不明遺構 3 基、ピット 59 基を検出した。遺構の中心時期は奈良時代の 8 世紀前葉で、調査区西端で検出した南北方向の溝（SD222）のみ 8 世紀から 9 世紀代まで幅広い時期の遺物が出土した。掘立柱建物は配置や規模に規則性が認められる。

5　古代の遺物は須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・緑釉陶器が少量出土した。そのほかに砥石、柱根・櫛・漆器などの木製品が出土した。

6　調査地点は、奈良時代の集落の北・東側縁辺部と考えられる。

7　中世～近世初期の遺構は水田遺構を検出した。水田は畦畔の方向が真北に沿うもの水田 24 区画と、10 度西偏する水田 2 区画が認められた。

8　中世～近世初期の遺物は、珠洲焼、瀬戸美濃焼、越中瀬戸焼、肥前系陶磁器、青磁・白磁・李朝陶器などの輸入陶磁器、漆器・曲物・木簡などの木製品、鉇釘・刀子などの金属製品が出土した。

引用・参考文献

相沢　央　2004　「第３部古代２類城郡への国府の移転」『上越市史』通史編１　自然・原始・古代　上越市

飯坂盛泰ほか　2007　『新潟埋蔵文化財調査報告書第 171 集　一般国道 253 号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅳ　狐宮遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

池田嘉一　1967　『中江用水史』　中江土地改良区

市村清隆　2004　「第３部第６章第６節　文禄四年検地」『上越市史』通史編２　中世　上越市

入江精次　2008　「１　地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 185 集　屋敷割付遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

宇野隆夫　1992　「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集　国立歴史民俗博物館

岡本郁栄　1999　「新潟県の地形概観」『新潟県の考古学』　高志書院

小笠原好彦・西　弘海・吉田恵二　1976　「第Ⅳ章　遺物　３　土器」『奈良国立文化財研究所学報第 26 冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所

尾崎高宏　2003　「上越地内（米岡地区・下割道跡隣接地）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成 14 年度』　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2004　「上越地内（戸野目～北田中地区）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成 15 年度』　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小田由美子ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 149 集　滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999　「第２節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』　高志書院

春日真実　2001　「横瓶の製作方法」『北陸古代土器研究』第９号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999　「第４章　古代　第２節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』　高志書院

春日真実　2005　「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀Ⅱ編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会

加藤学ほか　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 128 集　仲田遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤学・杉田和弘ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 159 集　用言寺遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金内　元　2008　「第Ⅶ章２　出土土器の編年的位置」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 182 集　岩ノ原遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

北野博司　2001　「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第９号　北陸古代土器研究会

桐原雅史　2007　「２　遺跡周辺の地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 171 集　狐宮遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1994　「新潟県埋蔵文化財調査報告書第 59 集　細池遺跡・寺道上遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1999　「第４章　古代　第４節　生産と流通　第１項　水田遺構」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院

高野武男　2002　「第１章　地形・地質　第２節　上越市周辺地域の地形　１沖積平野の地形」『上越市史　資料編１　自然』　上越市

小島幸雄ほか　1984　『新潟県上越市　本長者原廃寺確認調査概要』　上越市教育委員会

後藤　孝　2002　「下割遺跡一次調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成 13 年度』　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

斎野裕彦　1987　「第１節　遺構の種別と遺物の分類」『仙台市文化財調査報告書第 98 集　富沢』　仙台市教育委員会

坂井秀弥ほか 1982 『栗原遺跡 第４次・５次発掘調査概報』 新潟県教育委員会・新井市教育委員会
坂井秀弥ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 上新バイパス関係発掘調査報告Ⅰ 今池・下新町・子安遺跡』 新潟県教育委員会
坂井秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通－８～10世紀を中心にして－」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
笹澤正史・小島幸雄 1999 『津倉田遺跡』 新潟県上越市教育委員会
笹澤正史 2002 「第４章古代 3. 上越市最大の須恵器窯跡群」『三和村史』自然・考古編 三和村
笹澤正史 2003a 「第５章 古代 第１節 時代概説」『上越市史』資料編２ 考古 上越市
笹澤正史 2003b 「越前遺跡」『上越市史』資料編２ 考古 上越市
沢田敦ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
新編中江用水史編集委員会編 2006 『新編中江用水史 通史編』中江土地改良区
鈴木俊成 1985 「池田遺跡 第Ⅳ章 遺構と遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第38集 57年度発掘調査 池田遺跡（付編）一之口遺跡４区河川跡出土遺物』 新潟県教育委員会
高田平原団体グループ 1962 「高田平原の沖積層について－高田平原の団体研究・そのⅣ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第７号 新潟大学教育学部高田分校
高田平野団体研究グループ 1981 「高田平野の第四系と形成史－新潟県の第四系・そのXXIV－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号 新潟大学教育学部高田分校
高橋 勉ほか 1984 『栗原遺跡 第７次・第８次発掘調査報告書』 新井市教育委員会
高橋 勉ほか 1996 『新井市埋蔵文化財報告書第19集 高床山遺跡群 倉田遺跡 栗原遺跡 高柳地区五反田』 新井市教育委員会
高橋 勉 1994 「Ⅱ 高柳遺跡群」『新井市埋蔵文化財報告書第18 新井市遺跡確認調査報告書 高柳遺跡群・岡崎新田遺跡・藤塚新田遺跡・高床山遺跡群』 新井市教育委員会
高橋 勉 1997 「新井市高柳遺跡群の概要」『新潟県考古学会第９回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
高橋保雄ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』 新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗 2006 「上越三和道路（寺～本道地区）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺崎裕助・田中一穂 2006 「上越三和道路（門田新田地区）確認調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成17年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
東京大学史料編纂所編 1983 『越後国頸城郡絵図一頸城郡』 東京大学出版会
田海義正 2009 「上越市門田新田地内確認調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
田海義正 2009 「上越市米岡地内確認調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
戸根与八郎 2003 「第１章 中世 第１節 時代概説」『上越市業書８ 考古－中・近世資料－』 上越市
外山浩史 2003 「第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 2 遺跡の分布と歴史的環境 B 周辺の水利環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集 下別遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県農地部農村総合整備課 1980 『新潟県上越地域土地分類基本調査 高田東部』 新潟県農地部農村総合整備課
新潟県農地部農村総合整備課 1981 『新潟県上越地域土地分類基本調査 高田西部』 新潟県農地部農村総合整備課
農林水産省水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 2004 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
野水晃子 2007 「第Ⅶ章 まとめ 2 遺物について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第171集 狐宮遺跡』 新潟県

教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
早津賢二　2008　「上越市岩ノ原遺跡のテフラ分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 182 集　岩ノ原遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
北陸地方建設局北陸技術事務所　1981　『新潟県平野部の地盤図集（柏崎・高田平野編）』（社）北陸建設弘済会
細井佳浩　2006　「第Ⅶ章　まとめ　1 C　区下層の調査」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 154 集　三角田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
松井和幸　1994　「鉄製農具の変遷」『古代における農具の変遷ー発表要旨集ー』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
水沢幸一　2003　「横曽根遺跡」『上越市業書 8　考古ー中・近世資料ー』　上越市
山崎忠良ほか　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 120 集　下猿遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか　2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 134 集　下猿遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良　2008　「第Ⅶ章　まとめ　1　土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 201 集　延命寺遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 201 集　延命寺遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊裕之ほか　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 185 集　屋敷割付遺跡』新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

狐宮遺跡Ⅱ　遺構観察表

掘立柱建物（SB）

遺構番号	位置	方位		間数（桁行×梁行）	面積（nf）	規模（桁行×梁行）（m）		
	15Z2・15A	N-68°-W		（3間以上）×		6.3 以上×		
	柱穴	柱痕	形状	断面形	規模（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱穴間隔（m）
SB14	P2033	無か	円形	U字状	74 ×	74	6.79	P2033-P2036　1.92
	P2036	無	不整円形か	U字状	62 ×	63	6.88	P2036-P2035　1.78
	P2035	無	不整円形か	U字状	67 ×	92	6.69	P2035-P2051　2.05
	P2051	有			53 以上×	44 以上	6.73	
遺構番号	位置	方位		間数（桁行×梁行）	面積（nf）	規模（桁行×梁行）（m）		
	14Z2・14A	N-82°-W		1間×1間以上	5.04 以上	2.1 以上× 2.4 以上		
	柱穴	柱痕	形状	断面形	規模（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱穴間隔（m）
SB15	P2039	無	円形	U字	65 ×	57	6.88	P2039-P2071　1.55
	P2071	無	楕円形	U字	36 ×	37	7.19	P2071-P2038　2.16
	P2038	無	楕円形	U字	35 ×	34	7.13	

井戸（SE）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	形態	切り合い関係
2013	14D11・16	楕円形	漏斗状	176	144	145	N-34°-W	素掘り	

土坑（SK）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	切り合い関係
2011	13D20	楕円形	弧状	58	47	12		
2014	14D11	楕円形	弧状	70	54	13	N-60°-E	
2017	14D7	不整楕円形	弧状	196	80	17	N-15°-E	
2019	14D8	円形	弧状	174	76	15	N-75°-W	
2026	14B25	長楕円形		48	20	5	N-80°-E	
2044	15A4	楕円形		86		14	N-10°-W	＞SD2043
2052	16B1	楕円形	弧状	86	36	11	N-20°-E	
2065	14D5	円形	弧状	50	48	16		＞SK2066
2067	14D4	楕円形	弧状	64	40	1	N-37°-E	
2068	14C24	楕円形	弧状	64	44	11	N-15°-E	
2081	13C10		弧状			14		
2085	16E10	長楕円形	半円状	105	54	32	N-70°-E	
2086	17C16	長楕円形		132	72	32	N-85°-W	

溝（SD）

遺構名	グリッド	断面形	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	方　位	切り合い関係
2003	14A4	弧状	156	15 ～ 42	6	N - 62° -W	
2012	14C22	半円状	96	16 ～ 36	16	N - 50° -W	
2015	14D18 ～ 13E5	弧状		32	7	N-34° -E　N-80° -E	
2016	14D12	弧状	230	17	5	N-90° -W	
2020	14D9-10	弧状	276	32	5	N-66° -E	＜SD2063
2041	15B15 ～ 14B24	弧状	1340	45	11	N-80° -E	
2043	15A3 ～ 16A2	弧状	830	40	9	N-78° -W	＜SK2044
2061	14D3	弧状	80	45	1	N-73° -W	
2063	14D9	U 字状	52	22	6	N-78° -W	＞SD2020
2064	14C25 ～ 14D9	弧状	59.6	24	5	N - 15° -E	
2066	14D4 ～ 15D1	弧状	482	22	7	N-80° -W	＜SK2065
2075	14C4	弧状	296 以上	38	1	N - 15° -E	

性格不明遺構（SX）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	切り合い関係
2031	14A9	不整楕円形		228	82 ～ 119	14	N-83° -W	
2057	16A13	不整形		140	24	12		
2001	13B10	不整楕円形	弧状	140	98	8	N-40° -E	＞SK2002
2002	13B15	長楕円形		226	124	14	N-25° -W	＜SK2001
2006	14B15	不整形	弧状	140	104	9	N-50° -E	

狐宮遺跡Ⅱ　遺物観察表

土器

法量―（ ）：推定値　　切り離し―ヘラ：回転ヘラ切り、糸：回転糸切り　　胎土の混入物―砂粒、白：白色粒子、赤：赤色粒子、雲：雲母、長：長石、英：石英

番号	種類	器種	出土地点			法量（cm）			色調	調整			切り離し	胎土の混入物	備考
			グリッド	遺構	層	口径	底径	器高		内面	外面	底面			
1	土師器	長甕	15Z23	SB14 P2035	1	20.0			橙	ロクロナデ	ロクロナデ			赤・砂	
2	須恵器	無台杯	14D16	SE2013	4	12.6	7.0	3.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
3	須恵器	無台杯	14D16	SE2013	2	12.0	7.4	2.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	外面タール
4	須恵器	無台杯	14D16	SE2013	8	12.5	5.7	3.8	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	白・砂	外面墨書「六」
5	須恵器	無台杯	14D16	SE2013	8	12.1	5.2	4.2	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・砂	
6	須恵器	無台杯	14D16	SE2013	8	11.7	5.7	4.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	白	外面墨書、内外面タール
7	土師器	無台椀	14D16	SE2013	7	12.9	5.3	3.8	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	内面付着物、外面タール
8	土師器	無台椀	14D16	SE2013	8	13.0	5.8	3.8	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
9	黒色土器	無台椀	14D16	SE2013	6	13.0			灰黄褐	ミガキ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
10	黒色土器	無台椀	14D16	SE2013	7		6.1		灰褐	ミガキ	ロクロナデ・ミガキ		糸	雲・砂	

番号	種類	器種	出土地点		法量（cm）			色調	調整			切り離し	胎土の混入物	備考
			グリッド	遺構	層	口径	底径	器高		内面	外面	底面		
11	黒色土器	無台椀	14D16	SE2013	7		6.0		灰黄褐	ミガキ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	底面ヘラ記号
12	土師器	小甕	14D16	SE2013	4	10.6	6.6	11.2	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
13	土師器	小甕	14D11	SE2013	1	14.0			にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
14	土師器	小甕	14D16	SE2013	8		5.7		黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・砂	
15	須恵器	壺	14D16	SE2013	8		4.2		灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・英・赤・砂	
16	須恵器	長頸瓶	14D11・16	SE2013	2		8.9		灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ		糸	長・砂	
17	須恵器	長頸瓶	14D16	SE2013	4		7.4		灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ	ロクロケズリ		白・砂	外面自然釉
18	須恵器	長頸瓶	14D11	SE2013	1		9.0		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ	ロクロケズリ		長・砂	
19	須恵器	甕	14D16	SE2013	5				灰	タタキメ	当て具痕			白・砂	
20	土師器	無台椀	14D5	SK2014	1	13.5	6.0	3.4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			赤・砂	
21	須恵器	有台杯	14D7	SK2017	1	14.0	8.0	6.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白・砂	
22	土師器	長甕	14D8	SK2019	1	22.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
23	須恵器	無台杯	15A4	SK2044	1	12.3	8.0	3.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	雲・白	
24	須恵器	無台杯	14D18	SD2015	1	12.4			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	
25	須恵器	杯蓋	15A5	SD2043	1	16.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			長・砂	
26	須恵器	無台杯	14D13、13D15		Ⅲa	12.8	8.4	3.3	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
27	須恵器	無台杯	14D8		Ⅲa	12.7	8.2	3.0	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
28	須恵器	無台杯	14E1		Ⅲa	11.9	7.8	3.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	外面墨書
29	須恵器	無台杯	13D20・25		Ⅲa	13.0	5.5	(4.2)	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	白	
30	須恵器	有台杯	14D7・13		Ⅲa	14.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	外面墨書
31	須恵器	有台杯	13D5		Ⅲa		7.5		灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	底面ヘラ記号
32	須恵器	杯蓋	14D17・18		Ⅲa	13.6		3.3	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	
33	須恵器	杯蓋	16D20、17B6		Ⅲa	12.9		3.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	
34	須恵器	杯蓋	15A3・4		Ⅲa	11.6		2.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	
35	土師器	無台椀	14D12		Ⅲa		5.4		灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	底面墨書
36	土師器	無台椀	15C6		Ⅲa		5.6		灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	底面墨書
37	黒色土器	無台椀	14D11		Ⅲa	12.2	5.5	3.7	灰黄褐		ロクロナデ			雲・砂	
38	土師器	長甕	14D13		Ⅲa	28.0			にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
39	土師器	長甕	14D23		Ⅲa	27.0			にぶい黄褐	カキメ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
40	土師器	長甕	15A4		Ⅲa	25.0			にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
41	土師器	長甕	13D15		Ⅲa	23.0			にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
42	土師器	長甕	14C6		Ⅲa	21.0			にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
43	土師器	小甕	16D17		Ⅲa	14.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
44	土師器	鍋	14D11		Ⅲa	30.0			灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
45	須恵器	甕	15D21		Ⅲa				灰	ロクロナデ・タタキメ	ロクロナデ・当て具痕			白	
46	須恵器	長頸瓶	14D22、15C13		Ⅲa	10.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	内外面自然釉
47	須恵器	長頸瓶	14E2		Ⅲa				灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	外面自然釉

木製品

番号	器種	樹種	出土地点			法量（cm）			木取り	備考
			グリッド	遺構	層位	長	幅	厚		
48	曲物側板	スギ	14D16	SE2013	7	径 19.0	7.2	0.9	柾目	樹皮の接合材が残る。
49	曲物底板	ヒノキ	14D16	SE2013	5	径 19.6		0.7	柾目	樹皮の接合材が残る。
50	曲物側板		14D16	SE2013	7	4.6	3.5	0.2	柾目	内面に浅い切り込みあり。
51	曲物側板		14D16	SE2013	5	10.2	1.3	0.3	柾目	内面に浅い切り込みあり。
52	曲物側板	ヒノキ	14D16	SE2013	5	10.8	1.3	0.2	柾目	樹皮の接合材が残る。
53	木簡	コナラ属コナラ節	14D16	SE2013	7	9.6	4.7	2.8	分割材	未加工の面には広葉樹の樹皮が残る。
54	木簡	コナラ属アカガシ亜属	14D16	SE2013	7	13.5	4.8	4.9	丸太材	中央部を断面V字状の削込みが巡る。
55	木簡	コナラ属コナラ節	14D16	SE2013	7	10.1	4.0	2.3	分割材	側面の幅を減すには縦割。
56	馬形	ツバキ属	14D16	SE2013	7	9.0	2.9	2.2	丸太材	丸太材を削込んで頭部・頸部を表現。後端部断面は扇化。
57	鳥形か		14D16	SE2013	7	4.2	3.9	0.2		
58	鳥形か		14D16	SE2013	7	径 10.4		0.1 ～ 0.5		
59	板か	スギ	14D16	SE2013	7	25.0	1.0	1.1	柾目	側面に加工痕あり。下部側面と下端部は磨耗。
60	棒状木製品		14D16	SE2013	7	17.0	1.3	0.9	柾目	側面に加工痕あり。
61	棒状木製品		14D16	SE2013	6	6.6	0.6	0.5	板目	箸か。
62	木札状木製品		14D11	SE2013	4	14.8	1.8	0.5	板目	上部に孔あり。
63	棒状木製品		14D16	SE2013	4	36.2	1.5	1.1	柾目	上下端部付近の断面は角状。
64	用途不明木製品		14D16	SE2013	7	19.9	4.5	1.4	柾目	
65	用途不明木製品		14D16	SE2013	7	21.2	2.5	1.5	板目	
66	用途不明木製品		14D16	SE2013	4	26.6	3.8	3.1	柾目	
67	用途不明木製品		14A10	P2029	3	23.7	1.1	0.7	柾目	
68	部材		15B11		Ⅲa	14.3	1.3	1.4	板目	上部の側面と角をV字状に削込む。
69	箸	ヒノキ	14C8		Ⅲa	15.4	0.7	0.5	板目	上部は欠損。
70	柱根	クリ		P2051		26.9	9.6	6.5	分割材	

石製品

番号	器種	出土地点			法量（cm）			重量（g）	石材	備考
		グリッド	遺構	層位	長	幅	厚			
71	礫石	14D16	SE2013	6	11.5	6.1	1.9	341.2	砂岩	両面・両側面に礫面あり。
72	礫石	14D14		Ⅲa	16.8	6.1	4.3	702.3	砂岩	礫面は正面のみ。ラミナに沿って割れている。

土製品

番号	器種	出土地点			法量（cm）			重量（g）	遺存状況	備考
		グリッド	遺構	層位	長	幅	厚			
73	平瓦	14C9		Ⅲa	8.7	5.9	2.2	129.6	破片	表面に布目痕が残る。

金属製品

番号	器種	出土地点			法量（cm）			重量（g）	遺存状況	備考
		グリッド	遺構	層位	長	幅	厚			
74	刀子	14D16	SE2013	8	8.7	1.0	0.3	5.7	刃部欠損	刃部は 2.3cm 残存。
75	鎌	14D16	SE2013	7	17.7	3.1	0.2	29.6	両端部欠損	
76	不明鉄製品	14B7		Ⅲa	4.9	5.6	1.7	40.5		折により 2 枚の板を留めている。

下割遺跡Ⅳ　遺構観察表

古代

掘立柱建物（SB）

遺構番号	位置	方位		間数（桁行×梁行）	面積（nf）	規模（桁行×梁行）（m）		
SB230	36R	N-57°-W		2 間×2 間	14.4	4.0×3.6		
	柱穴	柱痕	平面形	断面形	規模（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱穴間隔（cm）
	P225	有	円形	半円状	33×37	39	12.69	P225-P229　403
	P229	有	円形	U字状	25×22	23	12.75	P229-P226　180
	P226	有	円形	半円状	42×38	74	12.70	P226-P279　180
	P279	有	円形	U字状	35×29	67	12.72	P279-P278　203
	P278	有	円形	U字状	27×26	41	12.75	P278-P276　192
	P276	有	楕円形	U字状	35×27	64	12.57	P276-P227　170
	P227	無	円形	不整形	34×32	40	12.64	P227-P225　190
遺構番号	位置	方位		間数（桁行×梁行）	面積（nf）	規模（桁行×梁行）（m）		
SB270	32Q	N-62°-W		2 間×（3 間）	（21.5）	（5.7）×3.8		
	柱穴	柱痕	平面形	断面形	規模（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱穴間隔（cm）
	P267	無	楕円形	U字状	18×15	17	13.05	P267-P261　221
	P261	有	円形	台形状	37×34	19	13.08	P261-P265　173
	P265	有	円形	台形状	33×32	25	12.99	P265-P263　204
	P263	無	円形	U字状	25×25	19	13.03	P263-P281　210
	P281	有	円形	不整形	53×50	49	12.79	P281-P282　360
	P282	有	楕円形	U字状	38×31	63	12.70	
	P266	有	楕円形	弧状	43×53	12	13.11	P267-P266　172
								P266-P281　213
遺構番号	位置	方位		間数（桁行×梁行）	面積（nf）	規模（桁行×梁行）（m）		
SB315	33P、34O・P	N-48°-W		2 間×2 間	18.8	4.6×4.1		
	柱穴	柱痕	平面形	断面形	規模（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱穴間隔（cm）
	P308		楕円形	弧状	40×29	12	13.13	P308-P313　146
	P313	有	楕円形	U字状	44×31	80	13.15	P313-P310　299
	P310	有	円形	U字状	41×38	61	12.67	P310-P305　221
	P305	無	円形	弧状	48×43	19	12.98	P305-P286　186
	P286	有	円形	U字状	20×19	74	12.47	P286-P311　293
	P311	有	円形	U字状	43×40	76	12.41	P311-P312　177
	P312	有	円形	U字状	25×22	39	12.66	P312-P308　416
遺構番号	位置	方位		間数（桁行×梁行）	面積（nf）	規模（桁行×梁行）（m）		
SB339	32O・P、33O・P	N-42°-W		2 間×2 間	14.3	3.6×4.0		
	柱穴	柱痕	平面形	断面形	規模（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱穴間隔（cm）
	P298	有	円形	台形状	55×50	42	12.81	P298-P296　176
	P296	無	楕円形	半円状	65×55	38	12.91	P296-P295　201
	P295	無	楕円形	台形状	71×57	37	12.91	P295-P294　198
	P294	無	隅丸方形	台形状	57×56	40	12.93	P294-P297　164
	P297	無	隅丸方形	台形状	54×55	33	12.91	P297-P334　167
	P334	有	円形	箱状	55×53	54	12.76	P334-P336　174
	P336	有	隅丸方形	箱状	53×50	48	12.78	P336-P298　432

土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）
SK202	33Q25・33R5	長楕円形	皿状	130	31	10	13.24
SK203	33Q9	長楕円形	皿状	80	31	5	13.16
SK204	33Q3	長楕円形	皿状	92	29	9	13.17
SK210	34P18	隅丸長方形	皿状	91	49	7	13.19
SK211	34P18・23	不整形	皿状	85	65	6	13.18
SK213	34Q2・3・7・8	不整形	皿状	174	78	11	13.15
SK216	33P22・23、33Q2・3	不整形	皿状	116	107	13	13.06
SK218	32Q25、33Q21	不整形	弧状	197	77	20	12.99
SK228	36S3・8	楕円形	弧状	97	84	38	12.78
SK231	35R25	不整形	皿状	148	68	8	13.09
SK232	36S2	楕円形	台形状	102	53 以上	58	12.54

遺構番号	位置	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)
SK237	35R20、36R11・16	不整形	皿状	245	146	21	12.86
SK238	36S6	楕円形	皿状	76	52以上	11	13.07
SK240	35R7・12	楕円形	皿状	127	82	8	13.13
SK241	34Q13・18	不整形	台形状	114	96	30	12.82
SK243	35R6・11	不整形	皿状	121以上	119	26	13.16
SK245	34R5・10、35R1・6	楕円形	弧状	202	128	20	13.10
SK246	35R1・2、6・7	不整形	台形状	136	102	26	13.07
SK250	31Q19	楕円形	弧状	87	69	12	13.26
SK253	37Q17・18・22・23	不整形	弧状	156	89	29	12.85
SK254	35Q15・20、36Q7・11～13・16・17・22	不整形	皿状	426	367	25	12.90
SK259	35Q5・10	楕円形	弧状	118	70	27	12.87
SK274	36S7	楕円形	台形状	79以上	72	49	12.54
SK280	36R20、37R16	長楕円形	皿状	100	44	24	12.94
SK291	32Q11・12・16・17	隅丸長方形	弧状	301	142	14	13.17
SK292	31Q4・5・9・10	楕円形	弧状	206	130	24	13.13
SK321	36S4・9	楕円形	半円状	81	57	30	12.67
SK322	36R14・19	楕円形	台形状	79	68	30	12.74
SK323	36R17	円形	半円状	73	67	34	12.69
SK324	36S15	楕円形	弧状	119	33以上	20	13.02
SK325	30Q4・5・9・10、31Q1・6、	隅丸方形	皿状	300	274	19	13.10
SK326	30P25、30Q5、31P21・22、31Q1・2	不整形	弧状	354	191以上	37	12.91
SK328	30Q10・15	楕円形	半円状	135	90	56	12.79
SK335	31O25、31P5、32P1	円形	台形状	65	51	51	12.76
SK343	31O19・20・23～25、31P3	不整形	弧状	468	204	24	13.07
SK344	31P7・8・12・13	隅丸長方形	弧状	235	125	40	12.94

溝（SD）

遺構番号	位置	断面形	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	方位	底面標高(m)	備 考
SD205	33Q14・19	弧状	2.5	58	8	N-35°-W	13.08	
SD212	34P23、34Q2・3	弧状	2.3	42	8	N-63°-W	13.17	
SD214	34Q22、34R1・2	弧状	3.4	57	10	N-40°-W	13.10	
SD221	37S6・7	半円状	2.2以上	42	28	N-81°-E	12.89	
SD222	36R・S、37Q・R・S	弧状	14以上	339	60	S-32～57°-E	12.41	
SD249	31・32Q	弧状	9.8以上	83	9	N-33～69°-W	13.25	
SD260	31P13	弧状	0.9	28	10	N-64°-E	13.25	
SD289	32・33P	弧状	8.1以上	25	7	N-77～92°-W	13.10	
SD301	32P9・10・15	弧状	3.5	29	7	N-69～43°-E	13.11	
SD331	32O・P、33O	弧状	20.2	78	15	N-45～47°-W	13.01	
SD327	20M19・24、20N4・9	弧状	6.6	59	26	N-2°-W	13.43	
SD332	32P6・7・11・12	弧状	2.5	74	7	N-53～94°-E	13.22	SD331と合流
SD333	32O・P	弧状	8.1以上	112	17	N-45°-W	13.11	SD331と合流
SD337	32P7	半円状	1.7	42	32	N-62°-W	12.96	

杭列（SA）

遺構番号	位置	方位		柱穴数	全長（m）			
	32Q	N-45°-E		3	4.4			
	柱穴	柱痕	平面形	断面形	直径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱穴間隔（cm）
SA269	P220	無	円形	U字状	16	11	13.10	P220-P219　210
	P219	無	円形	U字状	15	10	13.15	P219-P264　230
	P264	無	円形	U字状	20	10	13.07	

性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)
SX255	37Q13・14・18・19・22	不整形	皿状	447	180	18	12.98
SX257	36P6	楕円形	不整形	69	56	13	13.12
SX287	33Q・R	不整形	皿状	750	216	28	12.93
SX290	33P・33	不整形	皿状	469	192	15	13.03

中世～近世初期

水田区画（区画）

遺構名	グリッド	平面形	面積（㎡）
区画①	36～38O	（方形／長方形）	42以上
区画②	36O	（方形／長方形）	4以上
区画③	33～35O・P	（長方形）	209以上
区画④	31～33N・O・P	長方形	290
区画⑤	32～33P・Q	（長方形）	（126）
区画⑥	28～29L・M	（方形／長方形）	55以上
区画⑦	28～29N・O	（方形／長方形）	169以上
区画⑧	28～29O・P	（方形）	103以上
区画⑨	27M・N	（方形／長方形）	7以上
区画⑩	27～28N・O	（方形）	（102）
区画⑪	27～28O・P	（方形）	（110）
区画⑫	26M	（方形／長方形）	7以上
区画⑬	26～27M・N・O	長方形	123
区画⑭	26～27O・P	方形	103以上
区画⑮	25～26M・N・O	長方形	87以上
区画⑯	24～25M	（方形／長方形）	35以上
区画⑰	24～25M・N	長方形	91
区画⑱	24～26N・O・P	（方形／長方形）	145以上
区画⑲	23～24M・N	（方形／長方形）	76以上
区画⑳	23～24N・O	（方形／長方形）	66以上
区画㉑	22～23M・N	（方形／長方形）	44以上
区画㉒	22～23N・O	（方形／長方形）	34以上
区画㉓	20～22M・N	（方形／長方形）	20以上
区画㉔	20～22M・N	（方形／長方形）	11以上
区画㉕	19～21M・N	（方形／長方形）	52以上
区画㉖	19M・N	（方形／長方形）	4以上

畦畔（畦畔）

遺構名	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下端幅（m）	上端幅（m）	高さ（m）	切り合い関係
畦畔 6	27N・O	台形	N-3° -W	12.05	(0.92)	0.57	(0.06)	
畦畔 7	26N・O	台形	N-1° -E	8.35	(0.86)	0.38	(0.05)	
畦畔 8	26M	—	N-77° -W	4.08	—	0.53	—	
畦畔 9	27N	—	N-84° -W	5.61	—	0.49	—	
畦畔 18	28 ～ 29M	台形	N-85° -W	10.20	0.66	0.40	0.07	
畦畔 21	21 ～ 22N、22 ～ 23M	台形	湾曲（N-63° -W）	26.12	—	1.86	—	
畦畔 22	23M	台形	N-55° -E	1.85	0.74	0.37	(0.08)	
畦畔 24	24M・N	台形	N-28° -E	6.22	(0.80)	0.52	(0.03)	
畦畔 25	24M	台形	N-72° -W	1.51	(0.74)	0.52	(0.03)	
畦畔 26	24M	台形	蛇行（N-29° -E）	3.51	(0.65)	0.42	(0.03)	
畦畔 27	24M	台形	N-50° -W	1.50	0.44	0.33	0.04	
畦畔 28	24 ～ 25M	台形	蛇行（N-43 ～ 82° -W）	3.69	(0.54)	0.32	(0.04)	
畦畔 29	25M・N	台形	N-8° -E	14.28	1.12	0.96	0.03	
畦畔 30	25M	台形	N-2° -W	4.09	(1.91)	1.54	(0.04)	
畦畔 35	24 ～ 25N	台形	N-70° -E	5.32	(0.68)	0.36	(0.04)	
畦畔 44	21 ～ 22M・N	—	N-75° -W	8.54	—	1.04	—	
畦畔 46	21N	台形	N-84° -W	2.51	0.58	0.42	0.08	
畦畔 48	22M	台形	N-79° -W	2.75	0.98	0.73	0.11	
畦畔 49	31 ～ 32N、31O	台形	N-13° -W	12.20	0.84	0.64	0.03	＜SD114
畦畔 51	24N	台形	蛇行（N-79° -E、N-87° -W）	6.81	(0.82)	0.52	(0.07)	
畦畔 52	24O	台形	N-2° -E	5.65	(0.86)	0.65	(0.14)	
畦畔 54	24N・O	台形	N-6° -E	3.25	0.94	0.35	0.16	
畦畔 55	24N	台形	屈曲（N-80° -E、N-4° -W）	5.85	(1.40)	0.68	(0.08)	
畦畔 56	23N	—	N-86° -E	1.86	—	0.90	—	
畦畔 57	25 ～ 26N、26O	台形	N-8° -E	11.08	(0.84)	0.68	(0.16)	
畦畔 58	26・27O	台形	N-86° -W	7.18	(0.59)	0.22	(0.06)	
畦畔 59	26・27P	台形	N-88° -E	3.94	(0.59)	0.38	(0.12)	
畦畔 60	27O・P	台形	N-2° -E	8.89	0.46	0.22	0.05	
畦畔 62	31P	台形	N-59° -W	2.07	0.92	0.60	0.09	
畦畔 74	27 ～ 28P	台形	蛇行（N-79 ～ 87° -W）	8.51	0.91	0.72	0.08	＜SD71
畦畔 75	27 ～ 28P	台形	N-88° -W	5.43	0.86	0.62	0.05	
畦畔 76	28O・P	台形	N-6° -W	4.28	1.20	1.00	0.03	
畦畔 77	33 ～ 34O・P	台形	N-4° -E	10.47	0.68	0.48	0.06	
畦畔 78	32 ～ 33N	台形	N-78° -W	5.02	0.88	0.66	0.06	
畦畔 79	32N	台形	N-13° -E	3.62	(0.86)	0.67	(0.06)	
畦畔 80	32 ～ 33O	台形	N-88° -W	6.01	0.58	0.37	0.06	
畦畔 81	28O	台形	N-85° -E	4.42	0.72	0.52	0.06	
畦畔 82	29O	台形	N-76° -E	2.63	0.82	0.76	0.03	
畦畔 83	29N・O	台形	N-2° -W	12.33	0.58	0.45	0.06	
畦畔 84	28N・O	台形	N-3° -W	8.29	0.75	0.54	0.04	
畦畔 91	33N・O	台形	N-4° -E	6.78	(0.75)	0.59	(0.03)	
畦畔 92	34 ～ 35O	台形	N-78° -E	2.67	0.72	0.50	0.07	
畦畔 93	34O	—	N-16° -W	2.02	—	0.21	—	
畦畔 94	34O	台形	N-67° -E	2.65	(0.95)	0.35	(0.08)	
畦畔 95	33 ～ 34O	—	N-71° -E	4.45	0.96	0.63	0.09	
畦畔 96	34 ～ 35O	台形	N-77° -E	6.20	1.14	0.92	0.07	
畦畔 97	33 ～ 34N、34O	台形	N-75° -E	11.32	(1.20)	0.86	(0.04)	
畦畔 98	34O	台形	蛇行（N-22° -E）	2.52	(0.54)	0.36	(0.04)	
畦畔 99	34O	台形	N-3° -E	1.22	0.76	0.50	0.08	
畦畔 100	35O	台形	N-8° -E	5.37	1.26	0.97	0.06	
畦畔 102	32 ～ 33Q	台形	N-88° -W	14.95	0.68	0.42	0.02	
畦畔 103	33P	台形	N-88° -W	5.94	0.57	0.38	0.06	
畦畔 104	31 ～ 32P・Q	台形	N-7° -E	7.11	1.06	0.85	0.02	
畦畔 117	30 ～ 31M・N	台形	N-72° -E	3.69	(1.60)	0.86	(0.21)	
畦畔 118	30N	台形	N-76° -E	6.65	—	0.43	—	
畦畔 130	32P	—	N-87° -W	5.69	—	0.50	—	
畦畔 151	34O	台形	湾曲（N-68° -E）	2.13	(0.97)	0.68	(0.12)	
畦畔 152	34O	台形	蛇行（N-71-E）	4.75	0.63	0.41	0.05	
畦畔 153	34 ～ 35P	台形	N-72° -W	4.03	(1.25)	0.97	(0.12)	
畦畔 154	34O	台形	N-66° -E）	2.88	0.63	0.46	0.07	
畦畔 155	34 ～ 35P	台形	N-68° -W	3.52	0.83	0.72	0.06	
畦畔 158	19M・N	台形	N-5° -E	2.54	1.42	1.21	0.08	
畦畔 161	36O	台形	N-11° -W	4.42	1.51	1.38	0.06	
畦畔 162	36 ～ 38O	—	N-82° -E	2.68	1.04	0.96	0.01	
畦畔 163	37O・P	—	N-3° -E	6.50	0.92	0.56	0.02	
畦畔 164	36O・P	—	N-77° -E	3.91	0.82	0.50	0.15	
畦畔 166	36 ～ 37Q	—	N-77° -E	9.62	0.78	0.48	0.03	
畦畔 167	36P・Q	台形	N-75° -E	6.11	1.16	0.67	0.12	
畦畔 168	35 ～ 36P	—	N-75° -W	2.03	0.85	0.75	0.11	
畦畔 170	35 ～ 36Q	台形	N-78° -W	2.23	0.74	0.63	0.08	
畦畔 171	35 ～ 36Q	台形	N-88° -E	5.04	0.82	0.58	0.05	
畦畔 172	36 ～ 37Q	台形	N-76° -E	7.63	1.34	1.24	0.06	
畦畔 174	36 ～ 37R	台形	N-72° -E	4.36	1.05	0.82	0.10	
畦畔 175	36R	台形	N-76° -E	5.37	—	0.61	—	

遺構名	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	下端幅（m）	上端幅（m）	高さ（m）	切り合い関係
畦畔 176	35 ～ 36R	—	N-58°-E	2.03	—	1.17	—	
畦畔 179	35Q・R	台形	蛇行（N-8°-E）	5.85	1.13	0.98	0.14	
畦畔 180	35 ～ 36R・S	台形	N-24°-E	4.58	1.63	1.36	0.06	
畦畔 182	34P	—	N-85°-W	2.68	—	0.61	—	
畦畔 183	32P	—	N-16°-W	1.89	—	0.26	—	
畦畔 184	28L・M	台形	N-2°-E	8.32	0.78	0.62	0.05	
畦畔 185	28 ～ 29L・M	台形	N-6°-W	4.87	1.30	0.78	0.06	
畦畔 186	26M・N	台形	N-6°-W	8.63	—	1.48	—	
畦畔 187	26N・O	—	N-76°-E	2.62	—	0.32	—	
畦畔 188	24N	—	N-2°-E	3.17	—	0.85	—	
畦畔 189	22 ～ 23N	—	N-80°-W	4.39	—	0.77	—	
畦畔 190	22N・O	—	N-8°-E	4.21	—	0.90	—	
畦畔 191	22 ～ 23N	—	湾曲（N-85°-E）	5.63	—	0.58	—	
畦畔 192	22M	—	N-10°-E	5.25	—	0.89	—	
畦畔 193	21N	—	N-80°-W	3.55	—	0.48	—	
畦畔 194	20 ～ 21M・N	台形	N-5°-E	8.08	1.83	1.74	0.04	
畦畔 195	23M・N・O	—	N-6°-W	13.52	—	2.03	—	
畦畔 196	32O	—	湾曲（N-11 ～ 48°-W）	5.88	—	0.66	—	
畦畔 197	32 ～ 33N	—	N-71°-E	15.62	—	2.06	0.03	＜SD114

溝（SD）

遺構名	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）
SD5	35 ～ 36Q	弧状	N-86°-W	5.32	0.78	0.23
SD11	36 ～ 38O	弧状	屈曲（N-84°-E、N-9°-W）	22.13	0.80	0.08
SD12	35 ～ 36P	弧状	N-89°-W	2.97	0.80	0.08
SD13	36P	半円状	N-88°-E	3.41	1.08	0.28
SD14	36P・Q	半円状	N-86°-W	2.65	1.20	0.28
SD19	26L・M	弧状	N-31°-W	4.31	0.90	0.12
SD20	26L・M	弧状	N-24°-W	3.33	1.08	0.07
SD31	24M	弧状	N-21°-E	2.94	0.56	0.07
SD32	24M	弧状	N-19°-E	2.05	0.57	0.10
SD33	25M	弧状	屈曲（N-2°-E、N-71°-W）	3.10	1.14	0.09
SD34	25M	弧状	N-9°-E	5.09	1.06	0.06
SD41	19M	弧状	N-4°-E	1.88	1.22	0.16
SD42	21M・N	弧状	N-2°-W	3.88	1.58	0.23
SD43	21M・N、20N	弧状	N-80°-W	8.82	0.82	0.12
SD53	23M・N・O	弧状	N-4°-W	18.36	0.39	0.08
SD165	36O	-	N-78°-E	2.69	0.78	0.14
SD169	35Q	-	N-84°-W	8.56	0.91	0.16
SD173	36 ～ 37R	-	N-72°-E	1.18	1.54	0.18
SD177	35 ～ 37R	-	N-71°-E	11.60	1.38	0.16
SD178	35 ～ 36R	-	N-25°-E	5.59	0.94	0.19
SD181	35R	-	N-25°-E	5.52	1.08	0.29

近世初期以降

土坑（SK）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	方向	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	切り合い関係
SK63	30O14・15	長楕円形	半円状	N-45°-E	1.31	0.53	0.16	
SK156	31O7	長楕円形	半円状	N-15°-E	1.04	0.71	0.27	

溝（SD）

遺構名	グリッド	断面形	方向	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	切り合い関係
SD65	31P・Q	弧状	N-32°-E	5.53	1.32	0.14	
SD67	31P・Q	弧状	蛇行（N-25°-E）	8.33	0.82	0.24	
SD69	30 ～ 31P・31Q	弧状	蛇行（N-26°-E）	12.71	0.74	0.13	
SD71	28 ～ 29P、29Q	半円状	N-55°-E	12.62	0.62	0.34	＞畦畔 74
SD73	28 ～ 29P、29Q	半円状	湾曲（N-47 ～ 60°-E）	12.46	0.58	0.17	
SD88	29P・Q	弧状	N-18°-E	4.71	0.62	0.15	
SD89	29P・Q、30Q	弧状	湾曲（N-29 ～ 45°-E）	11.73	0.73	0.20	
SD90	29P・Q	半円状	N-32°-E	4.55	0.73	0.28	
SD101	30P	半円状	N-71°-W	6.72	0.89	0.33	
SD111	31N・O	半円状	N-15°-W	7.17	1.74	0.22	
SD112	30 ～ 31O、31N	半円状	湾曲（N-16 ～ 44°-W）	10.65	0.74	0.19	
SD114	31 ～ 32N	弧状	N-35°-W	3.72	0.19	0.09	＞畦畔 49・197
SD115	31O	弧状	N-41°-W	3.27	0.90	0.06	
SD116	31N・O	弧状	N-13°-W	6.45	0.80	0.12	
SD121	30P	半円状	N-20°-E	2.07	0.56	0.32	
SD122	30N・O	半円状	N-33°-E	6.02	0.70	0.34	
SD124	30O	半円状	N-32°-E	5.33	1.13	0.26	
SD126	30O・P、31P	弧状	N-39°-E	11.80	0.56	0.12	
SD128	30O・P	不整形	N-34°-E	9.72	1.07	0.07	
SD132	30N・O、31O・P	半円状	N-5°-E	11.36	1.13	0.37	
SD138	30P	弧状	N-42°-E	7.24	0.90	0.21	
SD157	30P・Q	弧状	N-73°-W	4.47	1.27	0.18	

下割遺跡Ⅳ　遺物観察表

土器

法量―（ ）：推定値　　切り離し―ヘラ：回転ヘラ切り、糸：回転糸切り
胎土の混入物―砂：砂粒、白：白色粒子、赤：赤色粒子、雲：雲母、長：長石、英：石英

番号	種類	器種	出土地点		法量（cm）				色調				切り離し	胎土の混入物	備考
			グリッド	遺構	層	口径	底径	器高		内面	外面	底面			
1	土師器	長胴 B2	31P5	SB339 P295	1	26.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			赤・砂	
2	須恵器	有台杯 I	33Q3	SK216	3	16.7			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白・砂	
3	土師器	小甕 B1	33Q3	SK216	3	15.0			黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
4	土師器	小甕	33Q21	SK218	2	16.0			浅黄橙					赤・砂	
5	須恵器	杯蓋 II	36R16	SK237	1	16.0		2.7	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	転用硯
6	須恵器	杯蓋 II	36R16	SK237	2	15.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	
7	土師器	長甕 A	35R20	SK237	3			6.8	暗褐					雲・砂	底面木葉痕
8	土師器	長胴 B1	36R16	SK237	2	22.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ・カキメ・タタキメ			雲・砂	
9	土師器	長甕 A1	35R20	SK237	3	21.0			にぶい橙		ヘラケズリ			砂	
10	土師器	長胴 B1	36S6	SK238	1	24.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
11	土師器	長胴 B2	34Q18	SK241		26.0			灰黄褐		ロクロナデ・カキメ			雲・砂	
12	土師器	長甕 A1	35R11	SK243	1	23.0			にぶい黄橙		ヘラケズリ			砂	
13	土師器	長甕 A1	35R11	SK243	1	22.6			にぶい黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ			雲・砂	
14	土師器	長胴 B2	35R11	SK243	1	22.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤・砂	
15	土師器	甕	35R11	SK243	1	18.0			にぶい黄橙		ハケメ			雲・赤・砂	
16	土師器	長甕 A	35R11	SK243	1		11.8		浅黄橙		ヘラケズリ			砂	
17	須恵器	有台杯 II	35R1	SK245	1	14.7	10.0	4.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	
18	土師器	長胴 B2	35R1	SK245	1	25.0			にぶい黄	ロクロナデ・ハケメ	ロクロナデ・カキメ・ハケメ			雲・赤・砂	
19	土師器	長胴 B2	35R1	SK245	1	26.0			にぶい黄橙	カキメ・ロクロナデ・ハケメ	ロクロナデ・カキメ・タタキメ			雲・砂	
20	土師器	長胴 B2	35R1	SK245	1	22.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ・タタキメ			雲・砂	
21	須恵器	杯蓋 II	37Q17	SK253	1	15.4			灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	天井部漆
22	土師器	鉢	37Q17	SK253	1	10.0			にぶい黄橙	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラケズリ			雲・砂	
23	土師器	長胴 B1	37Q17	SK253	1	24.0			浅黄橙	カキメ・ヘラケズリ	ロクロナデ・カキメ・ハケメ			雲・赤・砂	
24	土師器	長胴 B2	37Q17	SK253	1	24.0			浅黄橙	カキメ	ロクロナデ			雲・砂	
25	土師器	小甕 B1	37Q17	SK253	1	14.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
26	土師器	小甕 B2	37Q17	SK253	1	14.0			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
27	須恵器	小型壺	37Q17	SK253	1				灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白・砂	
28	須恵器	杯蓋 II	36Q12	SK254	2	15.4			灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			長・砂	
29	須恵器	杯蓋 II	36Q8・18・12	SK254	2				灰白	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			長	
30	土師器	長胴 B1	36Q12	SK254	3	24.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・砂	
31	土師器	小甕 B1	36Q8	SK254	3	14.0			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
32	土師器	鍋 A2	36Q13	SK254	3	32.0			にぶい黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ			雲・砂	
33	須恵器	無台杯 I	32Q16	SK291	1	13.9	8.2	5.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・雲・砂	
34	須恵器	有台杯 II	32Q16	SK291	1	13.8	9.0	4.6	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
35	須恵器	有台杯 II	32Q12	SK291	1	13.2	9.0	4.8	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
36	土師器	長胴 B1	32Q16	SK291	1	26.0			にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			砂	
37	須恵器	杯蓋 II	30Q5	SK325	4	14.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			英・砂	外面自然釉
38	土師器	長甕	30Q5	SK325	2	23.0			にぶい黄橙					雲・砂	
39	土師器	小甕 B1	30Q10	SK325	4	17.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
40	土師器	小甕 B1	30Q5	SK325	4	16.0			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
41	土師器	小甕 A1	30Q5	SK325	2	13.0			灰黄褐	ヤデ				雲・砂	
42	須恵器	長胴短頸壺	30Q5・10	SK325	4	11.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ・カキメ			長・砂	外面自然釉
43	須恵器	有台杯 II	31Q1	SK326	5	11.8	8.2	3.5	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ		白・砂	
44	須恵器	杯蓋 II	30Q5	SK326	2	14.4		2.8	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	転用硯、外面自然釉
45	土師器	長胴 B2	30P25	SK326	4	26.0			灰黄褐	カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・砂	
46	土師器	長胴 B2	31Q1	SK326	3	26.0			浅黄橙	カキメ	ロクロナデ			雲・砂	
47	土師器	長胴 B2	31P21	SK326	4	26.0			にぶい橙	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤・砂	
48	土師器	長甕	31Q1	SK326	4				にぶい黄橙	ハケメ	ヘラケズリ			雲・赤・砂	
49	土師器	小甕 A1	31P21	SK326	4	16.0			褐灰	ナデ・ハケメ				英・砂	
50	土師器	小甕 A1	31Q1	SK326	1	12.0			灰黄褐		ナデ・ハケメ			雲・砂	
51	土師器	小甕 B2	30Q5、31P21	SK326	2	16.0			灰黄褐	カキメ・ハケメ・ヘラケズリ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤・砂	
52	土師器	小甕 B1	31P21	SK326	2	14.0			にぶい黄橙	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤・砂	
53	土師器	小甕 B1	31P21	SK326	4	14.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ・カキメ			雲・砂	
54	土師器	小甕 B1	31Q1	SK326	2	15.0			浅黄	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤・砂	
55	土師器	小甕 B1	31Q1	SK326	2	14.0			にぶい黄橙					赤・砂	
56	土師器	小甕 B1	31P21	SK326	4	13.0			にぶい黄橙		ロクロナデ			雲・赤・砂	
57	須恵器	長胴短頸壺	30Q5、31Q1	SK326	2	13.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ・タタキメ			白	内外面自然釉
58	須恵器	無台杯	30Q10	SK328	5	14.4			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	
59	須恵器	有台杯	30Q10	SK328	2		4.5		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
60	土師器	甑	30Q10	SK328	3	34.0			浅黄橙					雲・赤・砂	
61	須恵器	無台杯 II	31Q24	SK343	2	(12.8)	8.0	(3.5)	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	英・長	
62	土師器	小甕 B	31P7	SK344	2		9.4		にぶい橙	ヘラケズリ	ヘラケズリ			赤・砂	
63	土師器	鍋 A1	34R2	SD214	1	33.0			にぶい黄橙	ヤデ	ハケメ・ヘラケズリ			雲・砂	

番号	種類	器種	出土地点			法量（cm）			色調	調整			切り離し	胎土の混入物	備考
			グリッド	遺構	層	口径	底径	器高		内面	外面	底面			
64	須恵器	無台杯Ⅱ	36S9	SD222	2	13.5	9.2	4.0	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	
65	須恵器	無台杯Ⅱ	37R17	SD222	1	13.2	8.3	3.4	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	内面漆、底面ヘラ記号
66	須恵器	無台杯Ⅱ	36S8	SD222	2	13.6	9.8	3.8	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	雲・白	
67	須恵器	無台杯Ⅱ	37R12	SD222	1	13.4	9.6	3.5	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	砂	
68	須恵器	無台杯Ⅱ	36S9	SD222	2	12.8	7.2	4.2	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	
69	須恵器	無台杯Ⅱ	36S3・9	SD222	2	12.6	8.7	3.0	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	雲・砂	
70	須恵器	無台杯Ⅲ	36S8	SD222	1	11.8	10.0	3.3	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			長・砂	
71	須恵器	無台杯Ⅱ	36S9	SD222	2	13.0	9.1	3.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	小泊窯産
72	須恵器	無台杯Ⅲ	37R17	SD222	1	11.6	7.8	3.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	小泊窯産
73	須恵器	無台杯	37R21	SD222	2	12.4			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	小泊窯産
74	須恵器	無台杯Ⅱ	37R22	SD222	2	12.8	6.9	3.2	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	長・砂	
75	須恵器	無台杯	37S1	SD222	1		6.6		灰	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	長・砂	
76	須恵器	有台杯Ⅱ	36S10	SD222	1	14.0	10.4	4.4	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
77	須恵器	有台杯Ⅱ	36S9	SD222	2	13.8	8.8	4.2	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	
78	須恵器	有台杯Ⅲ	37R17	SD222	1	11.8	7.6	3.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	
79	須恵器	杯蓋Ⅱ	36S10	SD222	2	14.3		3.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	天井部墨書
80	須恵器	杯蓋Ⅱ	36S9	SD222	2	15.4			灰白	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			雲・砂	
81	須恵器	杯蓋Ⅲ	36S10	SD222	2	12.2		3.0	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	小泊窯産
82	土師器	無台椀Ⅰ	37R12・17	SD222	2	14.5	6.3	4.7	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	外面タール
83	土師器	無台椀Ⅰ	37Q14・24	SD222	3	14.3	5.5	5.0	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
84	土師器	無台椀Ⅱ	36S5・10	SD222	2	12.8	6.0	4.6	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
85	土師器	無台椀Ⅱ	36S10	SD222	2	12.5	5.1	4.4	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
86	土師器	無台椀Ⅱ	37Q18・19	SD222	3	12.0	5.2	4.3	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
87	土師器	無台椀Ⅲ	36S9	SD222	2	13.0	5.6	3.6	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
88	土師器	無台椀Ⅲ	36S5・10	SD222	2	12.7	5.3	3.7	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
89	土師器	無台椀Ⅲ	36S9	SD222	2	12.6	4.9	3.8	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
90	土師器	無台椀Ⅲ	36S5・10	SD222	2	12.5	6.0	4.0	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	砂	
91	土師器	無台椀Ⅲ	36S5・10	SD222	2	12.5	5.7	3.7	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
92	土師器	無台椀Ⅲ	36S9	SD222	2	12.2	5.0	3.5	黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・砂	内面タール
93	土師器	無台椀Ⅲ	37R8・13・17	SD222	2	11.8	5.0	3.8	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
94	土師器	無台椀	37R17	SD222	2	15.9			にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
95	土師器	無台椀	37R16	SD222	2	14.0			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤	
96	土師器	無台椀	36S10、37S10	SD222	2	13.4			にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
97	土師器	無台椀	37R17	SD222	2	12.0			淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤	
98	土師器	無台椀	37R12	SD222	2		6.0		浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
99	土師器	無台椀	36S10	SD222	2		5.7		橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	
100	黒色土器	無台椀	36S9	SD222	2	14.0	6.0	4.5	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・赤・砂	外面タール
101	黒色土器	無台椀	37R8	SD222	2		5.1		浅黄橙	ミガキ	ロクロケズリ	ロクロケズリ	糸	雲・砂	
102	土師器	高杯	37R21	SD222	2				にぶい黄橙	ナデ	ミガキ			雲・赤・砂	
103	土師器	脚台	36S9	SD222	2				にぶい黄橙					雲・砂	
104	灰釉陶器	椀	36S9	SD222	1	16.0			灰					白	
105	灰釉陶器	皿	37R12	SD222	2	15.0			灰白					白	
106	灰釉陶器	椀	37R3	SD222	2	7.0			灰白					白	
107	土師器	長甕A1	36S5・9	SD222	2	21.0			浅黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ			雲・砂	
108	土師器	長甕A1	36S9	SD222	2	18.0			浅黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ			雲・赤・砂	
109	土師器	長甕A	37R1	SD222	1		11.0		浅黄橙	ハケメ	ヘラケズリ			雲・砂	
110	土師器	長甕A	36S5	SD222	2		8.4		浅黄橙	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ		雲・砂	
111	土師器	長甕B2	37R17・21	SD222	2	22.0		32.3	黒	ロクロナデ・当て具痕・ハケメ	ロクロナデ・タタキメ	タタキメ		雲・砂	
112	土師器	小甕A1	37R17	SD222	2	17.0			浅黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ			雲・赤・砂	
113	土師器	小甕A1	36S10	SD222	2	16.0			浅黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ			砂	
114	土師器	小甕A1	37S1	SD222	2	13.0			浅黄	ナデ	ナデ・ヘラケズリ			雲・砂	
115	土師器	小甕B2	36S5・9・10	SD222	2	15.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・砂	
116	土師器	小甕B2	36S9・10	SD222	2	11.0			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			砂	
117	土師器	小甕A	37R7	SD222	1		8.0		浅黄橙	ハケメ	ヘラケズリ			雲・砂	
118	土師器	小甕B1	37R3	SD222	2	14.0			にぶい黄橙					雲・砂	
119	土師器	小甕B1	36S9	SD222	2	14.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
120	土師器	小甕B2	36S5・9	SD222	2	12.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
121	土師器	小甕B1	37R17	SD222	1	12.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
122	土師器	鍋B2	37R8	SD222	2	42.0			にぶい黄橙	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤・砂	
123	土師器	鍋B2	37S1	SD222	2	36.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ・カキメ			雲・赤	
124	土師器	鍋B2	36S10	SD222	2	36.0			浅黄橙	ロクロナデ・ハケメ・カキメ	ロクロナデ・ハケメ			雲・赤・砂	
125	須恵器	甕Ⅱ	37R21	SD222	2	26.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	内面自然釉
126	須恵器	長頸瓶	37R8・17	SD222	2	7.2			灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ			白	
127	須恵器	横瓶	36S8・9	SD222	2				灰	ロクロナデ	カキメ・タタキメ			白・砂	内外面自然釉
128	須恵器	長胴短頸壺	36S5・9・10	SD222	2		11.8		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	
129	須恵器	有台杯Ⅲ	32Q1	SD249	1	11.3	7.7	3.6	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
130	須恵器	無台杯Ⅰ	33O12	SD331	1	14.3	7.0	4.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
131	須恵器	有台杯Ⅱ	33O16	SD331	1	14.3	9.6	3.8	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	底面墨書・付着物、転用硯
132	須恵器	有台杯Ⅱ	32P13	SD331	1	13.8	10.0	3.7	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
133	土師器	長甕B1	32O25	SD331	1	25.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
134	土師器	長甕	33O16	SD331	1	20.0			にぶい橙					雲・赤・砂	
135	土師器	小甕B	32P5	SD331	1		6.0		にぶい黄橙	カキメ	ヘラケズリ			雲・砂	
136	須恵器	有台杯Ⅱ	32P12	SD332	1		9.3		灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
137	須恵器	杯蓋Ⅱ	32P12	SD332	1	15.8			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白	
138	土師器	長甕A1	32P12	SD332	1	22.0			にぶい褐	ハケメ				雲・赤・砂	
139	土師器	小甕	32P12	SD332	1	18.0			灰黄褐					雲・赤・砂	

番号	種類	器種	出土地点			法量（cm）			色調	調整			切り離し	胎土の混入物	備考
			グリッド	遺構	層	口径	底径	器高		内面	外面	底面			
140	須恵器	無台杯Ⅱ	32O19	SD333	1	12.3	9.0	3.2	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	
141	須恵器	有台杯Ⅱ	32O19	SD333	1	13.8	9.3	4.4	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	転用硯，外面ヘラ記号
142	土師器	長甕A2	32O19	SD333	1	20.4			にぶい黄橙					砂	
143	須恵器	無台杯Ⅱ	37S2	P224	1	13.6	5.9	4.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		糸	雲・白・砂	
144	土師器	小甕B1	35R20	P236	2	14.0			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
145	土師器	鍋B1	35R18	P239	1	34.0			にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
146	土師器	鉢	36P6	SX257	1	20.0			にぶい黄橙		カキメ			雲・砂	
147	土師器	長甕B2	36P6	SX257	1	20.0			浅黄橙	ロクロナデ				雲・赤・砂	
148	土師器	小甕A	36P6	SX257	1		8.0		浅黄橙	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ		雲・砂	
149	須恵器	長頸瓶	36P6，36O23	SX257	1		12.4		灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ			長・砂	把手付
150	土師器	無台杯	33R1	SX287	3	13.0	9.4	3.4	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
151	須恵器	無台杯Ⅲ	33Q22	SX287	1	11.8	9.0	3.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
152	須恵器	杯蓋Ⅰ	33Q8・9・17	SX287	1	16.4		3.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	
153	須恵器	杯蓋Ⅱ	32Q17・22	SX287	1	15.4		(2.8)	明青灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	天井部墨書
154	土師器	長甕B1	33R1	SX287	2	24.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
155	土師器	鍋B2	33Q16	SX287	2	25.0			浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			砂	
156	須恵器	有台杯Ⅱ	33P21	SX290	1	14.3	8.6	4.2	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
157	土師器	小甕B	33P16	SX290	1		6.0		にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			赤・砂	
158	土師器	長甕A2	33P21	SX290	1	23.0			灰黄	ナデ	ナデ			雲・砂	
159	須恵器	無台杯Ⅱ	35R24		Ⅳ	13.5	7.5	3.6	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
160	須恵器	無台杯Ⅱ	36O22		Ⅴ	13.1	7.8	3.4	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
161	須恵器	無台杯Ⅱ	34O22		Ⅳ	12.6	8.7	3.7	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	雲・砂	
162	須恵器	無台杯Ⅱ	36P1		Ⅴ	12.9	4.9	4.7	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
163	須恵器	無台杯Ⅱ	36S3		Ⅴ	12.9	8.4	4.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	雲・砂	
164	須恵器	有台杯Ⅰ	20D16		Ⅴ	16.2	12.5	6.2	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
165	須恵器	有台杯Ⅰ	36S4		Ⅴ	15.8	10.4	5.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ		白・砂	
166	須恵器	有台杯Ⅰ	32P2		Ⅴ	15.0	9.9	7.4	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ		白・砂	底面ヘラ記号，外面自然釉
167	須恵器	有台杯Ⅰ	36Q6		Ⅴ	15.1	9.0	5.6	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	糸	白・砂	
168	須恵器	有台杯Ⅱ	32Q25		Ⅳ	14.6	9.0	4.4	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	底面墨書
169	須恵器	有台杯Ⅱ	33R1		Ⅴ	14.0	9.0	4.1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	転用硯，底面ヘラ記号
170	須恵器	有台杯Ⅱ	36O14		Ⅴ	14.0	8.2	4.1	灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	底面ヘラ記号
171	須恵器	有台杯Ⅱ	34Q16		Ⅴ	14.0	9.4	4.0	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	
172	須恵器	有台杯Ⅱ	32R4		Ⅴ	13.6	10.0	4.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	
173	須恵器	有台杯Ⅱ	36S2		Ⅴ	12.7	7.0	3.6	にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	ヘラ	白	底面ヘラ記号
174	須恵器	有台杯Ⅱ	19M24		Ⅴ	12.6	6.5	3.5	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・白・砂	
175	須恵器	有台杯Ⅲ	34O16		Ⅳ	11.5	7.5	3.6	橙	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白	底面ヘラ記号
176	須恵器	有台杯Ⅳ	35Q19		Ⅴ	9.4	6.3	3.8	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケズリ	ヘラ	白・砂	
177	須恵器	有台杯	34R20		Ⅴ		10.0		灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	長・砂	転用硯
178	須恵器	有台杯	32O3		Ⅴ		9.1		灰	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ	白・砂	転用硯，底面ヘラ記号
179	須恵器	杯蓋Ⅰ	35O10		Ⅳ	17.0		2.5	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	
180	須恵器	杯蓋Ⅱ	34P2・18		Ⅴ	15.8		2.8	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	内面ヘラ記号
181	須恵器	杯蓋Ⅱ	31Q17		Ⅴ	15.2		2.5	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	
182	須恵器	杯蓋Ⅱ	32Q16		Ⅴ	14.8		3.0	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	転用硯，外面自然釉
183	須恵器	杯蓋Ⅱ	34O22		Ⅴ	14.3		2.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			雲・砂	転用硯，外面自然釉，内面ヘラ記号
184	須恵器	杯蓋	30Q14		Ⅴ	11.7			灰白	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白	外面自然釉
185	須恵器	壺蓋	32O11		Ⅴ	11.9		4.0	灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			白・砂	外面自然釉
186	須恵器	瓶類	33R4・7		Ⅴ	6.0			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			白・砂	内外面自然釉
187	須恵器	長頸瓶	36R25		Ⅴ		8.3		灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ	ロクロケズリ		白	外面自然釉
188	須恵器	長頸瓶	32R5		Ⅴ				明青灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ			長・砂	
189	須恵器	横瓶	32P3		Ⅴ				灰	ロクロナデ・当て具痕	カキメ・タタキメ	タタキメ		白・砂	
190	須恵器	鉢	36R3，36Q8		Ⅴ	23.7		19.7	灰	ハケメ	ハケメ・ヘラケズリ	ヘラケズリ		砂	外面自然釉
191	須恵器	甕Ⅰ	33O1		Ⅴ	48.4			灰	ロクロナデ	ロクロナデ			砂	
192	須恵器	甕Ⅲ	36R2・7・11		Ⅴ	17.0			灰白	ハケメ・ロクロナデ	カキメ・タタキメ			白・砂	
193	須恵器	甕Ⅲ	35R22		Ⅴ	18.3		36.0	灰オリーブ	ロクロナデ・当て具痕	ロクロナデ・カキメ・タタキメ	タタキメ		砂	外面自然釉
194	土師器	長甕B1	34O22		Ⅴ	23.0			にぶい黄橙	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ			雲・砂	
195	土師器	長甕A1	32P12		Ⅴ	21.0			にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ			雲・砂	
196	土師器	小甕B2	32O7		Ⅴ	13.2	6.1	13.2	灰黄褐	カキメ	カキメ・ヘラケズリ			雲・砂	
197	土師器	小甕B1	34O21		Ⅴ	13.0			にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・赤・砂	
198	土師器	小甕B	35R1		Ⅴ		6.8		黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ			雲・砂	
199	土師器	鍋B2	33P14		Ⅴ	37.0			にぶい黄橙	カキメ・ハケメ	カキメ・ヘラケズリ			雲・赤・砂	
200	土師器	鍋B2	33P10		Ⅴ	36.0			にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ			雲・砂	
201	緑釉陶器	皿	28N21		Ⅳ		7.0		淡黄					白	
202	灰釉陶器	椀	35Q20		Ⅴ	15.0			灰白					白	
203	灰釉陶器	椀	35R22		Ⅴ	(14.0)			灰白					白	
204	灰釉陶器	椀	32Q22		Ⅴ		9.4		灰白					白	
205	灰釉陶器	皿	34N22				7.9		灰白					白	
206	灰釉陶器	皿	30N25		Ⅳ		6.0		灰白					白	

中世～近世

陶磁器

法量…（ ）：推定値　胎土の混入物…砂：砂粒、角：角閃石、雲：雲母、長：長石、英：石英、海：海面骨針

番号	種類	器種	出土地点			法量（cm）			口縁部残存率 /36	色調		胎土（色調、混入物）	製作技法・文様等	備考
			グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径		外面	内面			
207	肥前系陶器	碗	32P21	SD69	1					にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 精良	内外面：灰釉	
208	肥前系陶器	皿	32P21	SD69	1					灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 精良	内外面：灰釉	溝縁皿
209	不明	皿	28P17	SD71	1			3.7		にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙 砂・長・英		内外面：摩耗
210	珠洲	片口鉢	29P17	SD73	2					灰	灰	灰 砂・長・英・海	内面：卸し目一単位8条以上か	
211	越中瀬戸	擂鉢	29P16	SD73	1			10.6		赤褐	にぶい橙	にぶい橙 砂・長・英	内面：卸し目一単位9条以上か 内外面：鉄釉	内面：摩耗
212	青磁	碗	31N18	SD111	1	10.5			3.5	暗オリーブ灰	暗オリーブ灰	灰白 精良	外面：蓮弁文	
213	珠洲	甕か壺T種	31O25	SD132	1					オリーブ灰（自然釉）	灰	灰 砂・長・英・海	叩き締め成形 外面：自然釉	
214	不明	擂鉢	31O25	SD132	1	8.6	2.6	3.3	7.0	暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐 精良	内面：卸し目一単位5条	備前系か
215	青磁	碗	37P12		Ⅳ	11.7			3.5	暗オリーブ	暗オリーブ	灰白 精良	内外面：無文	漳州
216	青磁	碗	32O10		Ⅳ					灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 精良	外面：蓮弁文	
217	青磁	碗	27P20		Ⅳ	10.6			4.5	緑灰	緑灰	灰白 精良	外面：雷文	
218	青磁	碗	31P22		Ⅳ			5.6		緑灰	緑灰	灰白～明褐灰 精良	見込：渦巻文 高台内：無釉	
219	白磁	皿	33P		Ⅳ	10.4			4.0	灰白	灰白	灰白 精良	口縁端部：面取り	
220	青花	皿	36R17		Ⅳ	12.6			1.0	明青灰	明青灰	灰白 精良	内外面：透明釉 外面：草花文か	漳州
221	李朝陶器	皿	35P11		Ⅳ	9.7	2.7	3.1	8.5	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 砂・英	内外面：藁灰釉、砂目 底部：削り出し高台	
222	瀬戸・美濃	天目碗	20N19		Ⅲ	（11.5）			3.0	極暗赤褐	極暗赤褐	灰白 精良	内外面：鉄釉	
223	瀬戸・美濃	碗	29O15		Ⅳ					浅黄	浅黄	灰白 精良	内外面：灰釉	
224	珠洲	片口鉢	26M4		Ⅳ					灰	灰白	灰～灰白 砂・長・英・海	内面：卸し目	
225	珠洲	片口鉢	28N3		Ⅳ	36.8			3.5	灰	灰	灰 長・英	内面：卸し目一単位5条以上	
226	珠洲	片口鉢	34R18		Ⅴ					灰	灰	灰 砂・英・海	内面：卸し目一単位9条以上か	内面：摩耗
227	珠洲	片口鉢	34P18		Ⅳ			12.7		青灰	にぶい橙	青灰～にぶい橙 砂・長・英・海	内面：卸し目一単位6条	
228	珠洲	片口鉢	36R17		Ⅳ			11.9		灰	暗灰	灰～暗灰 砂・雲・長・英・海	内面：卸し目一単位6条	
229	珠洲	甕か壺	22N2		Ⅳ					灰	灰	灰 長・英・海		
230	珠洲	甕か壺T種	22N16		Ⅳ					赤灰～暗灰	暗灰	赤灰～暗灰 砂・長・英	叩き締め成形	
231	珠洲	甕か壺T種	22N11		Ⅳ					暗灰	暗灰	暗灰 砂・長・英	叩き締め成形	
232	珠洲	甕か壺T種	32P17		Ⅳ					灰	灰	灰 砂・長・英・海	叩き締め成形	
233	珠洲	甕か壺T種	36O3		Ⅳ					灰	灰	灰 砂・雲・長・海	叩き締め成形	外面：研磨痕
234	珠洲	甕か壺	30P		-			10.7		灰	灰	灰 砂・長・英・海	底部：ロクロ成形	外面：摩耗
235	不明	甕か壺	28L18		Ⅳ					赤灰	赤灰	赤灰 砂・長・英	内外面：長石・砂粒吹き出し	外面：スス
236	肥前系陶器	碗	24M19		Ⅲ	9.0			2.5	灰黄	灰黄	灰白 精良	内外面：灰釉 外面：鉄絵	
237	肥前系陶器	皿	35R2		Ⅴ	（11.9）			3.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 精良	外面：灰釉 内面：灰釉、鉄釉	皮鯨手
238	肥前系陶器	皿	35R16		Ⅳ	10.4			4.5	オリーブ灰	灰オリーブ	にぶい赤褐 精良	内外面：灰釉	口縁部：摩耗
239	肥前系陶器	皿	37P11		Ⅴ	12.6			3.0	灰黄	灰黄	灰白 精良	内外面：灰釉	
240	肥前系陶器	皿	28O24		Ⅳ			4.8		にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰 長・英	内外面：灰釉 底部：削り出し高台	
241	肥前系陶器	瓶	36P13		Ⅳ					暗褐、灰白	浅黄	浅黄 精良	外面：灰釉、藁灰釉	
242	越中瀬戸	皿	31O24		Ⅲ	9.3			5.0	黒褐	黒褐	明褐灰 精良	内面：釉止めの段 内外面：鉄釉	
243	越中瀬戸	皿	26O10		Ⅳ	10.3			3.0	褐灰	褐灰	橙 長・英	内外面：灰釉か	内外面：荒れ
244	越中瀬戸	広口壺	32N6		Ⅲ	10.2			7.0	暗褐	褐	灰白 砂・角・英	内外面：鉄釉	
245	越中瀬戸	広口壺	27O5		Ⅳ					オリーブ黒	黒褐	にぶい橙 砂・角・長・英	内外面：鉄釉	内外面：荒れ
246	越中瀬戸	不明	30O15		Ⅳ					暗褐	暗褐	浅黄橙 砂・英	内外面：鉄釉	長胴壺もしくは擂鉢か

木製品

番号	器種	樹種	出土地点			法量（cm）			木取り	備考
			グリッド	遺構	層位	長	幅	厚		
247	柱根	トネリコ属シオジ節	36R9	SB230-P225		16.2	14.1	6.4	分割材	底部のみ残存。端部をV字状に加工。
248	柱根	トネリコ属	36R19	SB230-P226		35.3	15.7	12.4	分割材	下端部をV字状に加工。
249	柱根	トネリコ属	36R18	SB230-P229		16.0	15.3	4.3	分割材	底部のみ残存。
250	柱根	トネリコ属	36R10	SB230-P276		20.0	14.2	9.7	分割材	底部のみ残存。端部をV字状に加工。
251	柱根	トネリコ属シオジ節	36R24	SB230-P279		18.2	13.1	5.0	分割材	底部のみ残存。
252	柱根	トネリコ属	32Q15	SB270-P282		27.4	15.5	8.3	分割材	底部のみ残存。端部を円錐状に加工。
253	柱根	トネリコ属	33P11	SB315-P286		18.8	8.2	6.7	分割材	
254	柱根	トネリコ属	33P7	SB315-P311		53.6	18.0	12.9	分割材	下端部を円錐状に加工。
255	棒状木製品		36S4	SK321	3	22.4	1.4	1.1	柾目	
256	棒状木製品		36R4	SK321	2	24.2	1.5	1.0	柾目	中央部は磨耗。
257	櫛	イスノキ	36S9	SD222	2	6.6	3.8	1.0	柾目	
258	漆器	ケヤキ	37R8	SD222	2	3.4	3.2	0.6		
259	曲物側板	スギ	36S8	SD222	2	8.5	1.2	0.4	柾目	内面に浅い切込みあり。
260	用途不明		37R3	SD222	2	11.1	1.5	0.5	板目	上端部を圭頭状に加工。
261	用途不明		36S9	SD222	2	8.0	1.6	0.7	板目	
262	用途不明		36S8	SD222	2	10.7	1.6	0.7	柾目	
263	用途不明		37R21	SD222	2	11.7	2.1	1.5	柾目	表面は全体に磨耗。
264	用途不明		37R3	SD222	3	12.9	2.2	0.8	板目	
265	用途不明		37R3	SD222	3	12.1	3.0	0.9	板目	表面全体は薄く炭化。
266	用途不明		36S9	SD222	2	11.4	5.6	1.4	柾目	上下両端に加工痕あり。部材製作時の端材か。
267	用途不明		36S9	SD222	2	8.6	4.8	1.0	柾目	上下両端に加工痕あり。部材製作時の端材か。
268	用途不明		37R8	SD222	2	9.1	4.0	2.3	板目	上下両端に加工痕あり。部材製作時の端材か。
269	用途不明		37R8	SD222	2	8.5	5.6	3.1	柾目	角材の端部を垂直に切断。部材製作時の端材か。
270	用途不明		36S9	SD222		13.0	5.7	4.1	分割材	下端部は一方向から斜めに加工。表面全体が炭化。
271	用途不明		37R17	SD222	2	15.5	3.4	1.3	板目	表面全体は薄く炭化。
272	用途不明		37R3	SD222	2	16.6	5.4	1.3	板目	
273	用途不明		37R17	SD222	2	20.1	3.4	1.4	板目	表面全体は薄く炭化。
274	用途不明		36S9	SD222	2	27.5	2.1	1.0	板目	
275	用途不明		35Q10		Ⅴ	10.0	3.9	4.1	分割材	上下両端に加工痕あり。部材製作時の端材か。
276	用途不明		35R4		Ⅴ	8.5	3.2	1.1	板目	上下両端に加工痕あり。表面は薄く炭化。
277	用途不明		25N11		Ⅳ	7.2	4.1	1.2	板目	上下両端に加工痕あり。部材製作時の端材か。
278	木簡		29P7		Ⅳ	15.7	2.6	0.5	柾目	釈文「せんふへもミ」上端は腐食により欠損。
279	曲物底板か		34Q4		Ⅳ	13.5	4.8	0.4	柾目	
280	木札		29P18		Ⅳ	17.1	2.5	0.9	板目	上部に紐を通すための孔が貫通。
281	用途不明		34N23		Ⅳ	12.1	4.4	1.2	柾目	
282	箸か		33P21		Ⅳ	14.8	1.3	1.0	柾目	下端部は先尖。一方向から削出している。
283	棒状木製品		27P2		Ⅳ	22.8	2.5	2.1	丸太材	三ヵ所で折損。断面付近に加工痕あり。故意に折ったものか。
284	部材		29O8		Ⅲ	10.3	4.8	1.3	板目	
285	部材		35Q1		Ⅲ	14.3	3.6	2.5	柾目	全体に磨耗。
286	切屑		29N13		Ⅲ	6.7	1.6	0.7	柾目	上部に紐を通すための孔が貫通。
287	切屑		29O7		Ⅲ	9.8	3.1	0.4	柾目	
288	切屑		29O7		Ⅲ	11.9	2.8	0.6	柾目	
289	切屑		29O7		Ⅲ	8.5	1.7	0.4	柾目	
290	切屑		29O7		Ⅲ	6.0	1.8	0.4	柾目	

石製品

番号	器種	出土地点			法量（cm）			重量（g）	石材	備考
		グリッド	遺構	層位	長	幅	厚			
291	砥石	36Q12	SK254	3	8.2	6.5	3.2	36.0	軽石	両面及び側面に砥面あり。

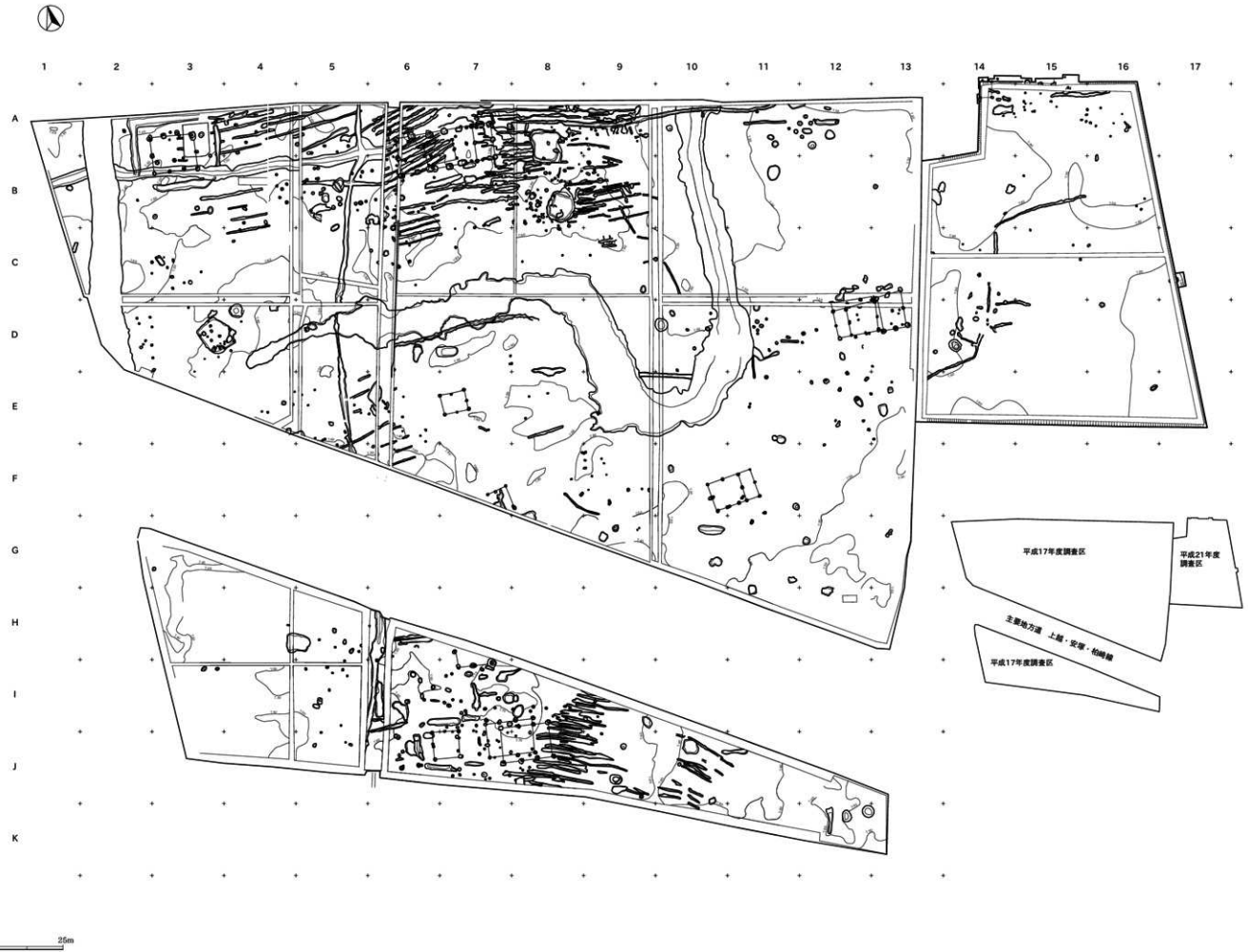
金属製品

番号	器種	出土地点			法量（cm）			重量（g）	遺存状況	備考
		グリッド	遺構	層位	長	幅	厚			
292	煙管	30Q6	SD89	2	6.4	径 1.0	0.3 ~ 5	6.4	雁首	雁首下部に打ちつけた凹み多数あり。
293	煙管	29Q3	SD90	2	1.1	径 1.6	0.5 ~ 1.5	2.9	火皿	
294	銃弾	31O3	SD111	1	径 1.24			10.2	完形	火縄銃の弾丸。
295	釘	33O2		Ⅳ	20.5	2.8	1.0	88.5	完形	船釘
296	釘	32N21		Ⅳ	16.4	2.8	0.6	48.9	完形	船釘
297	刀子	34N23		Ⅳ	13.0	1.4	0.5	11.9	刃部上端欠損	
298	銃弾	33P23		Ⅳ	径 1.10			8.0	変形	火縄銃の弾丸。球の一部が平坦に変形。
299	用途不明品	30P24		Ⅳ	8.7	1.4	0.6	22.9		
300	鉄滓	29O10		Ⅳ	4.9	5.4	1.4	58.0		
307	釘	26O20		Ⅲ	13.5	1.8	0.4	37.2	上端欠損	船釘
308	釘	36S6		Ⅲ	5.1	3.2	0.7	17.4	上部のみ	船釘
309	煙管	34P23		Ⅲ	6.3	径 0.9	0.3 ~ 0.7	6.2	雁首	
310	煙管	33P		Ⅲ	6.7	径 1.0	0.6	6.2	雁首（火皿欠損）	

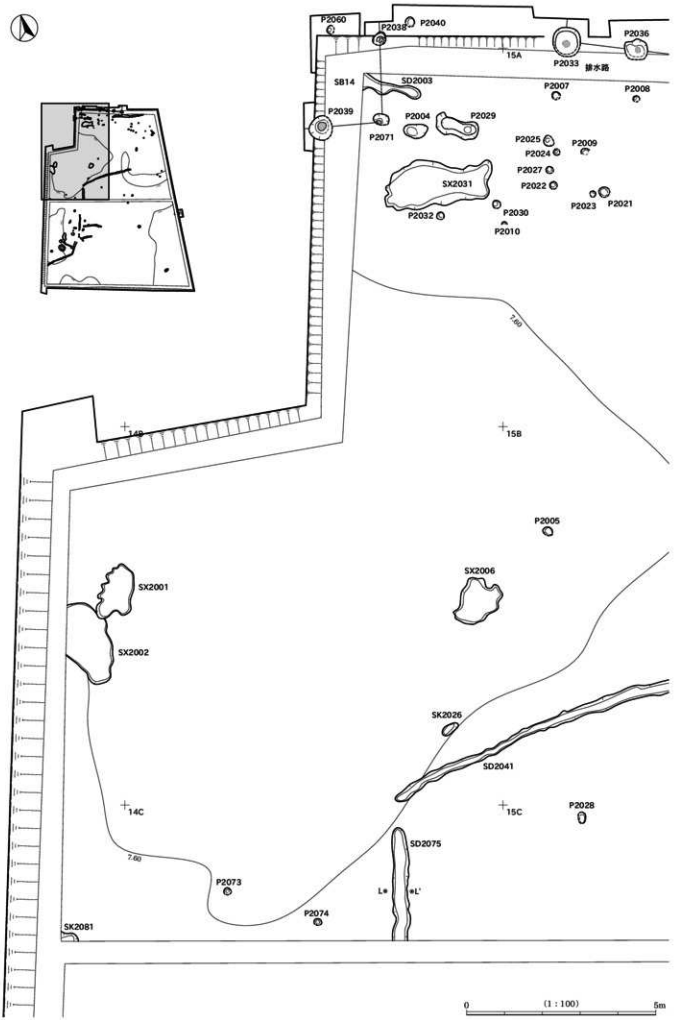
銭貨

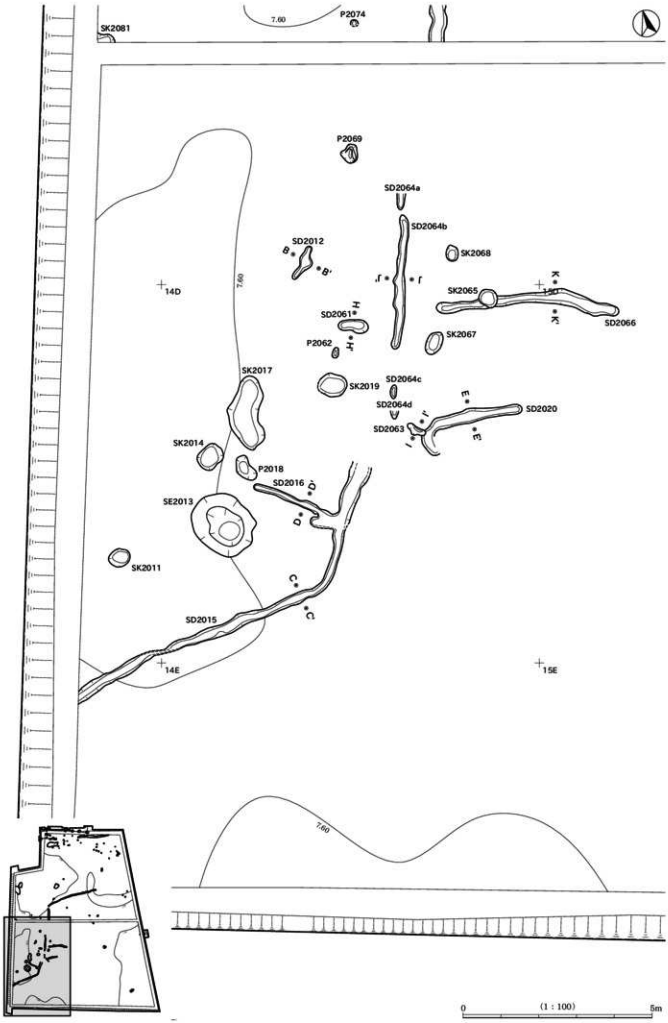
番号	銭名	出土地点			法量（mm）		重量（g）	備考
		グリッド	遺構	層位	直径	厚		
301	治平元寶	31O6		Ⅳ	24.3	1.2	2.6	北宋銭。初鋳年（1064）
302	治平元寶	36R14		Ⅳ	24.4	1.4	3.4	北宋銭。初鋳年（1064）
303	景徳元寶	35O2		Ⅳ	24.7	1.1	3.1	北宋銭。初鋳年（1004）
304	元祐通寶	35O2		Ⅳ	24.4	1.1	3.0	北宋銭。初鋳年（1086）
305	開元通寶	28O1		Ⅳ	(23.7)	(9.7)	(5.8)	唐銭。初鋳年（621）　腐食のため、2枚が固着している。
306	天禧通寶	28O1		Ⅳ	(24.4)	(3.5)	(5.4)	北宋銭。初鋳年（1017）　腐食のため、3枚が固着している。

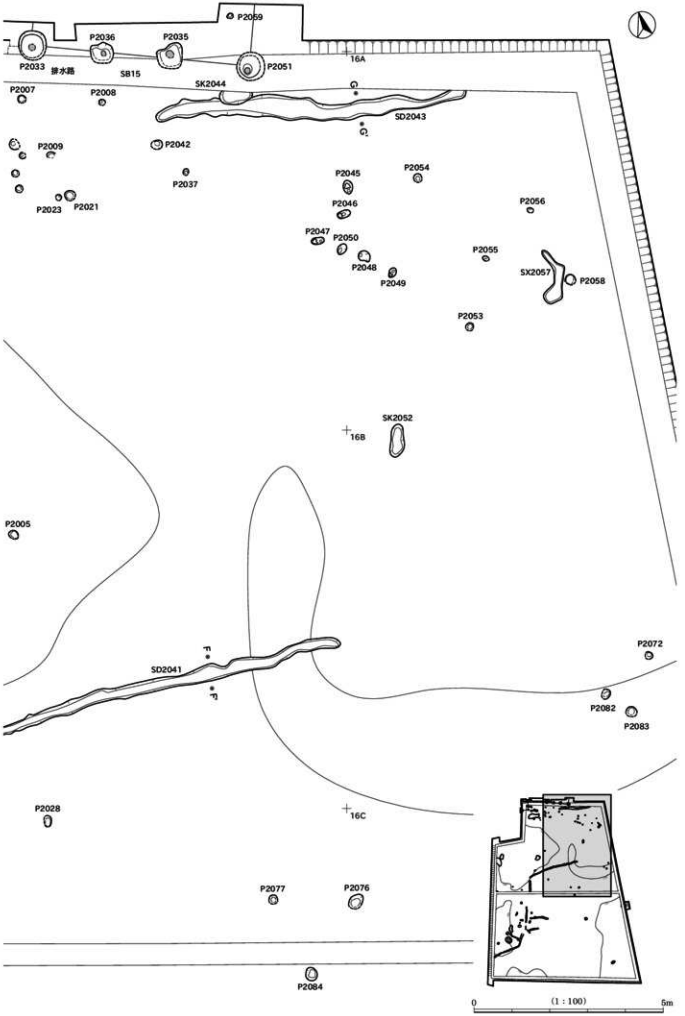
図　　版

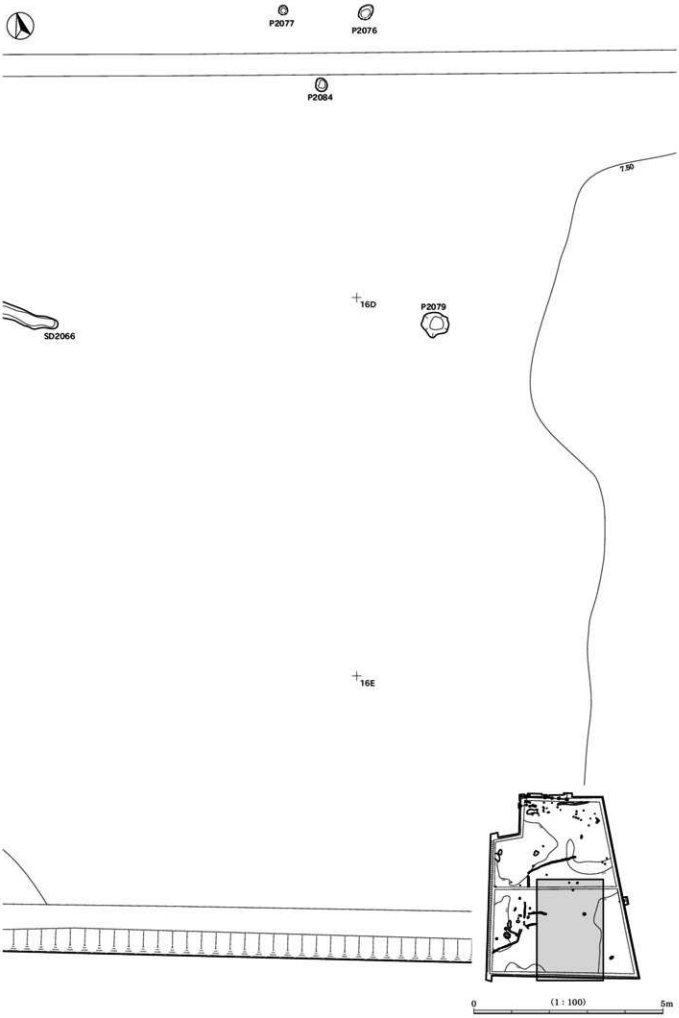

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
平成17年度調査区
平成21年度
調査区
主要地方道　上越・安塚・松崎線
平成17年度調査区
0
(1：500)
25m

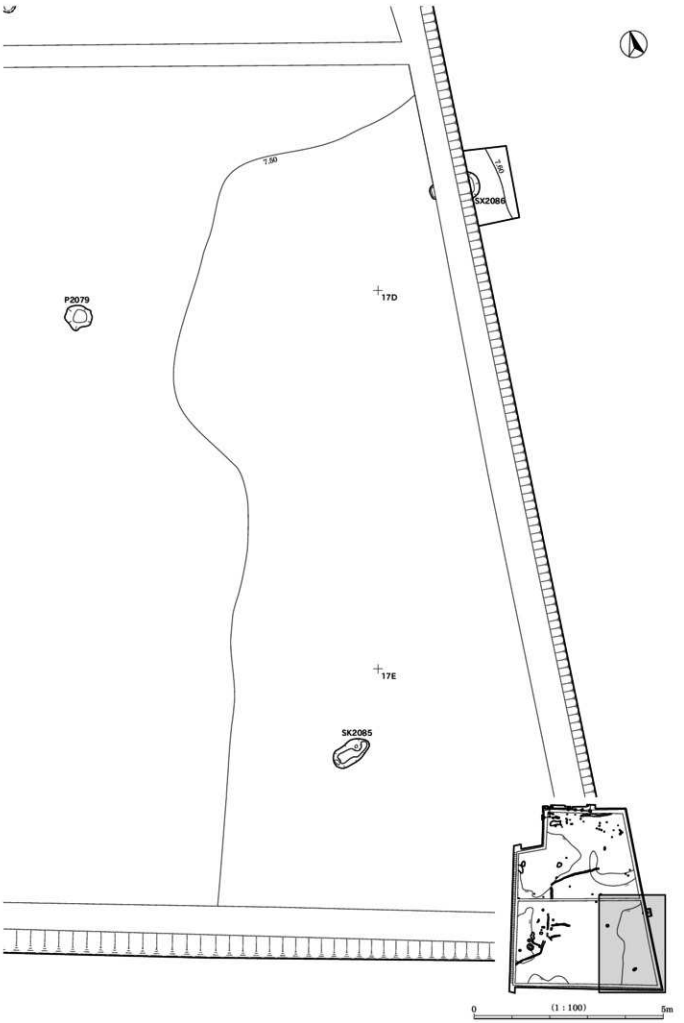
14
15
16
17
A
B
C
D
E
7.60
7.50
7.60
7.50
7.60
7.50
7.60
0
(1 : 300)
15m


P2060
P2038
P2040
15A
P2033
P2036
排水路
SB14
SD2003
P2007
P2008
P2039
P2004
P2029
P2071
P2025
P2024
P2009
P2027
SX2031
P2022
P2023
P2021
P2032
P2030
P2010
7.60
14B
15B
P2005
SX2001
SX2006
SX2002
SK2026
SD2041
14C
15C
P2028
SD2075
7.60
P2073
L
L'
P2074
SK2081
0
(1：100)
5m

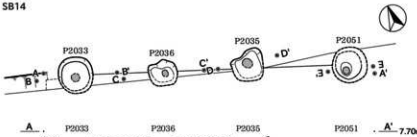

SK2081
7.60
P2074
P2069
SD2064a
SD2064b
SD2012
SK2068
SK2065
SD2066
SK2067
SD2061
P2062
14D
15D
SK2017
SK2019
SD2064c
SD2064d
SD2020
SD2063
SK2014
P2018
SD2016
SE2013
SK2011
SD2015
14E
15E
0
(1 : 100)
5m

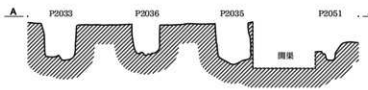

P2059
P2036
P2035
P2033
排水路
SB15
P2051
16A
SK2044
P2007
P2008
SD2043
P2009
P2042
P2037
P2045
P2054
P2023
P2021
P2046
P2056
P2047
P2050
P2055
P2048
SX2057
P2058
P2049
P2053
SK2052
16B
P2005
P2072
SD2041
P2082
P2083
P2028
16C
P2077
P2076
P2084
0
(1：100)
5m

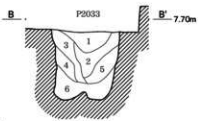

P2077
P2076
P2084
7.50
16D
P2079
SD2066
16E
0
(1：100)
5m


SX2086
P2079
17D
17E
SK2085
0
(1 : 100)
5m

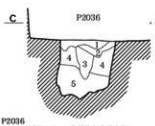
SB14



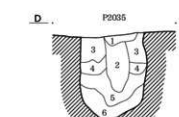




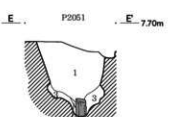
P2033
1　オリーブ黒色粘土　　炭白色粘土をブロック状にやや多く含む、炭化物を多く含む。
2　灰色粘土　　オリーブ黒色粘土をブロック状に含む。
3　青灰色シルト　　灰色粘土をマーブル状に含む。
4　灰色粘土　　緑灰色シルトをマーブル状に含む。
5　青灰色粘土　　黒色粘土をブロック状に含む。
6　青灰色粘土　　灰色粘土と黒色粘土をブロック状に多量に含む。



P2036
1　黄灰色シルト　　炭化物を少量含む。
2　黄灰色シルト　　炭化物をごく少量含む。
3　灰色粘土　　軟性強、柱痕。
4　青灰色細砂　　黒色粘土をブロック状に少量含む。
5　灰色粘土　　青灰色シルトをブロック状に多く含む。黒色粘土をブロック状に多く含む。

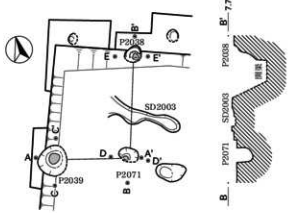


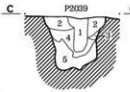
P2035
1　黒褐色シルト　　炭化物をやや多く含む、土師器出土。
2　灰色粘土　　明緑灰色粘土をブロック状に含む。
3　灰色シルト　　青灰色細砂をブロック状に含む。
4　青灰色細砂　　黒色粘土をブロック状に含む。
5　青灰色シルト質細砂　　黒色粘土を含む。
6　黒色粘土　　青灰色シルトを含む。



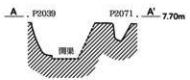
P2051
1　灰色粘土
2　明青灰色シルト質細砂　　軟性強、柱根が粘土化したものか。黒色粘土を含む。
3　灰色粘土　　明青灰色シルトをブロック状に少量含む。

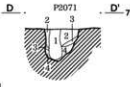
SB15





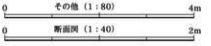
P2039
1　黄灰色粘土　　炭化物をごく少量含む、柱痕。
2　明青灰色シルト質粘土　　炭化物をごく少量含む。
3　明青灰色細砂
4　灰シルト質粘土　　明青灰色粘土と黒色粘土をブロック状に少量含む。
5　明青灰色粘土　　黒色粘土と灰色粘土を含む。

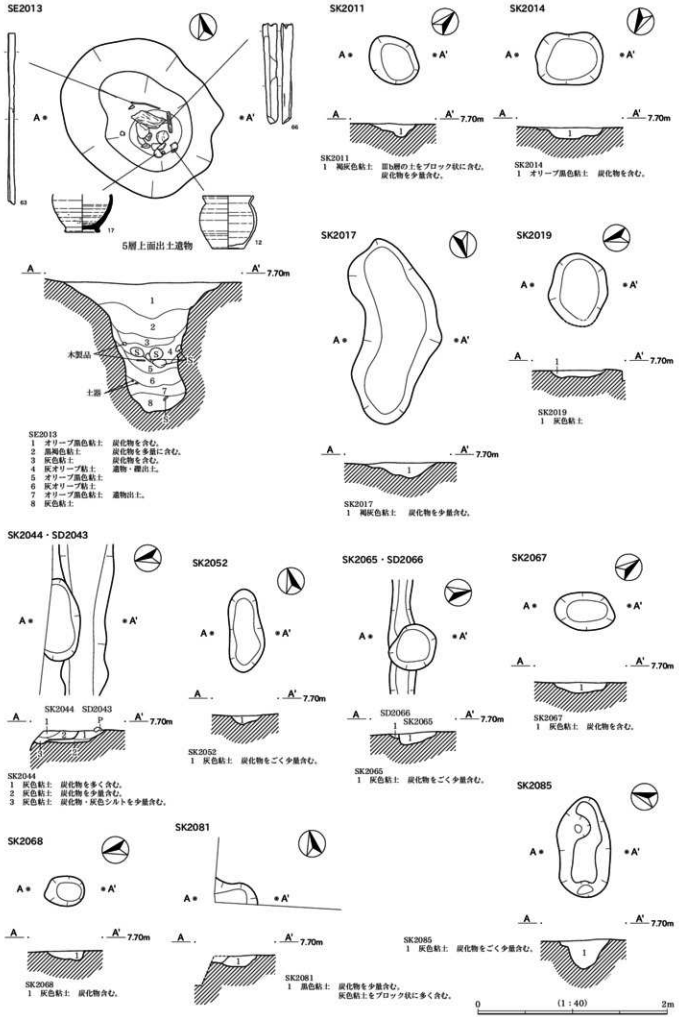


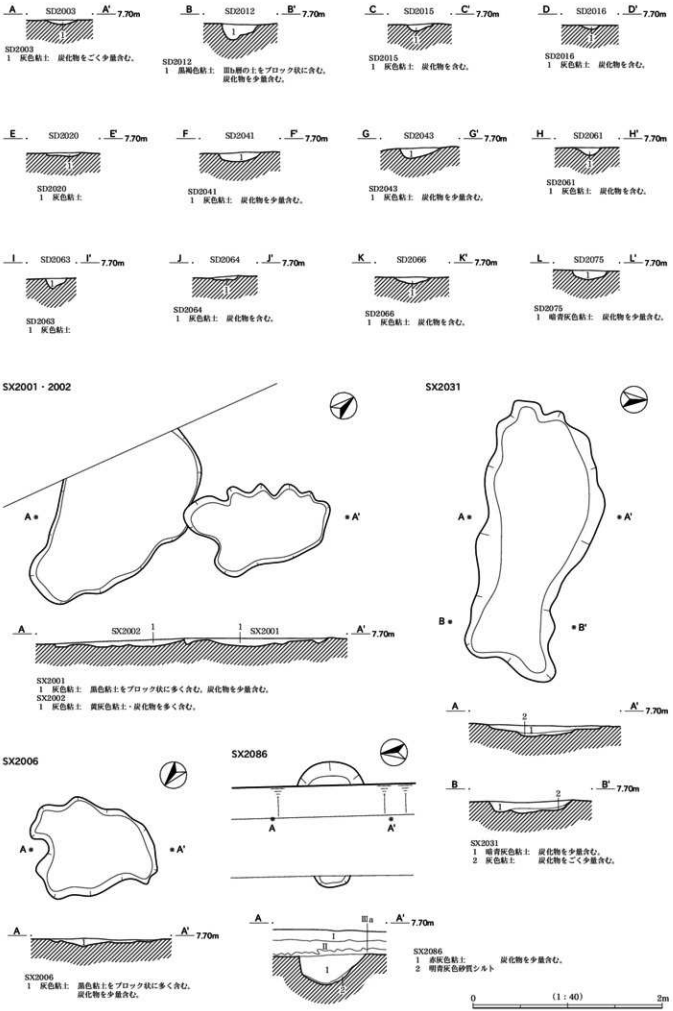


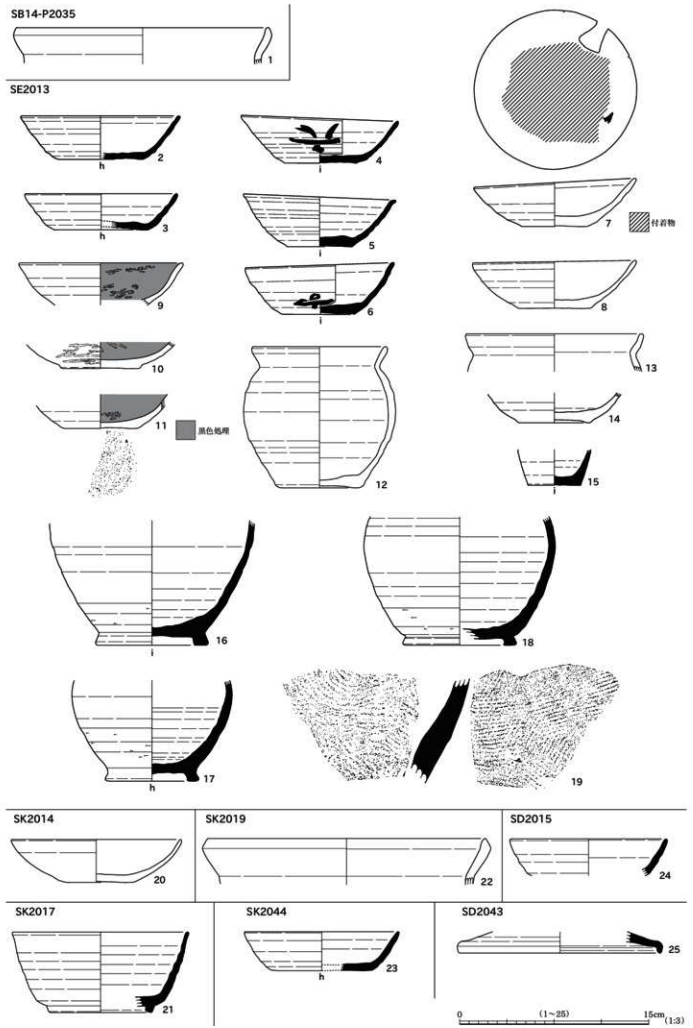
P2071
1　暗灰色シルト　　炭化物をごく少量含む、柱痕。
2　青灰色シルト　　炭化物をごく少量含む。
3　明青灰色砂質シルト
4　青灰色シルト　　炭化物をごく少量含む。

P2038
1　青灰色粘土　　炭化物を含む。
2　暗青灰色粘土　　軟性強。柱痕か。
3　明青灰色粘土

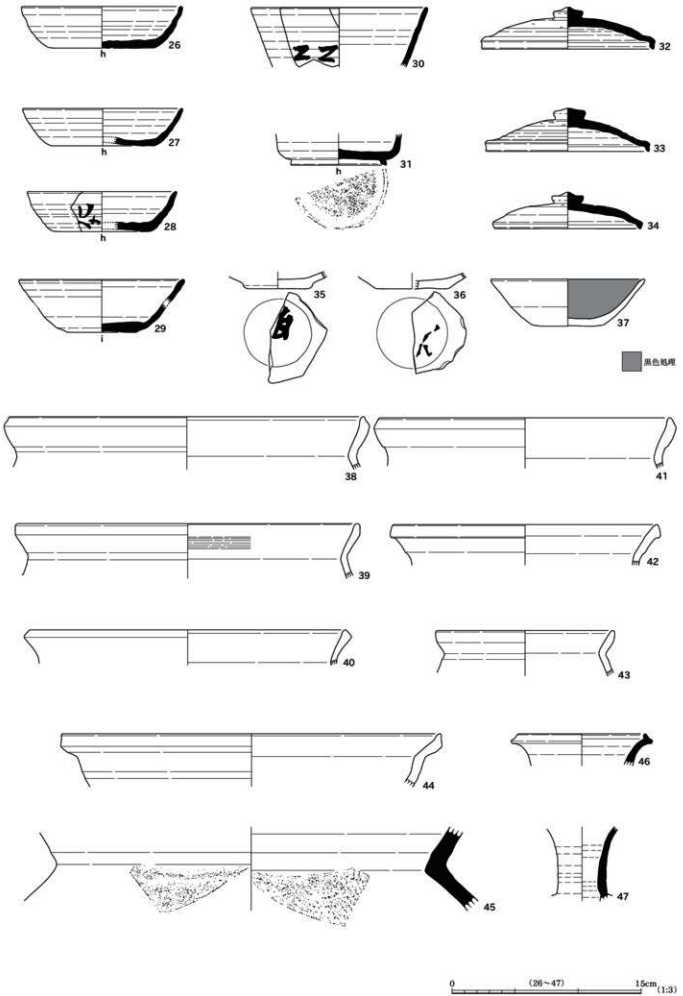



SE2013
A
A'
7.70m
63
66
17
12
5層上面出土遺物
木製品
土器
1 オリーブ黒色粘土　炭化物を含む。
2 黒褐色粘土　炭化物を多量に含む。
3 灰色粘土　炭化物を含む。
4 灰オリーブ粘土　遺物・礫出土。
5 オリーブ黒色粘土
6 灰オリーブ粘土
7 オリーブ黒色粘土　遺物出土。
8 灰色粘土
SK2011
1 褐灰色粘土　層b層の土をブロック状に含む。炭化物を少量含む。
SK2014
1 オリーブ黒色粘土　炭化物を含む。
SK2017
1 褐灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK2019
1 灰色粘土
SK2044・SD2043
SK2044
1 灰色粘土　炭化物を多く含む。
2 灰色粘土　炭化物を少量含む。
3 灰色粘土　炭化物・灰色シルトを少量含む。
SK2052
1 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
SK2065・SD2066
SK2065
1 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
SK2067
1 灰色粘土　炭化物を含む。
SK2068
1 灰色粘土　炭化物含む。
SK2081
1 黒色粘土　炭化物を少量含む。灰色粘土をブロック状に多く含む。
SK2085
1 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
0
(1：40)
2m

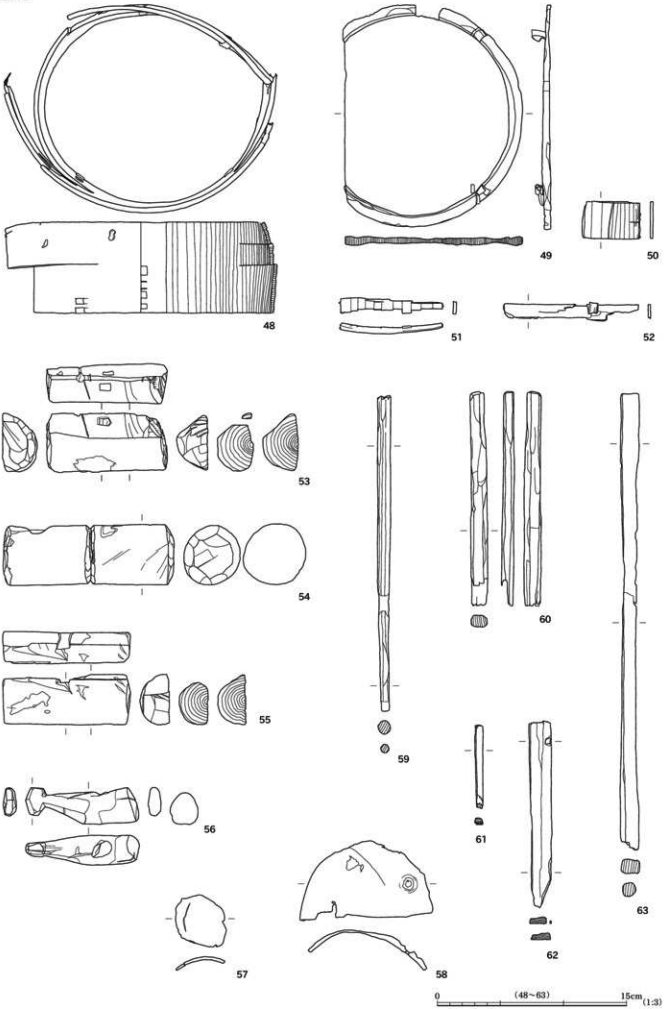

A . SD2003 . A' 7.70m
SD2003
1 灰色粘土 炭化物をごく少量含む。
B . SD2012 . B' 7.70m
SD2012
1 黒褐色粘土 旧ib層の土をブロック状に含む。炭化物を少量含む。
C . SD2015 . C' 7.70m
SD2015
1 灰色粘土 炭化物を含む。
D . SD2016 . D' 7.70m
SD2016
1 灰色粘土 炭化物を含む。
E . SD2020 . E' 7.70m
SD2020
1 灰色粘土
F . SD2041 . F' 7.70m
SD2041
1 灰色粘土 炭化物を少量含む。
G . SD2043 . G' 7.70m
SD2043
1 灰色粘土 炭化物を少量含む。
H . SD2061 . H' 7.70m
SD2061
1 灰色粘土 炭化物を含む。
I . SD2063 . I' 7.70m
SD2063
1 灰色粘土
J . SD2064 . J' 7.70m
SD2064
1 灰色粘土 炭化物を含む。
K . SD2066 . K' 7.70m
SD2066
1 灰色粘土 炭化物を含む。
L . SD2075 . L' 7.70m
SD2075
1 暗青灰色粘土 炭化物を少量含む。
SX2001・2002
A
A'
A . SX2002 1 1 SX2001 . A' 7.70m
SX2001
1 灰色粘土 黒色粘土をブロック状に多く含む。炭化物を少量含む。
SX2002
1 灰色粘土 黄灰色粘土・炭化物を多く含む。
SX2031
A
A'
B
B'
A . 2 . A' 7.70m
B . 2 . B' 7.70m
SX2031
1 暗青灰色粘土 炭化物を少量含む。
2 灰色粘土 炭化物をごく少量含む。
SX2006
A
A'
A . A' 7.70m
SX2006
1 灰色粘土 黒色粘土をブロック状に多く含む。炭化物を少量含む。
SX2086
A
A'
A . Ⅲa . A' 7.70m
SX2086
1 赤灰色粘土 炭化物を少量含む。
2 明青灰色砂質シルト
0 (1:40) 2m

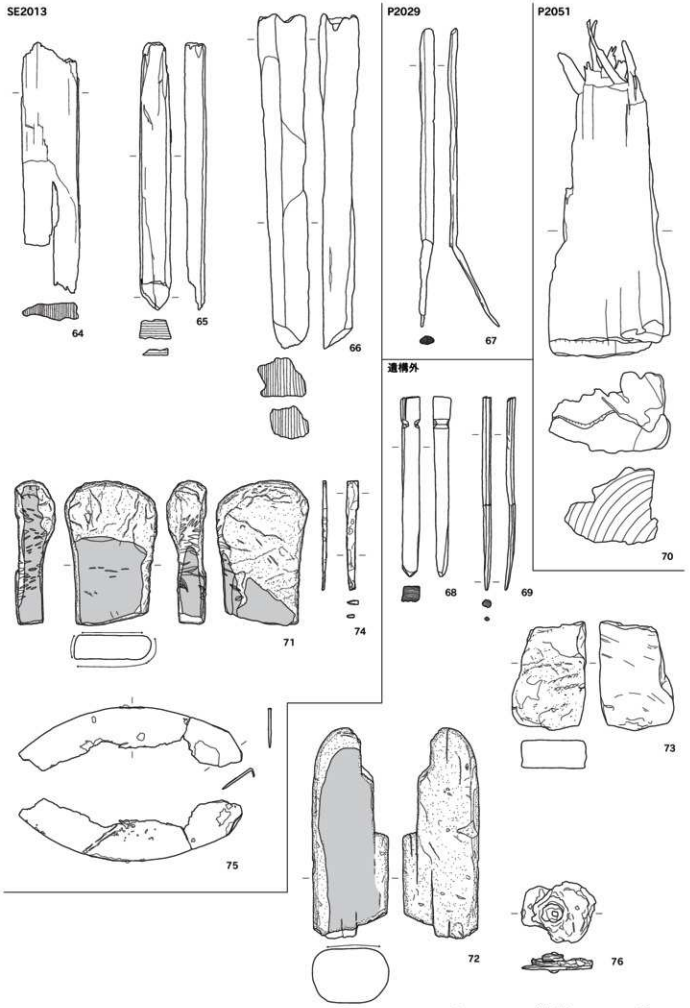

SB14-P2035
1
SE2013
2
4
3
5
7
付着物
9
6
8
10
13
11
黒色処理
12
14
15
16
18
17
19
SK2014
20
SK2019
22
SD2015
24
SK2017
21
SK2044
23
SD2043
25
0
(1～25)
15cm
(1:3)

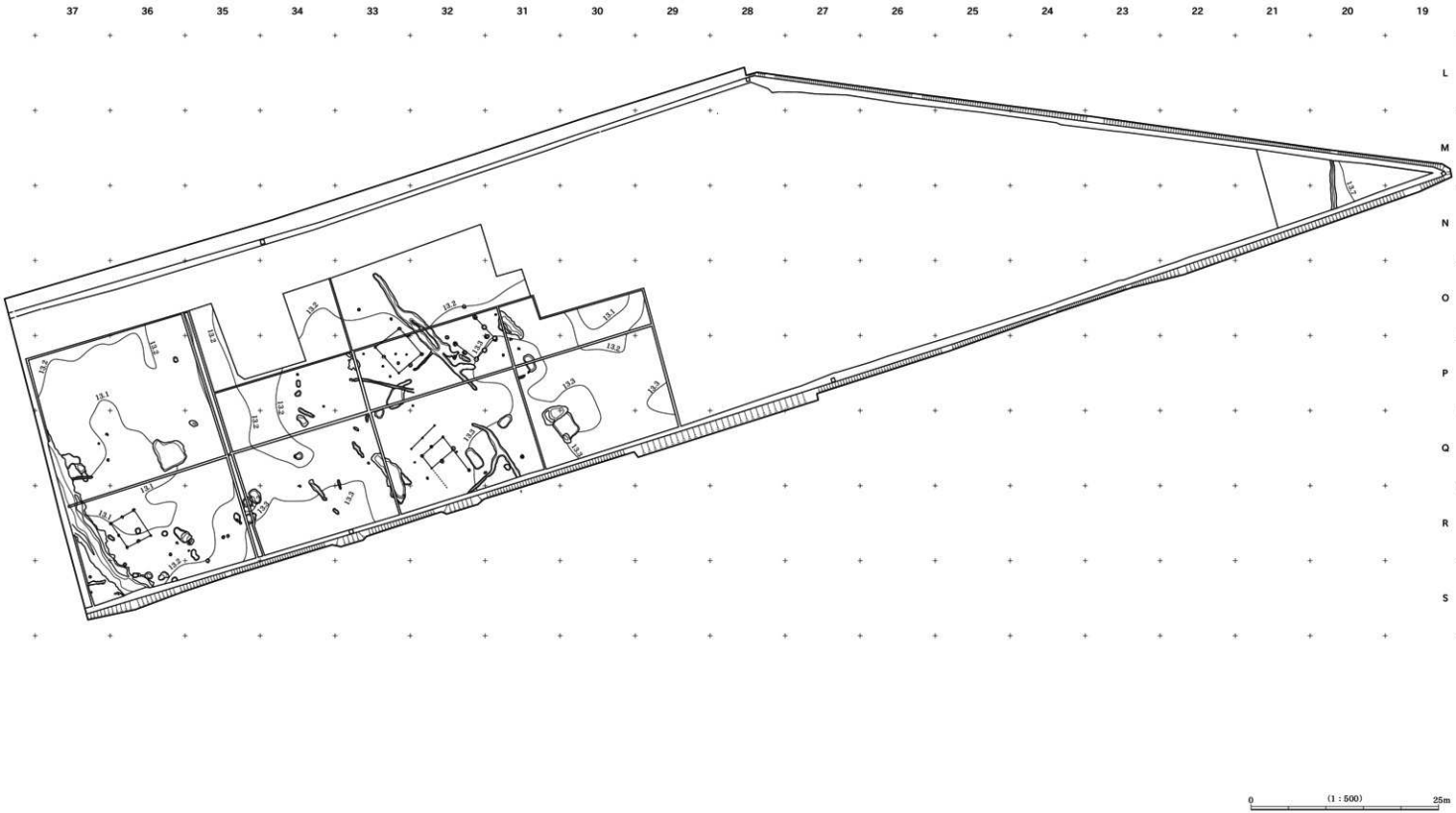
遺構外

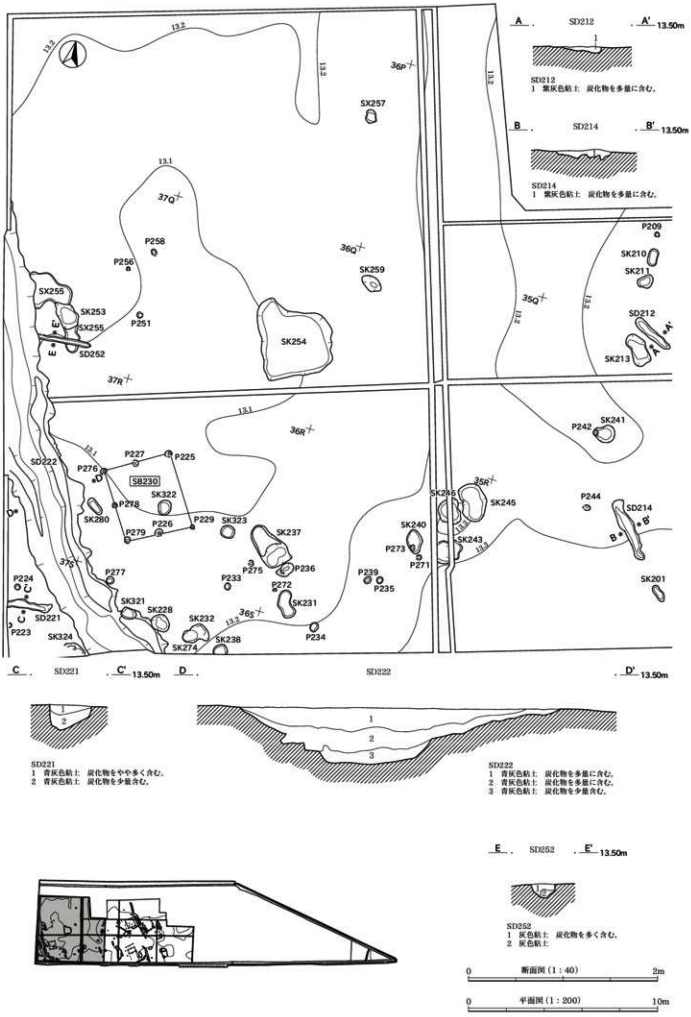

26
30
32
27
31
33
28
34
29
35
36
37
黒色処理
38
41
39
42
40
43
44
46
45
47
0
(26～47)
15cm
(1:3)

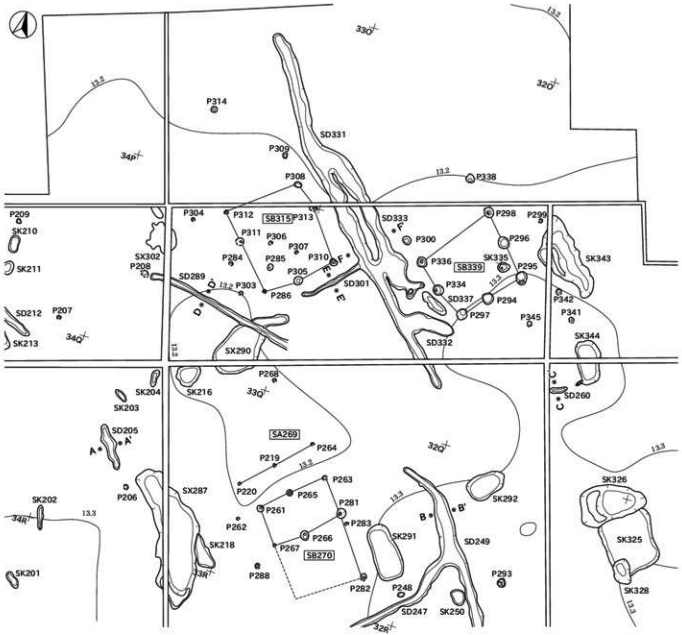
SE2013

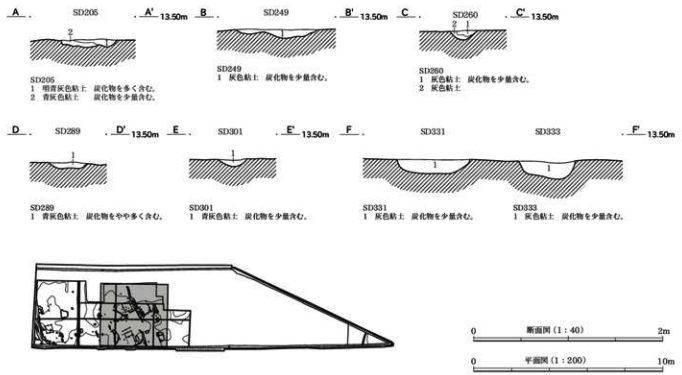



SE2013
P2029
P2051
遺構外
64
65
66
67
68
69
70
71
73
74
75
72
76
0
(64～76)
15cm
(1:3)


37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
L
M
N
O
P
Q
R
S
0
(1 : 500)
25m

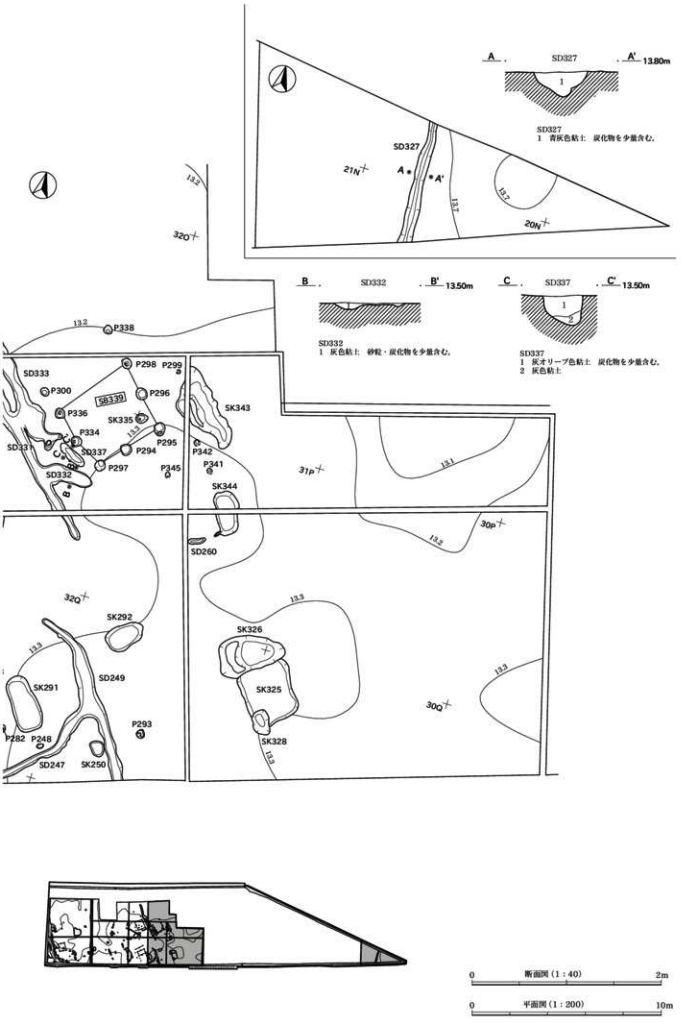

A . SD212 . A' 13.50m
SD212
1 紫灰色粘土 炭化物を多量に含む。
B . SD214 . B' 13.50m
SD214
1 紫灰色粘土 炭化物を多量に含む。
C . SD221 . C' 13.50m
D . SD222 . D' 13.50m
SD221
1 青灰色粘土 炭化物をやや多く含む。
2 青灰色粘土 炭化物を少量含む。
SD222
1 青灰色粘土 炭化物を多量に含む。
2 青灰色粘土 炭化物を多量に含む。
3 青灰色粘土 炭化物を少量含む。
E . SD252 . E' 13.50m
SD252
1 灰色粘土 炭化物を多く含む。
2 灰色粘土
0 断面図（1：40） 2m
0 平面図（1：200） 10m
SX257
SX259
SX254
SX255
SX253
SD252
SD222
SB230
SK322
SK280
SK237
SK246
SK245
SK240
SK243
SK201
SK321
SK228
SK232
SK274
SK238
SK231
SK234
SK210
SK211
SK213
SK241
SD214
P209
P242
P244
P258
P256
P251
P227
P225
P276
P278
P226
P229
P279
P275
P236
P233
P272
P239
P235
P271
P273
P224
P223
P277
P234
P235
P224
SD221
SK324
13.1
13.2
36P
37Q
36Q
37R
36R
35Q
35R
37S
36S

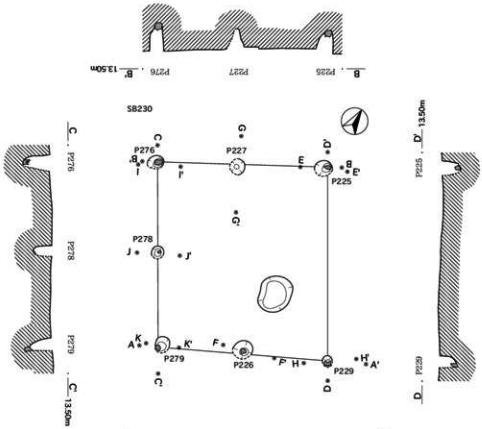


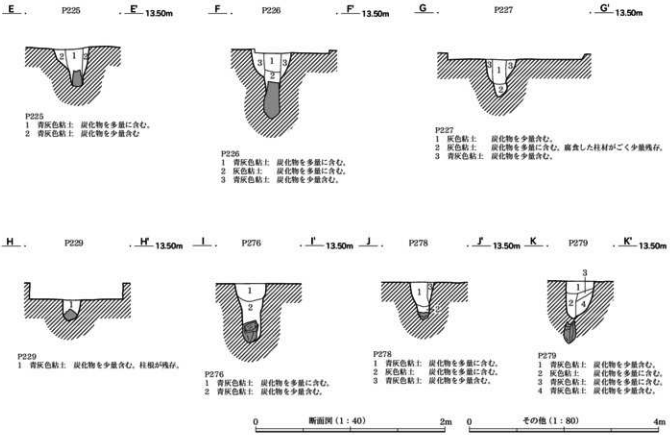


0　断面図（1：40）　2m

0　平面図（1：200）　10m


A
SD327
A'
13.80m
1
SD327
1　青灰色粘土　炭化物を少量含む.
SD327
21N
A
A'
13.2
20N
320
B
SD332
B'
13.50m
C
SD337
C'
13.50m
SD332
1　灰色粘土　砂粒・炭化物を少量含む.
SD337
1　灰オリーブ色粘土　炭化物を少量含む.
2　灰色粘土
P338
SD333
P298
P299
P300
P296
P336
SK339
SK335
SK343
P334
SD331
SD337
P294
P295
P342
P297
P345
P341
SD332
SK344
31P
SD260
30P
32Q
SK292
SK326
SD249
SK325
SK291
30Q
P293
P282
P248
SK328
SD247
SK250
0
断面図（1：40）
2m
0
平面図（1：200）
10m





P225
1　青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　青灰色粘土　炭化物を少量含む

P226
1　青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　灰色粘土　炭化物を多量に含む。
3　青灰色粘土　炭化物を少量含む。

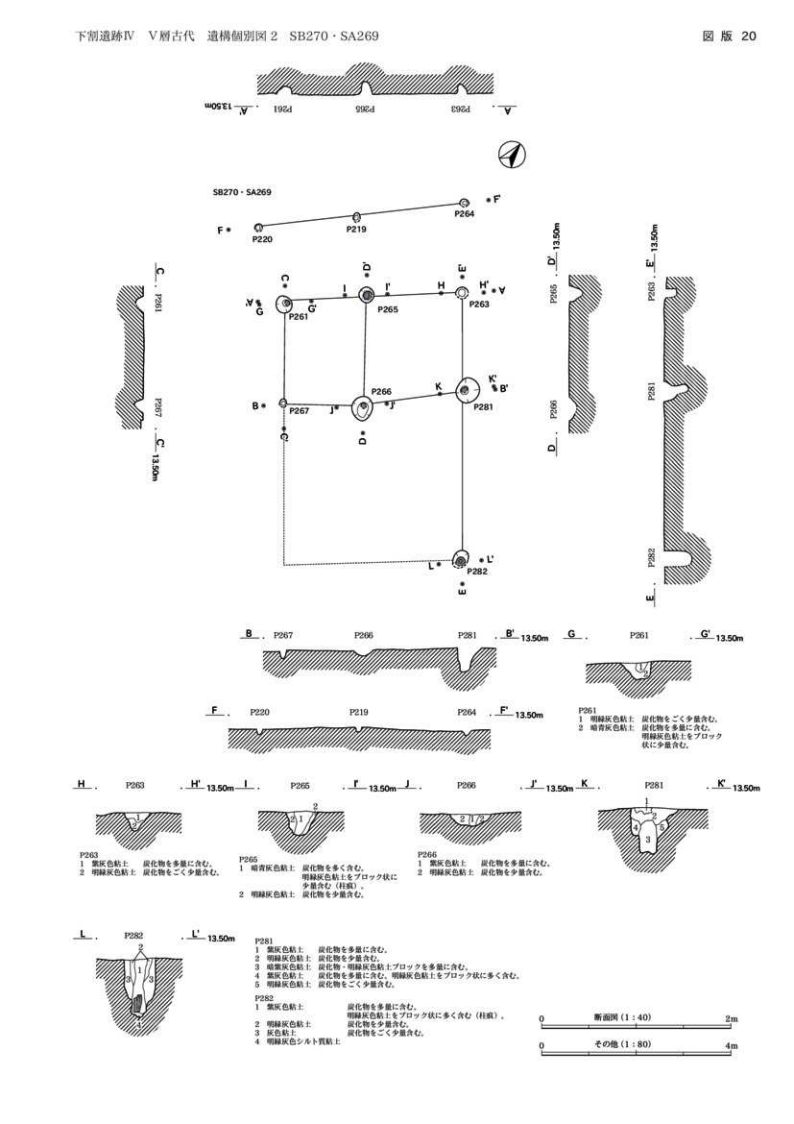
P227
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　炭化物を多量に含む。腐食した柱材がごく少量残存。
3　青灰色粘土　炭化物を少量含む。

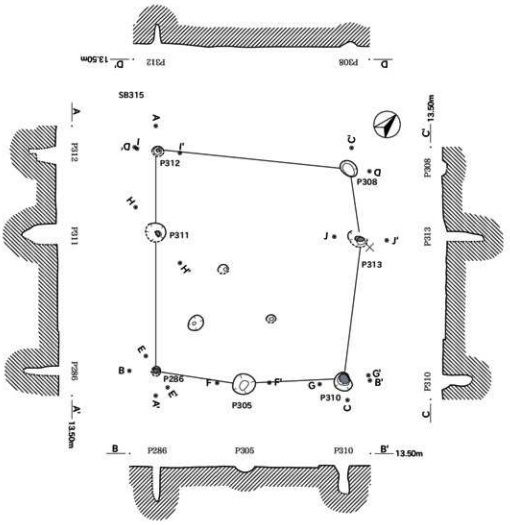
P229
1　青灰色粘土　炭化物を少量含む。柱根が残存。

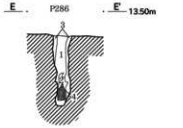
P276
1　青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　青灰色粘土　炭化物を少量含む。

P278
1　青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　灰色粘土　炭化物を多量に含む。
3　青灰色粘土　炭化物を少量含む。

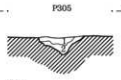
P279
1　青灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　炭化物を多量に含む。
3　青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
4　青灰色粘土　炭化物を少量含む。


SB270・SA269
P220
P219
P264
P263
P262
P261
P265
P266
P267
P281
P282
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
J
J'
K
K'
L
L'
13.50m
1 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 明緑灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
1 暗青灰色粘土　炭化物を多く含む。
明緑灰色粘土をブロック状に少量含む（柱痕）。
2 明緑灰色粘土　炭化物を少量含む。
1 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 明緑灰色粘土　炭化物を少量含む。
1 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 明緑灰色粘土　炭化物を多量に含む。
1 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 明緑灰色粘土　炭化物をブロック状に多く含む。
3 暗黒灰色粘土　炭化物・明緑灰色粘土ブロックを多量に含む。
4 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。明緑灰色粘土をブロック状に多く含む。
5 明緑灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
1 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。
明緑灰色粘土をブロック状に多く含む（柱痕）。
2 明緑灰色粘土　炭化物を少量含む。
3 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
4 明緑灰色シルト質粘土
0　断面図（1：40）　2m
0　その他（1：80）　4m



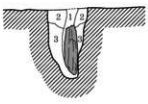


P286
1　青灰色粘土　　炭化物を少量含む。
2　褐灰色粘土　　粘性強い（粒痕）。
3　明緑灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
4　明緑灰色粘土



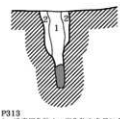
P305
1　暗青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　青灰色粘土　　炭化物・土器片を少量含む。

P310
1　暗青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　青灰色粘土　　炭化物を少量含む。
3　灰色粘土　　炭化物をごく少量含む。

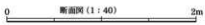


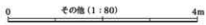
P311
1　オリーブ黒色粘土　粘性強い。
2　明青灰色粘土　　炭化物をごく少量含む。
3　灰色粘土　　炭化物を少量含む。

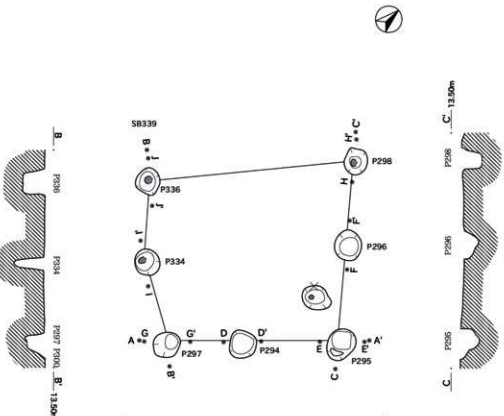
P312
1　暗青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2　灰色粘土　　炭化物を少量含む。

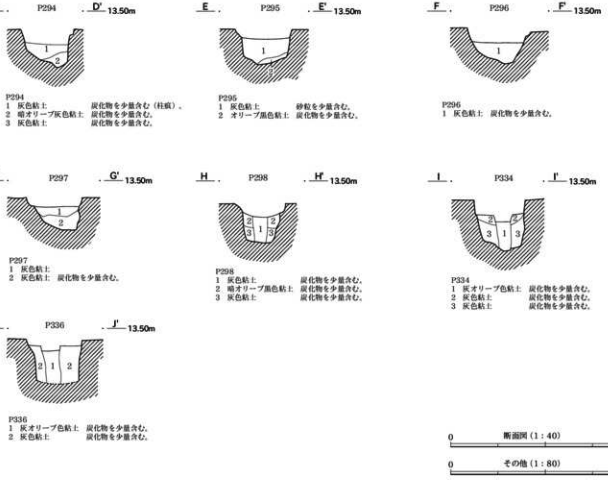


P313
1　暗青灰色粘土　炭化物を多量に含む。柱根が残存。
2　灰色粘土　　炭化物を少量含む。



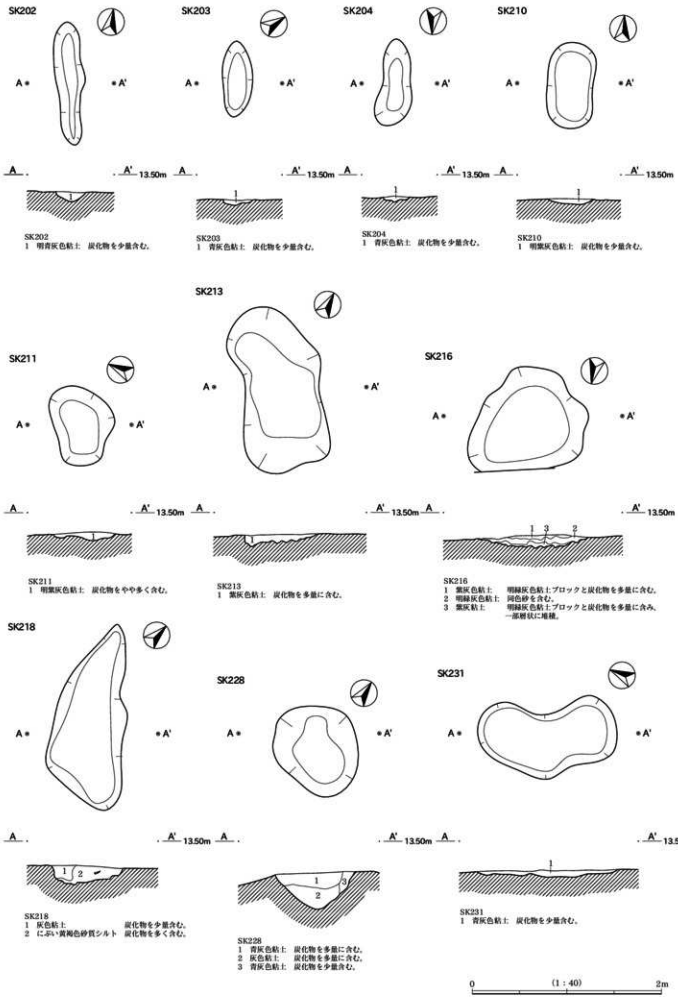


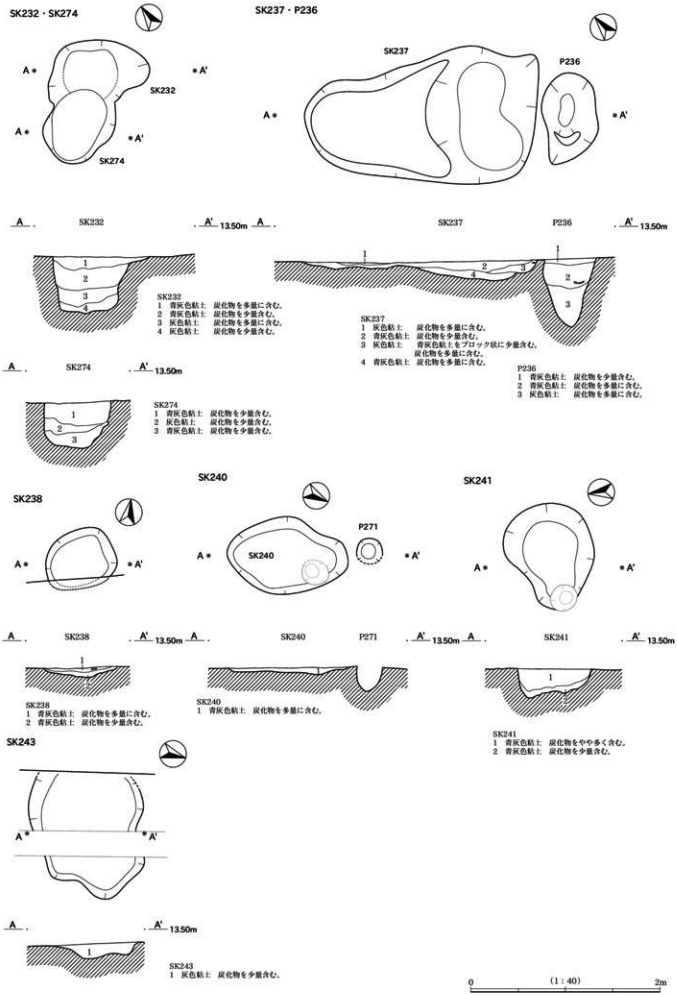


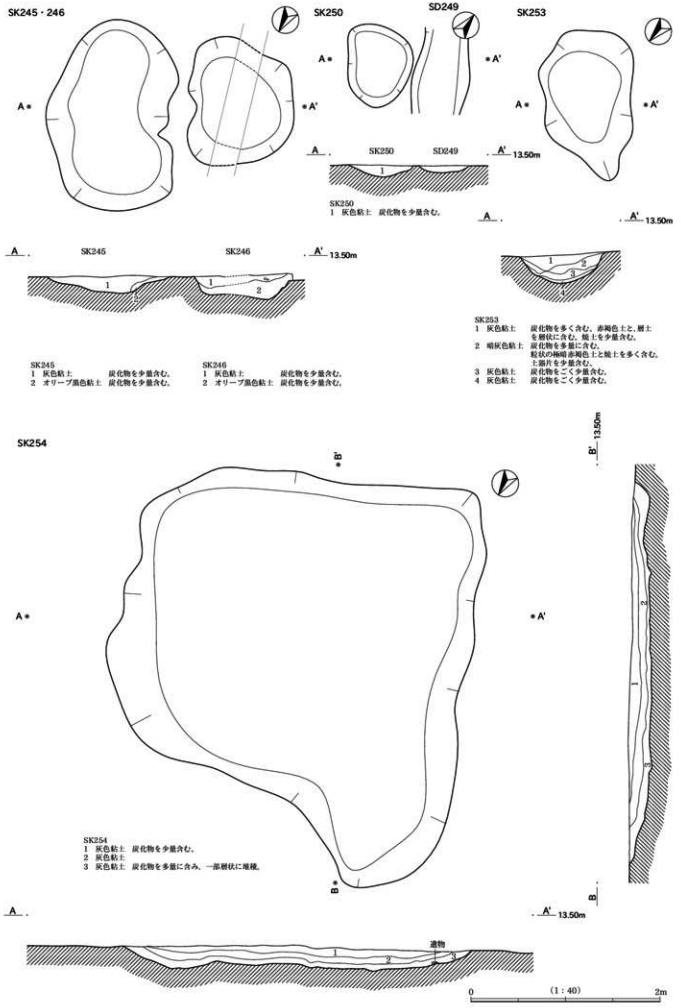


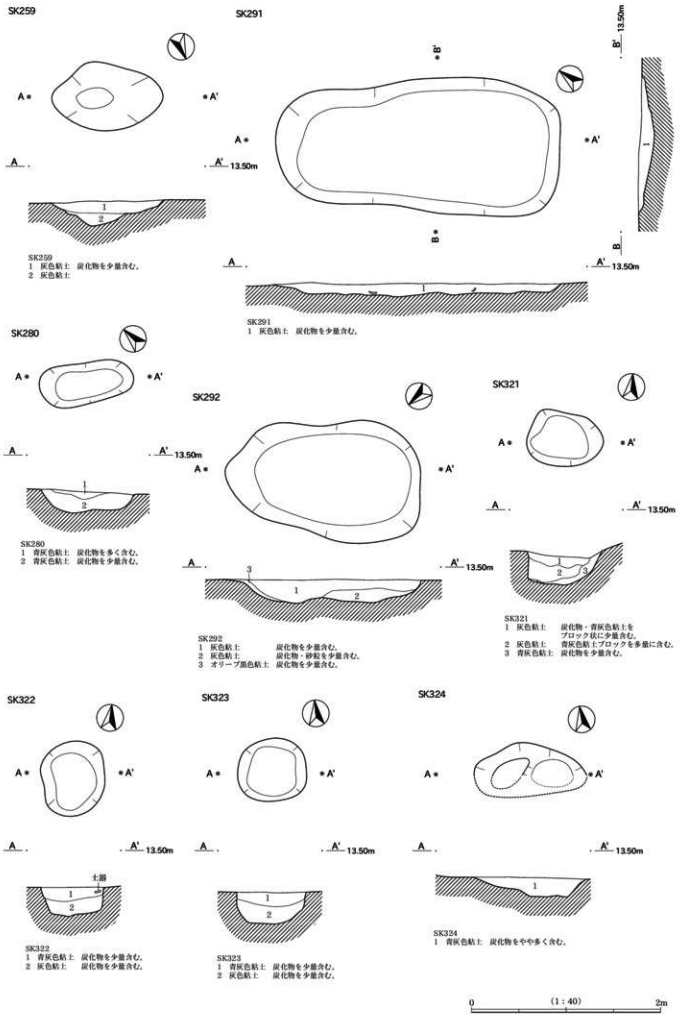
0 断面図（1：40） 2m

0 その他（1：80） 4m

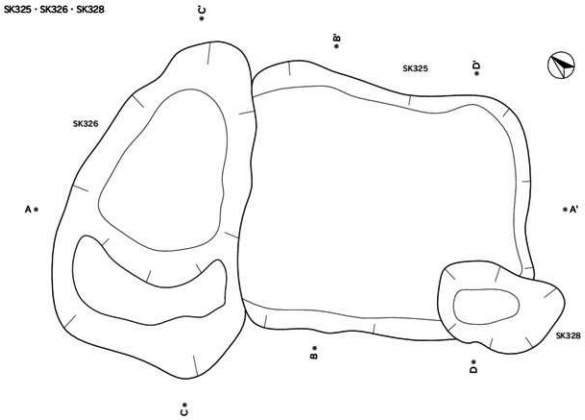

SK202
SK203
SK204
SK210
SK211
SK213
SK216
SK218
SK228
SK231
A
A'
13.50m
SK202
1 明青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK203
1 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK204
1 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK210
1 明黒灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK211
1 明黒灰色粘土　炭化物をやや多く含む。
SK213
1 黒灰色粘土　炭化物を多量に含む。
SK216
1 黒灰色粘土　明緑灰色粘土ブロックと炭化物を多量に含む。
2 明緑灰色粘土　同色砂を含む。
3 黒灰粘土　明緑灰色粘土ブロックと炭化物を多量に含み、一部層状に堆積。
SK218
1 灰色粘土　炭化物を少量含む。
2 にぶい黄褐色砂質シルト　炭化物を多く含む。
SK228
1 青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 灰色粘土　炭化物を多量に含む。
3 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK231
1 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
0
(1：40)
2m

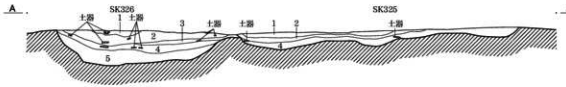

SK232・SK274
A
A'
SK232
SK274
SK237・P236
SK237
P236
SK232
1 青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
3 灰色粘土　炭化物を多量に含む。
4 灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK237
1 灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
3 灰色粘土　青灰色粘土をブロック状に少量含む。炭化物を多量に含む。
4 青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
P236
1 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
2 青灰色粘土　炭化物を少量に含む。
3 灰色粘土　炭化物を多量に含む。
SK274
1 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
2 灰色粘土　炭化物を少量含む。
3 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK238
SK240
P271
SK241
SK238
1 青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
2 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK240
1 青灰色粘土　炭化物を多量に含む。
SK241
1 青灰色粘土　炭化物をやや多く含む。
2 青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK243
SK243
1 灰色粘土　炭化物を少量含む。
0　(1:40)　2m


SK245・246
SK250
SD249
SK253
A
A'
13.50m
SK250
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK245
SK246
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　オリーブ黒色粘土　炭化物を少量含む。
SK246
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　オリーブ黒色粘土　炭化物を少量含む。
SK253
1　灰色粘土　炭化物を多く含む。赤褐色土と、層土を層状に含む。焼土を少量含む。
2　暗灰色粘土　炭化物を多量に含む。粒状の極暗赤褐色土と焼土を多く含む。土器片を少量含む。
3　灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
4　灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
SK254
B
B'
SK254
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土
3　灰色粘土　炭化物を多量に含み、一部層状に堆積。
遺物
0
(1：40)
2m

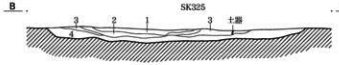

SK259
A
A'
13.50m
1
2
SK259
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土
SK291
B
B'
13.50m
1
2
SK291
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK280
1
2
SK280
1　青灰色粘土　炭化物を多く含む。
2　青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK292
3
1
2
SK292
1　灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　炭化物・砂粒を少量含む。
3　オリーブ黒色粘土　炭化物を少量含む。
SK321
1
2
3
SK321
1　灰色粘土　炭化物・青灰色粘土をブロック状に少量含む。
2　灰色粘土　青灰色粘土ブロックを多量に含む。
3　青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK322
土器
1
2
SK322
1　青灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK323
1
2
SK323
1　青灰色粘土　炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK324
1
SK324
1　青灰色粘土　炭化物をやや多く含む。
0
(1：40)
2m

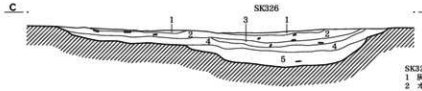
SK325・SK326・SK328



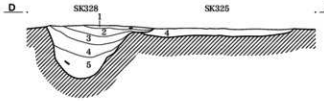


SK325
1　灰色粘土　　炭化物を少量含む。
2　オリーブ黒色粘土　炭化物を多量に含む。
3　黒色粘土　　炭化物を多量に含む。
4　灰色粘土　　炭化物を少量含む。

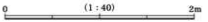


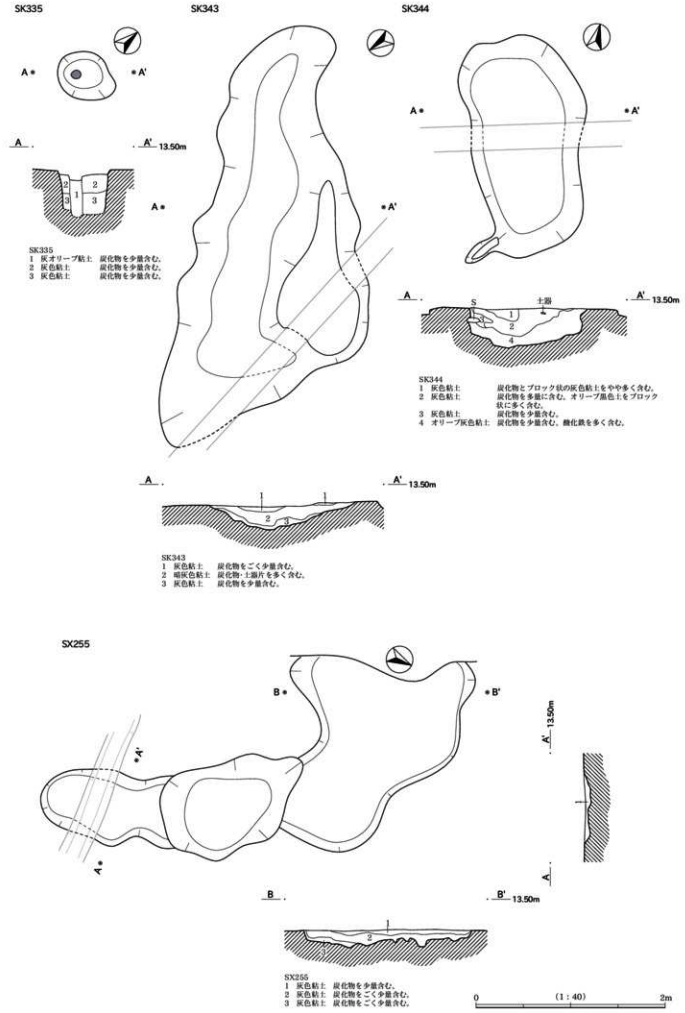


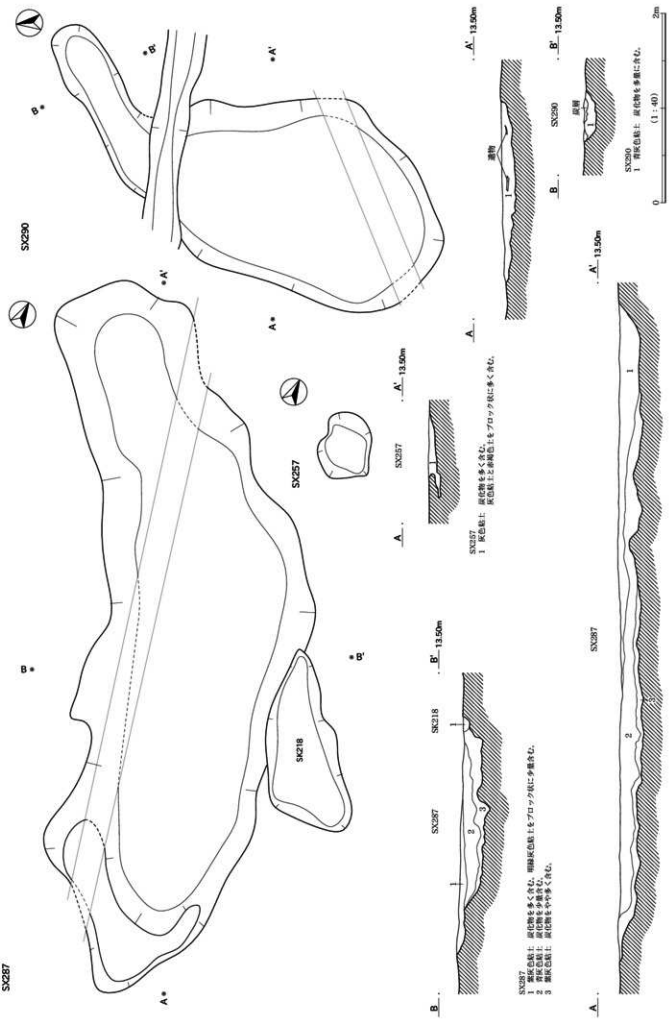
SK326
1　灰色粘土　　炭化物を少量含む。
2　オリーブ黒色粘土　炭化物・灰色粘土ブロックを多量に含む。
3　黒色粘土　　炭化物を多量に含む。
4　オリーブ黒色粘土　炭化物・灰色粘土ブロックを多量に含む。
5　灰色粘土　　炭化物を少量含む。

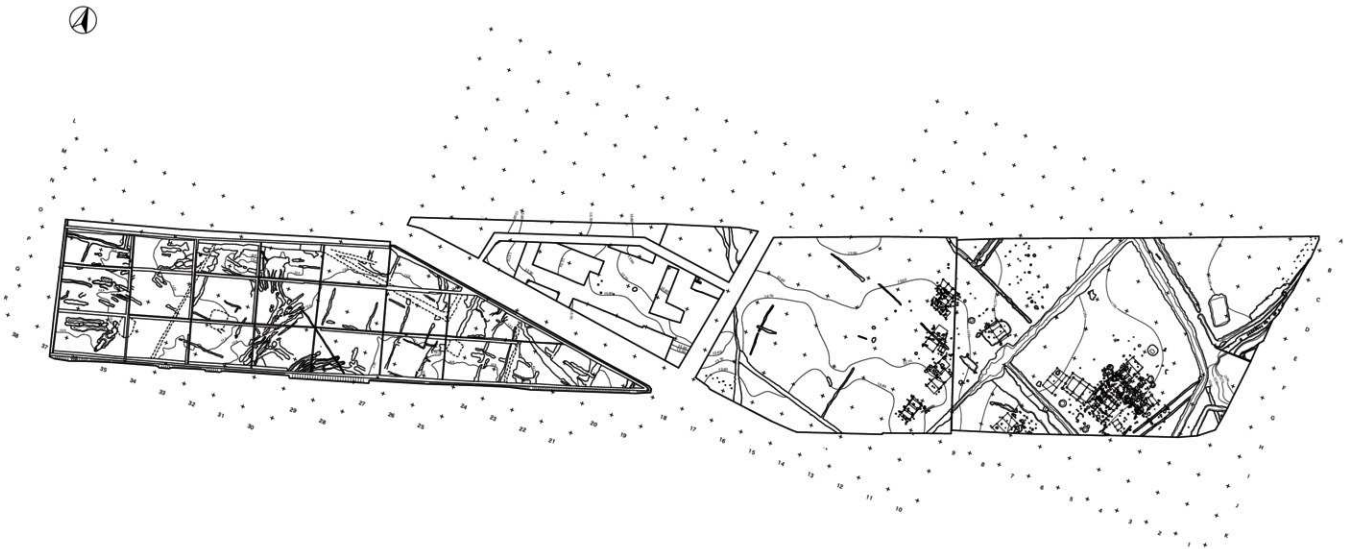


SK328
1　オリーブ黒色粘土　炭化物を多量に含む。
2　オリーブ黒色粘土　炭化物を多く含む。
3　灰色粘土　　炭化物を少量含む。
4　灰色粘土　　炭化物を少量含む。
5　灰色粘土　　炭化物を少量含む。

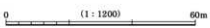


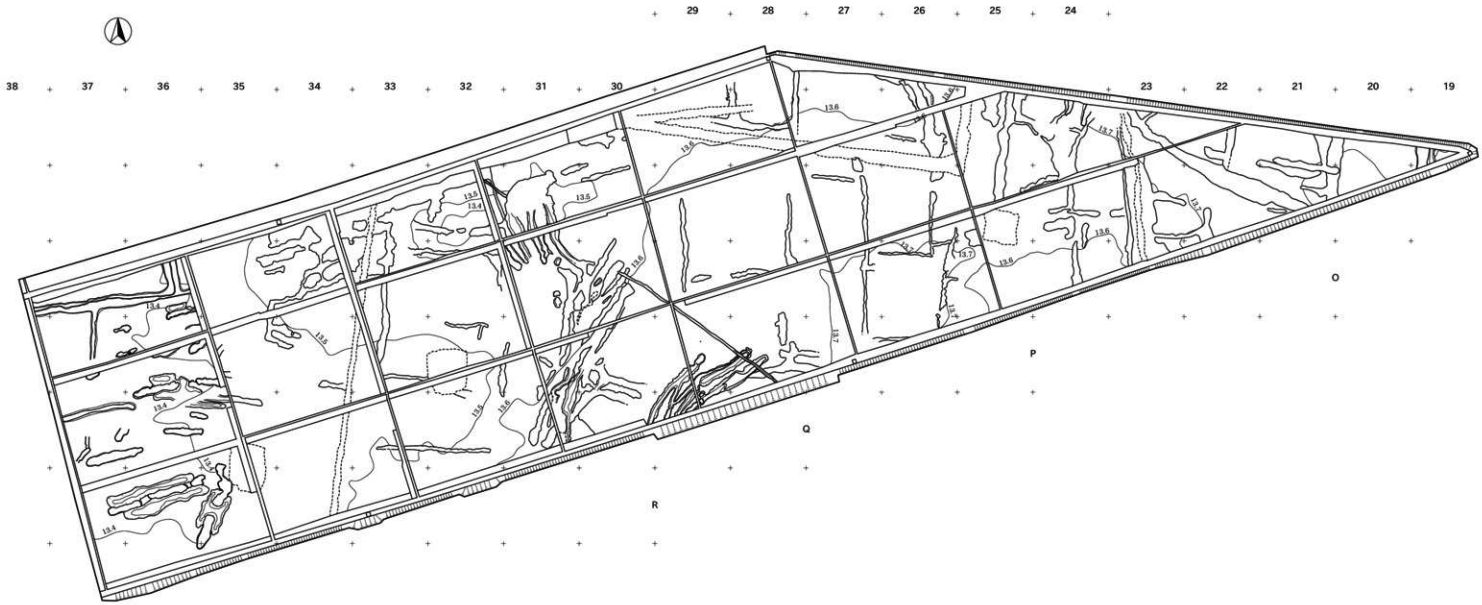

SK335
A
A'
13.50m
2
1
3
SK335
1 灰オリーブ粘土　炭化物を少量含む。
2 灰色粘土　炭化物を少量含む。
3 灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK343
SK343
1 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
2 暗灰色粘土　炭化物・土器片を多く含む。
3 灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK344
S
土器
SK344
1 灰色粘土　炭化物とブロック状の灰色粘土をやや多く含む。
2 灰色粘土　炭化物を多量に含む。オリーブ黒色土をブロック状に多く含む。
3 灰色粘土　炭化物を少量含む。
4 オリーブ灰色粘土　炭化物を少量含む。礫化鉄を多く含む。
SX255
B
B'
SX255
1 灰色粘土　炭化物を少量含む。
2 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
3 灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
0
(1：40)
2m


SX290
SX287
SX257
SK218
A
A'
B
B'
13.50m
遺物
炭層
SX290
1 青灰色粘土：炭化物を多量に含む。
(1：40)
0
2m
SX257
1 灰色粘土：炭化物を多く含む。
灰色粘土と赤褐色土をブロック状に多く含む。
SX287
1 黒灰色粘土：炭化物を多く含む。明緑灰色粘土をブロック状に多量含む。
2 青灰色粘土：炭化物を少量含む。
3 黒灰色粘土：炭化物を中や多く含む。

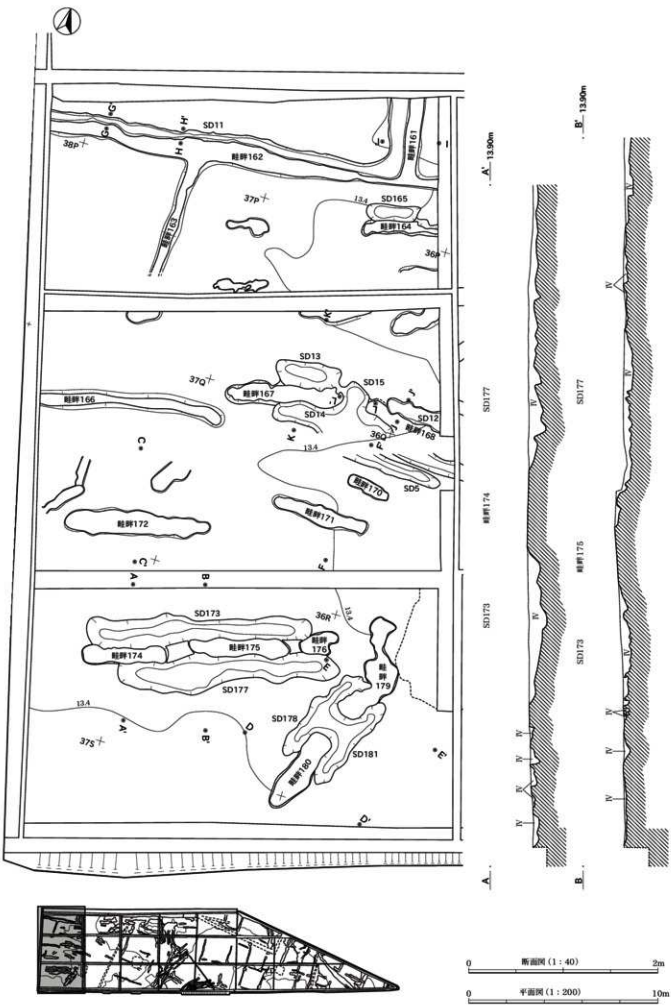


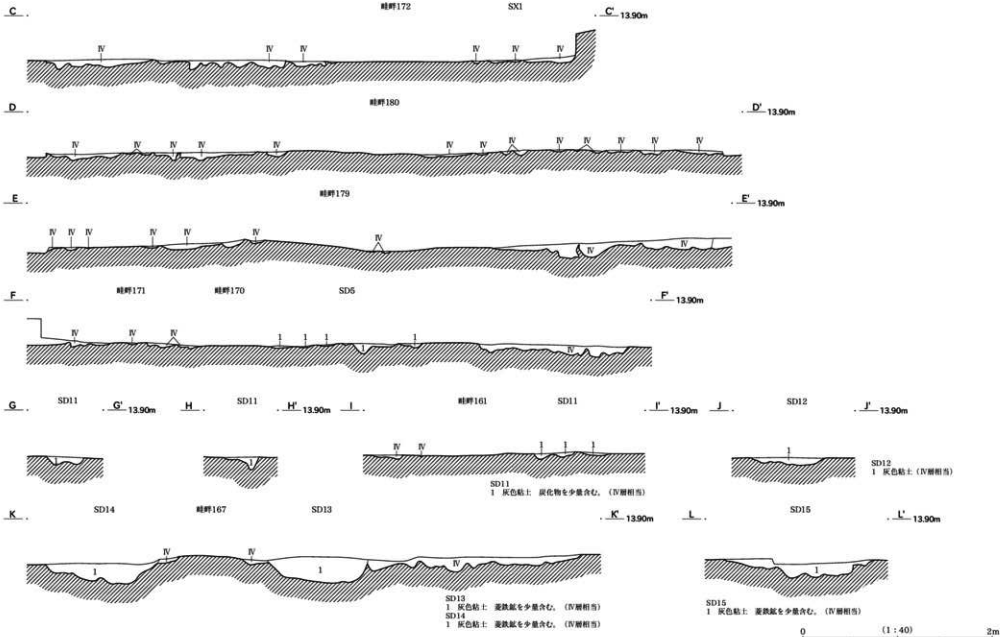
平成21年度
平成15年度
平成14年度

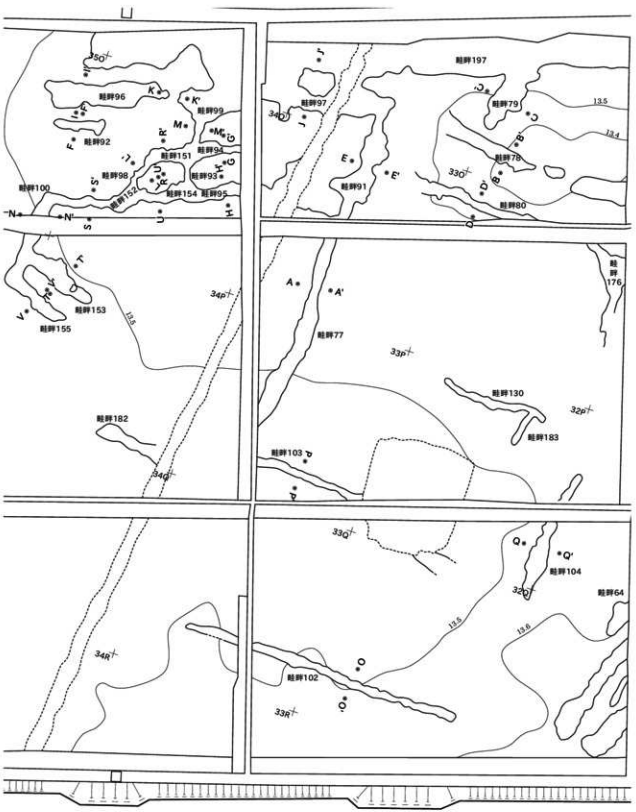

0
(1：1200)
60m



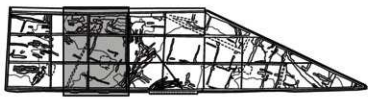
0　(1：500)　25m


SD11
SD165
SD13
SD15
SD14
SD12
SD5
SD173
SD175
SD177
SD178
SD181
SD179
SD180
SD176
SD174
SD177
SD173
SD175
A
A'
B
B'
断面図（1：40）
2m
平面図（1：200）
10m

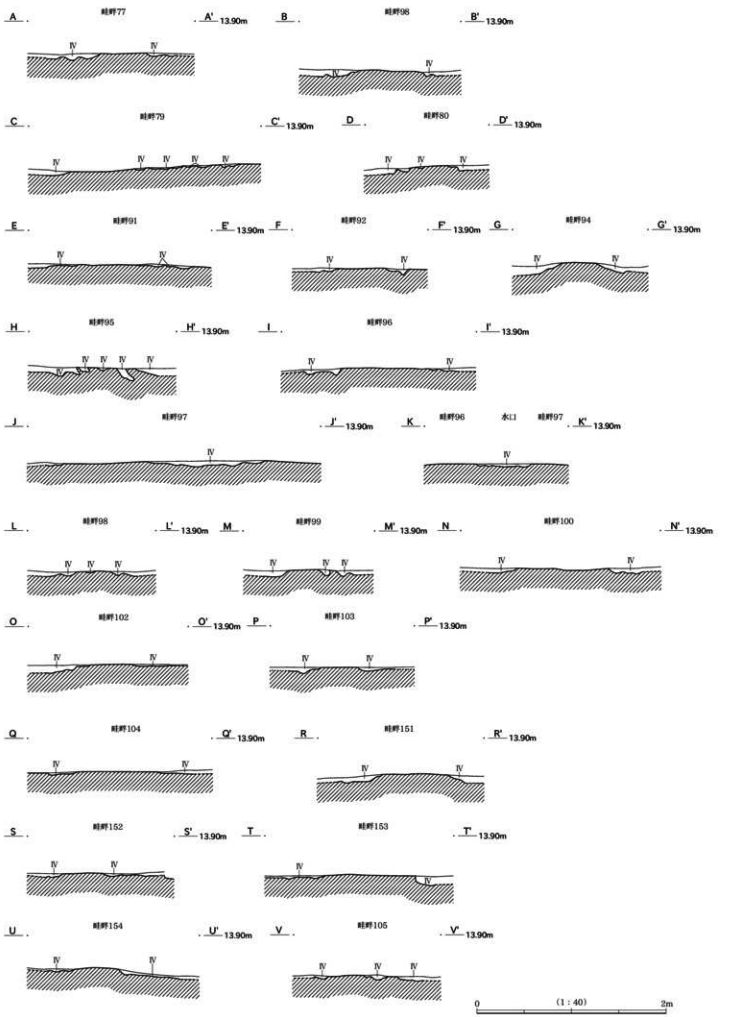

C
畦畔172
SX1
C' 13.90m
D
畦畔180
D' 13.90m
E
畦畔179
E' 13.90m
F
畦畔171
畦畔170
SD5
F' 13.90m
G
SD11
G' 13.90m
H
SD11
H' 13.90m
I
畦畔161
SD11
I' 13.90m
J
SD12
J' 13.90m
SD11
1 灰色粘土 炭化物を少量含む。（Ⅳ層相当）
SD12
1 灰色粘土（Ⅳ層相当）
K
SD14
畦畔167
SD13
K' 13.90m
L
SD15
L' 13.90m
SD13
1 灰色粘土 菱鉄鉱を少量含む。（Ⅳ層相当）
SD14
1 灰色粘土 菱鉄鉱を少量含む。（Ⅳ層相当）
SD15
1 灰色粘土 菱鉄鉱を少量含む。（Ⅳ層相当）
0 (1：40) 2m

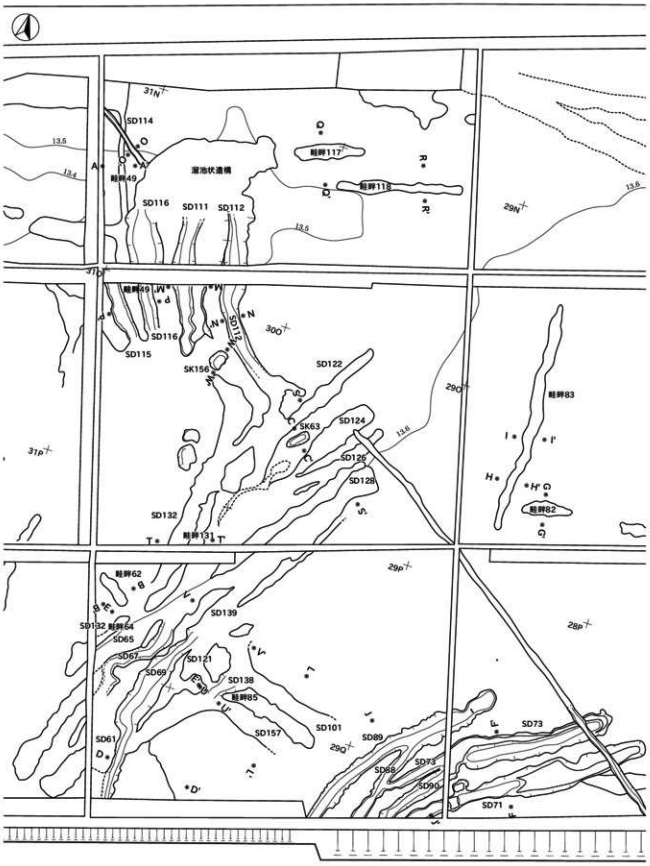


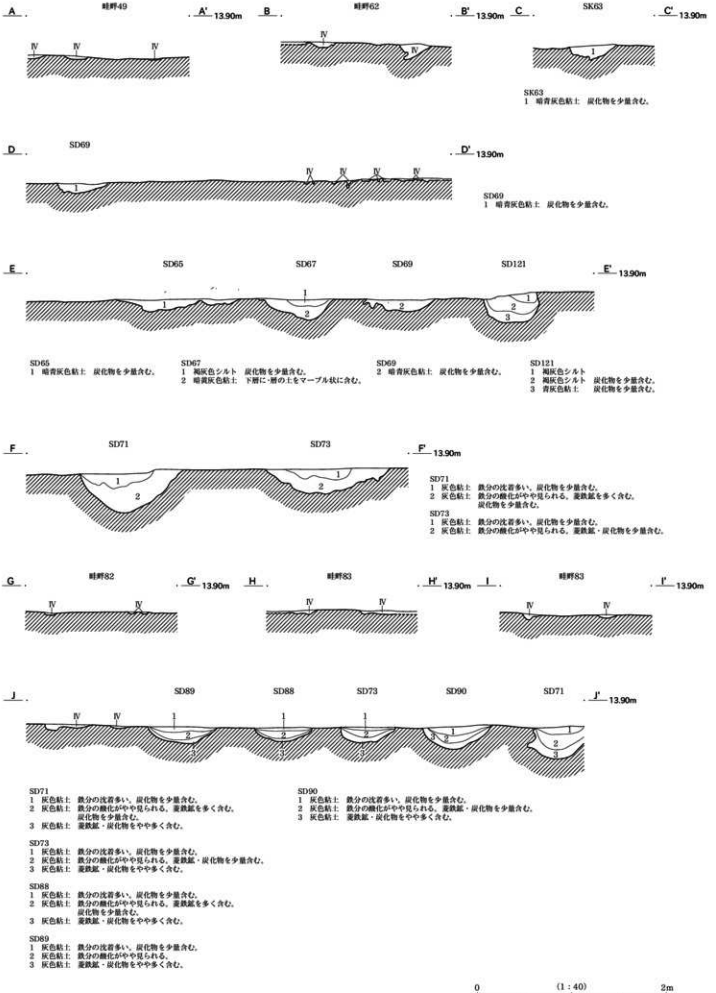
35O
I'
K
K'
I
F'
M
M'
G'
F
L'
R'
H'
G
S'
U
R
H
N
N'
S
U
H
J'
J
C'
C
B'
B
D'
D
E
E'
A
A'
P
P'
Q
Q'
O
O'
13.5
13.4
13.6
34O
33O
34P
33P
32P
34Q
33Q
32Q
34R
33R
鞋畔96
鞋畔99
鞋畔92
鞋畔151
鞋畔94
鞋畔98
鞋畔93
鞋畔100
鞋畔152
鞋畔154
鞋畔95
鞋畔197
鞋畔97
鞋畔79
鞋畔78
鞋畔91
鞋畔80
鞋畔153
鞋畔155
鞋畔182
鞋畔77
鞋畔176
鞋畔130
鞋畔183
鞋畔103
鞋畔104
鞋畔64
鞋畔102

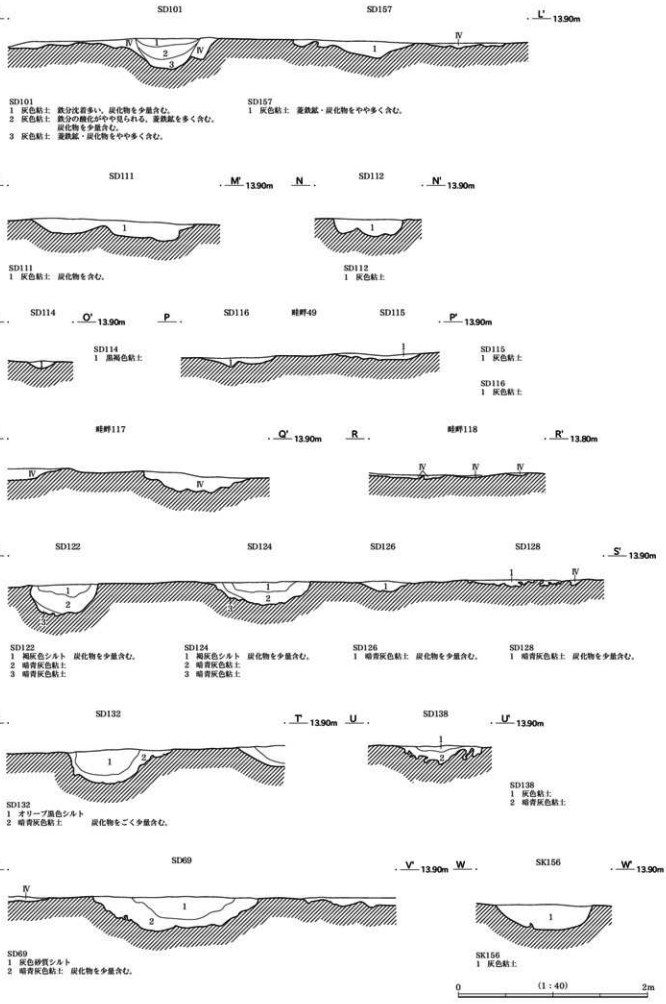


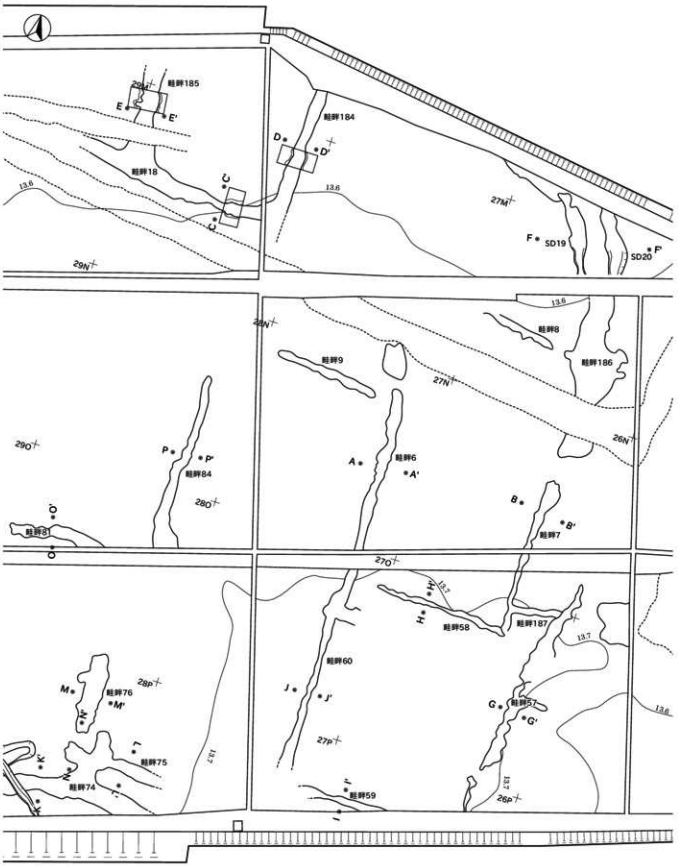
0　(1：200)　10m


A
畦畔77
A' 13.90m
B
畦畔98
B' 13.90m
C
畦畔79
C' 13.90m
D
畦畔80
D' 13.90m
E
畦畔91
E' 13.90m
F
畦畔92
F' 13.90m
G
畦畔94
G' 13.90m
H
畦畔95
H' 13.90m
I
畦畔96
I' 13.90m
J
畦畔97
J' 13.90m
K
畦畔96
水口
畦畔97
K' 13.90m
L
畦畔98
L' 13.90m
M
畦畔99
M' 13.90m
N
畦畔100
N' 13.90m
O
畦畔102
O' 13.90m
P
畦畔103
P' 13.90m
Q
畦畔104
Q' 13.90m
R
畦畔151
R' 13.90m
S
畦畔152
S' 13.90m
T
畦畔153
T' 13.90m
U
畦畔154
U' 13.90m
V
畦畔105
V' 13.90m
Ⅳ
0
(1：40)
2m

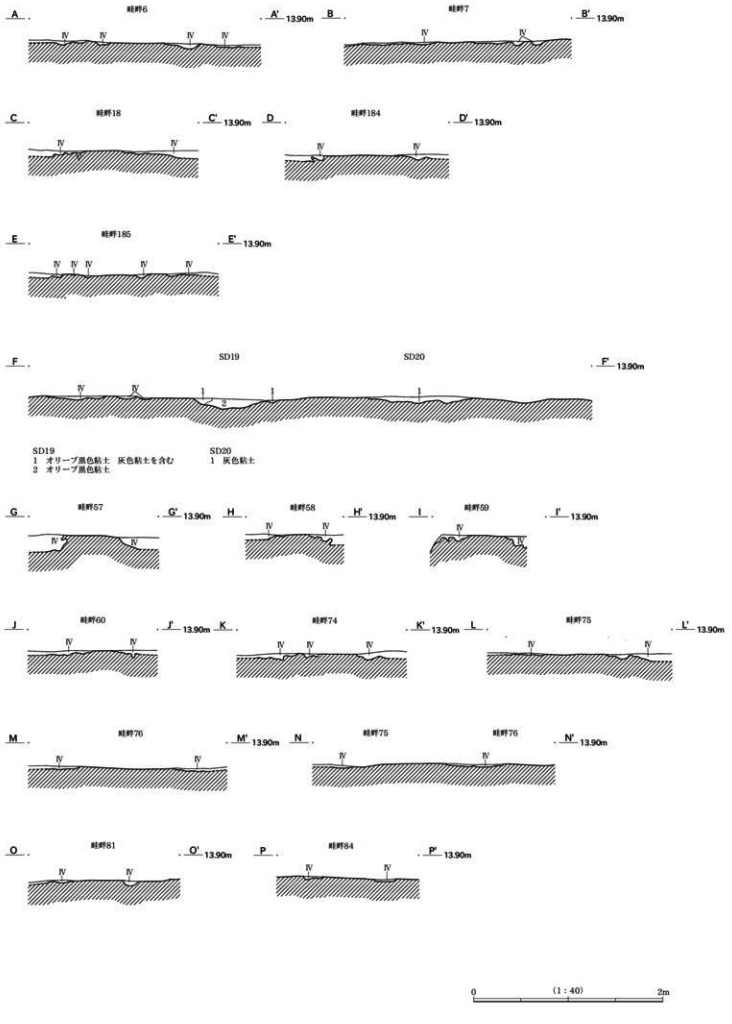

SD114
13.5
13.4
A
A'
SD116
SD111
SD112
13.5
29N
13.6
31N
SD116
SD115
SK156
SD122
SK63
SD124
SD126
SD128
SD132
31P
29O
13.6
29P
28P
SD139
SD67
SD69
SD121
SD138
SD157
SD101
SD89
SD61
SD73
SD68
SD90
SD71
0
(1 : 200)
10m

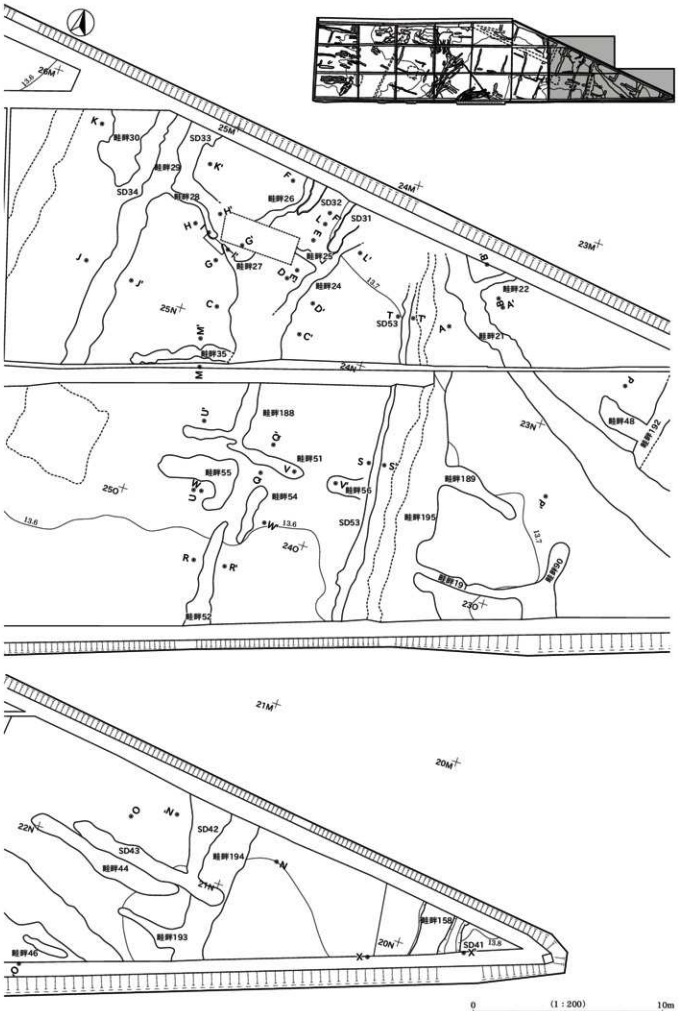

A
畦畔49
A'
13.90m
B
畦畔62
B'
13.90m
C
SK63
C'
13.90m
SK63
1　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
D
SD69
D'
13.90m
SD69
1　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
E
SD65
SD67
SD69
SD121
E'
13.90m
SD65
1　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SD67
1　褐灰色シルト　炭化物を少量含む。
2　暗黄灰色粘土　下層に・層の土をマーブル状に含む。
SD69
2　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SD121
1　褐灰色シルト
2　褐灰色シルト　炭化物を少量含む。
3　青灰色粘土　炭化物を少量含む。
F
SD71
SD73
F'
13.90m
SD71
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる、炭鉄鉱を多く含む。
炭化物を少量含む。
SD73
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる、炭鉄鉱・炭化物を少量含む。
G
畦畔82
G'
13.90m
H
畦畔83
H'
13.90m
I
畦畔83
I'
13.90m
J
SD89
SD88
SD73
SD90
SD71
J'
13.90m
SD71
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる、炭鉄鉱を多く含む。
炭化物を少量含む。
3　灰色粘土　炭鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
SD73
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる、炭鉄鉱・炭化物を少量含む。
3　灰色粘土　炭鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
SD88
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる、炭鉄鉱を多く含む。
炭化物を少量含む。
3　灰色粘土　炭鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
SD89
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる。
3　灰色粘土　炭鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
SD90
1　灰色粘土　鉄分の沈着多い、炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の酸化がやや見られる、炭鉄鉱・炭化物を少量含む。
3　灰色粘土　炭鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
0
(1：40)
2m

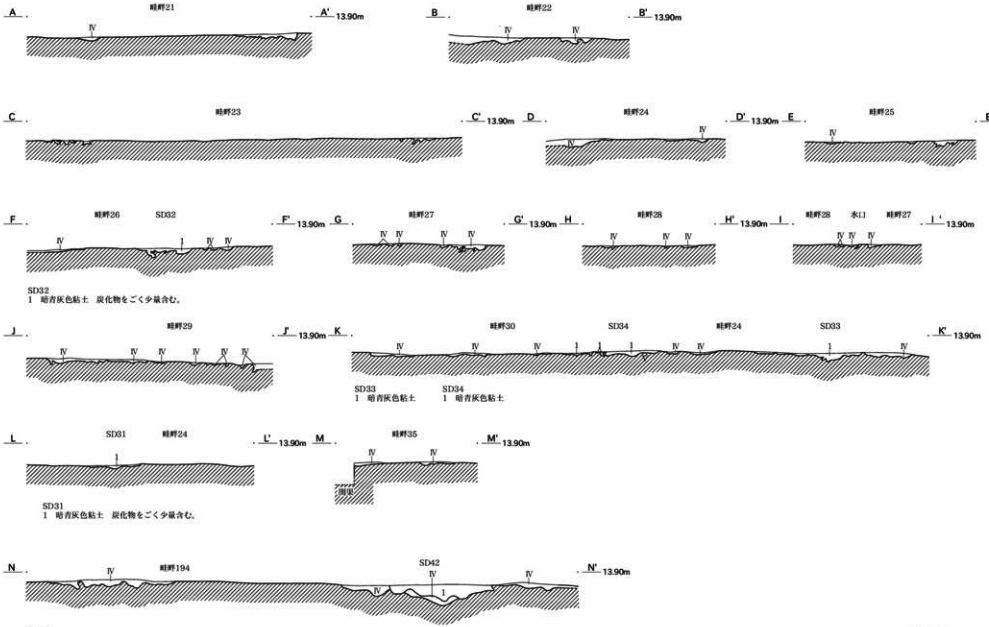

L
SD101
SD157
L' 13.90m
SD101
1　灰色粘土　鉄分化若干多い。炭化物を少量含む。
2　灰色粘土　鉄分の機化がやや見られる。遺鉄鉱を多く含む。炭化物を少量含む。
3　灰色粘土　遺鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
SD157
1　灰色粘土　遺鉄鉱・炭化物をやや多く含む。
M
SD111
M' 13.90m
N
SD112
N' 13.90m
SD111
1　灰色粘土　炭化物を含む。
SD112
1　灰色粘土
O
SD114
O' 13.90m
P
SD116
畦畔49
SD115
P' 13.90m
SD114
1　黒褐色粘土
SD115
1　灰色粘土
SD116
1　灰色粘土
Q
畦畔117
Q' 13.90m
R
畦畔118
R' 13.80m
S
SD122
SD124
SD126
SD128
S' 13.90m
SD122
1　褐灰色シルト　炭化物を少量含む。
2　暗青灰色粘土
3　暗青灰色粘土
SD124
1　褐灰色シルト　炭化物を少量含む。
2　暗青灰色粘土
3　暗青灰色粘土
SD126
1　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SD128
1　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
T
SD132
T' 13.90m
U
SD138
U' 13.90m
SD132
1　オリーブ黒色シルト
2　暗青灰色粘土　炭化物をごく少量含む。
SD138
1　灰色粘土
2　暗青灰色粘土
V
SD69
V' 13.90m
W
SK156
W' 13.90m
SD69
1　灰色砂質シルト
2　暗青灰色粘土　炭化物を少量含む。
SK156
1　灰色粘土
0
(1：40)
2m

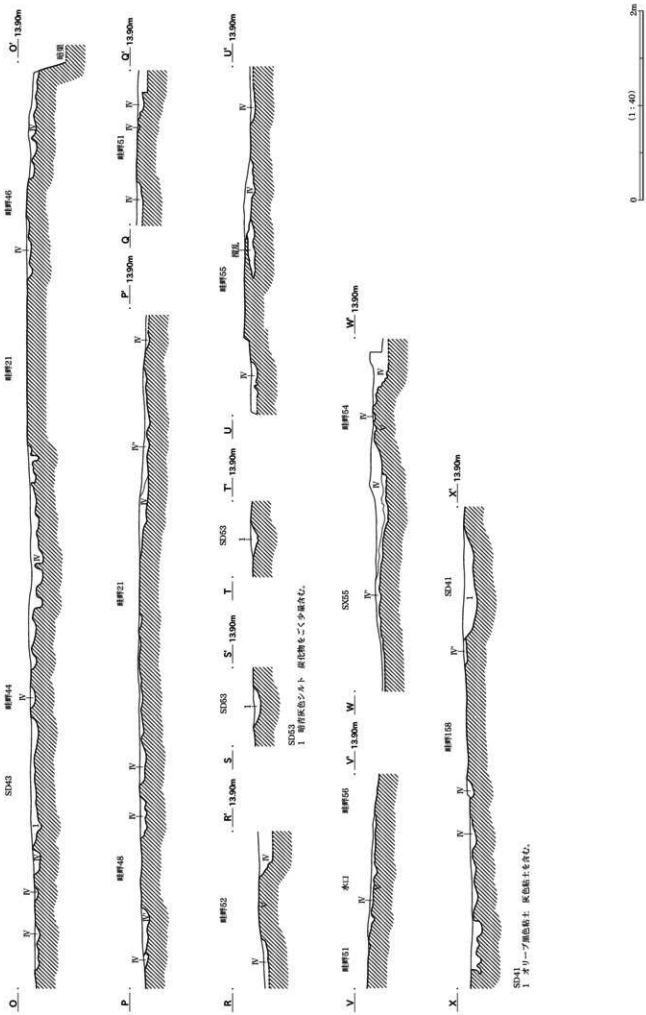

畦畔185
畦畔184
畦畔18
畦畔8
畦畔186
畦畔9
畦畔84
畦畔6
畦畔7
畦畔81
畦畔58
畦畔187
畦畔60
畦畔76
畦畔75
畦畔74
畦畔57
畦畔59
SD19
SD20
29N
28N
27N
26N
290
280
270
28p
27p
26p
13.6
13.7
13.8

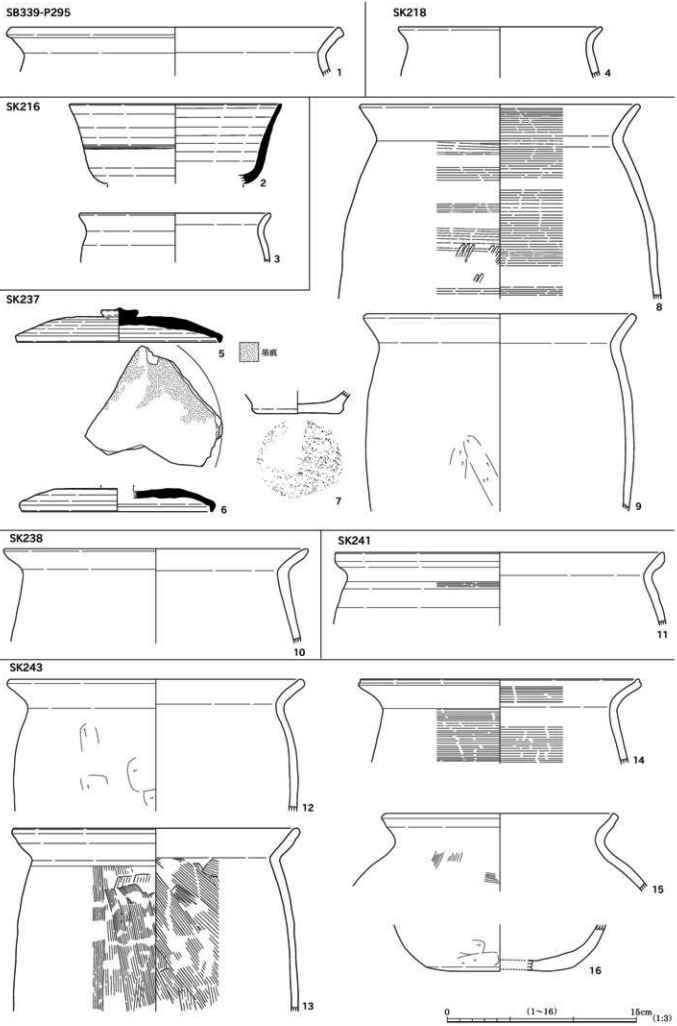
0　(1：200)　10m

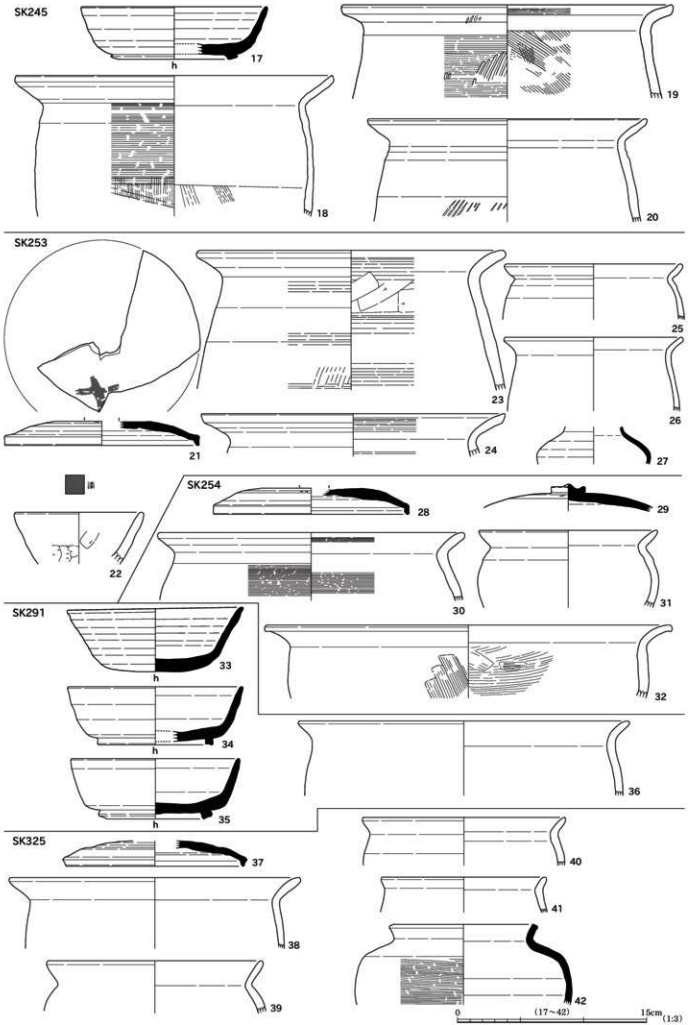

A
畦畔6
A'
13.90m
B
畦畔7
B'
13.90m
C
畦畔18
C'
13.90m
D
畦畔184
D'
13.90m
E
畦畔185
E'
13.90m
F
SD19
SD20
F'
13.90m
SD19
1 オリーブ黒色粘土　灰色粘土を含む
2 オリーブ黒色粘土
SD20
1 灰色粘土
G
畦畔57
G'
13.90m
H
畦畔58
H'
13.90m
I
畦畔59
I'
13.90m
J
畦畔60
J'
13.90m
K
畦畔74
K'
13.90m
L
畦畔75
L'
13.90m
M
畦畔76
M'
13.90m
N
畦畔75
畦畔76
N'
13.90m
O
畦畔81
O'
13.90m
P
畦畔84
P'
13.90m
0
(1：40)
2m

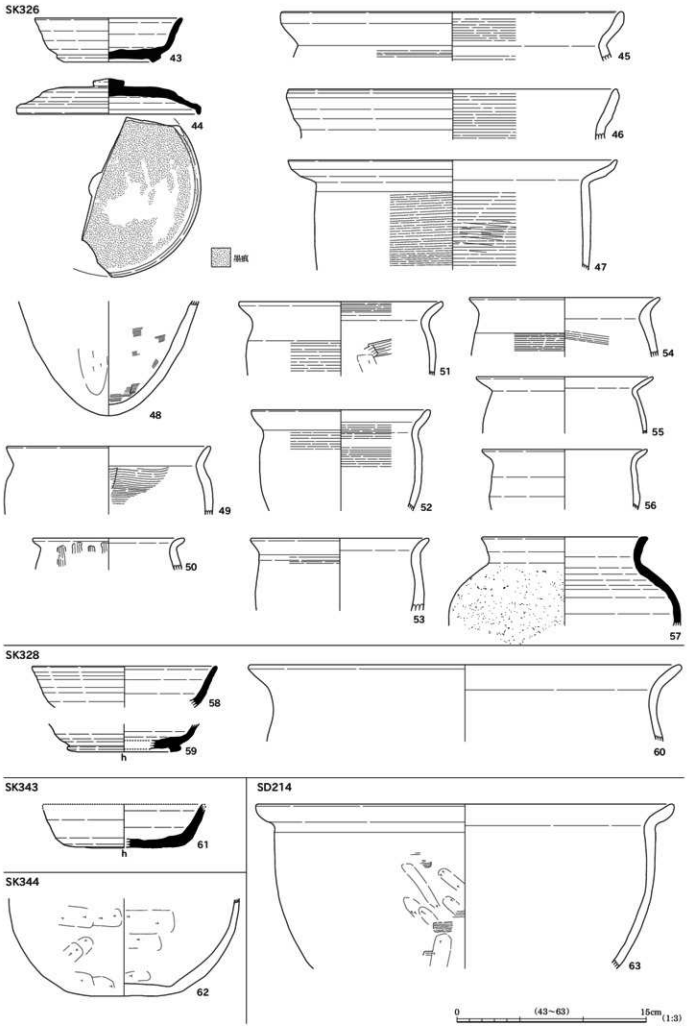

竪穴30
竪穴29
竪穴28
竪穴27
竪穴26
竪穴25
竪穴24
竪穴22
竪穴21
竪穴35
竪穴188
竪穴51
竪穴55
竪穴54
竪穴56
竪穴189
竪穴195
竪穴52
竪穴48
竪穴102
竪穴190
竪穴10
竪穴194
竪穴44
竪穴193
竪穴46
竪穴158
SD33
SD34
SD32
SD31
SD53
SD42
SD43
SD41
0
(1：200)
10m

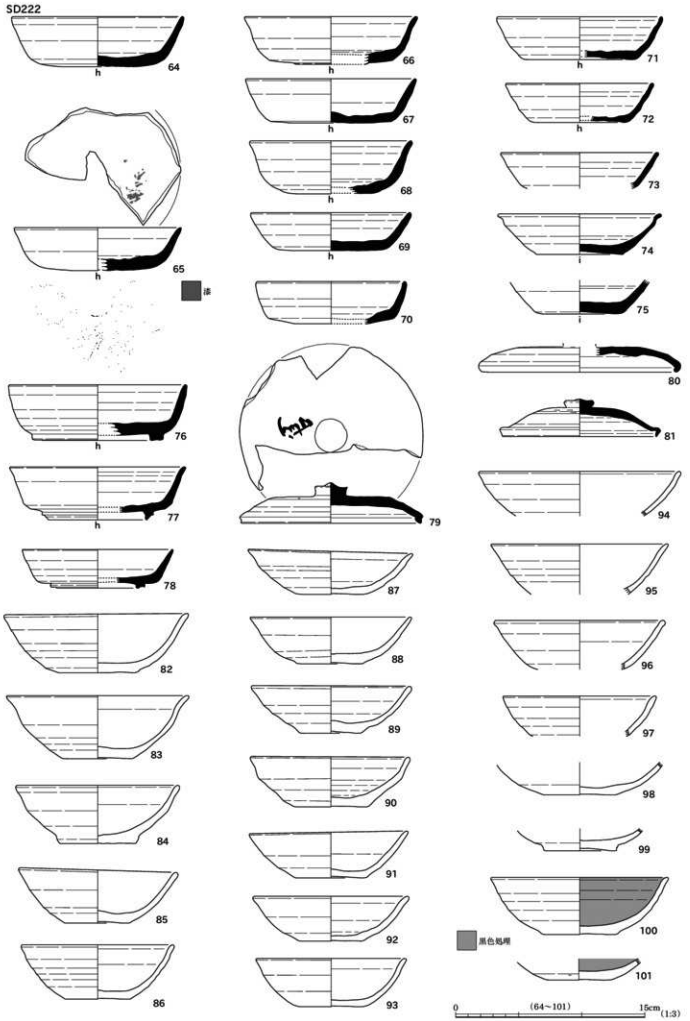

A
畦畔21
A' 13.90m
B
畦畔22
B' 13.90m
C
畦畔23
C' 13.90m
D
畦畔24
D' 13.90m
E
畦畔25
E' 13.90m
F
畦畔26
SD32
F' 13.90m
G
畦畔27
G' 13.90m
H
畦畔28
H' 13.90m
I
畦畔28
水口1
畦畔27
I' 13.90m
SD32
1 暗青灰色粘土 炭化物をごく少量含む。
J
畦畔29
J' 13.90m
K
畦畔30
SD34
畦畔24
SD33
K' 13.90m
SD33
1 暗青灰色粘土
SD34
1 暗青灰色粘土
L
SD31
畦畔24
L' 13.90m
M
畦畔35
M' 13.90m
撹乱
SD31
1 暗青灰色粘土 炭化物をごく少量含む。
N
畦畔194
SD42
N' 13.90m
SD42
1 黒色粘土
0
(1：40)
2m

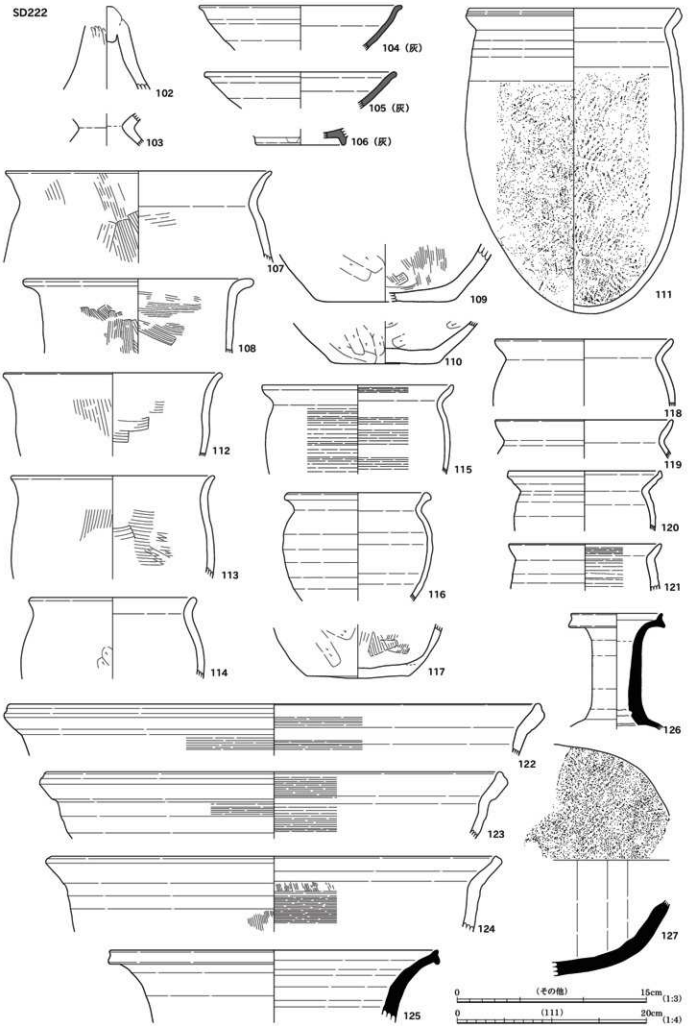

O
O'
P
P'
Q
Q'
R
R'
S
S'
T
T'
U
U'
V
V'
W
W'
X
X'
SD43
SD53
SD55
SD41
SD53
1 暗青灰色シルト 炭化物をごく少量含む。
SD41
1 オリーブ黒色粘土 灰色粘土を含む。
(1：40)
0
2m

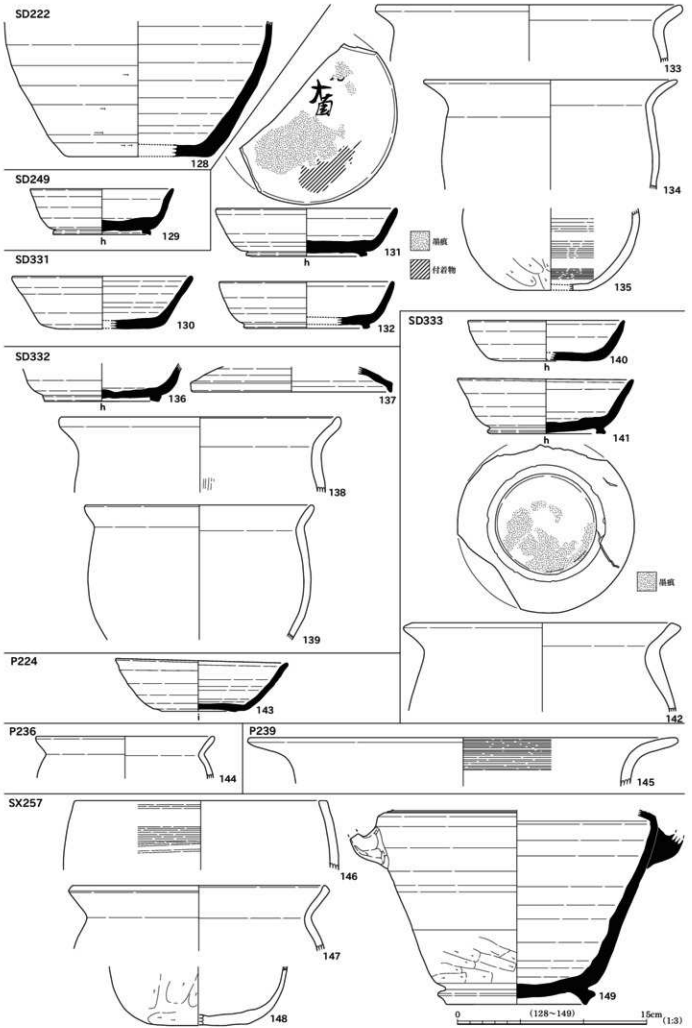

SB339-P295
1
SK218
4
SK216
2
3
8
SK237
5
黒斑
6
7
9
SK238
10
SK241
11
SK243
12
14
15
13
16
0
(1~16)
15cm
(1:3)

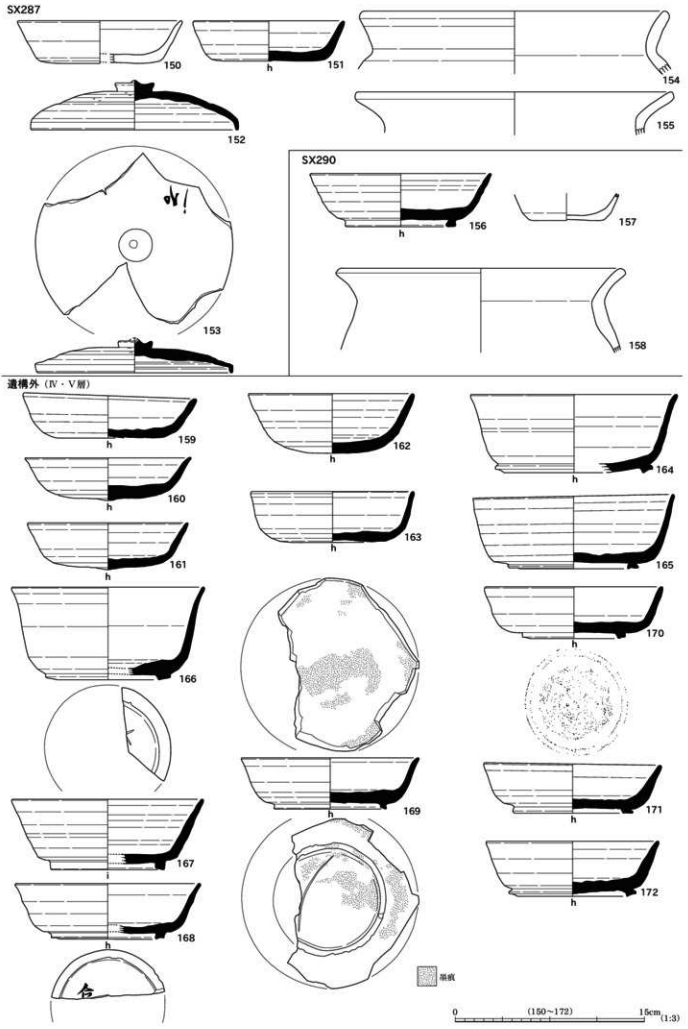

SK245
17
19
18
20
SK253
25
23
26
21
24
27
SK254
28
29
22
30
31
SK291
33
32
34
36
35
SK325
37
40
41
38
42
39
0
(17～42)
15cm
(1:3)


SK326
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
SK328
58
59
60
SK343
61
SK344
62
SD214
63
0
(43～63)
15cm
(1:3)

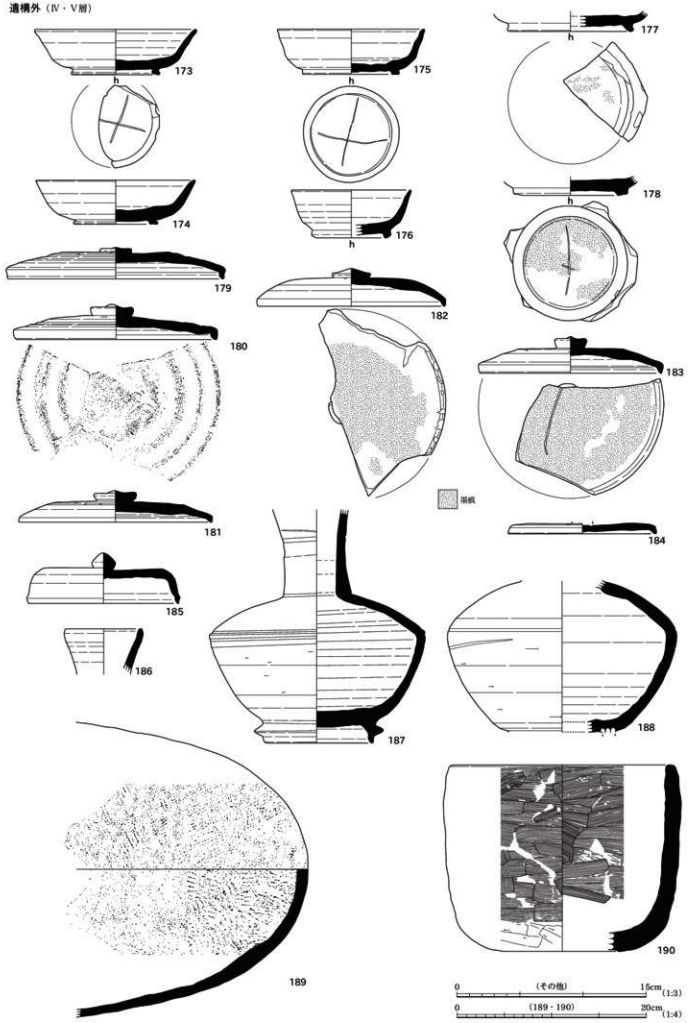

SD222
64
65
漆
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
黒色処理
0
(64～101)
15cm
(1:3)

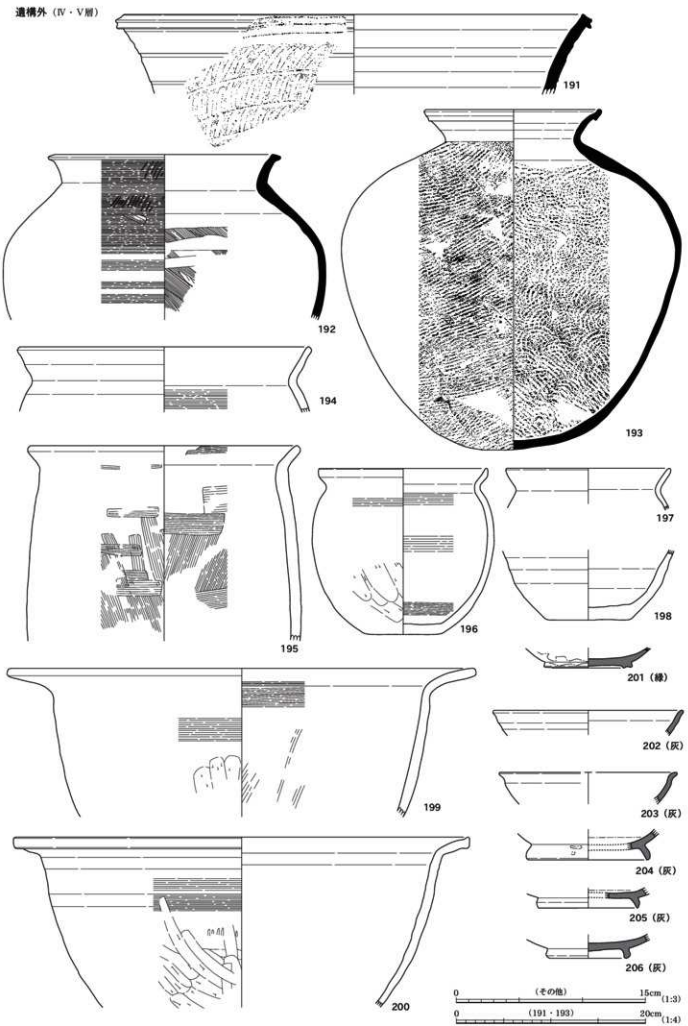

SD222
102
103
104（灰）
105（灰）
106（灰）
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
0　（その他）　15cm　(1:3)
0　（111）　20cm　(1:4)

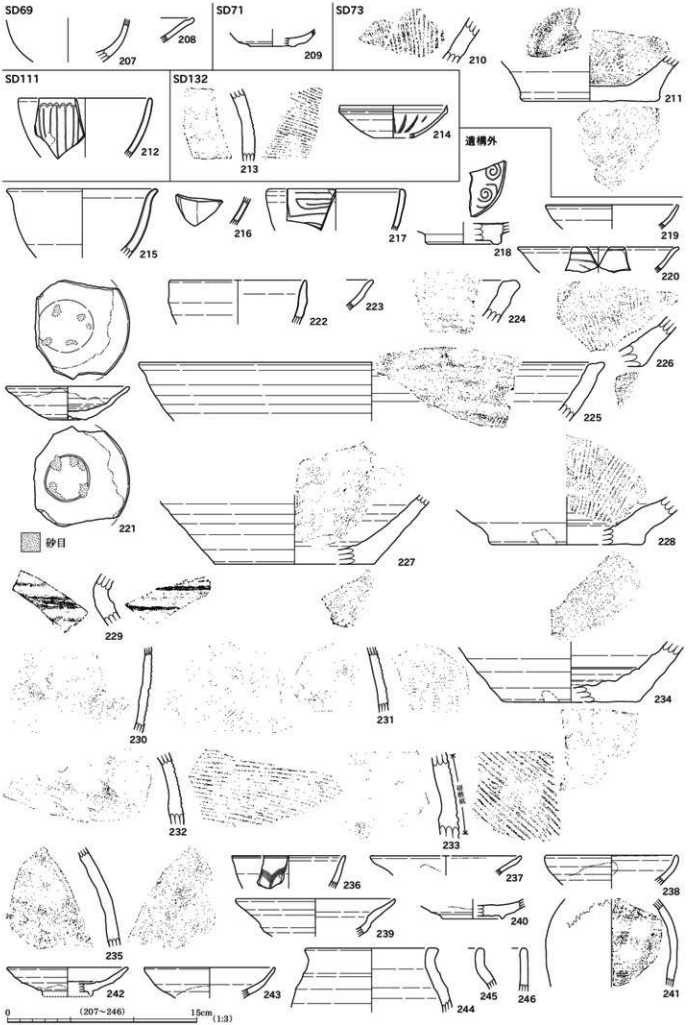

SD222
128
SD249
129
131
SD331
130
132
SD332
136
137
138
139
P224
143
P236
144
P239
145
SX257
146
147
148
SD333
140
141
142
133
134
135
黒斑
付着物
0
(128~149)
15cm
(1:3)

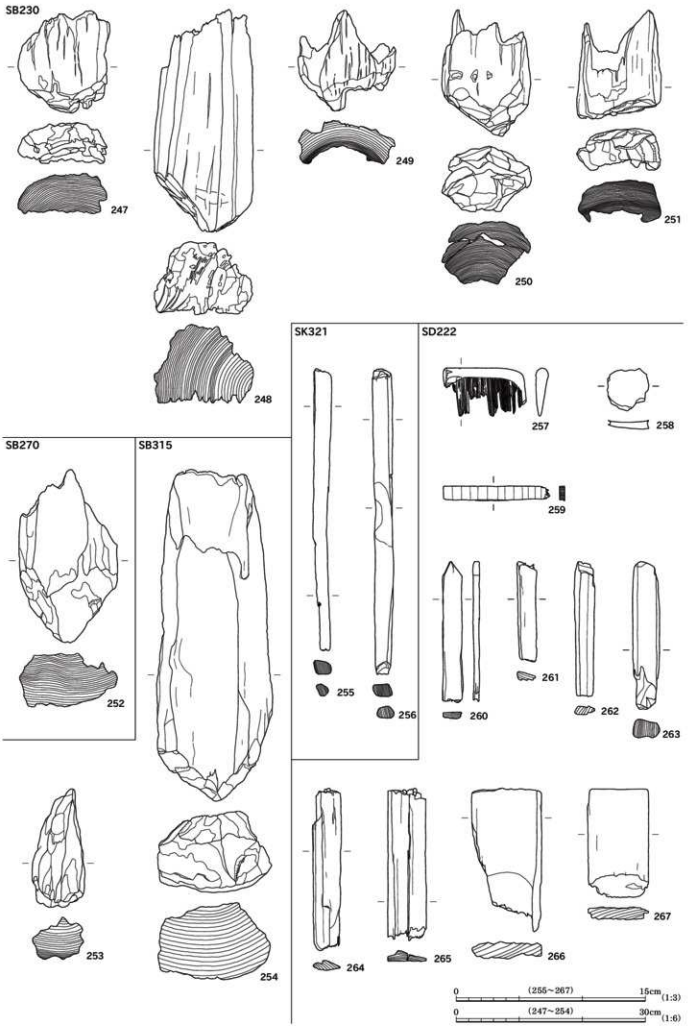

SX287
150
151
h
152
153
154
155
SX290
156
h
157
158
遺構外（Ⅳ・Ⅴ層）
159
h
160
h
161
h
162
h
163
h
164
h
165
166
167
i
168
h
169
h
170
h
171
h
172
h
合
黒痕
0
(150～172)
15cm
(1:3)

遺構外（Ⅳ・Ⅴ層）

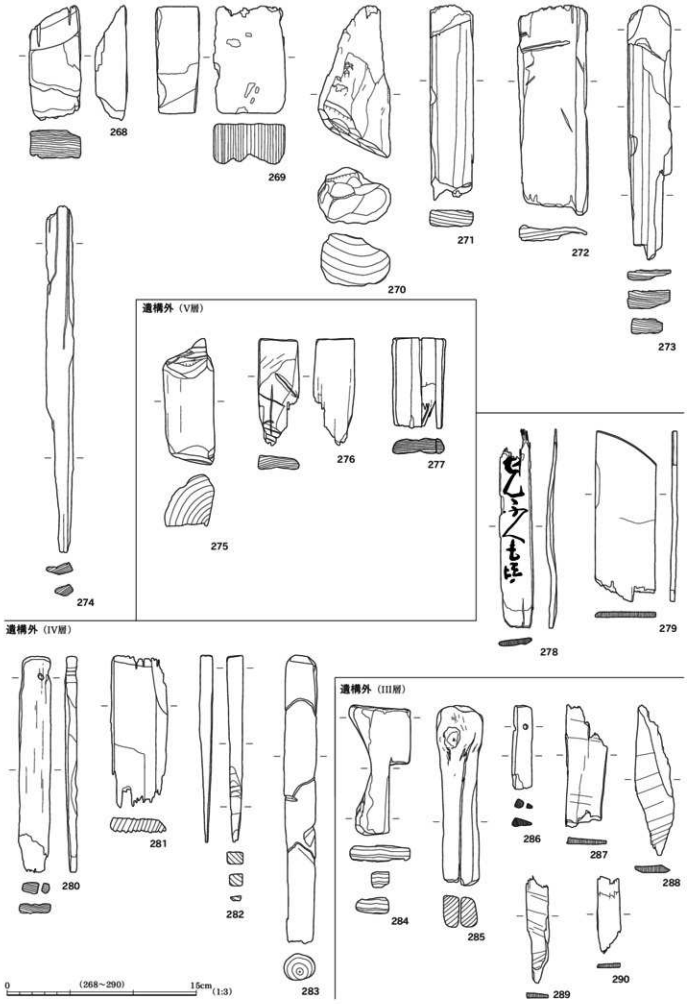

173
h
174
175
h
176
h
177
h
178
h
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
黒紙
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
（189・190）
20cm
(1:4)


遺構外（Ⅳ・Ⅴ層）
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201（縁）
202（灰）
203（灰）
204（灰）
205（灰）
206（灰）
0　（その他）　15cm　(1:3)
0　（191・193）　20cm　(1:4)

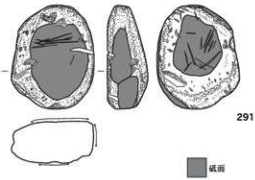

SD69
SD71
SD73
SD111
SD132
遺構外
砂目
0
(207～246)
15cm
(1:3)


SB230
247
248
249
250
251
SK321
255
256
SD222
257
258
259
260
261
262
263
SB270
252
253
SB315
254
264
265
266
267
0 (255~267) 15cm (1:3)
0 (247~254) 30cm (1:6)

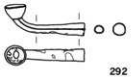
SD222


268
269
270
271
272
273
274
遺構外（V層）
275
276
277
278
279
遺構外（IV層）
280
281
282
283
遺構外（III層）
284
285
286
287
288
289
290
0
（268～290）
15cm
(1:3)

SK254



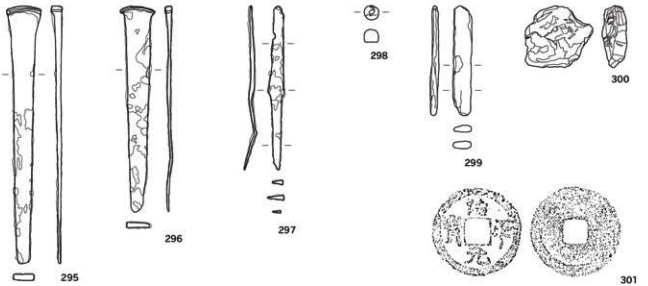
SD89

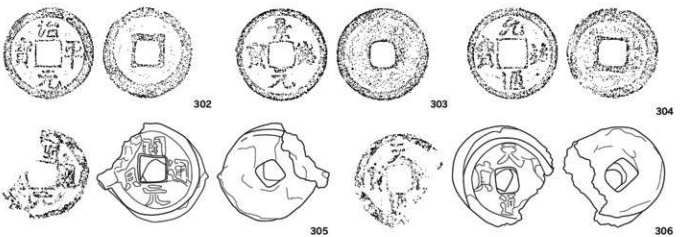


SD90

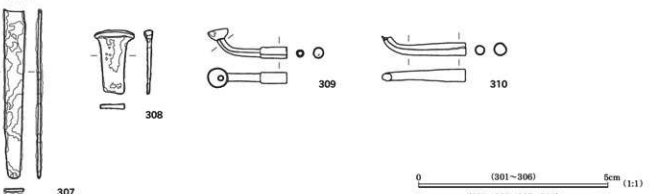
SD111

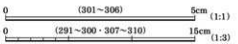
遺構外（Ⅳ層）

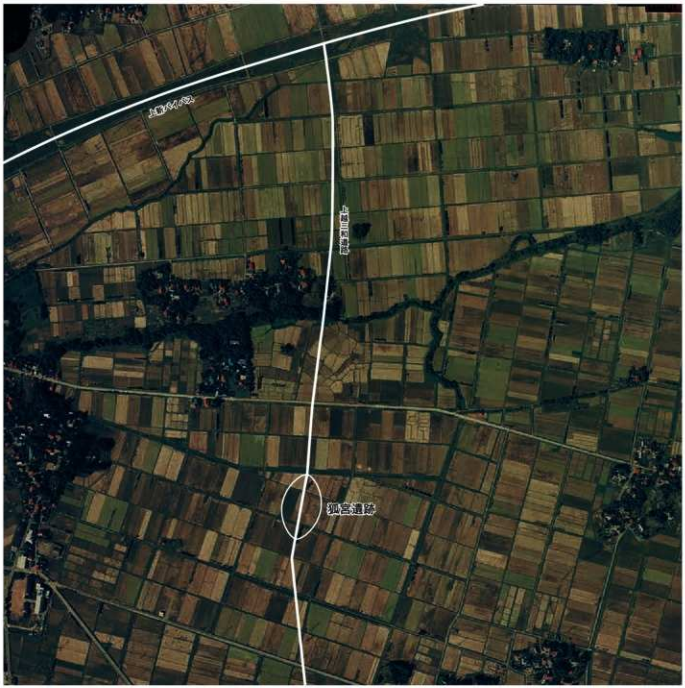




遺構外（Ⅲ層）







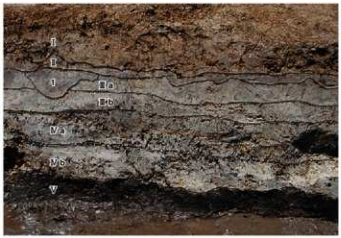
遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院　昭和50年9月25日撮影　空中写真）

遺跡遠景（調査前、北から）

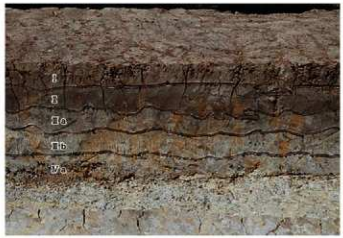
遺跡近景（北から）

遺跡全景（上空から）

遺物集合写真



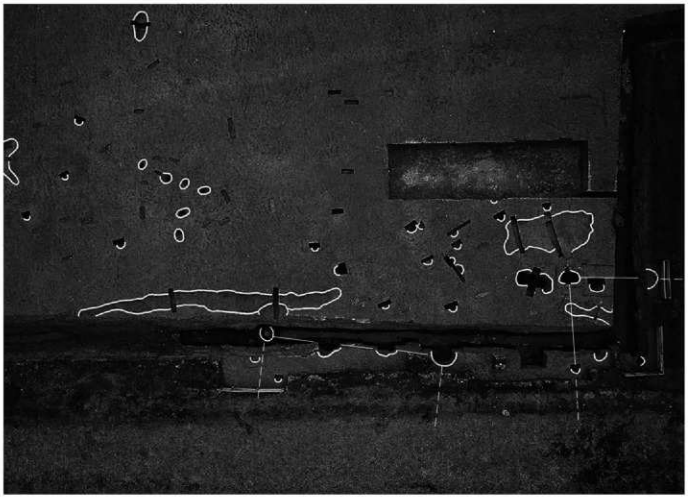
15A　基本層序（東から）



15C　基本層序（南から）

SE2013　土層断面（南から）

SE2013　遺物出土状況（南から）



SB14　周辺（上空から）

SB14-P2033　土層断面（南から）

SB14-P2036　土層断面（南から）

SB14-P2035　土層断面（南から）

SB14-P2051　土層断面（南から）

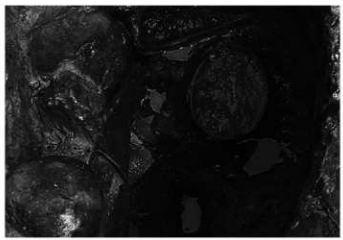
SB15　完掘（南から）

SB15-P2038　土層断面（南から）

SB15-P2039　土層断面（東から）

SB15-P2071　土層断面（南から）

SE2013　完掘（南から）


SE2013　遺物出土状況（南から）

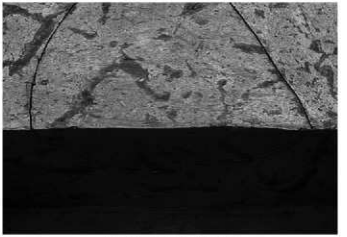
SK2011　土層断面（南から）

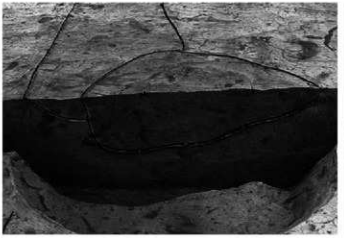
SK2014　土層断面（北から）

SK2017　遺物出土状況（西から）

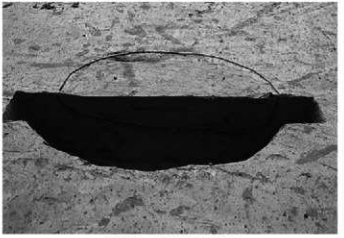
SK2019　土層断面（東から）

SK2044・SD2043　土層断面（西から）


SK2052　土層断面（南から）


SK2065・SD2066　土層断面（北東から）

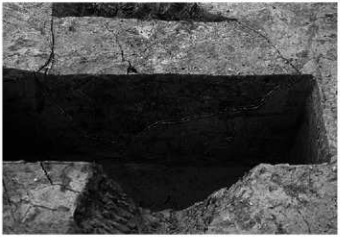
SK2067　土層断面（東から）


SK2068　土層断面（東から）

SK2081　土層断面（南から）

SK2085　土層断面（南西から）

SD2003　土層断面（南東から）


SD2012　断層断面（南から）

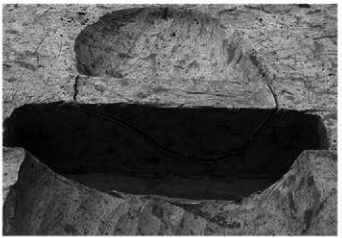
SD2015　土層断面（東から）

SD2016　土層断面（北から）

SD2020　土層断面（北東から）

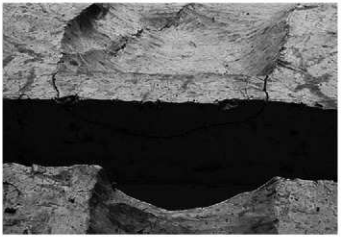
SD2041　土層断面（西から）

SD2043　土層断面（西から）


SD2061　土層断面（東から）

SD2063　土層断面（北から）

SD2064　土層断面（北東から）

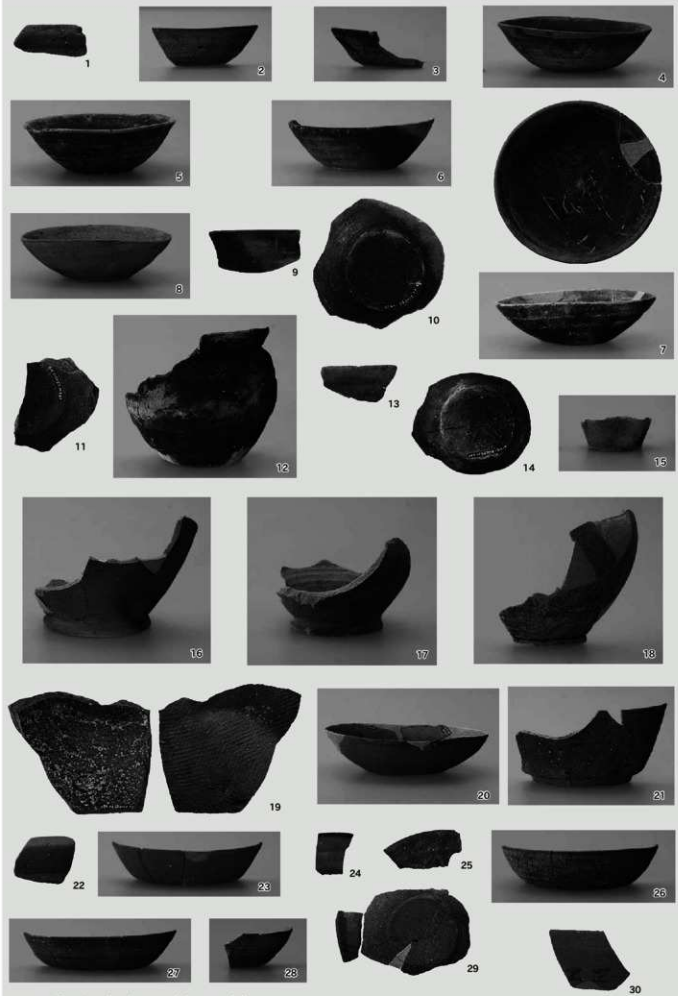

SD2066　土層断面（西から）

SD2075　土層断面（南から）

SX2001・2002　土層断面（東から）

SX2031　土層断面（東から）

SX2086　土層断面（西から）



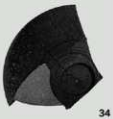
SB14-P2035（1）・SE2013（2～19）・SK2014（20）・SK2017（21）
SK2019（22）・SK2044（23）・SD2015（24）・SD2043（25）・遺構外（26～30）

S=1/3（1～30）

31

32

33


34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

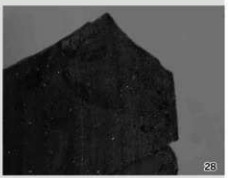
45

46

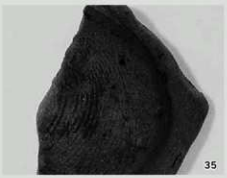
47

4

6


28

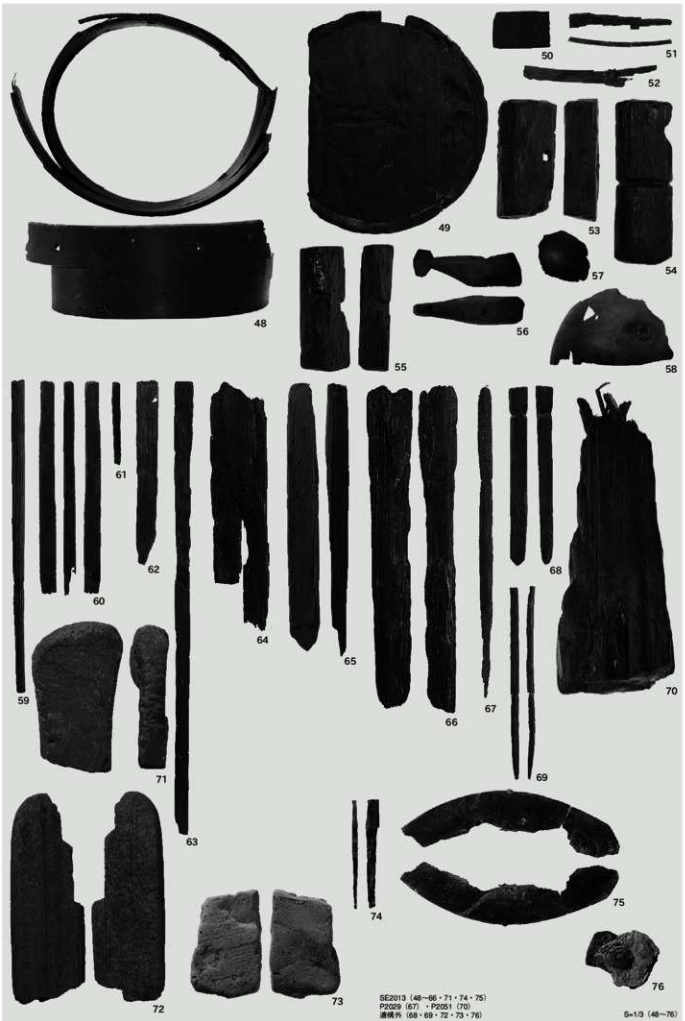
30


35

36

遺構外（31～47）

S=1/3（31～47）



SE2013（48～66・71・74・75）
P2029（67）・P2051（70）
遺構外（68・69・72・73・76）

S=1/3（48～76）

遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院　昭和 50 年 9 月 25 日撮影　空中写真）

遺跡遠景（北東から）

遺跡遠景（東から）

古代面　全景（上空から）

古代面　SB270・315・335 ほか（上空から）

古代面　SB230・SD222 ほか（上空から）

中世～近世面　全景（上空から）

中世～近世面　水田（上空から）

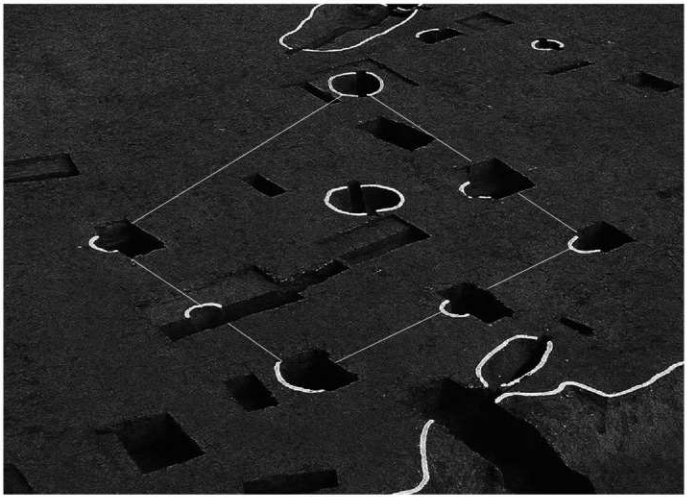
奈良時代の土器

SD222 出土土器

SD222 遺物出土状況（東から）

35S　基本層序（北から）

23N　基本層序（南から）



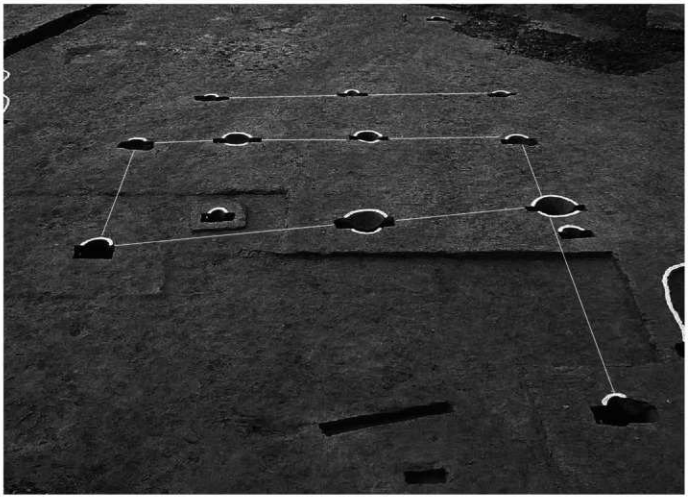
SB230　完掘（西から）

SB230-P225　土層断面（南から）

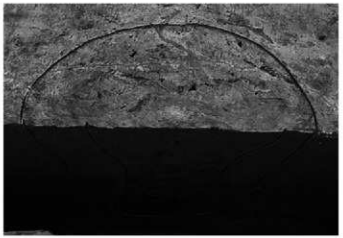
SB230-P226　土層断面（南から）

SB230-P276　柱根検出状況（南から）

SB230-P279　柱根検出状況（南から）



SB270　完掘（南から）

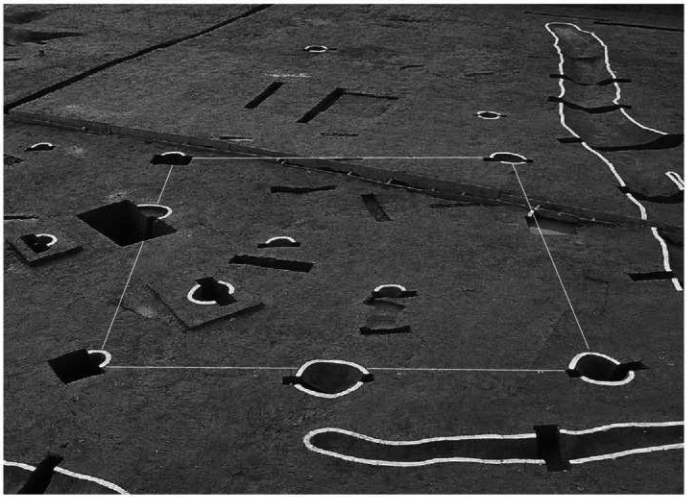


SB270-P265　土層断面（南から）

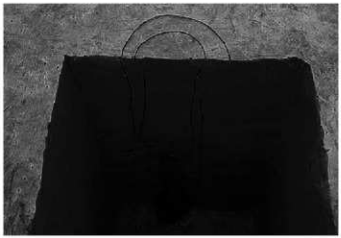
SB270-P281　土層断面（南から）

SB270-P282　土層断面（南から）

SB270-P282　完掘（南から）

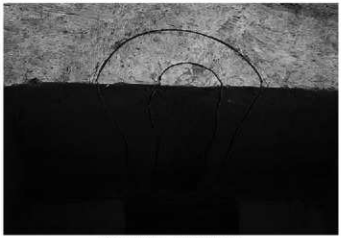


SB315　完掘（南から）



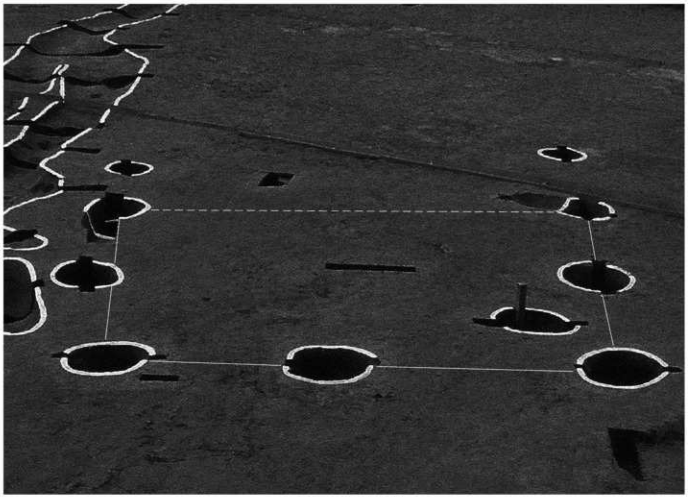
SB315-P286　土層断面（南から）

SB315-P286　完掘（南から）



SB315-P312　完掘（南から）

SB315-P313　土層断面（南から）



SB339　完掘（南東から）

SB339-P297　土層断面（南から）

SB339-P298　土層断面（北東から）

SB339-P334　土層断面（北から）

SB339-P336　土層断面（南から）

SK216　土層断面（北から）

SK216　完掘（北から）

SK218　土層断面（南から）

SK218　完掘（南から）

SK228　土層断面（南から）

SK228　完掘（南から）

SK232　土層断面（南から）

SK232　完掘（西から）

SK237　土層断面（西から）

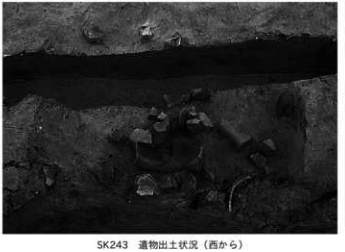
SK237　完掘（西から）

SK238　土層断面（南から）

SK238　完掘（南から）

SK241　土層断面（西から）

SK241　完掘（西から）

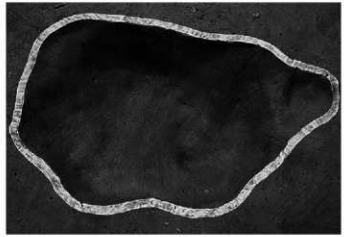

SK243　遺物出土状況（西から）

SK243　完掘（東から）

SK245　土層断面（北から）

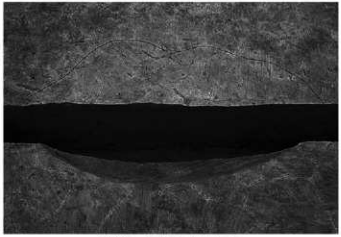
SK245　土層断面（北から）

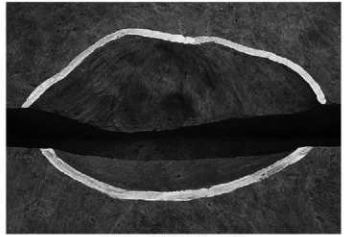
SK253　土層断面（南から）


SK253　完掘（北から）

SK254　土層断面（南から）

SK254　完掘（南から）


SK259　土層断面（北東から）


SK259　土層断面（北東から）

SK280　土層断面（西から）

SK280　完掘（西から）

SK291　土層断面（西から）

SK291　完掘（東から）

SK292　土層断面（北から）

SK292　完掘（北から）

SK321　土層断面（南から）

SK321　完掘（南から）

SK322　土層断面（南から）

SK322　完掘（南から）

SK323　土層断面（南から）

SK323　完掘（南から）

SK325　土層断面（南から）

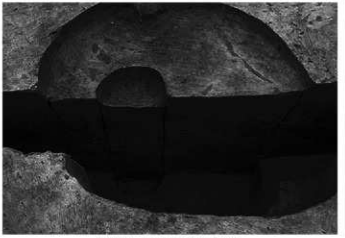
SK326　土層断面（西から）

SK326　土層断面（南から）

SK328　土層断面（南から）

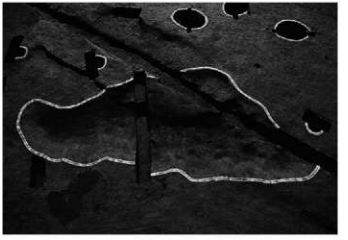
SK326　遺物出土状況（南西から）

SK325・326・328　完掘（西から）


SK335　土層断面（南西から）

SK335　完掘（北から）

SK343　土層断面（北西から）


SK343　完掘（北から）

SK345　土層断面（南から）

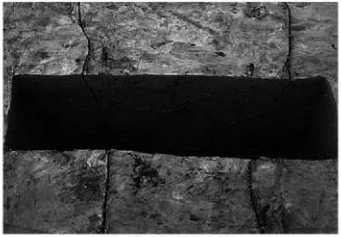
SK345　完掘（東から）

SD222　完掘（南から）

SD222　遺物出土状況（北から）

SD222　土層断面（南から）

SD214　土層断面（南から）



SD221　土層断面（東から）

SD252　土層断面（東から）

SD249・250　土層断面（南から）

SD289　土層断面（東から）

SD301　土層断面（南西から）

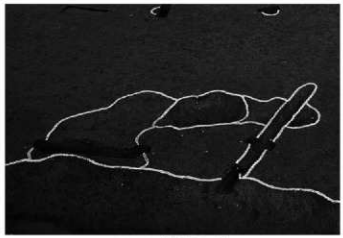
SD327　土層断面（南から）

SD331　土層断面（南から）

SD331・332　遺物出土状況（東から）

SD332　土層断面（南東から）

SX255　土層断面（東から）


SX255　完掘（西から）

SX257　遺物出土状況（東から）

SX257　土層断面（東から）

SX287　土層断面（南から）

SX287　完掘（南から）

SX290　土層断面（南から）

SX290　完掘（南から）

水田　区画①～④　35～38O・P・Q（南西から）

水田　区画⑰・⑱・⑳・㉑　26～27O・P周辺（南から）

畦畔174　土層断面（西から）

畦畔172　土層断面（西から）

畦畔179　土層断面（南から）

SD5　土層断面（東から）

SD11　土層断面（北東から）

畦畔167・SD13・14　土層断面（東から）

畦畔18　土層断面（東から）

畦畔52　土層断面（南から）

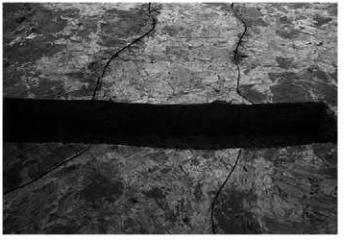
畦畔 55　土層断面（東から）

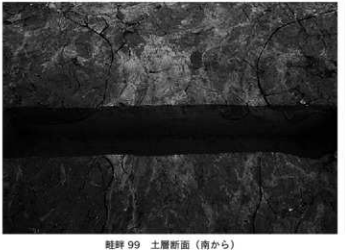
畦畔 58　土層断面（東から）

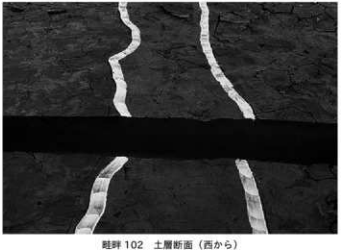
畦畔 60　土層断面（南から）

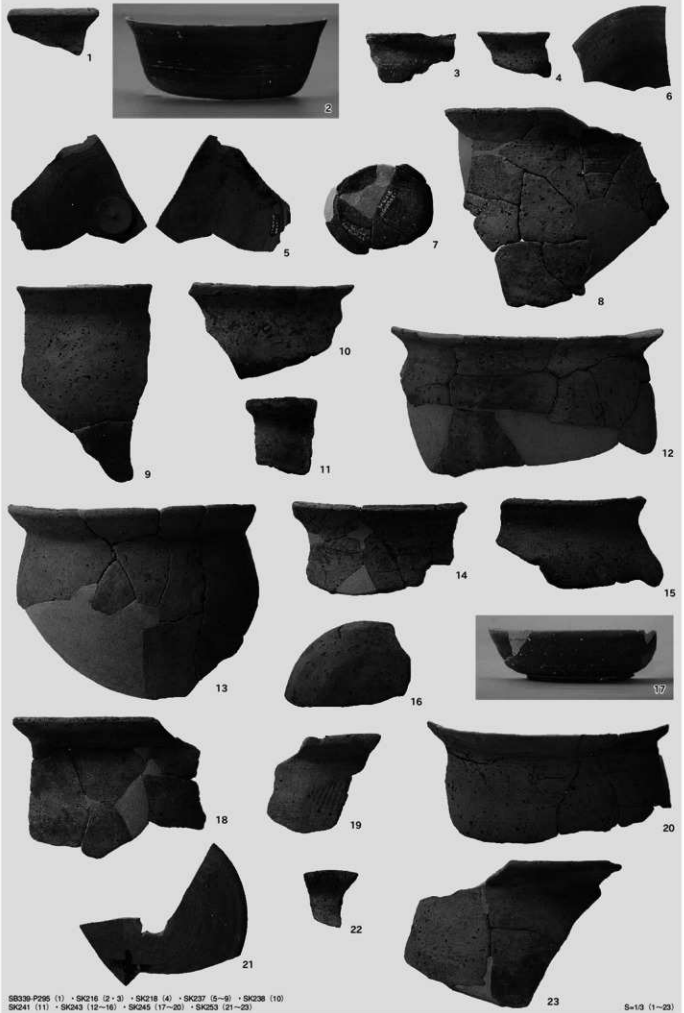
畦畔 74　土層断面（南から）

畦畔 80　土層断面（西から）


畦畔 84　土層断面（南から）

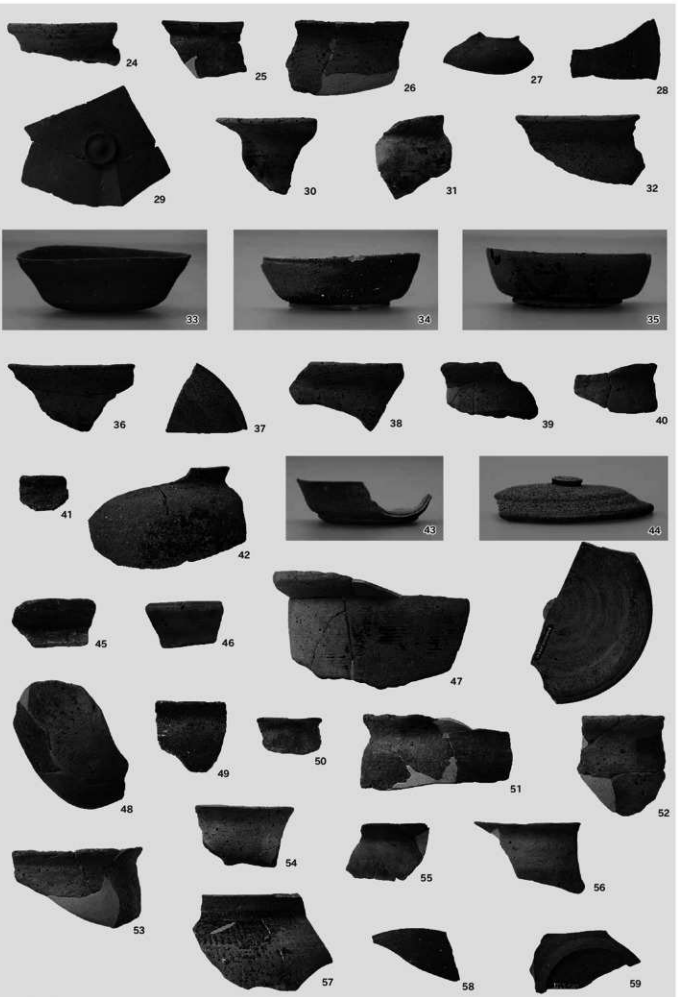

畦畔 99　土層断面（南から）


畦畔 102　土層断面（西から）



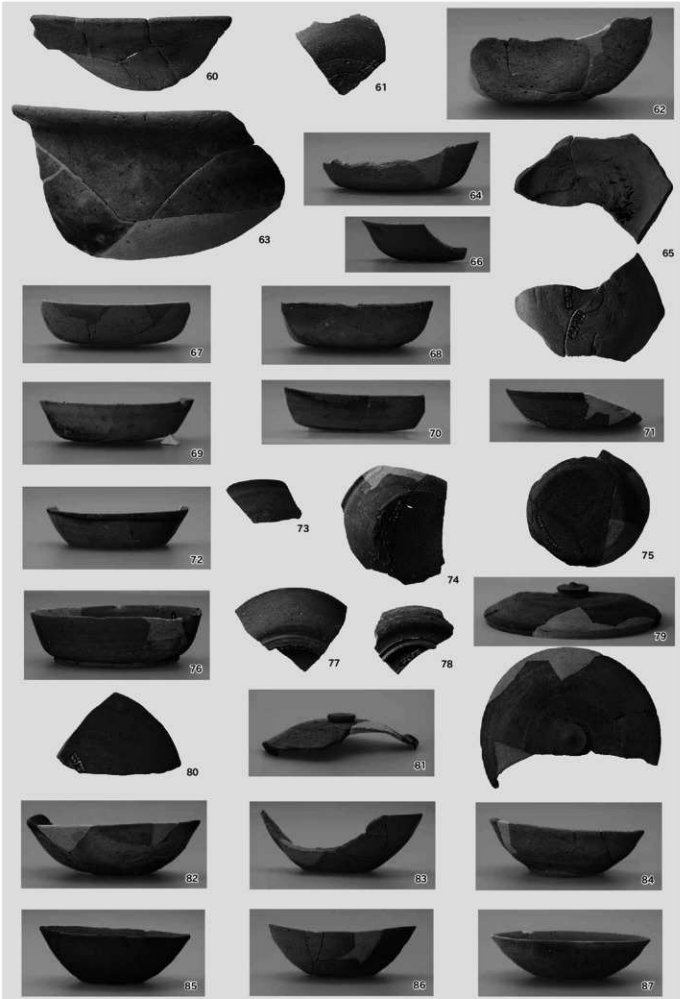
SB339-P295（1）・SK216（2・3）・SK218（4）・SK237（5～9）・SK238（10）
SK241（11）・SK243（12～16）・SK245（17～20）・SK253（21～23）

S=1/3（1～23）



SK253（24～27）・SK254（28～32）・SK291（33～36）
SK325（37～42）・SK326（43～57）・SK328（58・59）

S=1/3（24～59）



SK328（60）・SK343（61）・SK344（62）
SD214（63）・SD222（64～87）

S=1/3（60～87）

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

109

110

107

108

112

113

114

111

115

116

117

118

119

120

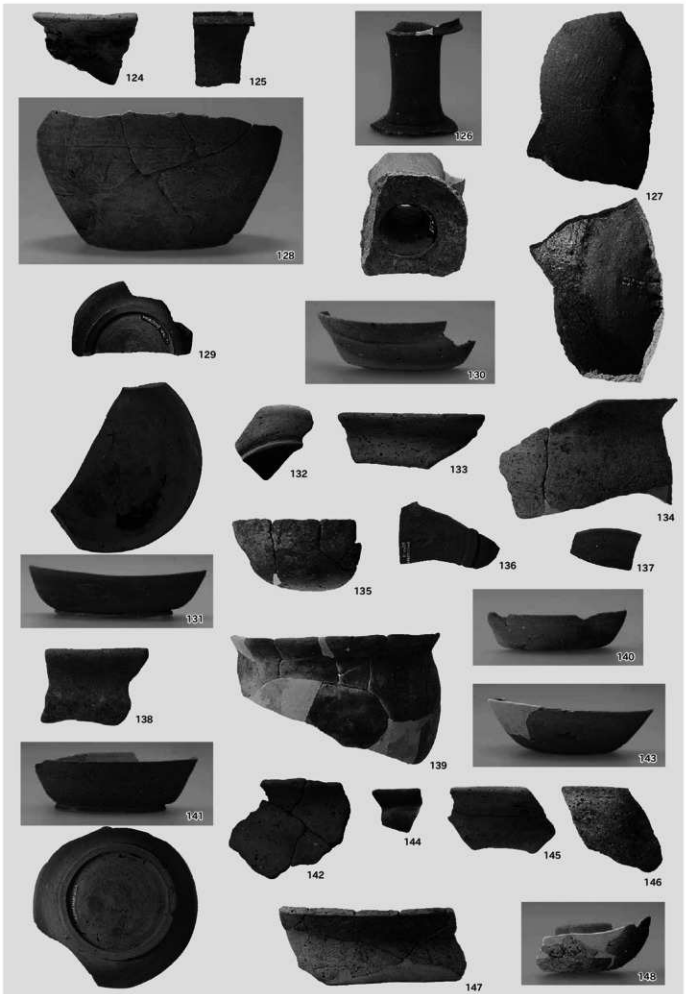
121

122

123

SD222（88～123）

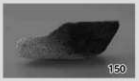
S=1/3（88～110・112～123）・S=1/4（111）



SD222（124～128）・SD249（129）・SD331（130～135）・SD332（136～139）・SD333（140～142）
P224（143）・P236（144）・P239（145）・SX257（146～148）

S=1/3（124～148）

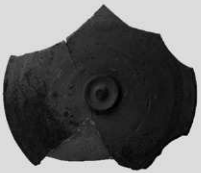
149


150

151

152

154



155

156

157

158

159

153

160

161

162

163

164

165

166

167

169

168

170

SX257（149）・SX287（150～155）
SX290（156～158）・遺構外（159～170）

S=1/3（149～170）

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

187

185

184

186

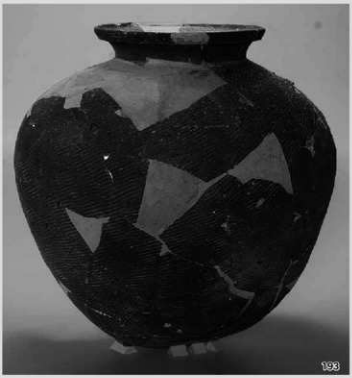
遺構外（171～187）　　S=1/3（171～187）

188

189

190

191


193

192

194

197

195

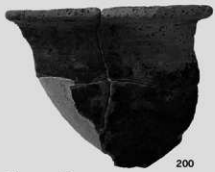
196

遺構外（188～197）

S=1/3（188・192・194～197）・S=1/4（189・190・193）

198

199


200

201

202

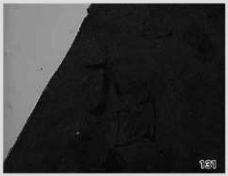
203

204

205

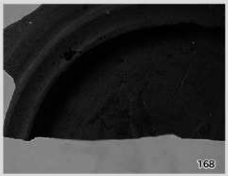
206

79


131

153

21


168

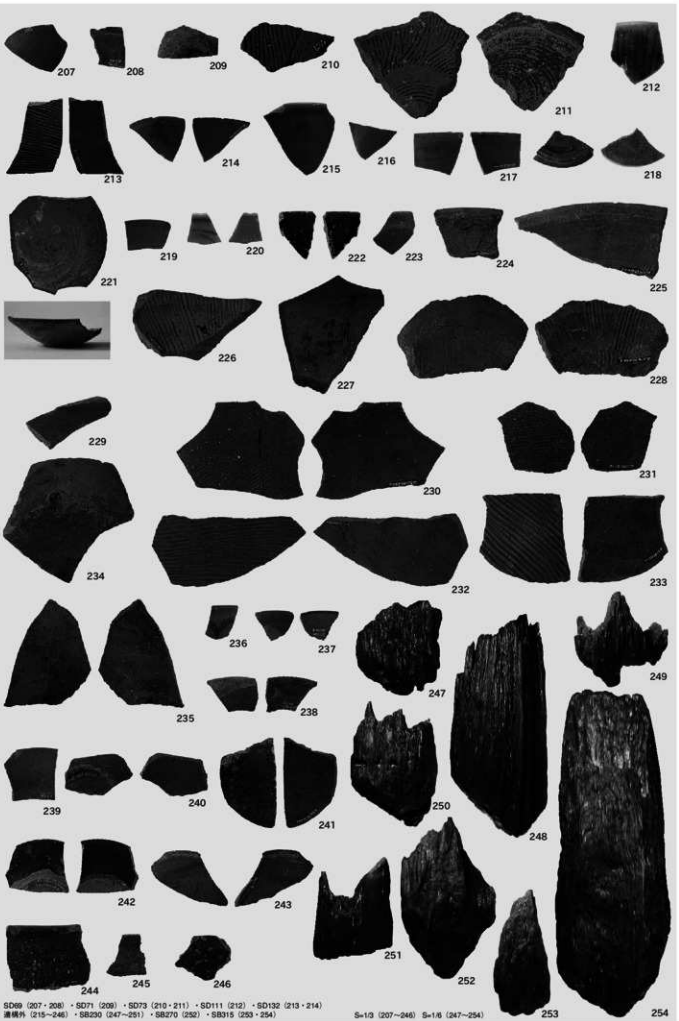
55

170

173

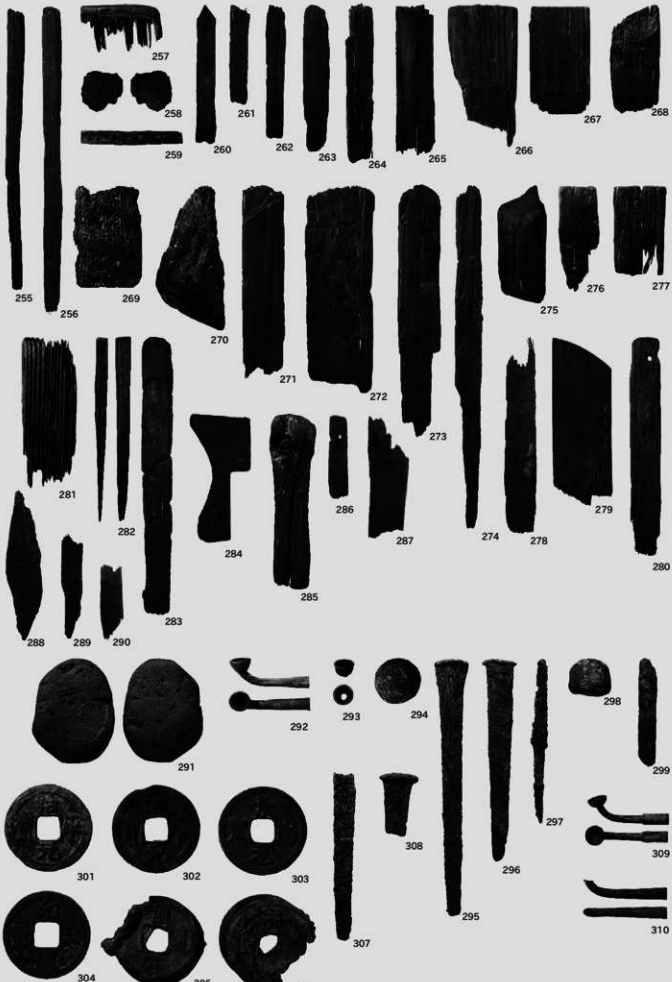
175

遺構外（198～206）　　S=1/3（198～206）



SD69（207・208）・SD71（209）・SD73（210・211）・SD111（212）・SD132（213・214）
遺構外（215～246）・SB230（247～251）・SB270（252）・SB315（253・254）

S=1/3（207～246）S=1/6（247～254）



SK254（291）・SK321（255・256）・SD89（292）・SD90（293）・SD111（294）・SD222（257～274）遺構外（275～290・295～299・301～310）

S=1/1（294・298・301～306）
S=1/3（上記以外）

報告書抄録

ふりがな	きつのみやいせき　に・しもわりいせき　よん
書名	狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳ
副書名	一般国道 253 号上越三和道路関係発掘調査報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 227 集
編著者名	飯坂盛泰・高橋保雄（以上、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、野水晃子・矢部英生・長沼吉嗣・今井原俊（以上、株式会社吉田建設）、藤根　久・鈴木　茂・黒沼保子・米田恭子・伊藤　茂・尾寄大貢・丹生越子・廣田正史・小林紘一（以上、株式会社パレオ・ラボ）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　電話　0250（25）3981
発行年月日	西暦 2011（平成 23）年 8 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
狐宮遺跡	新潟県上越市本道字南沖 477 番地ほか	15-222	1475	37° 07′ 44″	138° 16′ 50″	20090422 ～ 20090612	1,589	一般国道253号上越三和道路建設
下割遺跡	新潟県上越市米岡字中割 1,086 番地ほか	15-222	266	37° 08′ 01″	138° 18′ 57″	20090528 ～ 20091030	9,160	一般国道253号上越三和道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狐宮遺跡	集落	平安時代 （9 世紀前葉～中葉）	掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基、土坑 12 基、溝 11 条、性格不明遺構 5 基、ピット 44 基	土師器、須恵器、木製品（曲物・木錐・馬形・柄・棒状品・木札・箸・柱根ほか）、土製品（瓦、石製品（砥石）、金属製品（刀子・鎌ほか）	平成 17 年度調査で検出された平安時代の集落の東側縁辺部に相当する。
下割遺跡	集落	奈良時代 （8 世紀前葉）	掘立柱建物 4 棟、杭列 1 列、土坑 44 基、溝 14 条、性格不明遺構 3 基	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、木製品（柱根・棒状品・曲物・櫛・漆器ほか）、石製品（砥石）	奈良時代の集落の一画が明らかになった。
	水田	室町時代～江戸時代初期（14～17 世紀前半）	畦畔 93 条、土坑 2 基、溝 43 条、湿地状遺構 1 基	青磁、白磁、青花、李朝陶器、瀬戸美濃焼、珠洲焼、肥前系陶磁器、越中瀬戸焼、木製品（木簡・木札・箸ほか）、金属製品（釘・刀子・煙管・銃弾・鉄滓）、銭貨	水田は東西・南北方向の畦畔が直行し、条里形地割に基づく可能性がある。 平成 14・15 年の調査結果と合わせると、中世の農村景観が明らかになった。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 227 集
一般国道 253 号上越三和道路関係発掘調査報告書
狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳ

平成 23 年 8 月 17 日印刷
平成 23 年 8 月 31 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒 950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒 956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社
〒 950-0963　新潟市中央区南出来島 2 丁目 1-25
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集『狐宮遺跡Ⅱ 下割遺跡Ⅳ』 正誤表　2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	下割遺跡　北緯	３７度０８分０１秒	３７度０７分５７秒
抄録	下割遺跡　東経	１３８度１８分５７秒	１３８度１８分４８秒